岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第609集

大平野（おおだいらの）Ⅱ遺跡発掘調査報告書

胆沢ダム建設事業関連遺跡発掘調査

２０１３

国土交通省東北地方整備局胆沢ダム工事事務所
（公財）岩手県文化振興事業団

大平野Ⅱ遺跡発掘調査報告書

胆沢ダム建設事業関連遺跡発掘調査

大平野Ⅱ遺跡調査区全景（南東から）

調査Ⅶ区全景（西から）

縄文時代中期後～末葉の土器

縄文時代晩期中葉の土器

序

本県には、旧石器時代をはじめとする１万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多くのこされております。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料であります。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らねばなりません。

一方、県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要とされます。それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財の保護との調和も求められるところであります。

（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行ない、記録保存する措置をとってまいりました。

本報告書は奥州市胆沢区における、胆沢ダム建設に関連して平成23年度に発掘調査された奥州市胆沢区大平野Ⅱ遺跡の調査成果をまとめたものであります。大平野Ⅱ遺跡の調査は今回で６回目を数え、概ね遺跡推定範囲の全域を調査したことになります。調査の成果によって、大平野Ⅱ遺跡は縄文時代中期、後晩期の集落遺跡であることが分かり、竪穴住居や土坑が多数見つかりました。また出土遺物の時期は縄文時代早期から晩期までに及んでおり、長きにわたる人間の生活の痕跡が認められる遺跡でもあります。

本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時に、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました国土交通省東北地方整備局胆沢ダム工事事務所をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成25年２月

公益財団法人　岩手県文化振興事業団
理事長　池　田　克　典

例　　言

1　本報告書は、平成23年度に行った大平野Ⅱ遺跡（奥州市胆沢区若柳字大平野1-1ほか）の発掘調査の成果を収録したものである。

2　今回の調査は、胆沢ダム建設に関わる事前の緊急発掘調査である。調査は岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課と国土交通省東北地方整備局胆沢ダム工事事務所との協議を経て、（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが担当した。

3　遺跡台帳に登録されている遺跡番号は「NE30－2300」である。

4　遺跡略号、発掘調査期間、担当者、調査面積、委託者名は以下の通りである。

　遺跡略号：ODNⅡ－11

　調査期間：平成23年6月13日～11月7日

　調査担当者：須原 拓・濱田 宏・佐藤あゆみ

　調査面積：8,700㎡（トレンチ調査による終了分を含めると87,000㎡）

　委託者：国土交通省東北地方整備局胆沢ダム工事事務所

5　室内整理期間と担当者は、以下の通りである。

　整理期間：平成23年11月1日～平成24年3月31日

　担当者：須原 拓・佐藤あゆみ

6　調査および整理における委託業務については次の機関に依頼した。

　基準点測量：株式会社 南部測量設計

　航空写真撮影：株式会社 東邦航空

　石材鑑定：花崗岩研究会

　炭化物年代測定（AMS）：株式会社 加速器分析研究所

　火山灰産地分析：株式会社 火山灰考古学研究所

　剥片石器実測：株式会社 ラング

7　本遺跡の調査成果は、すでに『平成23年度発掘調査報告書』（岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第603集）において発表しているが、内容については本書が優先する。

8　土色の色調は、『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修1993）を使用している。

9　本報告書の執筆・編集は須原が行った。

10　本報告書で使用した地形図は、国土地理院発行1：50,000「焼石岳」である。

11　本遺跡の調査で得られた一切の資料、出土遺物・撮影写真・遺構実測図・遺物実測図は岩手県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。

凡　　例

1　遺構について

（1）本文中の図版縮尺

以下を原則とし、各図版にはスケールを付している。

平面・断面：1/40　　炉の平面・断面：1/20

（2）遺構断面の土層注記

野外調査の際、土層の観察記録については以下の項目を基本とし、記録した。

色調（『標準土色帖』（農林水産省農林技術会議局監修）を基準とする）

粘性（4段階表示：**強い、やや強い、やや弱い、弱い**）

しまり（4段階表示：**密、やや密、やや疎、疎**）

混入物の有無（混入量は5段階表示：**微量1～10%・少量11～20%・中量21～30%・やや多い31～40%・多量41～50%**）

2　遺物について

（1）本文中の図版縮尺は以下を原則とし、各図版にはスケールを付している。

縄文土器：1/3　　剥片石器：2/3　　礫石器：1/3・1/4

（2）遺物図面のアミかけについては下の凡例図に示した通りである。

（3）観察表の表記項目について

出土地点・層位・器種・残存部位・土器型式（時期）・外面文様・内面調整・色調（外・内面）・焼成・ススコゲの有無について観察し、記載している。

文様：口唇部（「唇」と表記）、口縁部（「口」と表記）、胴部（「胴」と表記）、底部（「底」と表記）に分けて観察している。なお、無文の場合は特に記載していない。

焼成：土器の断面を観察し、断面にみられる火回りの悪さを示す黒色層を基準として4分類した。

良　　好→断面に黒色層が認められず、断面の色調が橙色を帯びるもの。

やや良好→断面に明瞭な黒色層は認められないが、土器の内外面色調と比べ、やや暗い（黒色味がかっている）もの。

やや不良→断面の中央部にのみ黒色層がみとめられるもの。

不　　良→断面の半分以上に黒色層が認められ、火回りが悪いもの。

色調：外内面については『標準土色帖』（農林水産省農林技術会議局監修）の色調を基準とした。

遺構

焼成範囲

P 土器片

S 礫

遺物

敲打痕

アスファルト付着範囲

磨り面

被熱範囲

凡　　例

目　　次

Ⅰ　発掘調査に至る経過 …… 1

Ⅱ　遺跡周辺の地理的環境 …… 1

1　遺跡の位置 …… 1
2　遺跡の立地 …… 3
3　遺跡周辺の歴史環境 …… 3
4　周辺の遺跡 …… 5

Ⅲ　調査の経過と方法 …… 8

1　野外調査 …… 8
2　室内整理 …… 8

Ⅳ　遺物の分類基準 …… 11

Ⅴ　基本土層 …… 13

Ⅵ　検出した遺構・遺物 …… 14

1　概　　要 …… 14
2　竪穴住居 …… 21
3　住居状遺構 …… 53
4　土　　坑 …… 56
5　性格不明遺構 …… 102
6　焼土遺構 …… 104
7　柱穴群 …… 106
8　包含層 …… 108
9　その他の遺構外出土遺物 …… 113

Ⅶ　自然科学分析 …… 147

1　放射性炭素年代測定(AMS測定) …… 147
2　火山灰同定分析 …… 150
3　黒曜石産地同定分析 …… 156

Ⅷ　総　　括 …… 159

報告書抄録 …… 242

図版目次

第１図　遺跡位置図…… 2
第２図　周辺地形と年度別本調査範囲…… 5
第３図　周辺の遺跡…… 7
第４図　トレンチ位置図…… 9
第５図　基本土層…… 13
第６図　調査区全体図…… 14
第７図　遺構配置図（１）…… 15
第８図　遺構配置図（２）…… 16
第９図　遺構配置図（３）…… 17
第10図　遺構配置図（４）…… 18
第11図　１号住居（１）…… 22
第12図　１号住居（２）…… 23
第13図　１号住居出土遺物（１）…… 24
第14図　１号住居出土遺物（２）…… 25
第15図　１号住居出土遺物（３）…… 26
第16図　２号住居（１）…… 28
第17図　２号住居（２）…… 29
第18図　２号住居出土遺物（１）…… 30
第19図　２号住居出土遺物（２）…… 31
第20図　２号住居出土遺物（３）…… 32
第21図　２号住居出土遺物（４）…… 33
第22図　３号住居（１）…… 34
第23図　３号住居（２）…… 35
第24図　３号住居出土遺物（１）…… 36
第25図　３号住居出土遺物（２）…… 37
第26図　３号住居出土遺物（３）…… 38
第27図　４号住居（１）…… 40
第28図　４号住居（２）…… 41
第29図　４号住居出土遺物（１）…… 42
第30図　４号住居出土遺物（２）…… 43
第31図　４号住居出土遺物（３）…… 44
第32図　４号住居出土遺物（４）…… 45
第33図　５号住居（１）…… 47
第34図　５号住居（２）…… 48
第35図　５号住居出土遺物（１）…… 49
第36図　５号住居出土遺物（２）…… 50
第37図　６号住居…… 51
第38図　６号住居出土遺物…… 52
第39図　７号住居…… 54
第40図　７号住居出土遺物…… 54
第41図　１号住居状遺構…… 55
第42図　１号住居状遺構出土遺物…… 55
第43図　１～６号土坑…… 60
第44図　７～14号土坑…… 61
第45図　15～19号土坑…… 62
第46図　20～27号土坑…… 63
第47図　28～35号土坑…… 64
第48図　36・37号土坑…… 65
第49図　38～44号土坑…… 66
第50図　45～52号土坑…… 67
第51図　53～59号土坑…… 68
第52図　60～67号土坑出土土器…… 69
第53図　68～72号土坑出土土器…… 70
第54図　73～79号土坑出土石器 …… 71
第55図　80～86・88号土坑出土石器 …… 72
第56図　87・89～93号土坑出土石器 …… 73
第57図　94～99号土坑 …… 74
第58図　100～103号土坑 …… 75
第59図　104～112号土坑 …… 76
第60図　113～117号土坑 …… 77
第61図　118～126号土坑 …… 78
第62図　127～133号土坑 …… 79
第63図　134・135号土坑 …… 80
第64図　26～49号土坑出土土器 …… 81
第65図　54・55号土坑出土土器 …… 82
第66図　26～38号土坑出土土器 …… 83
第67図　38～48号土坑出土土器 …… 85
第68図　49・53号土坑出土土器 …… 86
第69図　60～84号土坑出土土器 …… 87
第70図　85～93号土坑出土土器 …… 88
第71図　94～106号土坑出土土器 …… 89
第72図　107～111号土坑出土土器 …… 90
第73図　111号土坑出土土器 …… 91
第74図　112～125号土坑出土土器 …… 92
第75図　126・129号土坑出土土器 …… 93
第76図　71～86号土坑出土石器 …… 94
第77図　81・85号土坑出土石器 …… 95
第78図　87～92号土坑出土石器 …… 96
第79図　94～99号土坑出土石器 …… 97
第80図　102～107号土坑出土石器 …… 98
第81図　108～113号土坑出土石器 …… 99
第82図　118～129号土坑出土石器 …… 101
第83図　１号性格不明遺構 …… 102
第84図　１号性格不明遺構出土遺物 …… 103
第85図　１～５号焼土 …… 105
第86図　柱穴群出土遺物 …… 106
第87図　調査Ⅶ区包含層 …… 109
第88図　調査Ⅶ区包含層出土遺物（１）…… 110
第89図　調査Ⅶ区包含層出土遺物（２）…… 111
第90図　調査Ⅶ区包含層出土遺物（３）…… 112
第91図　調査Ⅶ区土器分布図 …… 114
第92図　調査Ⅷ・Ⅸ・Ⅹ区土器分布図 …… 115
第93図　調査Ⅶ区遺構外出土土器（１）…… 117
第94図　調査Ⅶ区遺構外出土土器（２）…… 118
第95図　調査Ⅷ区遺構外出土土器 …… 119
第96図　調査Ⅸ区遺構外出土土器 …… 120
第97図　調査Ⅰ・Ⅵ区遺構外出土石器（１）…… 123
第98図　調査Ⅶ区遺構外出土石器（２）…… 124
第99図　調査Ⅶ区遺構外出土石器（３）…… 125
第100図　調査Ⅶ区遺構外出土石器（４）…… 126
第101図　調査Ⅶ区遺構外出土石器（５）…… 127
第102図　調査Ⅶ区遺構外出土石器（６）…… 128
第103図　調査Ⅷ・Ⅸ・Ⅹ区遺構外出土石器（１）… 129
第104図　調査Ⅷ・Ⅸ・Ⅹ区遺構外出土石器（２）… 130
第105図　火山灰テフラ組成ダイヤグラム …… 153
第106図　分析作業フローチャート …… 157

第107図　北日本の黒曜石原産地 …… 157
第108図　分析グラフ …… 157
第109図　出土した縄文土器 …… 160
第110図　石器分析 …… 162
第111図　縄文時代中期を中心とした遺構分布(過去調査区を含む)… 164
第112図　調査Ⅷ～Ⅹ区の遺構分布 …… 165

表　目　次

第１表　大平野Ⅱ遺跡の調査履歴…… 4
第２表　周辺の遺跡一覧…… 6
第３表　遺構名変更表…… 10
第４表　遺構内・遺構外出土遺物一覧…… 19
第５表　土坑一覧…… 57
第６表　柱穴一覧…… 107
第７表　遺物観察表…… 131
第８表　近代以降の遺物（瓶類）…… 146
第９表　近代以降の遺物（石製品）…… 146
第10表　火山灰分析ガラス重鉱物分析結果…… 153
第11表　屈折率測定結果…… 153
第12表　黒曜石製遺物の原産地推定結果…… 158

写真図版目次

写真図版１　調査区全景（１）…… 170
写真図版２　調査区全景（２）…… 171
写真図版３　基本土層…… 172
写真図版４　１号住居…… 173
写真図版５　２号住居…… 174
写真図版６　３号住居…… 175
写真図版７　４号住居…… 176
写真図版８　５号住居…… 177
写真図版９　６号住居…… 178
写真図版10　７号住居…… 179
写真図版11　１号住居状遺構・試掘風景…… 180
写真図版12　１～４号土坑…… 181
写真図版13　５～８号土坑…… 182
写真図版14　９～12号土坑…… 183
写真図版15　13～16号土坑…… 184
写真図版16　17～20号土坑…… 185
写真図版17　21～24号土坑…… 186
写真図版18　25～28号土坑…… 187
写真図版19　29～32号土坑…… 188
写真図版20　33～36号土坑…… 189
写真図版21　37～40号土坑…… 190
写真図版22　41～44号土坑…… 191
写真図版23　45～48号土坑…… 192
写真図版24　49～52号土坑…… 193
写真図版25　53～56号土坑…… 194
写真図版26　57～60号土坑…… 195
写真図版27　61～64号土坑…… 196
写真図版28　65～68号土坑…… 197
写真図版29　69～72号土坑…… 198
写真図版30　73～76号土坑…… 199
写真図版31　77～80号土坑…… 200
写真図版32　81～84号土坑…… 201
写真図版33　85～88号土坑…… 202
写真図版34　89～92号土坑…… 203
写真図版35　93～97号土坑…… 204
写真図版36　97～100号土坑 …… 205
写真図版37　101～104号土坑…… 206
写真図版38　105～108号土坑…… 207
写真図版39　109～112号土坑…… 208
写真図版40　113～116号土坑…… 209
写真図版41　117～120号土坑…… 210
写真図版42　121～124号土坑…… 211
写真図版43　125～127号土坑…… 212
写真図版44　128～131号土坑…… 213
写真図版45　132～135号土坑…… 214
写真図版46　１～４号焼土…… 215
写真図版47　５号焼土・１号性格不明遺構・包含層 216
写真図版48　試掘トレンチ…… 217
写真図版49　１・２号住居出土土器…… 218
写真図版50　２・３号住居出土土器…… 219
写真図版51　３・４号住居出土土器…… 220
写真図版52　４・５号住居出土土器…… 221
写真図版53　５～７号住居・１号住居状遺構・土坑出土土器 222
写真図版54　35～81号土坑出土土器…… 223
写真図版55　70～125号土坑出土土器 …… 224
写真図版56　81～105号土坑出土土器 …… 225
写真図版57　102～126号土坑出土土器…… 226
写真図版58　126・129号土坑・１号性格不明遺構・柱穴・包含層出土土器 227
写真図版59　包含層出土土器…… 228
写真図版60　包含層・調査Ⅶ区遺構外出土土器…… 229
写真図版61　調査Ⅶ区遺構外出土土器…… 230
写真図版62　調査Ⅶ～Ⅸ区遺構外出土土器…… 231
写真図版63　調査Ⅸ区遺構外出土土器…… 232
写真図版64　１号・２号住居出土石器…… 233
写真図版65　２～４号住居出土石器…… 234
写真図版66　４～７号住居・１号住居状遺構・土坑出土石器 … 235
写真図版67　土坑出土石器（２）…… 236
写真図版68　土坑出土石器（３）…… 237
写真図版69　土坑・柱穴・性格不明遺構・遺構外出土石器…… 238
写真図版70　遺構外出土石器（２）…… 239
写真図版71　遺構外出土石器（３）…… 240
写真図版72　遺構外出土石器（４）…… 241

Ⅰ　発掘調査に至る経過

大平野Ⅱ遺跡は、「胆沢ダム建設事業」に伴い、その事業区域内に位置することから、発掘調査を実施することとなったものである。

胆沢ダムは、北上川右支川胆沢川に建設中の堤体高132m、堤長標高723m、総貯水容量１億4,300万㎥の中央コア型ロックフィルダムであり、その目的に洪水調節・河川環境保全等のための流水確保・かんがい用水・水道用水・水力発電を有する多目的ダムである。

胆沢ダム建設事業は、平成２年５月11日に「胆沢ダムの建設に関する基本計画」が官報告示されて建設着手し、その後平成12年６月14日に基本計画変更が官報告示され、事業費及び工期改定を行い現在に至っている（当初工期：平成11年度→変更工期：平成25年度）。

埋蔵文化財の取り扱いについては、事業に先立ち昭和58年10月に建設省（現国土交通省）新石淵ダム調査事務所（昭和63年４月に胆沢ダム工事事務所に組織改正）から、ダム事業区域内における埋蔵文化財の有無を岩手県教育委員会に照会し、周知地区864,000㎡、可能性有地区490,000㎡を確認した。その後は、水没面積4,400,000㎡を含む事業区域内における埋蔵文化財の包蔵地について、毎年度、各工事の実施に先立って岩手県教育委員会との協議を行いながら、計画的に調査を実施してきているところである。

胆沢ダム建設事業に関する大平野Ⅱ遺跡の埋蔵文化財調査は、ダム建設に伴う付替市道尿前槻木平線の道路工事に必要となる盛土材の採取地や受入地などで、必要な区域（約221,000㎡）を実施することとし、平成17年３月25日付け国東整胆調設第56号により、胆沢ダム工事事務所長から岩手県教育委員会に試掘調査の依頼を行った。

依頼を受けた岩手県教育委員会が平成17年５月30日～７月29日にかけて試掘調査を実施した結果、遺構密度は疎らではあるが、広範囲にわたって縄文時代前期と縄文時代後期の集落跡が確認されたため、当該区域について平成17年10月３日付け教生第1005号にて「発掘調査が必要」である旨、胆沢ダム工事事務所長に回答があった。

この回答に基づき岩手県教育委員会と協議し、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターに委託して発掘調査を実施することになったものである。

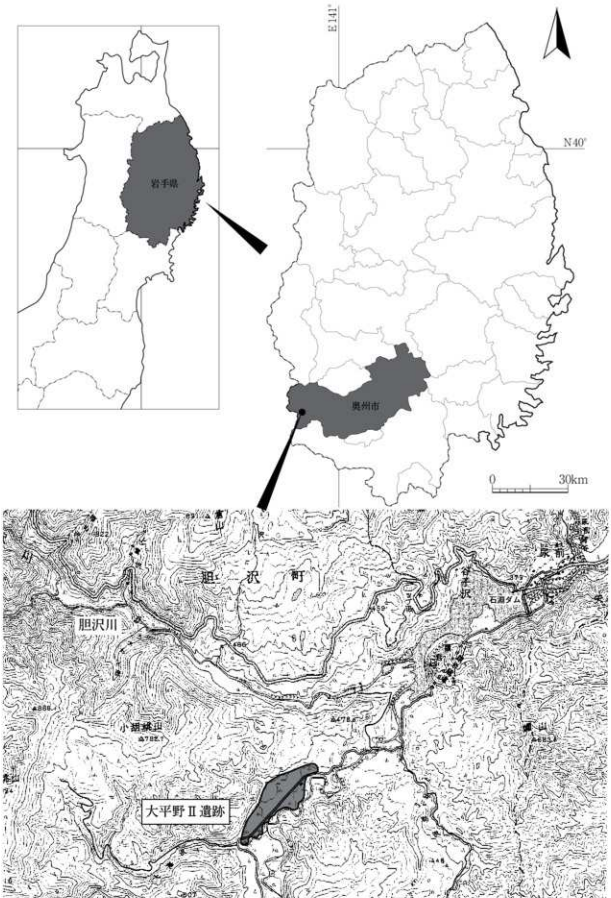
（国土交通省東北地方整備局胆沢ダム工事事務所）

Ⅱ　遺跡周辺の地理的環境

１　遺 跡 の 位 置

大平野Ⅱ遺跡は奥州市胆沢区若柳字大平野に所在し、奥州市胆沢総合支所から西へ18km、石淵ダムからは南西へ10kmに位置する。北緯39度05分34秒、東経140度52分05秒付近の地点であり、国土地理院発行の５万分の１地形図「焼石岳」図幅に含まれる。遺跡の北西側には胆沢川が、また南東隣接地には胆沢川の支流である前川が流れており、石淵ダム付近で合流する。

本調査は、胆沢ダム建設に伴い調査が行われた。調査前の現況は森林・荒地である。



第1図　遺跡位置図

2　遺跡の立地

大平野Ⅱ遺跡は奥羽山脈東縁部にあたる、丘陵裾野の南東向き緩斜面上に立地する。今回の調査区の標高は360m前後を測り、過去の調査区と比べ最大で約15m低い。遺跡の立地する緩斜面地は、長さ1.2㎞、幅300mに及ぶ広大な平坦地でもあり、平坦地中央には小寒沢が横断する。このような地形は平坦面の形成しづらい胆沢川上流域においてやや特異である。おそらく前川の開析作用に加え、大寒沢・小寒沢などの沢状の支流による丘陵開析がこのような広大な平坦地を形成していく要因となったものと推測する。大平野Ⅱ遺跡はこの平坦地上に遺跡推定範囲の多くが占められている。今回の調査区はこの緩斜面地内の南東端に位置し、また遺跡内には小寒沢が含まれている。

3　遺跡周辺の歴史環境

（1）奥州市の遺跡群と大平野Ⅱ遺跡の位置づけ

岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課の平成18年３月31日現在のまとめによると、奥州市の遺跡は1,069箇所にのぼり、このうち胆沢区内では185遺跡を数える。遺跡の時代を見てみると、旧石器時代から近世に至る各時代において遺跡が存在する。なかでも縄文時代の遺跡は多く、別の時代との複合遺跡まで合わせると、全体の７割近くを占めている。

大平野Ⅱ遺跡も胆沢区内の遺跡の１つであり、『胆沢市史Ⅰ　原始古代編』には「大平野遺跡」として記載されている。大平野Ⅱ遺跡は胆沢区内の遺跡の中で最西端に位置し、本遺跡よりも西側には３遺跡が登録されるのみである。

（2）これまでの大平野Ⅱ遺跡の調査からみえるもの

大平野Ⅱ遺跡は平成23年度までに旧胆沢町教育委員会により１回、県教育委員会により１回（試掘調査）、当センターにより６回の計８回、発掘調査が行われてきた。各調査の概要と成果については第１表の通りである。以下、内容について概観する。

昭和47年、当時牧草地だった遺跡範囲内において企業体による施設建設の為の整地工事が行われ、それによって露出した竪穴住居らしき遺構の調査を旧胆沢町教育委員会が行っている。調査の結果、炉跡とその周辺に柱穴状の土坑（「性格不明な穴状遺構」）が確認され、また遺構外から縄文時代晩期（大洞C2式）の土器片が出土している。この調査は「スケッチ記録」にとどまるものであったとのことで、詳しい調査位置も定かではないが、『胆沢市史Ⅰ』を見る限りでは今回の調査区の南西端あるいは平成20年度調査Ⅳ区の周辺ではないかと推測する。いずれにしてもこれが大平野Ⅱ遺跡の初めての調査となり、晩期集落の一端が窺える調査結果となった。

平成17年度、胆沢ダム建設工事に伴い、大平野Ⅱ遺跡が工事対象となることから県教育委員会による試掘調査が行われ、その結果を基に、平成18年度から平成23年度までの６年間にわたり、大平野Ⅱ遺跡の本格調査が行われることとなった。

平成18年度は主に遺跡推定範囲の北西側が調査され、縄文時代中期末葉～後期前葉の遺構が見つかった。特に小寒沢の北岸では縄文中期末葉に比定される竪穴住居状遺構（住居状遺構）２棟とそれらに伴われる土器埋設遺構・土坑が分布しており、これらの遺構群によって形成された小規模集落が確認されている。また加えて該期の土坑が調査区北側にも点在しており、生活域が山側にも展開していたことが窺える。他に14世紀代に帰属すると推定されるカマド状遺構が見つかっており、縄文時代

以降も連綿と人の生活の場であったことが窺える調査結果となった。

平成19年度は遺跡推定範囲を超えて北東側を中心に調査が行われた。検出した遺構は掘立柱建物跡や土坑、カマド状遺構などである。遺構の時期も概ね平成18年度調査と同じと考えられ、縄文時代及び中世における生活範囲は遺跡の範囲を超えることが分かる調査となった。

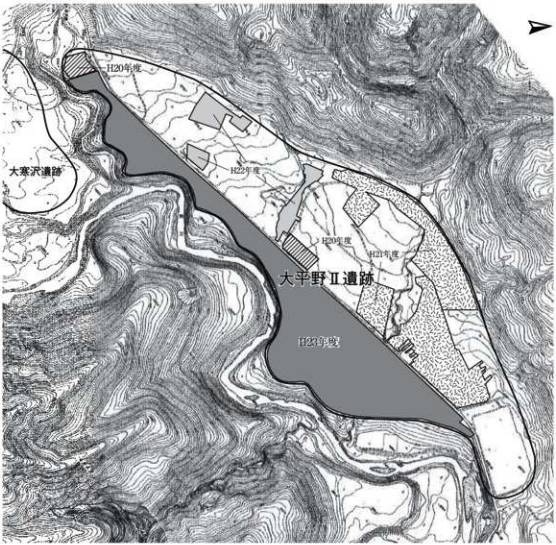
平成20・21年度は遺跡推定範囲のほぼ中央と南西端で調査が行われた。そしてそれぞれの調査区で縄文時代中期末葉の竪穴住居を数棟ずつ検出し、該期における小規模集落が前川の支流となる沢筋で点在する様子が窺えた。またその沢筋の一つである小寒沢周辺からは多量の遺物が出土しており、沢の氾濫により、多くの遺物が沢の周辺に流れ込んでいる様相が窺えた。また特筆すべき点として、竪穴住居の床面に自然礫が巡る「配石住居」が見つかっている。他に遺構外からは縄文時代早期、前期前葉の土器片も出土しており、縄文時代のなかでもかなり広い時期幅の中で生活が営まれていることが分かった。加えて調査区南西端では旧石器時代の石器が出土している。石器は縄文時代の遺物群との層位的な出土状況から、流れ込みと考えられるものの、旧石器時代にさかのぼっても生活圏であった可能性が高いことが判明した調査であった。

平成22年度では遺跡推定範囲の西側が調査された。遺跡推定範囲のほぼ中央を前川に向かって横断する沢の周辺から縄文時代中期後葉の竪穴住居１棟が見つかっており、その周辺には中期末葉から後期の土坑群が分布している。したがって前年度とは別の沢筋においても小規模集落が点在する様相が判明した。またこの年度の調査においても遺構外から縄文時代早期、前期前葉の遺物群が出土しており、生活圏の広さが窺えた。

以上が平成22年度までの調査の概要である。のべ193,150㎡が調査され、遺物の出土量は総じて土器が大コンテナ25.5箱分、石器は中コンテナ15箱分にのぼる。ここまでの調査成果から大平野Ⅱ遺跡は主に縄文時代中期後葉から後期にかけての小規模集落群が沢筋周辺を中心として点在する遺跡であることが分かった。一方、沢と沢との間の平坦地においては遺物の分布は極わずかで遺構も時期不明の土坑が数基分布するのみで、集落は確認されていない。こういった点から遺物の分布から考えられる当時の生活圏自体は遺跡全体に及んでいる一方、集落は限られた場所に点在する様相が窺える。各集落についてはそれぞれ別の集落か単集落の移動の結果かは定かではない。

第１表　大平野Ⅱ遺跡の調査履歴

調査年度	委託者	調査面積（㎡）	調査機関	調査期間	調査成果・検出遺構	出土遺物	文献
昭和47年		－	田熊沢町教育委員会	不明	炉跡・柱穴状土坑 晩期の集落か。	縄文土器（大洞C２式）	『熊沢町史１』
平成17年	熊沢ダム工事事務所	－	県教育委員会	2005.6～2005.8	試掘調査		岩埋文576集
平成18年		36,500	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	2006.06.01～2006.11.07	住居状遺構・掘設土器・土坑など 縄文中期末葉の集落 14世紀カマド状遺構群	縄文土器（大木10式・瘤付土器）・土器 土師器・土師質土器	岩埋文576集
平成19年		71,300		2007.06.25～2007.10.25	堀立柱建物・土坑・炉跡など	縄文土器（早期・中期・後期）・弥生土器 ・石器	岩埋文576集
平成20年		11,750		2008.0602～2008.11.14	竪穴住居・土坑など 縄文中期末葉の集落	縄文土器（早～後期）・石器・旧石器	岩埋文576集
平成21年		600		2009.06.01～2009.06.30	土坑・集石	縄文土器（早～後期）・石器	岩埋文576集
平成22年		7,300		2010.04.12～2010.09.30	竪穴住居・土坑・掘設土器など 縄文中期後葉～後期前葉の集落	縄文土器（早～後期）・石器	岩埋文593集



第２図　周辺地形と年度別本調査範囲

4　周 辺 の 遺 跡(第２表・第３図)

縄 文 時 代

大平野Ⅱ遺跡周辺での遺跡の分布は非常に少ない傾向にある。これは胆沢川や前川の丘陵解析により、平坦地は形成されるものの、その範囲は狭く、一帯のほとんどが山間部であることに起因するものと推測する。その一方、胆沢扇状地まで下がると国史跡である大清水上遺跡を代表とし、縄文時代の遺跡が多く分布する。大清水上遺跡は前期後葉大木5式期の大規模集落であり、大型住居が環状に配置されることで著名であるが、こういった集落は大平野Ⅱ遺跡周辺では認められず、いずれも１～数棟の竪穴住居を中心とした小規模集落が点在するにとどまる。

前川上流域で大平野Ⅱ遺跡より奥側には渋沢民遺跡がある。渋沢民遺跡は『胆沢市史Ⅰ』によると縄文時代中期(大木8a式)の土器片や石器群が出土している。ただし調査事例がなく詳細は不明である。渋沢民遺跡より奥には遺跡は認められず、その手前には大寒沢遺跡が存在するが、平成14年度に登録された新規遺跡であり、詳細は不明である。大平野Ⅱ遺跡の北東側に隣接して大平野Ⅰ遺跡が存在する。登録上は縄文時代の遺物包蔵地となっているが、未調査で詳細は不明。位置的にみて大平野Ⅱ遺

跡と同様な性格をもつ遺跡と想像する。さらに北東側には平根原Ⅰ・Ⅱ遺跡、坪渕Ⅰ～Ⅲ遺跡、下嵐江Ⅰ～Ⅲ遺跡が位置する。平根原Ⅰ遺跡は登録上、縄文時代の遺物包蔵地であるが、平成20年度の当センターでの発掘調査では遺構・遺物ともに見つからず、従って詳細も不明である。坪渕Ⅱ遺跡は縄文時代後晩期の遺跡であり、平成19・20年度の当センターでの発掘調査で後期、晩期各１棟ずつ竪穴住居が、また縄文時代後期に比定される掘立柱建物跡２棟が見つかっており、竪穴住居と掘立柱建物跡で構成される集落であったことが窺える。また別の土坑数基は、本遺跡の土坑群と時期・形態ともに類似しており、遺跡間での関連性があったことも推測される。下嵐江Ⅰ・Ⅱ遺跡は旧石器時代と近世を中心とした複合遺跡であるが、縄文時代中期後半から後期初頭に比定される竪穴住居が数棟見つかっており、やはり同地でも小規模集落が形成されていたことが窺える。

前川と胆沢川の合流地点に近い胆沢川北岸では蜂谷遺跡、尿前Ⅰ・Ⅱ遺跡、下尿前Ⅰ・Ⅱ遺跡が分布する。尿前Ⅱ遺跡、下尿前Ⅰ遺跡では縄文時代早期末～前期初頭・中期・後期・晩期の竪穴住居が数棟ずつ確認されている。時期幅は広いが、どの時期も小規模な集落が点在する様相が窺える。また尿前Ⅱ遺跡、下尿前Ⅱ遺跡は縄文中期の遺物包蔵地であり、大木10式土器が出土している。

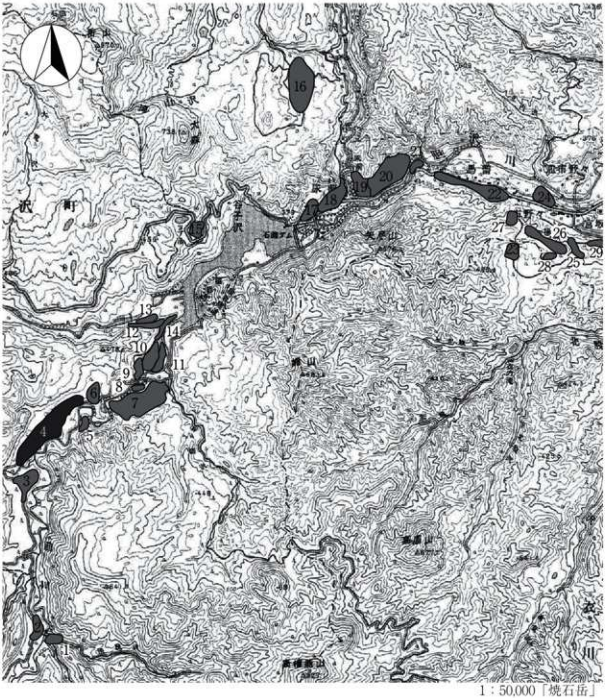
このようにして、胆沢川・前川上流域では縄文時代早期から晩期までに及び、人の生活の痕跡が認められる一方、集落自体は小規模で、生活者も転々と移動を繰り返していたことが窺える。当然、大平野Ⅱ遺跡もそのひとつであったと考える。

弥生時代以降

弥生時代以降の遺跡は大平野Ⅱ遺跡周辺でも縄文時代の遺跡と比較してさらに少ない。ただ同地は中世・近世においては仙北街道筋であったことから、貴重な資料が存在する。

第２表　周辺の遺跡一覧

No.	遺跡名	時　代	種　別	遺構・遺物	備　考
1	酒民沢Ⅱ	近世	祇山跡	寺院跡・祇道跡	
2	酒民沢	縄文・中世	散布地	縄文土器	
3	大堀沢	不明	不明	不明	
4	大平野Ⅱ	縄文・中世	集落	竪穴住居（縄文中期）・土坑（縄文中期・後期）・焼土遺構（中世）・縄文土器・石器・土師質土器	
5	道大平野	不明	不明	不明	
6	大平野Ⅰ	縄文	散布地	縄文土器	
7	平根原Ⅰ	縄文	散布地	縄文土器	
8	平根原Ⅱ	縄文	散布地	縄文土器	
9	坪渕Ⅰ	縄文	散布地	縄文土器	
10	坪渕Ⅱ	縄文	集落	竪穴住居（縄文後期）・土坑（縄文後期）・縄文土器・石器	
11	坪渕Ⅲ	縄文	散布地	縄文土器	
12	下嵐江Ⅰ	縄文	散布地	縄文土器・石器	
13	下嵐江Ⅲ	縄文	散布地	縄文土器	
14	下嵐江Ⅱ	縄文	散布地	縄文土器	
15	谷子沢	縄文	散布地	縄文土器	
16	蜂谷	縄文、近世	散布地	土坑（近世）、縄文土器、石器	
17	尿前Ⅱ	縄文	集落	竪穴住居・土坑・土器埋設遺構・（縄文早期～晩期）・縄文土器・石器	
18	尿前Ⅰ	縄文	散布地	縄文土器・石器	
19	下尿前Ⅱ	縄文・弥生・近代	集落	土坑（縄文・弥生）・焼土遺構（弥生）・縄文土器・弥生土器・炭釜（近世）	
20	下尿前Ⅰ	縄文・弥生・古代	集落	竪穴住居・土坑・配石遺構（縄文中・後期）・縄文土器・石器・土坑（弥生）・弥生土器・竪穴住居（古代）	
21	田穴山堰	近世～	生産遺跡	平堰・穴堰・余水吐・石積・水門・水門遺水板	
22	馬留	縄文	散布地	縄文土器	
23	惣寺	縄文	散布地	縄文土器	
24	市野々	縄文・近世	集落	土坑（縄文晩期）・縄文土器・石器・土師器・須恵器・炭釜・井戸（近世）・陶器・銭貨	
25	なめだけⅠ	縄文	散布地	縄文土器	
26	なめだけⅡ	縄文	散布地	縄文土器	
27	なめだけⅢ	縄文	散布地	縄文土器	
28	大清水上Ⅱ	縄文	散布地	縄文土器	
29	大清水上	縄文・近世	集落	大形住居・土坑・焼土遺構・埋設土器・陥し穴（縄文前期）・縄文土器・石器・焼土遺構（近世）	



1：50,000「焼石岳」

第３図　周辺の遺跡

弥生時代では下尿前Ⅰ・Ⅱ遺跡で弥生時代後期の土器やアメリカ式石鏃が見つかっており、縄文時代晩期以降も人の生活の場であったことが窺える。

古代については本遺跡以外に遺物が確認されていないが渋民沢遺跡は中世末期に「渋民沢銀山」があったとされ、墓壙や寺院跡が所在されたとされている。

近世では下嵐江Ⅰ・Ⅱ遺跡から掘立柱建物跡群が検出され、またそれらに伴うかどうか定かではないが、近接する坪渕Ⅱ遺跡からは多量の墓壙が見つかっている。

Ⅲ　調査の経過と方法

1　野　外　調　査

本調査に先立ち、岩手県教育委員会生涯学習文化課により試掘調査が実施され、委託者との協議を経て調査区が設定されている。

平成23年６月13日（月）より調査を開始した。調査員２名（９月５日から３名、11月１日から２名）、野外作業員26名体制で行った。

調査対象面積は87,000㎡と広大であり、調査区全体を表土除去し遺構検出を行うには、膨大な時間と労力を必要とする。そこで平成22年度までの調査で採用した方法を踏襲した。それは任意に試掘トレンチを設定し、表土下の地層状況を確認しつつ、遺構検出面、あるいは遺構自体を見つけ、その広がりから本調査区を必要とする範囲を確定した上で面的な表土除去、遺構検出を行う方法で、これにより面的な調査範囲を8,700㎡に限定した。

試掘には重機（バックホー0.45㎥、0.7㎥）を用いた。試掘トレンチは山側から前川の方向へ、概ね地形に直交させるように設定した。なお平成17年度の生涯学習文化課による試掘でも同方向にトレンチがいれられており、この文化課の試掘トレンチとは重ならないように注意した。トレンチ同士の間隔は５～６ｍとし、竪穴住居などの遺構の見落としが無いように努めた。試掘は６月14日から９月27日までの期間を要し、計109本の試掘トレンチを設定した（第4図）。試掘トレンチと面的に広げた本調査区範囲は、のべ面積24,716㎡になり、調査対象面積87,000㎡の約３割に相当する。なお試掘トレンチの設定については９月14日に生涯学習文化課に実見、確認を経て了承を得た。

面的に広げた本調査区範囲については、表土除去後、人力による遺構検出作業を行った。検出した遺構は規模や性格により、適宜に４分法と２分法を選択し精査を行った。各遺構については平面と断面、また必要に応じ遺物出土状況の実測および、写真撮影を行った。遺構平面図の実測には、CUBIC社製遺構実測ソフト「遺構くん」を用いて光波トランシットによる測量を行った。また断面図の実測にはデジタルカメラ（Canon PawerShot S60）を用いた写真解析測量を行った（撮影は調査員が行い、解析作業および、図化作業は㈲不二出版へ委託した）。遺物の取り上げについては出土量が多い場所は５ｍ四方の取り上げ用グリッドを設定し、取り上げを行った。出土量の少ない場所はトータルステーションを用いて座標を確認しつつ取り上げを行ったが、報告書掲載遺物については第４図に示したグリッドに変換し、観察表に表記している。

写真撮影は主に、デジタルカメラ1台（キャノンEOS50D）と６×７判カメラ１台（モノクローム）を使用し、同アングルのデジタル写真・銀塩写真両方撮影している。またセスナ機による航空撮影を用いた全景写真撮影を行った（株式会社　東邦航空に委託）。

平成23年10月12日（水）当事業団理事長・事務局長の視察を受けた。

平成23年10月27日（木）に委託者、県教育委員会立ち会いの下、終了確認を受けた。以降、残務を片付けつつ、11月７日（月）に調査を終了し、撤収した。

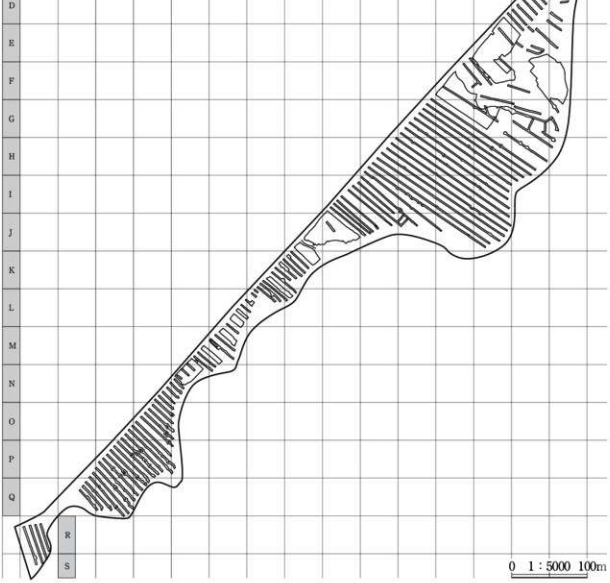
2　室　内　整　理

平成23年11月１日から平成24年３月31日の期間に室内整理作業を行った。調査員１名（２月16日か

ら２名)、室内作業員３名体制である。

遺物は概ね野外作業の段階で水洗を終えており、室内作業ではそれ以降の工程（仕分け・注記、接合復元、実測、トレース、図版作成、収納）を作業員が分担した。なお、剥片石器の実測は㈱ラングへと委託した。調査員は、原稿執筆、遺物観察表作成、実測図や図版のチェックを行った。また石器については平成24年１月24日に花崗岩研究会による石材鑑定を受けた。遺物の写真撮影は当センターの写場において写真技師が撮影を行った。撮影にはデジタルカメラ（EOS1ds）を用いている。

遺構図面の整理は、㈲不二出版に業務委託しており、野外調査時に作成した図面（「遺構くん」による平面図データと写真解析により作成した断面図）から、調査員の指示のもと、第２原図作成および遺構図版作成を行った。



第４図　トレンチ位置図

遺構・遺物図版の作成にはAdobe社「IllustratorCS3」を使用し、図版を作成した。

なお本報告書作成にあたり、各遺構名を野外調査時から変更した。本報告書に記された遺構名を優先する。遺構名の変更については第３表の通りである。

第３表　遺構名変更表

遺構名	旧遺構名
1号住居	SI01
2号住居	SI02
3号住居	SK32/SK33
4号住居	SI03
5号住居	SK27
6号住居	SI04
7号住居	SK143
1号住居状遺構	SK108
1号土坑	SK01
2号土坑	SK02
3号土坑	SK03
4号土坑	SK10
5号土坑	SK04
6号土坑	SK12
7号土坑	SK23
8号土坑	SK06
9号土坑	SK09
10号土坑	SK05
11号土坑	SK22
12号土坑	SK07
13号土坑	SK08
14号土坑	SK13
15号土坑	SK11
16号土坑	SK14
17号土坑	SK16
18号土坑	SK17
19号土坑	SK18
20号土坑	SK19
21号土坑	SK20
22号土坑	SK21
23号土坑	SK24
24号土坑	SK25
25号土坑	SK26
26号土坑	SK30
27号土坑	SK28
28号土坑	SK29
29号土坑	SK34
30号土坑	SK31

遺構名	旧遺構名
31号土坑	SK36
32号土坑	SK37
33号土坑	SK35
34号土坑	SK41
35号土坑	SK42
36号土坑	SK39
37号土坑	SK40
38号土坑	SK43
39号土坑	SK38
40号土坑	SK48
41号土坑	SK45
42号土坑	SK46
43号土坑	SK44
44号土坑	SK47
45号土坑	SK59
46号土坑	SK50
47号土坑	SK52
48号土坑	SK51
49号土坑	SK54
50号土坑	SK62
51号土坑	SK49
52号土坑	SK58
53号土坑	SK56
54号土坑	SK55
55号土坑	SK61
56号土坑	SK57
57号土坑	SK53
58号土坑	SK60
59号土坑	SK63
60号土坑	SK84
61号土坑	SK71
62号土坑	SK70
63号土坑	SK64
64号土坑	SK65
65号土坑	SK68
66号土坑	SK66
67号土坑	SK67
68号土坑	SK69

遺構名	旧遺構名
69号土坑	SK73
70号土坑	SK74
71号土坑	SK79
72号土坑	SK78
73号土坑	SK80
74号土坑	SK76
75号土坑	SK81
76号土坑	SK82
77号土坑	SK77
78号土坑	SK88
79号土坑	SK72
80号土坑	SK100
81号土坑	SK87
82号土坑	SK83
83号土坑	SK86
84号土坑	SK89
85号土坑	SK118
86号土坑	SK115
87号土坑	SK92
88号土坑	SK91
89号土坑	SK90
90号土坑	SK139
91号土坑	SK101
92号土坑	SK102
93号土坑	SK97
94号土坑	SK98
95号土坑	SK110
96号土坑	SK109
97号土坑	SK94
98号土坑	SK95
99号土坑	SK106
100号土坑	SK93
101号土坑	SK114
102号土坑	SK119
103号土坑	SK129
104号土坑	SK130
105号土坑	SK103
106号土坑	SK99

遺構名	旧遺構名
107号土坑	SK104
108号土坑	SK107
109号土坑	SK105
110号土坑	SK111
111号土坑	SK136
112号土坑	SK137
113号土坑	SK112
114号土坑	SK113
115号土坑	SK116
116号土坑	SK117
117号土坑	SK120
118号土坑	SK121
119号土坑	SK128
120号土坑	SK96
121号土坑	SK131
122号土坑	SK124
123号土坑	SK126
124号土坑	SK127
125号土坑	SK122
126号土坑	SK123
127号土坑	SK132
128号土坑	SK133
129号土坑	SK140
130号土坑	SK125
131号土坑	SK134
132号土坑	SK135
133号土坑	SK141
134号土坑	SK138
135号土坑	SK85
1号墳土	SX04
2号墳土	SX02
3号墳土	SX03
4号墳土	SX01
5号墳土	SX05
1号性格不明遺構	SK142

Ⅳ　遺物の分類基準

1　縄　文　土　器

早期中葉

蛇王洞Ⅱ式と物見台式を確認した。口縁部に爪形の刻みが巡り、胴部には格子状の沈線文が施文される一群を蛇王洞Ⅱ式、貝殻腹縁文と沈線文が組み合わさって施文される一群を物見台式とした。

前期前葉

大木2a・2b式を確認した。繊維が混入しているものを大木2a式、繊維が混入せず、Ｓ字状連鎖沈線文が巡るものを大木2b式とした。

中期初頭

大木7a・7b式を確認した。口縁・胴部が区画され、口縁部に縄文、沈線・隆帯で文様が描かれる一群を大木7a式、口縁・胴部に境がなく、文様が描かれる一群を大木7b式とした。文様については『縄文土器大観』などを参照した。

中期後葉～末葉

大木９式と大木10式を確認した。口縁から胴部へと楕円形区画文や渦巻き文が描かれる一群を大木９式とし、隆帯の付されるものを古段階、沈線による区画文を施文するものを新段階としている。大木10式は曲線的な区画文が描かれ、胴下半部には縄文のみが施文されるものを一括した。

後期初頭～中葉

門前式、十腰内Ⅰ～Ⅱ式、瘤付土器第３段階を確認した。門前式は口縁部から胴部に連鎖状隆帯が垂下する土器を一括した。十腰内Ⅰ～Ⅱ式は帯縄文が施文される土器、また注口土器で浅い浮彫状の文様が施文される土器を一括した。なお、出土土器が小片で、これ以上細分できなかった。また、瘤付土器第３段階では、瘤が付かなくても、同時期にみられる細沈線充填の一群が出土している。文様については、岩埋文589集、鈴木2001、『縄文土器大観』を参照している。

晩期中葉

大洞Ｂ～C1式までの土器を確認した。機械的ではあるが、三叉文が施文される土器を大洞Ｂ式、羊歯状文が施文される土器を大洞BC式、雲形文のみが施文される土器を大洞C1式とした。

文様から土器型式が特定できない土器については観察表に時期のみを記している。また縄文のみが施文、あるいは無文のいわゆる「粗製」土器も共伴する土器を基に推定している。

2　石　　器

石　　鏃

扁平で、二次加工により鋭角な先端部が作り出され、長さ5cm以下の剥片石器。細かい形態分類の名称については鈴木1991を参照した。

石　　錐

二次加工により錐状の端部が作出される剥片石器。形態から摘み部と錐部が分かれるものと、摘み部が無く、錐部の境が不明瞭なものとに分けられるが、点数が少なく、細分していない。

石　　匙

突出した摘み部を作出し、幅広の刃部が作出された剥片石器。摘み部を水平に置いた際の刃部角度から縦型、横型、斜型に分類した。

尖　頭　器

やや幅広で、二次加工により鋭角な先端部が作出された剥片石器で、長さは５cm以上に及ぶもの。

篦状石器

平面形が撥形を呈し、縁辺の一端あるいは両端に二次加工による刃部が作出された剥片石器。

スクレイパー

定形化した形状をもたず、縁辺部に刃部が作出されている剥片石器を一括した。刃部角度や刃部の形状から３分類した。

１類：縁辺の1/2以上に刃部が作出され、扁平で、刃部の角度が60°以下のもの。所謂、「削器」。

２類：縁辺の1/2以上に刃部が作出され、刃部の角度が60°以上のもの。所謂、「掻器」。

３類：縁辺に刃部が作出されるが、二次加工が１・２類と比べ粗いもの。

礫　　器

礫または大型の剥片を素材とし、縁辺を大きく連続剥離し、刃部とした礫石器。

両極石器

上下２方向か上下左右４方向に打撃の痕跡がある方形の剥片石器で、所謂「楔型石器」を含む。

磨製石斧

平面形が撥形か長方形で、剥離・敲打によって整形され、研磨によって仕上げられた石斧。

敲磨器類

10cm大以下で磨痕、敲打痕、凹痕、線上痕が確認できた礫石器を一括した。所謂「磨石」、「凹石」、「敲石」を含んでいる。上記４種類の使用痕が単体のみ認められるものも多いが、使用痕複数種が複数箇所認められるものもある。

石皿・台石

10cm大以上で偏平な礫石器を「石皿」、厚みのある礫石器を「台石」として一括した。使用痕は磨痕、凹痕、線上痕、研溝で複数種認められるものもある。

石　　核

表面にフレイク剥離作業をしたと考えられる痕跡が認められるもの。

フレイク類

上記の分類項目全てからはずれた剥片石器を一括した。特に微細剥片が縁辺に連続するものを「Ｕフレイク」、二次加工が不連続で刃部か判断できないもの、または部分的に施されるものを「Ｒフレイク」とした。また、打面と背面の形状から以下のように分類した。

まず打面の調整具合で３分類した。

１類：自然面を打面とするもの　　２類：１回、剥離作業が行われた面を打面とするもの

３類：２回以上、剥離作業が行われた面を打面とするもの。

また、背面にみられる自然面の残存状況により３分類した。

ａ類：背面の全てが自然面（剥離なし）　　ｂ類：背面の一部が自然面（一部に剥離作業を行う）

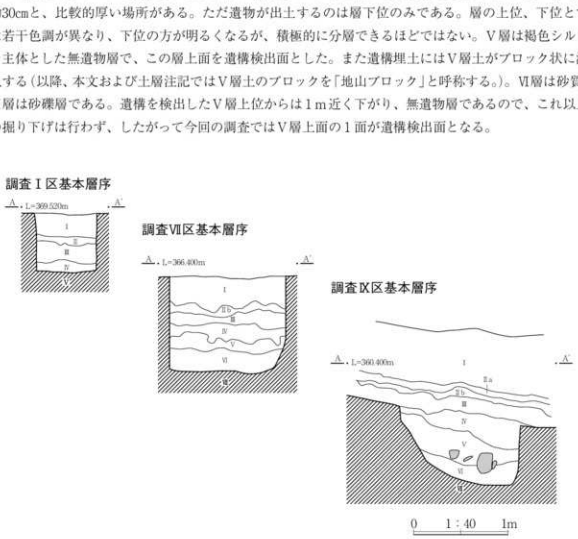
ｃ類：背面に自然面が見られないもの（面全体で剥離作業が行われている）

これらの組み合わせで９分類とした。また打面、背面が確認できないものは以下の２分類とした。

4a類：いずれかの面に自然面が残るもの。　　4b類：自然面が全く残らないもの。

Ⅴ 基 本 土 層

調査Ⅰ・Ⅶ・Ⅸ区で基本土層を確認した（第５図）。今回の調査範囲は広大であり、南西から北東にむけて標高が低くなる傾向があるが、土層の堆積様相自体は概ね均一であった。Ⅰ～Ⅱ層は自然堆積である。Ⅱ層は、遺構・遺物がなく、堆積時期については不明である。色調・焼土粒混入の有無で二分（Ⅱa・Ⅱb）した。Ⅲ層は黒褐色～褐色の粒子の細かいシルト層で、遺構は見つかっていないが、下部から縄文土器・石器が出土している。出土した縄文土器の時期は早期から晩期で、時期幅は広い。ただし調査区によっては出土する土器の時期に偏りがあることからⅢ層土の堆積時期のピークは場所によって異なっているとも考えられる。またⅤ層上面で検出した縄文時代の遺構には、Ⅲ層を主体とする埋土上位に十和田ａテフラが堆積しているものが数例認められる。このことから考えても、Ⅲ層の堆積にはかなり時間を要したことが想像される。Ⅳ層は暗褐色シルトを主体とし、遺物を包含する。Ⅳ層は層厚が約30cmと、比較的厚い場所がある。ただ遺物が出土するのは層下位のみである。層の上位、下位とでは若干色調が異なり、下位の方が明るくなるが、積極的に分層できるほどではない。Ⅴ層は褐色シルトを主体とした無遺物層で、この層上面を遺構検出面とした。また遺構埋土にはⅤ層土がブロック状に混入する（以降、本文および土層注記ではⅤ層土のブロックを「地山ブロック」と呼称する。）。Ⅵ層は砂質、Ⅶ層は砂礫層である。遺構を検出したⅤ層上位からは１ｍ近く下がり、無遺物層であるので、これ以上の掘り下げは行わず、したがって今回の調査ではⅤ層上面の１面が遺構検出面となる。



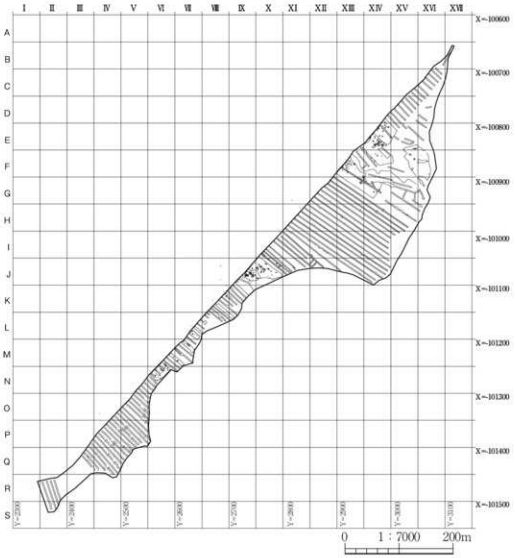
Ⅰ	黒色シルト	(10YR2/1)	粘性弱	しまり密	粒子やや細かい	表土　下部にⅡ層土ブロックで混入
Ⅱa	黒褐色シルト	(10YR2/2)	粘性やや弱	しまりやや密	粒子やや細かい	無遺物層
Ⅱb	暗褐色シルト	(10YR3/3)	粘性やや弱	しまりやや密	粒子やや粗い	無遺物層　焼土粒が少量、層的に混入
Ⅲ	黒褐色シルト	(10YR3/2)	粘性やや弱	しまりやや密	粒子やや細かい	遺物包含層　炭化物微量、小礫微量含み、遺物を包含する
Ⅳ	暗褐色シルト	(10YR3/3)	粘性やや強	しまり密	粒子やや細かい	Ⅱ～Ⅴ層の漸移層で土位に遺物を包含する　炭化物微量含む
Ⅴ	褐色シルト	(10YR4/6)	粘性強	しまり密	粒子細かい	上面が遺構検出面　炭化物微量、地山ブロックを少量含む
Ⅵ	黄褐色シルト	(10YR5/8)	粘性強	しまり密	粒子細かい	無遺物層　Ⅴ層土より明るい色調で、移質
Ⅶ	黄褐色砂礫	(10YR5/6)	粘性強	しまり密	粒子やや粗い	礫層　10～20cm大の礫多量含む

第５図　基本土層

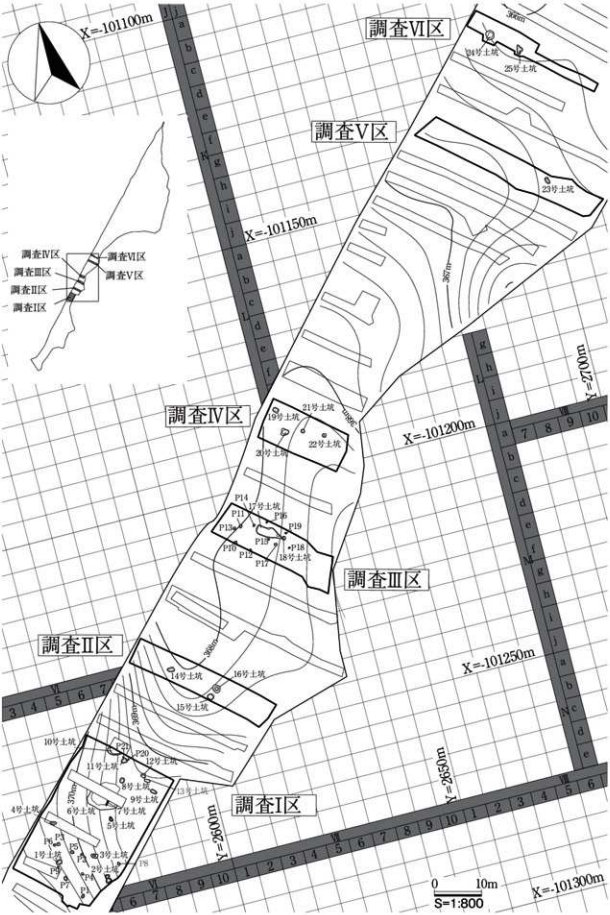
Ⅵ　検出した遺構・遺物

1　概　　要（第６～10図）

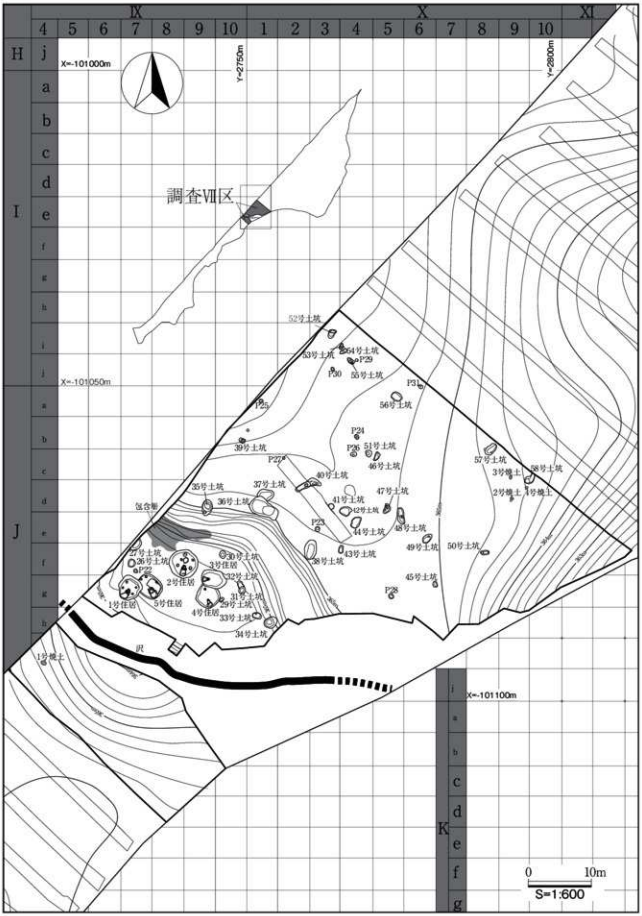
調査対象範囲は北東から南西へ長く、約1.2km×200mの範囲に及ぶ。第Ⅲ章で述べたとおり、調査区全体に109本のトレンチを入れ、遺構・遺物の有無を確認した上で、遺構精査や遺物の取り上げ等が必要な箇所については面的に広げて調査を行った。結果、面的に広げた調査区は10箇所に及んだ（調査Ⅰ～Ⅹ区）。特に調査Ⅶ・Ⅷ・Ⅸ・Ⅹ区の４箇所については遺構・遺物の広がりが顕著で、縄文時代中期後葉～末葉、および晩期中葉の集落域であることが分かった。検出遺構は竪穴住居７棟、住居状遺構１棟、土坑135基、焼土遺構５基、性格不明遺構１基である。出土遺物は土器が大コンテナ箱で11.5箱、石器が中コンテナ14箱分にのぼる。遺物の時期はそれぞれ縄文時代早期中葉・前期前葉・中期初頭・中期後葉～後期初頭・後期中葉・晩期中葉～後葉に比定され、特に中期後葉～末葉、晩期中葉の遺物は遺構に共伴するものが多い。遺構内外からの出土遺物量・点数については第４表に示した。



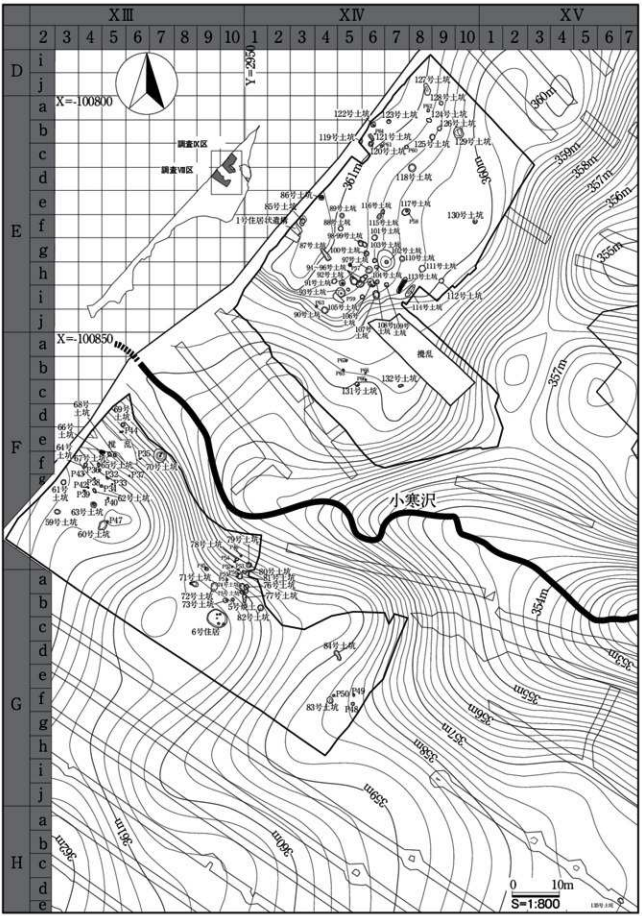
第６図　調査区全体図


調査Ⅵ区
調査Ⅴ区
調査Ⅳ区
調査Ⅲ区
調査Ⅱ区
調査Ⅰ区
X=-101100m
X=-101150m
X=-101200m
X=-101250m
X=-101300m
Y=-270m
Y=-265m
Y=-260m
24号土坑
25号土坑
23号土坑
21号土坑
19号土坑
22号土坑
20号土坑
17号土坑
18号土坑
14号土坑
16号土坑
15号土坑
10号土坑
11号土坑
12号土坑
8号土坑
9号土坑
6号土坑
7号土坑
5号土坑
4号土坑
1号土坑
3号土坑
2号土坑
0　10m
S=1:800

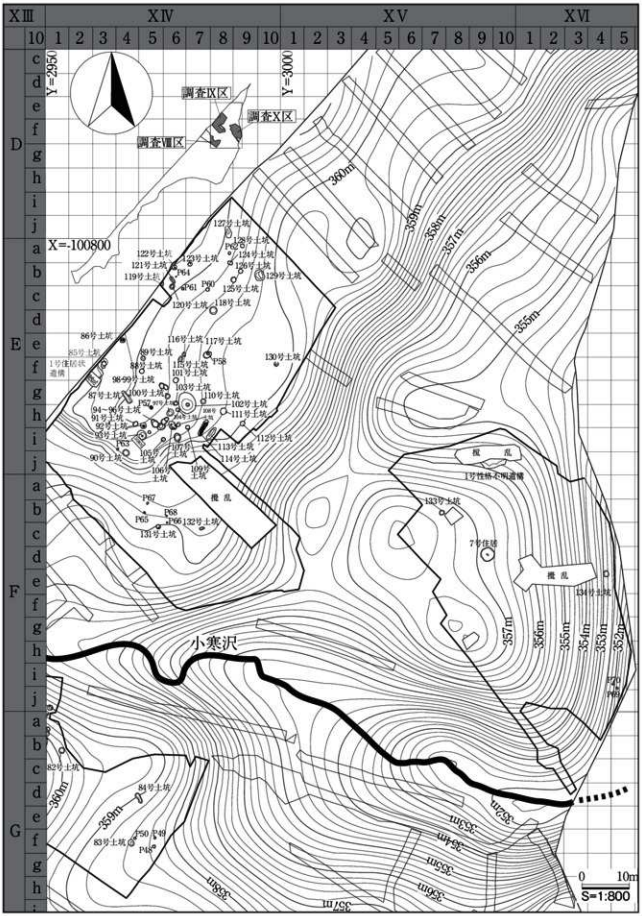
第７図　遺構配置図（１）


IX
X
XI
H
I
J
K
X=-101000m
X=-101050m
X=-101100m
Y=-2750m
Y=-2800m
調査Ⅶ区
52号土坑
53号土坑
54号土坑
P29
P30
55号土坑
P31
56号土坑
P25
39号土坑
P24
P26
51号土坑
46号土坑
P27
40号土坑
57号土坑
3号機土
58号土坑
2号機土
1号機土
35号土坑
37号土坑
36号土坑
強盗塚
41号土坑
47号土坑
42号土坑
44号土坑
48号土坑
P23
49号土坑
50号土坑
43号土坑
38号土坑
45号土坑
P28
27号土坑
26号土坑
47号
30号土坑
31号住居
32号土坑
2号住居
1号住居
5号住居
29号土坑
4号住居
33号土坑
34号土坑
沢
0
10m
S=1:600

第８図　遺構配置図（２）



第９図　遺構配置図（３）


XIII
XIV
XV
XVI
Y=-29500
Y=-30000
X=-100800
調査Ⅸ区
調査Ⅹ区
調査Ⅷ区
小寒沢
機乱
1号住居跡
7号住居
S=1:800
0
10m

第10図　遺構配置図（4）

第４表　遺構内・遺構外出土遺物一覧（１）

遺構＼遺物	土器/土製品	石鏃	石錐	尖頭器	石匙	両極石器	楔状石器	不定形石器	異形石器	磨製石斧	礫器	敲磨器類	石皿	石臼	台石	砥石	フレイク類	石核	石棒	石製品
１号住居	779.1	3	2					2			1	12		4	2		18			
２号住居	777.9	5	1		2		1	3				13		8	4		25	2		
３号住居	871.0	6			2		4	5				8		1	1	1	21			
４号住居	983.6	5			2	1		3			1	19		6	2		23	1		
５号住居	1092.3	2			1			2			1	20		6	2		14			
６号住居	179.9											4					5			
７号住居	64.8											2								
１号住居状遺構	49.6											4			3		1			
１号性格不明遺構	1231.5	3			2	1		3				9			1		5	1		
６号土坑	18.1																			
17号土坑	37.0							2									4			
18号土坑						1														
25号土坑	16.8																2			
26号土坑	1005.8				1							3		2			4			
27号土坑	2171.7							1									3			
28号土坑	25.1																1			
29号土坑	17.8																			
30号土坑	120.3	1															1			
31号土坑	35.0											1					1			
33号土坑	29.5							1												
34号土坑	11.4																6			
35号土坑	3443.3							1				1					2			
36号土坑	46.9											3								
37号土坑	190.9											3					2			
38号土坑	5.5						1	1				4					2			
39号土坑	10.2																			
40号土坑	6.5																4			
41号土坑	571.0																1			
42号土坑	12.9				1															
43号土坑	7.1											3		1						
44号土坑	58.8																			
45号土坑	20.3																			
46号土坑	7.8																			
47号土坑	3.9																			
48号土坑	0.0							1				1					1			
49号土坑	17.1					1	1													
53号土坑	27.4											1								
54号土坑	1550.2																			
55号土坑	532.0																1			
56号土坑	39.2																1			
57号土坑	39.0																			
59号土坑	61.4																1			
60号土坑	23.8																			
63号土坑	22.2														1		1			
65号土坑	16.6																			
66号土坑	327.9											2		1	1		2			
68号土坑	173.2											1								
69号土坑	20.3																1			
70号土坑	802.4																1			
71号土坑	40.4											1								
72号土坑	38.0																1			
73号土坑	52.0											1			1					
74号土坑	357.1													2			1			
75号土坑	224.2													1						1
76号土坑	656.3				1															1
77号土坑	304.4						1													
78号土坑	237.5																			
79号土坑	544.0							1												1
81号土坑	1952.7													1						
84号土坑												1			1					
85号土坑	891.3							1				2		2	1		1			
86号土坑	380.0							2				7		1	2		4			

※遺物が出土しない遺構については無記

土器/土製品：重量（g）　石器：点数（点）

第４表　遺構内・遺構外出土遺物一覧（２）

遺構＼遺物	土器/土製品	石鏃	石錐	尖頭器	石匙	両極石器	楔状石器	不定形石器	異形石器	磨製石斧	礫器	敲磨器類	石錘	石皿	台石	砥石	フレイク類	石核	石棒	石製品
87号土坑	795.6	2										7		2	1		3			
88号土坑	1036.1											1			1					
89号土坑	129.3																1			
90号土坑	128.3																			
91号土坑	211.8																1			
92号土坑	1342.0	1			1						1	4		1			9	2		
93号土坑	698.5																			
94号土坑	1485.9	1										8		1	2		3			
95号土坑	538.4											3		1	1		1			
96号土坑	324.0										1						2			
97号土坑	1523.1											9		1	1		4			
98号土坑	121.0											1								
99号土坑	649.7											2								
100号土坑	393.9											1					1			
101・94号土坑	0.0											1								
101号土坑	309.5	1															1			
101号土坑周辺	0.0											1								
102号土坑	1696.9	2			1							1		1	1		4			
104号土坑	0.0										1	4								
105号土坑	312.9											10		1			2			
106号土坑	895.0											4		2			4			
107号土坑	928.9	1										5					3			
108号土坑	184.4											1								
109号土坑	15.1											3								
110号土坑	359.0											7		1						
111号土坑	7282.2											1					3			
112号土坑	459.7											2		1						
113号土坑	169.1											44		1	4		1			
114号土坑	102.8																			
117号土坑	26.5						1					1								
118号土坑	770.7											3					3	1		
119号土坑	35.9																			
120号土坑	265.0													1						
121号土坑	3.8																1			
122号土坑	254.7	1										1					1			
123号土坑	0.0	1																		
124号土坑	139.6																			
125号土坑	1832.2											1		1			3			
126号土坑	247.8	2																		
127号土坑	5.2																1			
128号土坑	39.4																2			
129号土坑	728.9	1					1	2				4		1			5			
132号土坑	0.0																1			
133号土坑	71.7																			
134号土坑	0.0							1												
4号焼土	11.4																			
5号焼土	43.2																			
Pit35	0.0											1								
Pit46	0.0																1			
Pit59	0.0											1		1						
Pit67	0.0											1								
調査Ⅰ区遺構外出土	157.6				1											1	1	1		
調査Ⅱ区遺構外出土	3.3																			
調査Ⅵ区遺構外出土	135.0	2			1	1	3	7				1					8			
調査Ⅶ区遺構外出土	20664.9	15	2	2	15	4	14	50	3	1	8	44	1	6	1		245		1	
調査Ⅷ区包含層	20695.9	1				1		2				8					14	3		
調査Ⅷ区遺構外出土	1663.2	2			1	1						6				1	1			
調査Ⅸ区遺構外出土	13585.1	3			3	1	1	2				29		2	4	1	1			1
調査Ⅹ区遺構外出土	428.8					1	1	2				4		1	1		7			

土器/土製品：重量（g）　石器：点数（点）

2　竪　穴　住　居

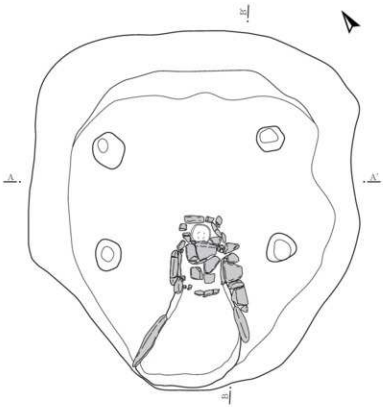
1号住居（第11～15図、写真図版４・49・64、第７表）

調査Ⅶ区やや西側Ⅳ J7gグリッドに位置する。Ⅴ層上面で検出した。５号住居と重複し、本遺構の方が新しい。遺構の南東側は沢へと続く緩やかな斜面地に立地し、またその周囲には調査前から大きな木が植わっていたため、第11図に示した通り、遺構全体を図化できたものの、実際には遺構上部が大きく削平を受けていた。平面形は不整な隅丸方形を呈し、開口部は380×349cmを測る。床面は概ね平坦であり、壁は大きく広がりながら立ち上がる。確認面から床面まで最深で33cmである。埋土は４層からなる。黄褐色シルトを主体とし、炭化物や礫が混入する。堆積状況から自然堆積と推定する。炉は複式炉で南西側の壁際に設置されている。規模は181×123cmを測り、土器埋設部、石囲部、前庭部で構成されている。土器埋設部は石囲が施され、胴下半のみの深鉢（第13図１）が正位で埋設されている。石囲部は比較的大型の礫を炉石として設置している。ただし前庭部との境界に設置された炉石だけは小型であり、境界として機能していたか定かではない。また石囲部底面には部分的ではあるが敷石が施される。なお各敷石の大きさは一様ではない。前庭部には側面に沿って、大型の礫がハの字状に設置されている。複式炉全体の深さは床面から最深で19cmを測る。掘り方は土器埋設部から前庭部の一部に及んでおり（第12図右下）、深さは最深14cmである。掘り方の状態から炉の構築に際し、床面を炉より一回り大きく底面を掘り下げ、掘り方土を埋めながら、炉石・埋設土器を設置していったものと推測する。他に柱穴４個を検出した。配置から主柱穴と推測され、したがって本遺構は４本柱を主柱とする竪穴住居といえる。また東側の壁面周辺の床面が一段高く、テラス状を呈しているが、硬化面などは認められず、意図的に構築された付属施設であるかどうかは定かではない。

出土遺物は縄文土器7765.4g、土製品１点、石器44点が出土している。埋土下位から出土するものが多く、その一方、炉内からの出土量は少ない。縄文土器の出土量は他の遺構より比較的多い方であるが、いずれも破片で形態の復元できるものは埋設土器（第13図１）のみである。ただそれ自体も胴下半のみしかみつからず、器形全体が分かるものではない。12点図示した。１の埋設土器は胴部中央が膨らむ形態の深鉢で口縁部から胴部上半はみつからなかった。胴部に「S」字状の区画文が巡る。５～８は深鉢の胴部片で１同様にアルファベット状の区画文が施文される。大木10式古段階に比定されると思われる。９・10は深鉢の胴部片で区画文が施文されるが、区画文の在り様から大木９式新段階の可能性が高い。５は区画文を微隆起線文により描いており、他とは異なる特徴を有する。11・12は粗製の深鉢で、11は口縁部が無文、胴部に縄文のみが施文される。土製品は土製円盤１点（13）で両面の磨滅が激しい。無文の土器片を利用し、側面に研磨を施して整形した痕跡が認められる。石器は７点図示した。14・15は石鏃で、14は平基鏃、15は凹基無茎鏃である。15は先端部を欠損する。16・17は石錐である。16は摘み部が大きく錐部が小さい形態で、摘み部の両端が欠損する。17は本来、錐部が長い形態を呈していたと推定されるが、錐部が２分の１以上欠損している。18・19は敲磨器類で、18は扁平な楕円形の礫を素材とし、側面端部に敲打した痕跡が見受けられる。19は不整な立方体状の礫を素材とし、全体に敲打痕が見受けられる。20・21は石皿である。20は偏平な大型の礫を素材とし、片面の中央部を磨り面として利用している。21は厚みのある不整な礫を素材とし、片面に磨痕と線上痕が、もう片面には凹痕と線上痕が認められ、両面使用されていたと考える。また磨面の方は面が著しく傾いており、これは使用して磨滅したことを要因とした片減りではないかと推定する。22は台石で先端部を欠損する。大型で厚みのある楕円形の礫を素材とし、側面まで含めた３面に敲打痕が見受けられる。

住居の時期は埋設土器（１）の時期から大木10式古段階と推定する。

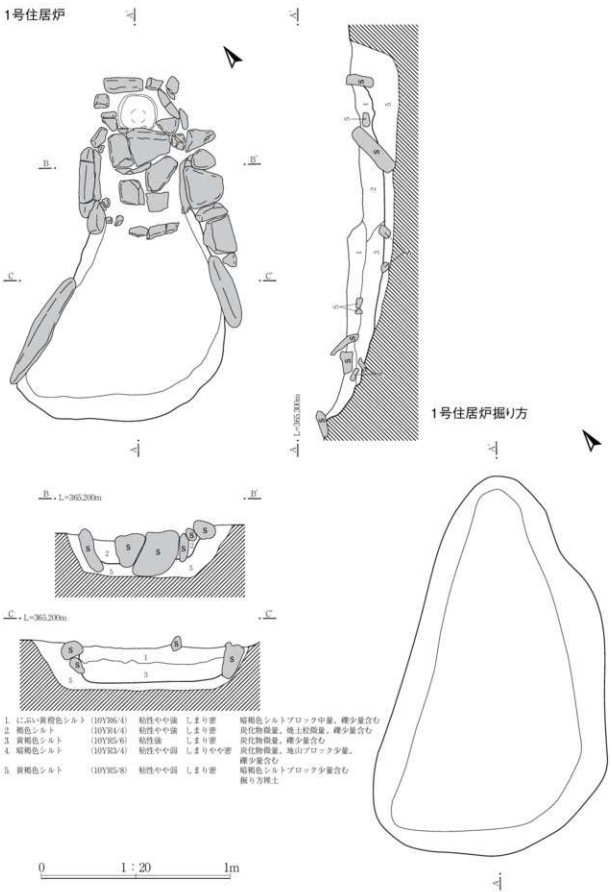
1号住居



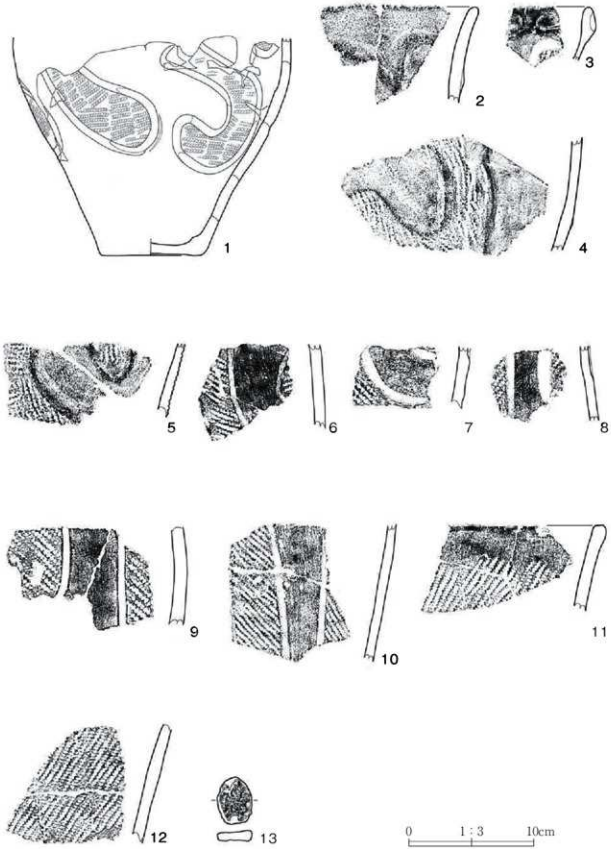
1. にぶい黄褐色シルト　(10YR4/3)　粘性やや弱　しまりやや強　炭化物微量、礫少量含む
2. 暗褐色シルト　(10YR3/3)　粘性やや弱　しまりやや密　炭化物微量、礫少量含む
3. 褐色シルト　(10YR4/4)　粘性やや弱　しまりやや密　炭化物微量、礫中量含む
4. 黄褐色シルト　(10YR5/6)　粘性弱　しまりやや密　炭化物微量、地山ブロック少量、礫中量含む

0　1：40　1m

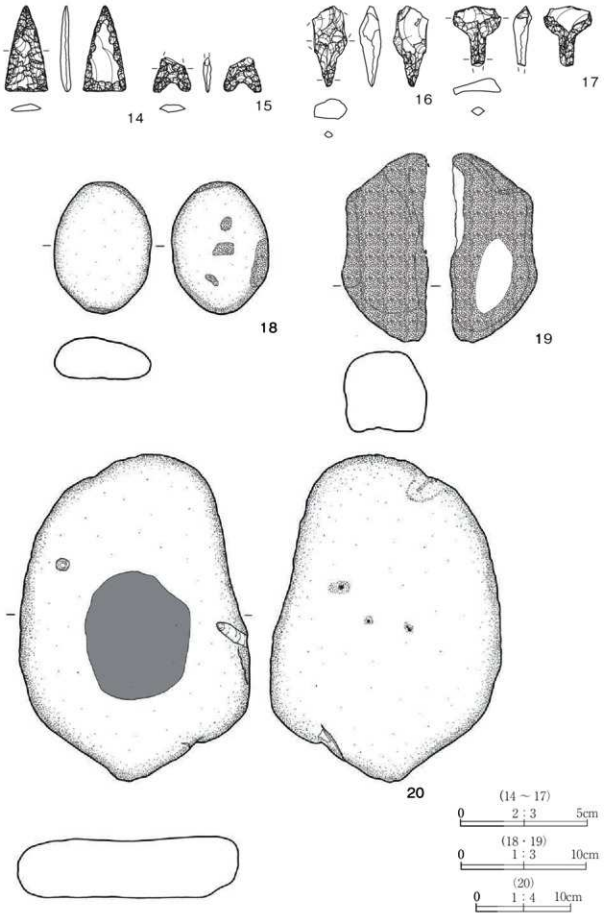
第11図　1号住居（1）


1号住居炉
1号住居炉掘り方
B
B'
C
C'
L=365.200m
L=365.300m
1. にぶい黄橙色シルト　(10YR6/4)　粘性やや強　しまり密　暗褐色シルトブロック中量、礫少量含む
2. 褐色シルト　(10YR4/4)　粘性やや強　しまり密　炭化物微量、焼土粒微量、礫少量含む
3. 黄褐色シルト　(10YR5/6)　粘性強　しまり密　炭化物微量、礫少量含む
4. 暗褐色シルト　(10YR3/4)　粘性やや弱　しまりやや密　炭化物微量、地山ブロック少量、礫少量含む
5. 黄褐色シルト　(10YR5/8)　粘性やや弱　しまり密　暗褐色シルトブロック少量含む　掘り方埋土
0
1：20
1m

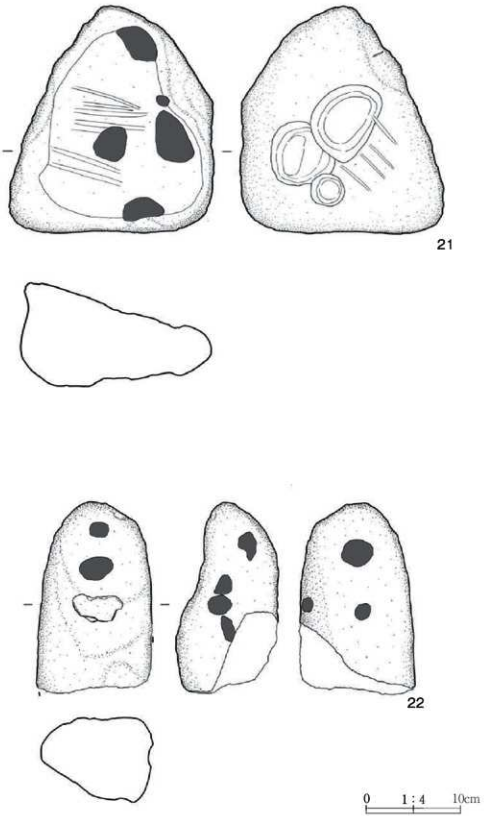
第12図　1号住居（2）



第13図　1号住居出土遺物（1）



第14図　1号住居出土遺物（2）



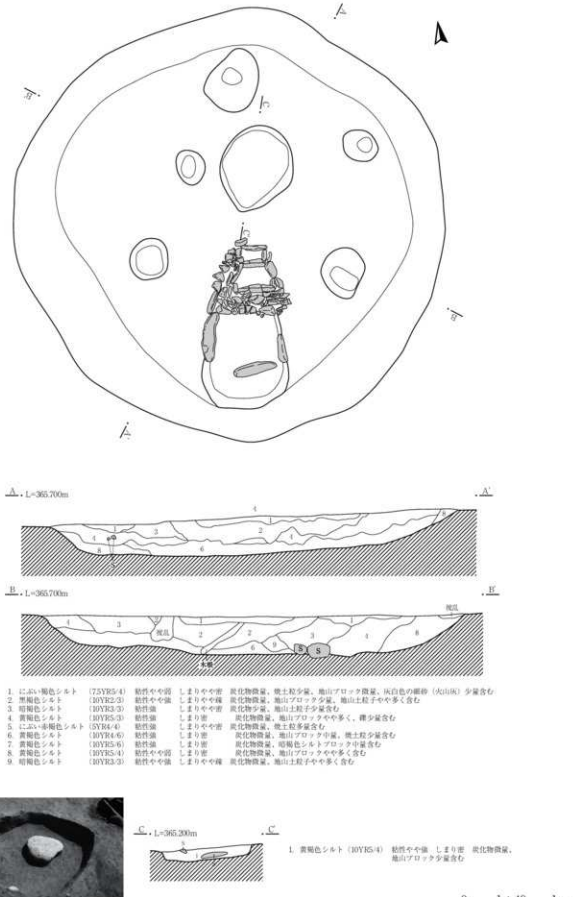
第15図　1号住居出土遺物（3）

２号住居（第16～21図、写真図版５・49・50・64・65、第７表）

調査Ⅶ区ほぼ中央Ⅸ J8f グリッドに位置する。Ⅴ層上面で検出した。他の遺構との重複はない。平面形は不整な円形を呈し、開口部は461×454cmを測る。床面は概ね平坦であり、壁は外へと大きく広がりながら立ち上がる。確認面から床面まで最深43cmである。埋土は９層からなる。埋土上位の中央付近は黒褐色シルトを主体とするが、その周りから埋土下位にかけては黄褐色シルトが主体となる。混入物は炭化物や礫であり、堆積状況から自然堆積と考える。なお１層中には火山灰がブロックで堆積していた。産地同定分析は行っていないが、同様の火山灰が調査Ⅰ区６号土坑・Ⅸ区102号土坑の遺構埋土からも出土しており、分析の結果、十和田ａテフラとの結果を得ている（第Ⅶ章参照）。したがって本遺構の火山灰も十和田ａテフラの可能性が高い。そのため本遺構は十和田ａテフラ降下期ごろまで埋没しきっていなかったことが推察される。炉は複式炉で、南壁際に設置されている。規模は181×84cmを測り、石囲部２個と前庭部で構成されている。石囲部は奥側（北）は25×30cmの横長の長方形を呈し、手前側（南）は30×50cmの不整な台形を呈する。どちらの石囲部も大型の礫を炉石として設置している。西側側面には小型の礫を２列に並べており、炉石の補強として設置されたものと推定される。また手前側石囲部は前庭部との境界には小型の礫を利用して、幅20cm程度の敷石が施されている。敷石に利用される石の大きさは不規則である。前庭部は石囲部より一段高く、南側にいくにつれ、住居床面との境が判別しづらいほど浅くなる。側面には沿うように大型の礫が設置され、また前庭部のほぼ中央には長楕円形の大型礫が炉の長軸にほぼ直交して設置されている。この大型礫は炉に伴うものと判断したが、前庭部底面から５cmほど上に位置しており、廃棄された礫の可能性もある。複式炉全体の深さは最深で床面から16cmを測る。掘り方は石囲部から前庭部の一部に及んでいる（第17図右下）。深さは最深８cmである。掘り方から炉の構築に際しては、石囲部２箇所それぞれの位置を楕円形状に掘り窪め、そのうえで掘り方を埋めながら、炉石を設置していったことが推測される。また掘り方埋土中からは土器が多量に出土しており、それらは一部炉の使用面にも露出している。そのため、精査当初は埋設土器と考えていたが、石囲部の炉石の位置とそれらの土器の位置が大きくずれており、埋設土器として設置されたものではないと判断した。したがって、これらの土器群は炉の構築の際に掘り方土とともに埋められたと推察されるが、どのような理由によるかは定かではない。他の付属施設として、柱穴５個と床下土坑１個を検出した。柱穴は主柱穴と考えられ、したがって本遺構は５本柱の主柱穴で構成される住居と想定されるが、配置がややいびつである。床下土坑は複式炉の北側から検出した。不整な楕円形を呈し、94×77cmを測る。深さは床面から12cmである。埋土中から石皿１点（第20図38）が出土している。

出土遺物は縄文土器7778.9g、石器64点である。縄文土器の出土量は比較的多く、形態が復元できたものも見受けられるが、その一方小片も多い。７点図示した。23～25は複式炉の掘り方埋土から出土した土器で24・25は石囲部下から、23は25の上に重ねられて出土した（第17図下写真参照）。23は深鉢の胴部のみで楕円形区画文が胴部の上半と下半で別々に施文される。区画内は縄文の他、刺突が充塡される。また区画文の外にも縄文が施文される。24は胴部下半のみで縄文を地文とし、縦位に浅い沈線が垂下する。沈線は区画文の一部ではないかと考える。23・24ともに大木９式新段階と判断した。25は深鉢の胴部下半で、浅い縄文が施文されるのみである。なお24・25は二次焼成により器面全体が赤色化している。26は小型の深鉢でほぼ完形である。３単位の波状口縁を呈し、胴部がくびれる形態である。口縁部が無文、胴部は縄文のみ施文される。27は深鉢の口縁部片。突起状に突出した波状口縁で頂部の下には円孔が見受けられる。口縁部全体には横位に微隆線による区画文が巡り、胴部には縦位に楕円形区画文が垂下する。28・29は粗製の深鉢で、同一個体である。28には口縁部に補修

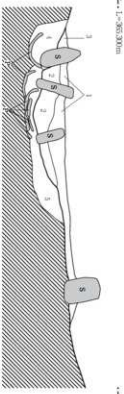
2号住居

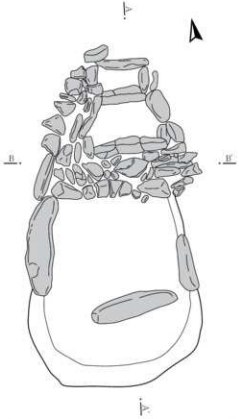


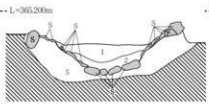
床上土坑

第16図　2号住居（1）

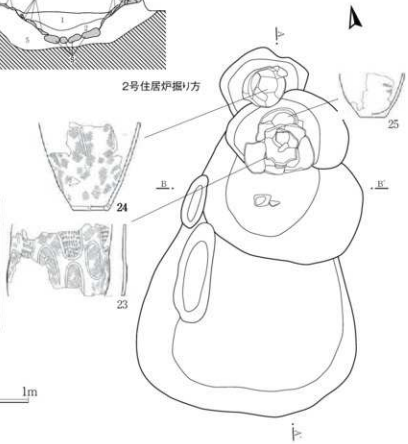
2号住居炉







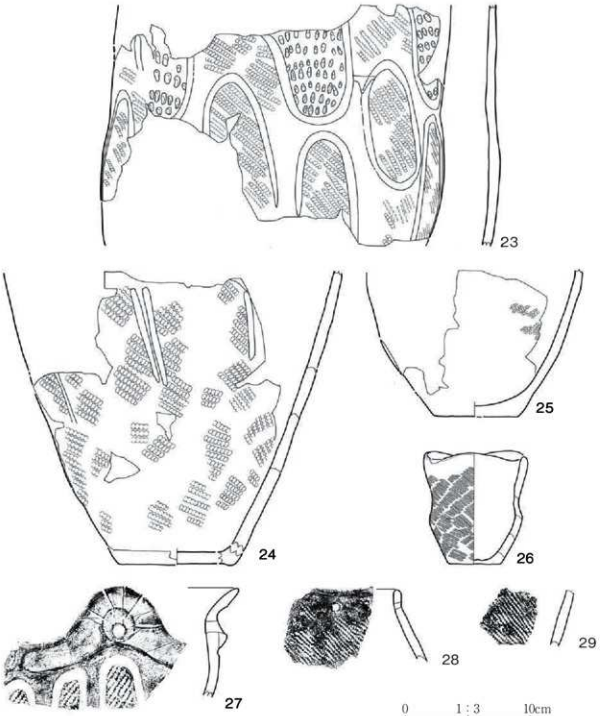
2号住居炉掘り方



掘り方内土器出土状況（西から）

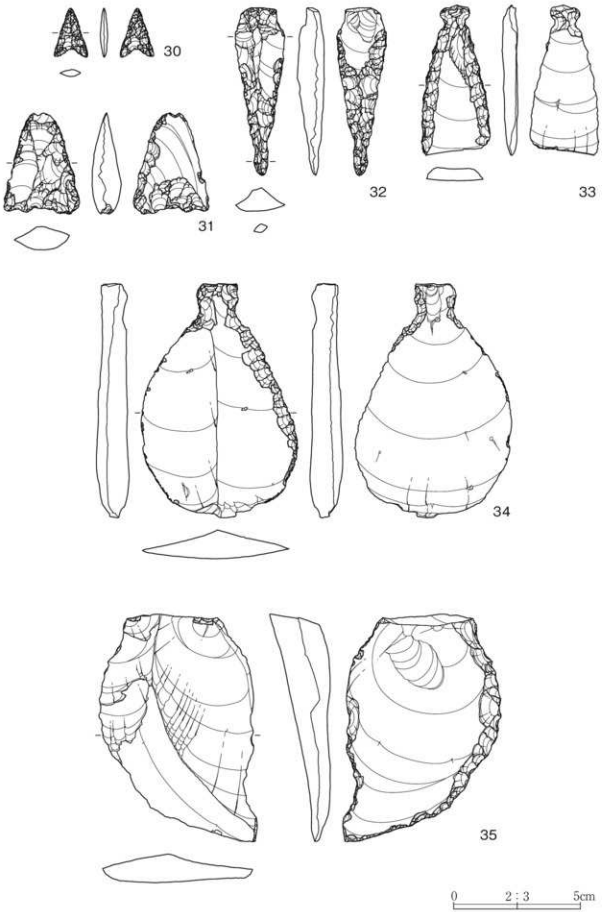
0　1：20　1m

第17図　2号住居（2）

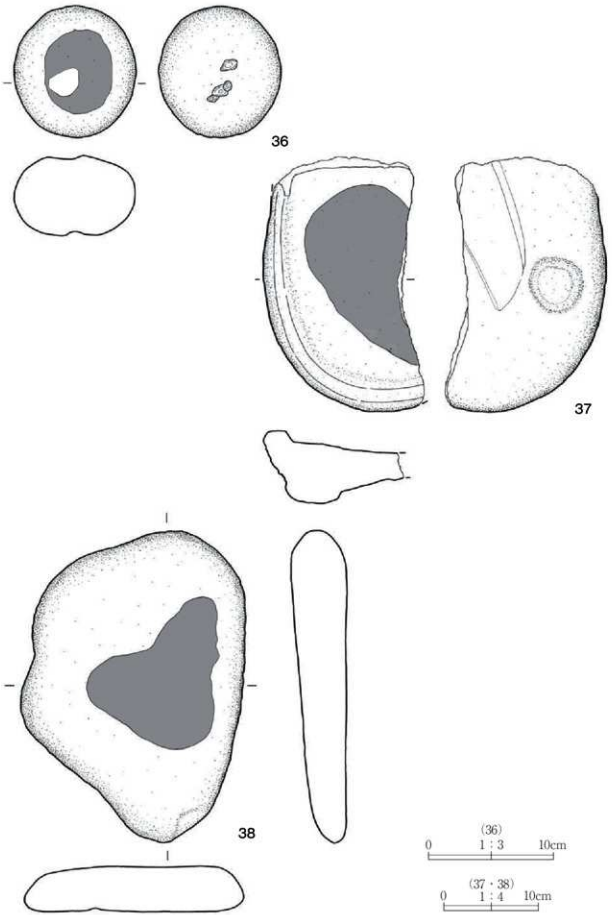


第18図　2号住居出土遺物（1）

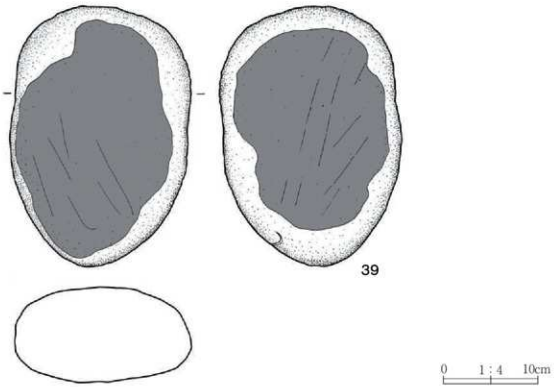
孔が1か所見受けられる。また内面にはアスファルトと思われる黒点の付着物が確認できた。石器は10点図示した。30・31は石鏃で、30は凹基無茎茎鏃の完形品である。31は未成品である。完成品と比べて大きく、また二次加工が及ばない縁辺が見受けられることから、それほどまだ加工が進んでいない段階と考える。32は石錐で縁辺の両面に二次加工が施されている。33・34は石匙でどちらも縦型である。33は細身で縁辺部両端の片面のみに二次加工が施され、刃部を作出している。34はやや体部に幅があり、摘み部から続く縁辺の片側、片面のみに二次加工による刃部が作出されている。35は不定



第19図　２号住居出土遺物（２）



第20図　2号住居出土遺物（3）



第21図　２号住居出土遺物（４）

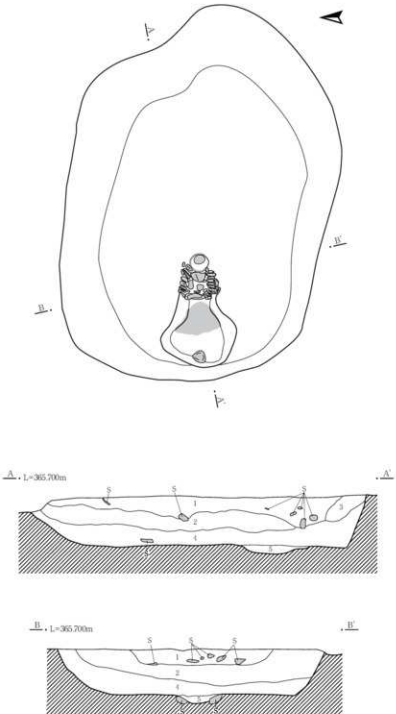
形石器である。やや厚みのある縦型の剥片を素材とし、縁辺の片面のみから二次加工を施し、刃部を作出している。36は敲磨器類で厚みのある円形の礫を素材とし、片面の中央に磨った痕跡、もう片面に凹痕が認められる。37・38は石皿である。37は３分の１以上欠損する。底面に低い脚が１か所見受けられるが、本来は四脚であったと推測する。使用面は１面のみで使用面は浅くくぼんでいる。38は偏平で不整形な礫を素材とし、片面のみを磨面として利用する。38は台石で、厚みのある楕円形の礫を素材とし、両面に磨った痕跡が認められる。また磨った際に生じた線上痕も見受けられる。

竪穴住居の時期は掘り方埋土出土の土器（23～25）の時期から大木９式新段階と考える。

３号住居（第22～26図、写真図版６・50・65、第７表）

調査Ⅶ区ほぼ中央Ⅸ J9gグリッドに位置する。Ⅴ層上面で検出した。４号住居と重複し、本遺構の方が新しい。平面形はいびつな楕円形を呈し、開口部は400×280cmを測る。床面は概ね平坦であり、壁は緩やかに広がりながら立ち上がる。確認面から床面まで最深で52cmである。埋土は４層からなる。埋土上位の中央部は暗褐色シルトを、その周辺および埋土下位は褐色シルトを主体とし、炭化物や地山ブロックが混入する。堆積状況から自然堆積と推定する。炉は複式炉で西側の壁際に設置されている。規模は21×80cmを測り、土器埋設部、石囲部、前庭部から構成されている。土器埋設部にはほぼ完形の深鉢（第24図40）が正位で埋設されている。埋設土器は底部を欠損するのみでほぼ完形で、その底部には、内側から礫を１個付設してあたかも補強するかのようであった。石囲部は中央に扁平な礫が不規則に、側面両側には楕円形の礫が炉の長軸と直交方向に並べられて設置されていた。前庭部は石囲部側は一段高く、前庭部自体は深く掘り下げられている。前庭部の平面形はいびつで石囲部よ

3号住居

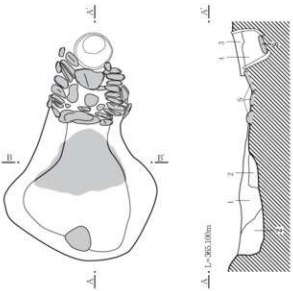


1. 暗褐色シルト	(10YR3/4)	粘性やや弱	しまりやや密	炭化物微量、地山ブロック少量含む
2. 褐色シルト	(10YR4/4)	粘性強	しまりやや密	炭化物微量、地山ブロック中量含む
3. 褐色シルト	(10YR4/4)	粘性やや強	しまりやや緩	炭化物微量、地山ブロック多量含む
4. にぶい黄褐色シルト	(10YR5/4)	粘性強	しまり密	炭化物微量、暗褐色シルトブロック少量含む
5. 暗褐色シルト	(10YR3/4)	粘性やや強	しまり密	炭化物少量、地山ブロック中量含む　炉埋土

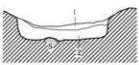
0　1：40　1m

第22図　3号住居（1）

3号住居炉



3号住居炉掘り方



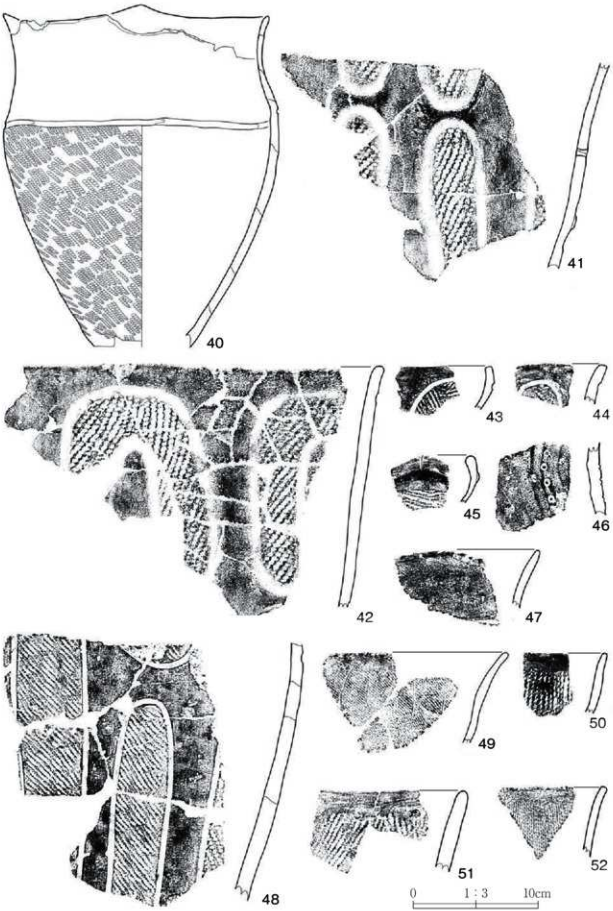
1. にぶい黄褐色シルト（10YR5/4）粘性やや弱　しまり密　炭化物微量、地山ブロック少量含む
2. にぶい黄褐色シルト（10YR5/3）粘性弱　しまり密　炭化物微量含む
3. 褐色シルト　（10YR4/6）粘性強　しまりやや密　炭化物微量含む
4. 褐色シルト　（10YR4/4）粘性強　しまりやや疎　炭化物中量含む

0　1：20　1m

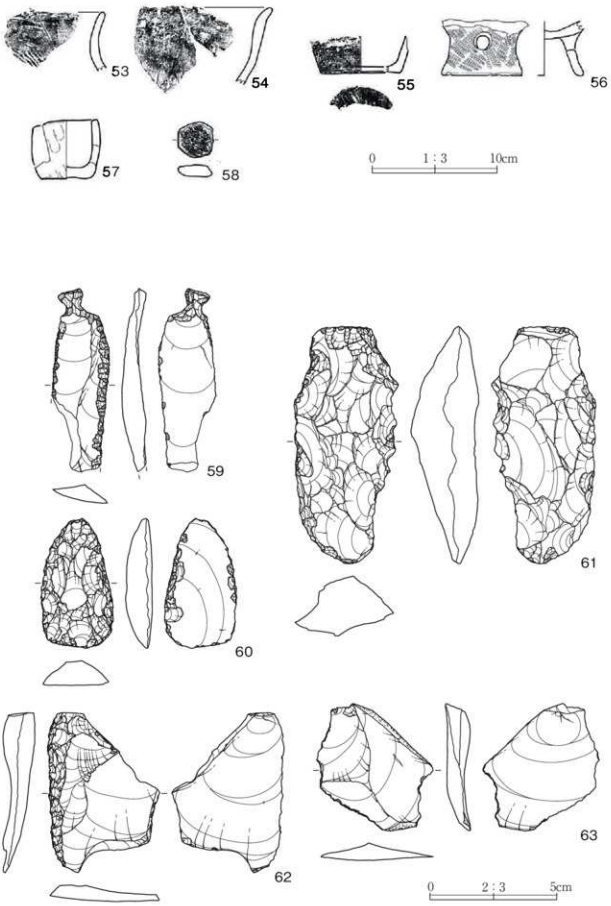
第23図　3号住居（2）

りやや広がる。他の竪穴住居の複式炉にみられるような、前庭部側縁への礫の設置は認められない。複式炉全体の深さは床面から最深で14cmを測る。掘り方は明確には確認できなかった。第23図右写真は埋設土器・炉石を外した状態である。この状態からの推定であるが、炉の構築に際し、埋設土器部や前庭部について掘り下げ自体はおこなったが、炉の形以上には大きく掘り下げていない可能性が高い。他に柱穴などの付属施設は検出していない。

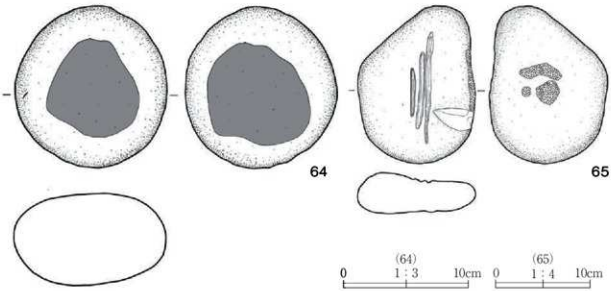
出土遺物は縄文土器8718.0g、土製品１点、石器49点である。縄文土器の出土量は多い。形態を復元できたものは少ないが、大型の破片資料が多い。18点図示した。40は複式炉に埋設された深鉢で、底面と口縁部の一部を欠損するのみである。波状口縁を呈し、口縁部と胴部は沈線によって区画される。口縁部は無文、胴部は縄文のみが施文される。粗製の類と考えられる。形態の特徴から大木10式古段階に相当すると判断した。41・42・48は深鉢の大型破片で、口縁部から胴部へと区画文が縦位に施文される。41・48は区画内の縄文は磨消し技法で、42は充填技法で施文される。大木９式新段階から大木10式古段階に比定される。43・44は深鉢口縁部の小片で口縁部に区画文が施文される。大木10式新段階。45は口縁部に隆帯が巡る。46は浅い沈線が縦位に垂下し、それに沿うように円形の刺突が巡る。大木10式でも比較的新しい段階に比定される可能性がある。49～52は粗製で、口縁部あるいは口端部直下が無文、胴部は縄文のみが施文される。53～57は小型の土器を一括した。54は鉢。胴部が



第24図　３号住居出土遺物（１）



第25図　3号住居出土遺物（2）



第26図　３号住居出土遺物（３）

膨らみ口縁部が外反する形態で無文である。55は小型深鉢の底部片で無文。底面に縄文の圧痕が見受けられた。56は台付鉢の台部である。貫通孔があり、器面全体は縄文のみ施文される。57は手づくねの小型深鉢で、指頭による整形痕が残るのみで無文である。土製品は土製円盤１点（58）で無文の土器片を利用している。磨滅が激しいが、側面に研磨を施し、整形したものと推察する。石器は７点図示した。59は石匙で、先端部を欠損する。縦型で片面のみ二次加工を施し、刃部を作出する。60・61は篦状石器で、60はやや小型で、片面は二次加工が全面に及んでいるが、もう片面は刃部となる縁辺部分にのみ二次加工が施される。61はやや大型で厚みのある剥片を素材としている。両面の全面に二次加工が及んでいるが、やや粗い加工で刃部を作出する。62は不定形石器とした。縦型の剥片を素材とし、縁辺の片面にのみ二次加工を施す。63はUフレイクで、2b類に相当し、縁辺に微再剥離が見受けられる。64・65は敲磨器類である。64はやや厚みのある円形の礫を素材とし、両面に磨った痕跡が認められた。65は偏平な不整形の礫を素材とし、片面には砥溝が３条、もう片面の中央には敲打した痕跡が見受けられる。

遺構の時期であるが、出土した縄文土器の時期にはやや幅があるが、複式炉の埋設土器（第24図40）の時期から大木10式古段階と考える。

４号住居（第27～32図、写真図版７・51・52・65、第７表）

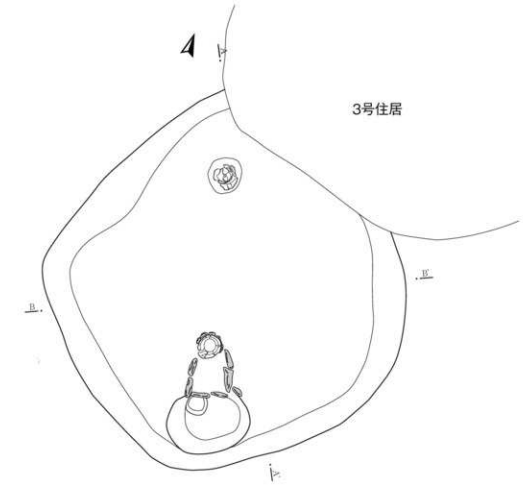
調査Ⅶ区ほぼ中央Ⅸ J9gグリッドに位置する。Ⅴ層上面で検出した。３号住居と重複し、本遺構の方が古い。平面形はいびつな楕円形を呈し、開口部は402×384cmを測る。床面は概ね平坦であり、壁は緩やかに外へと広がりながら立ち上がる。確認面から床面まで最深で43cmである。埋土は４層（第27図３～６層）からなる。暗褐色シルトを主体とし、炭化物や地山ブロックが混入する。堆積状況から自然堆積と推定する。炉は複式炉で南側の壁際に設置されている。規模は129×87cmを測り、土器埋設部、石囲部、前庭部から構成されている。土器埋設の土器は底部を欠損する深鉢（第29図66）で正位の状態で埋設されている。石囲部は40×45cmの方形を呈し、６個の比較的大型の礫を炉石として設置している。ただし埋設土器部との境界は炉石が設置されていない。前庭部は石囲部より一段低く掘り下げられてい

る。平面形は横長の楕円形で石囲部よりやや広がる。また石囲部との境界に径20cmの掘り込みが認められた。前庭部内に炉石などの設置は認められない。複式炉全体の深さは床面から最深で14cmを測る。掘り方は土器埋設部から石囲部に及んでおり、掘り方の深さは４cmである。掘り方の状態から、炉の構築に際し、まず、炉の形態に全体を掘り窪め、そこからさらに土器埋設部分を掘り下げている。そして掘り方を埋めながら埋設土器・炉石を設置していったものと推測される。付属施設としては埋設土器と柱穴１個がある。埋設土器は北壁寄りの床面で検出している。径約40cm、深さ約10cmの掘り方に土器（第29図68）が埋設されており、深鉢の胴下半から底部のみが埋設され、その上から胴部上半の破片が覆いかぶさるような状態で出土した。柱穴は１個のみ検出したが、炉の掘り方を精査中にみつけており、床面上では確認できなかった。複式炉前庭部の西脇に接するように位置しており、竪穴住居本体に伴うものか、炉の付属施設と考えるべきか定かではない。また柱穴埋土中から土器（第29図67）が出土している。

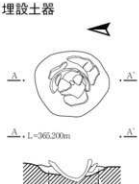
出土遺物は縄文土器9839.0g、石器63点である。縄文土器の出土量は今回の調査で検出した遺構の中でも特に多い。18点図示した。66は複式炉の埋設土器である。口縁部の一部と底面を欠損する。胴部上半で膨れ、口縁部がややくびれる形態で口縁部と胴部が沈線で区画されている。胴部に渦巻き状の区画文が施文され区画内には縄文が充填される。大木10式古段階の特徴を有する。67は炉の前庭部西脇から見つかった柱穴の埋土から出土している。深鉢の胴部下半部で地文の縄文のみしか認められないが、形態から大木10式古段階ではないかと推定する。68は住居北側の床面に設置されていた埋設土器である。底面のみ埋設され、その上に口縁部から胴部の大型破片が覆いかぶさるような状態で出土したが、両者の接合部はみつかっていない。粗製の深鉢で口唇部直下が無文で、その下は縄文のみが施文される。69は複式炉内から出土した深鉢で口縁部が欠損するが、胴部に上下二段に区画文が施文される。区画内の縄文は磨消技法で施文され、文様の特徴から大木９式新段階に比定されると考える。70～74は深鉢の破片資料で楕円形と推定される区画文が描かれている。大木９式新段階から大木10式古段階頃に比定される。75は深鉢で、埋土上位から出土した破片類が接合したものである。口縁部と胴部の一部を欠損する。波状口縁を呈し、胴部上半がくびれる形態で、口縁部に２条の沈線が巡る。胴部には楕円形あるいは逆「U」字状の区画文が施文される。区画内の縄文は磨消技法で施文されており、大木９式新段階の特徴を有する。76は埋土下位から出土した深鉢の大型破片で、胴部上半にゆるい肩を有し、口縁部はほぼ直立気味になる形態である。口縁部には３条の沈線文が巡り、浅い幅広の刺突文が巡る。胴部には浅い浮彫状の渦巻き文や逆「U」字状の区画文が展開し、区画内には縄文ではなく、口縁部にも施文する刺突文が充填される。これは本遺跡ではあまり見られない文様要素である。大木９式古段階～新段階に収まるものであると考える。77～82も破片資料である。77は繊維が混入しており前期前葉大木2a式に比定される。口縁部に押圧縄文が巡る。78～80は中期後葉に比定され、沈線による区画文が見受けられるが、縄文は区画内外に施文されている。79は粗製の深鉢の底部片で無文。底面に網代痕が認められた。82は小型の深鉢で口縁部を欠損する。縄文のみが施文される。石器は９点図示した。83･84は石鏃で、83は凹基無茎鏃、84は平基鏃である。85は縦型の石匙で、先端部を欠損する。刃部は主に片面のみの二次加工で作出している。86は両極石器で上下左右４方向から打撃を加えた痕跡が認められる。87は不定形石器で、全体の２分の１以上を欠損する。縁辺の片側片面のみの二次加工で刃部を作出している。88は敲磨器類で縁辺部のほとんどを欠損する。偏平で不整形な礫を素材とし、両面に凹痕が数か所にわたり見受けられる。89～91は石皿でいずれも偏平な楕円形の礫を素材とし、89は片面、90・91は両面を使用面とする。

遺構の時期についてであるが、出土した土器には大きく時期幅があり、特に埋土上位からは大木９式新段階に比定される土器が多く、一方、炉の埋設土器は大木10式古段階に比定される土器であると

4号住居



埋設土器



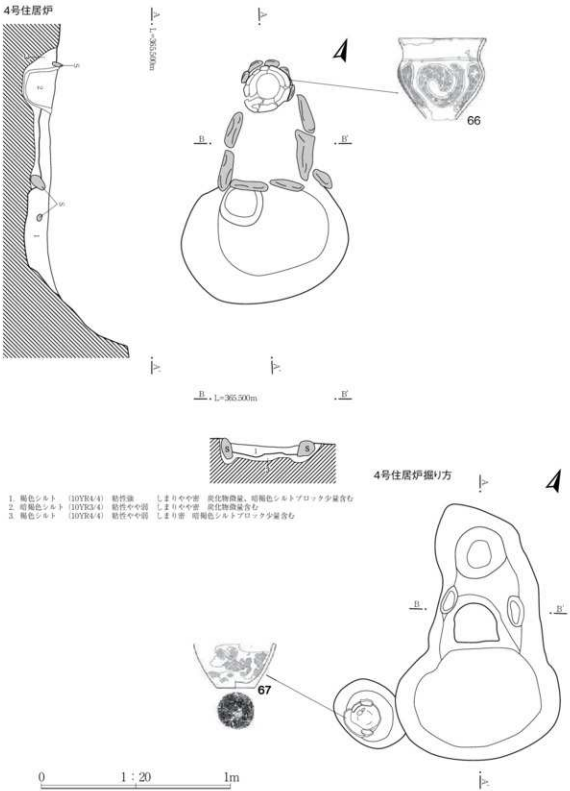
1. 黒褐色シルト（10YR2/3）　粘性強　しまりやや密　炭化物微量含む　３号住居埋土
2. 暗褐色シルト（10YR3/3）　粘性強　しまりやや密　炭化物微量含む　３号住居埋土
3. 暗褐色シルト（10YR3/3）　粘性弱　しまりやや緩　炭化物微量、地山ブロック少量含む
4. 褐色シルト　（10YR4/4）　粘性やや強　しまり密　炭化物微量、地山ブロック中量含む
5. 黒褐色シルト（10YR3/2）　粘性弱　しまりやや密　炭化物微量、地山ブロック少量含む
6. 暗褐色シルト（10YR3/4）　粘性強　しまりやや密　炭化物少量、暗褐色シルトブロック中量含む

1. 暗褐色シルト（10YR3/4）　粘性やや強　しまりやや密　炭化物微量含む

4号住居　0　1：40　1m

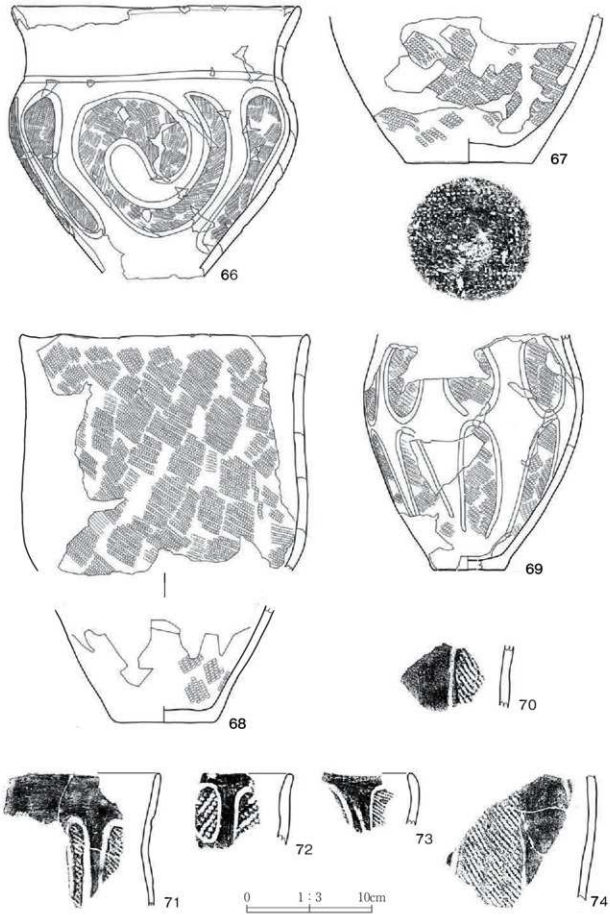
埋設土器　0　1：20　1m

第27図　4号住居（1）

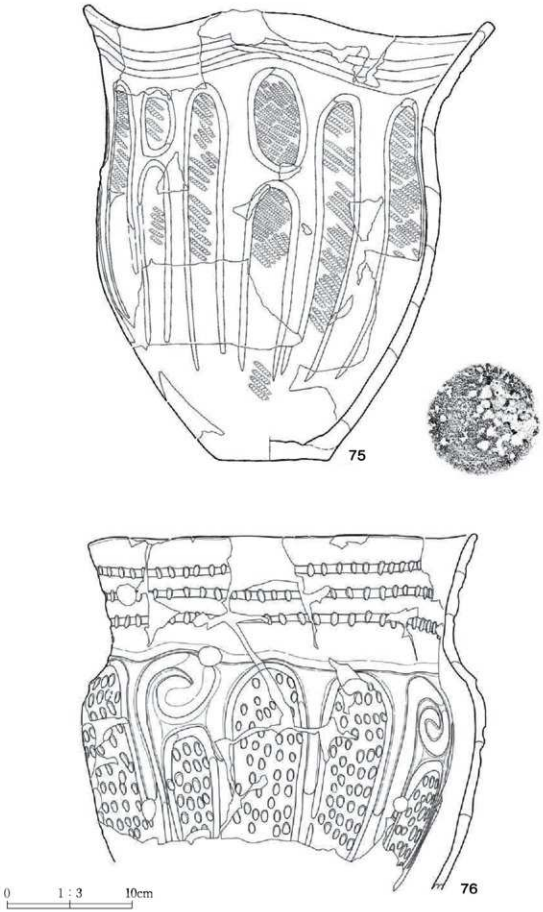


第28図　4号住居（2）

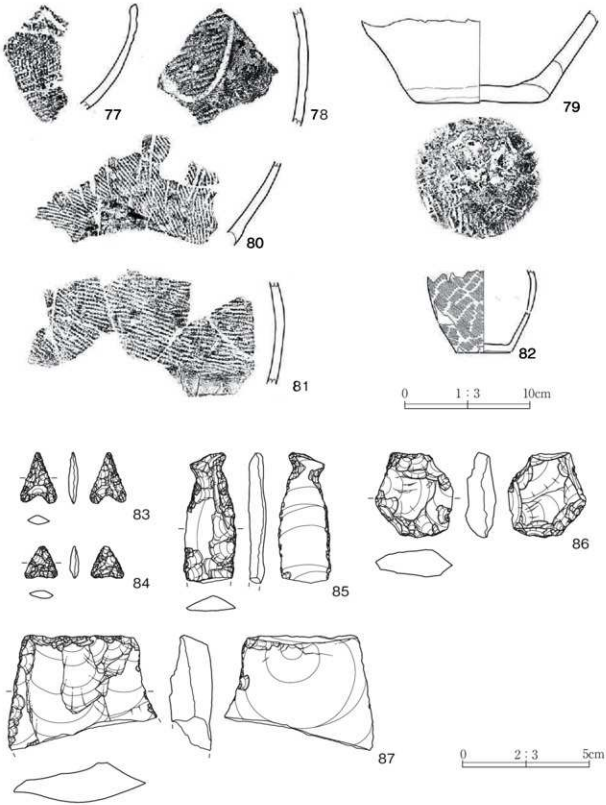
いう逆転現象が見受けられる。本遺構については埋設土器の時期を基準とし、本遺構の時期を大木10式古段階とする。埋土中から出土した大木９式新段階の遺物群は何らかの原因で遺構内に混入したものと推定するが、前期前葉の土器片（77）も同様に混入したのもそれを裏付けているかもしれない。



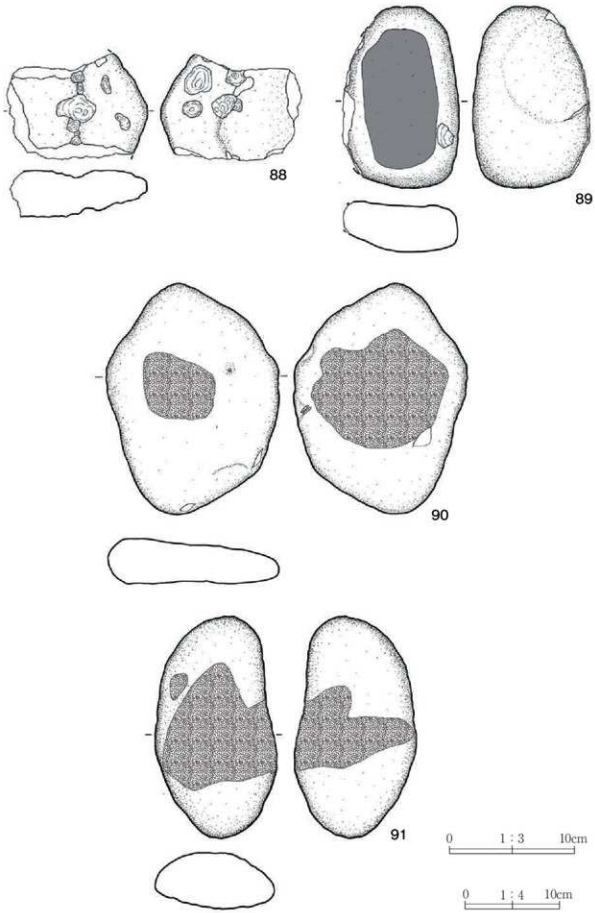
第29図　4号住居出土遺物（1）



第30図　4号住居出土遺物（2）



第31図　4号住居出土遺物（3）



第32図　４号住居出土遺物（４）

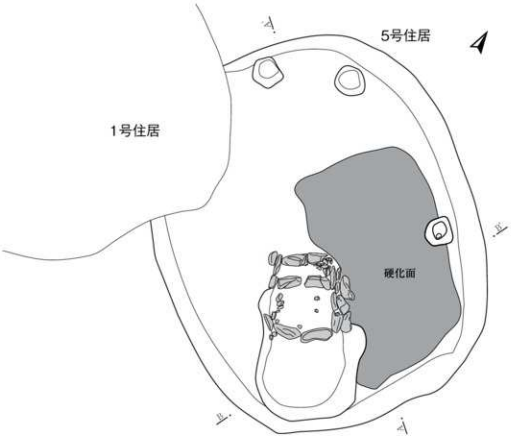
5号住居（第33～36図、写真図版８・52・53・66、第７表）

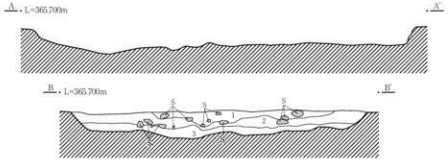
調査Ⅶ区ほぼ中央Ⅸ J7gグリッドに位置する。Ⅴ層上面で検出した。１号住居と重複し、本遺構の方が古い。検出面から埋土上位中にかけて多量の礫が出土し（第33図下写真）、精査当初は検出プランと出土礫の広がりから大型の土坑と判断していた。しかし礫を取り除き、掘り進めていった結果、底面上で炉を検出し、竪穴住居であることが判明した。

平面形は楕円形を呈し、開口部は421×354cmを測る。床面は概ね平坦であり、壁は緩やかに広がりながら立ち上がる。確認面から床面まで最深で28cmである。埋土は３層からなる。暗褐色～褐色シルトを主体とし、炭化物やⅤ層土が混入する。堆積状況から自然堆積と推定する。また上述の通り、検出面から埋土上位にかけて多量の礫群が出土している。基本土層のⅣ～Ⅴ層中には礫は混入しないので、これらの礫群は人為的に投げ込まれたものと推測される。礫群は観察の結果、概ね自然礫であり、わずかに敲磨器類が含まれている。どのような行為で礫群が投げ込まれたかは不明である。炉は複式炉で南側の壁際に設置されている。規模は176×116cmを測り、石囲部２個と前庭部から構成されている。石囲部は北西側（奥）が30×60cmの方形、南東側（中央）は65×70cmの正方形を呈する。短軸方向の炉石は比較的大型の礫を炉石として設置するが、長軸方向の炉石は短軸のそれと比べるとやや小型の礫を利用する。また北東側の炉石はその外側に炉石を二、三重に並べており、補強しているものと推定する。石囲部の形態は短軸方向が幅広になっており、他の竪穴住居の複式炉と比べると、やや異なる形態を呈する。前庭部は石囲部より一段高くなる。平面形はいびつで石囲部よりやや広めである。他の複式炉のような、前庭部縁辺への礫の設置は認められない。複式炉全体の深さは床面から最深で30cmを測る。掘り方は石囲部のみで認められた（第34図右）。掘り方の深さは最深14cmである。掘り方の状態から炉の構築に際し、炉の形に全体を掘り窪め、そして石囲の範囲をさらに掘り下げた上で、掘り方土で埋めながら炉石を設置していったものと推測する。他に柱穴は北西壁際から２個、東壁際から１個検出している。主柱穴の可能性が高いが、配置から３本柱の主柱配列とは考えにくいので、他に１号住居に切られた部分にあるか、あるいは検出出来なかった可能性がある。したがって本遺構は４本以上の主柱穴で構成される竪穴住居といえる。また炉の東側の床面で硬化面を確認した。硬化面は230×134cmの広範囲に及んでおり、床面全体の1/3以上を占めている。

出土遺物は縄文土器5118.7g、石器48点である。縄文土器の出土量は比較的多いが、その割には小片が多く、形態が復元できたものはない。10点図示した。92は深鉢の大型破片で本遺構からの出土遺物のなかでは最も大きい。直線的に開く形態と推定され、口縁部から胴部へと逆「U」字状の区画文が施文される。区画内の縄文は磨消技法で施文される。大木９式新段階の特徴を有する。93・94も深鉢で92と同様な形態、文様をとるものと推定する。94は区画文内の縄文を充填技法で施文している。区画文が明瞭でないが大木10式古段階の可能性もある。95・96は口縁部が内湾する深鉢で二重の沈線により区画文を描いている。また縄文は区画内のみではなく区画の外の一部にも施文される特徴を有する。大木９式新段階新段階である。97・98は深鉢の胴部片で92と同様の文様と推定する。99・100は深鉢の胴部片でアルファベット状の区画文が施文されており、大木10式古段階の特徴を有する。また100は区画の外にも縄文が施文される。101は粗製の深鉢で口縁部から胴部へと縄文のみが施文される。石器は３点図示した。102は縦型の石匙で、先端部を欠損する。両面全体に二次加工が施されている。103・104は敲磨器類でどちらも厚みのある楕円形の礫を素材とし、103は両面に磨った痕跡が、104は両面と端部の一部に磨った痕跡および敲打した痕跡が見受けられる。

遺構の時期については埋土中から出土した土器群の多くが大木９式新段階に比定されるものであることから、本遺構もその時期に相当すると考える。





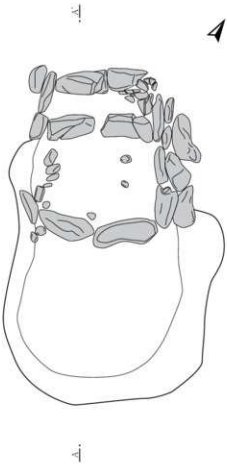
1. 暗褐色シルト　(10YR3/3)　粘性やや弱　しまりやや密　炭化物微量、地山ブロック微量含む
2. 褐色シルト　(10YR4/4)　粘性やや強　しまりやや緩　炭化物微量、地山ブロック少量含む
3. 褐色シルト　(10YR4/3)　粘性強　しまり密　炭化物微量、暗褐色シルトブロック中量含む

0　1：40　1m

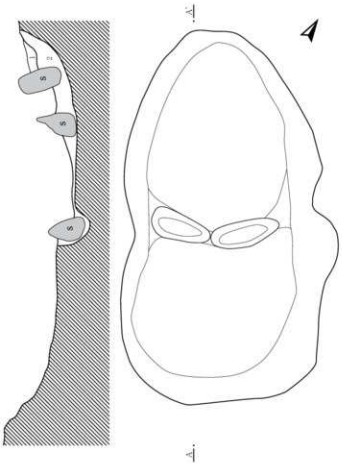
5号住居　埋土上位　検出土状況

第33図　5号住居（1）

5号住居炉



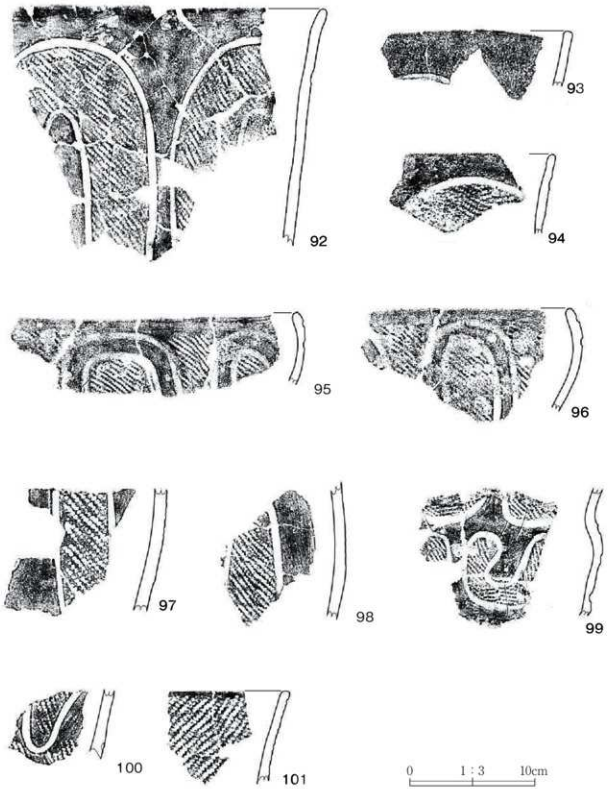
5号住居炉掘り方



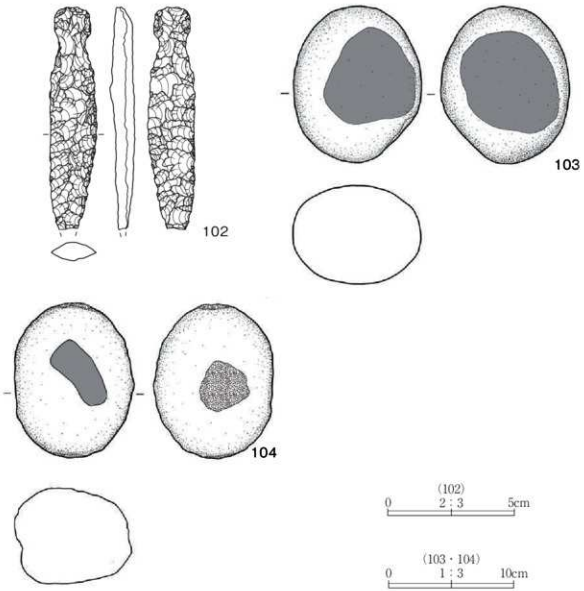
1．暗褐色シルト（10YR3/4）粘性やや強　しまりやや密　炭化物微量含む
2．褐色シルト　（10YR4/4）粘性強　　しまり密　　掘り方埋土　炭化物微量含む

0　1：20　1m

第34図　5号住居（2）



第35図　５号住居出土遺物（１）



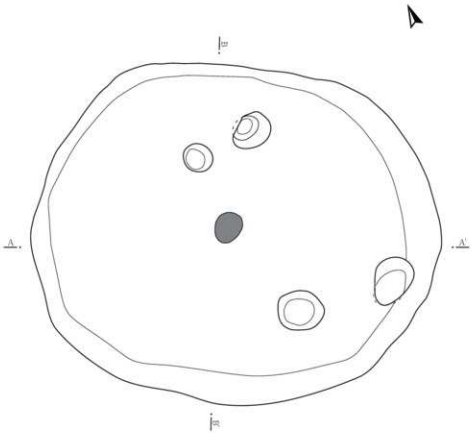
第36図　５号住居出土遺物（２）

６号住居（第37・38図、写真図版９・53・66、第７表）

調査Ⅷ区ほぼ中央XⅢG9eグリッドに位置する。Ⅴ層上面で検出した。他の遺構との重複はない。平面形は不整な楕円形を呈し、開口部は420×359cmを測る。床面は概ね平坦であり、壁は大きく外へと広がりながら立ち上がる。確認面から床面まで最深で17cmである。埋土は３層からなる。暗褐色シルトを主体とし、炭化物やⅤ層土が混入する。堆積状況から自然堆積と推定する。炉は地床炉で床面ほぼ中央に設置されている。炉の平面形は楕円形を呈し、規模は34×27cmを測る。炉内の焼成具合は良好で、７cmの焼土の堆積が認められた。他に柱穴４個を検出した。配列は不規則で主柱穴かどうかは定かではない。

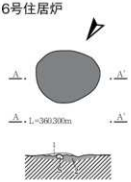
出土遺物は縄文土器1796.9g、石器９点である。縄文土器の出土量は重量でみると比較的多いが、そのほとんどは第38図105に示した深鉢であり、他の出土土器は図示できないほど小片である。105は粗製の深鉢の大型破片であるが、接合点がないので、両面から図示している。ほぼ直線的に外へと広がり、口縁部で若干内湾気味となる形態で、口縁部から胴部にかけて縄文のみが施文される。石器は

6号住居



1. 暗褐色シルト（10YR3/3）粘性やや弱　しまりやや密　炭化物微量、地山ブロック少量、礫少量含む
2. 黒褐色シルト（10YR2/2）粘性やや弱　しまりやや密　炭化物微量、地山ブロック少量含む
3. 暗褐色シルト（10YR3/4）粘性やや弱　しまりやや密　炭化物微量、地山ブロックやや多く含む

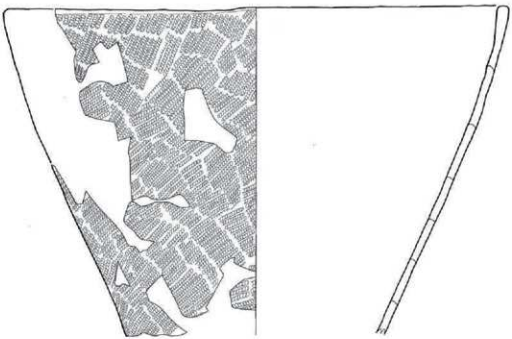
6号住居炉

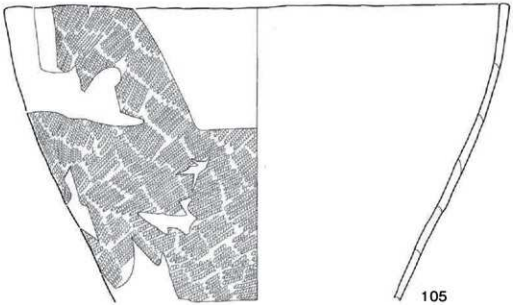


1.暗褐色シルト（10YR3/3）　粘性やや弱　しまりやや緩
　　焼土粒・炭化物微量含む
2.赤褐色焼土　（5YR4/6）　粘性弱　しまり密
　　焼成により床が赤色化　炭化物少量含む

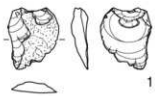
6号住居炉　0　1：20　1m　　6号住居　0　1：40　1m

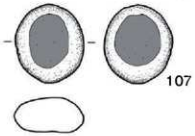
第37図　6号住居





0　1：3　10cm





(106)
0　2：3　5cm

(107)
0　1：3　10cm

第38図　6号住居出土遺物

２点図示した。106はフレイク類で背面に大きく自然面が残る。打面は不明でⅣａ類に相当する。107は小型の敲磨器類。偏平な円形の礫を素材とし、両面に磨った痕跡が見受けられる。

遺構の時期については、主な出土土器（105）が粗製であるので、時期判断の材料にはなり得ないが、105の形態では縄文時代後晩期の深鉢に類似し、また周辺遺構からは主に晩期（大洞BC式）の土器が出土していることから、本遺構も晩期に比定するものと推測する。

７号住居（第39・40図、写真図版10、第７表）

調査Ⅹ区ほぼ中央ⅩⅤF9dグリッドに位置する。Ⅴ層上面で検出した。他の遺構との重複はない。平面形は不整な楕円形を呈し、開口部は293×276cmを測る。床面は概ね平坦であり、壁は緩やかに広がりながら立ち上がる。確認面から床面まで最深で22cmである。埋土は２層からなる。暗褐色シルトを主体とし、炭化物やⅤ層土が混入する。堆積状況から自然堆積と推定する。炉は地床炉で床面ほぼ中央に設置されている。炉の平面形は不整な長楕円形を呈し、規模は57×35cmを測る。炉内の焼成具合はやや良好で、約６cmの焼土の堆積が認められた。柱穴などの付属施設は認められない。

出土遺物は縄文土器64.8g、石器2点である。縄文土器の出土量は少なく、また小片のみで、図示できるものは第40図108のみである。深鉢の胴部片でわずかにみえる文様は帯縄文と考えれる。小片だが、後期前葉十腰内Ⅰ～Ⅱ式に比定されるものと推定する。石器は１点図示した。109は敲磨器類で厚みのある不整形な礫を素材とする。平坦な両面に大きな凹痕が見受けられる。

遺構の時期については、出土遺物が少なく定かではないが、108を根拠とすれば、縄文後期前葉と推定される。北側に隣接する１号住居状遺構もその時期に相当するので、そういった点でも蓋然性は高いものと考える。

３　住居状遺構

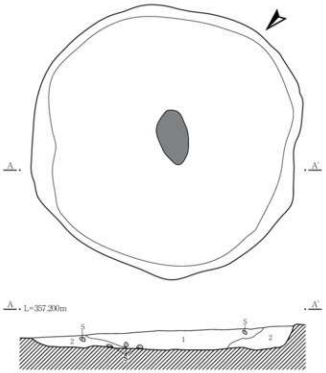
平面形態や規模の点では竪穴住居と同等であるが、炉や柱穴などの付属施設が認められない、また部分的に調査区外に及んでおり、遺構の全容が知れない竪穴の遺構を「住居状遺構」とする。今回の調査では１棟検出した。

１号住居状遺構（第41・42図、写真図版11・53・66、第７表）

調査Ⅸ区北端ⅩⅣE3fグリッドに位置する。Ⅴ層上面で検出した。遺構の北西側は調査区外に及んでおり、また遺構の南西部は攪乱に壊されている。精査当初、プラン形状から大型の土坑を想定していたが、掘り進めていくにつれ、壁の立ち上がり方が他の土坑とは異なること、また遺物の出土量も多いことから竪穴住居の可能性も視野に入れつつ精査を進めた。ただ遺構全体のうち検出できた範囲は限られ、またその範囲からは炉や柱穴が確認されなかったことから、竪穴住居とはせず、住居状遺構とした。他の遺構との重複はない。検出できたのは全体の1/3程度である。平面形は不整な方形を呈すると推定する。開口部は（236）×（194）cmを測る。床面は概ね平坦であり、壁はほぼ直立気味である。確認面から床面まで最深で38cmである。埋土は５層からなる。黒褐色シルトを主体とし、炭化物やⅤ層土が混入する。堆積状況から自然堆積と推定する。炉などの付属施設は認められなかった。

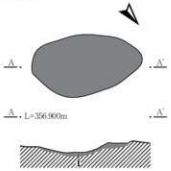
出土遺物は縄文土器1231.5g、石器８点である。縄文土器の出土量は比較的多いが、小片のみで形態が復元できたものは見受けられない。８点図示した。110は粗製の深鉢で縄文のみが施文される。111は繊維が混入する。斜縄文が施文され、前期前葉に比定される。流れ込みによる混入と推定される。

7号住居



1　暗褐色シルト（7.5YR3/4）粘性やや強　しまりやや密　炭化物微量、礫少量含む
2　褐色シルト　（10YR4/4）粘性やや強　しまりやや密　炭化物微量、地山ブロック少量、礫少量含む

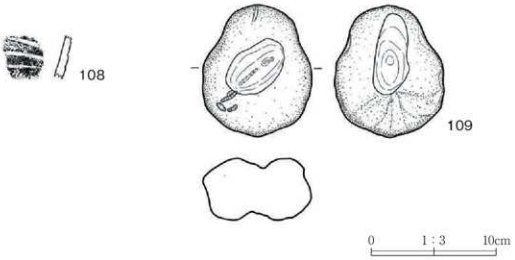
7号住居炉



1　赤褐色焼土（5YR4/6）粘性やや弱　しまりやや密
焼成により床が赤色化　炭化物微量含む

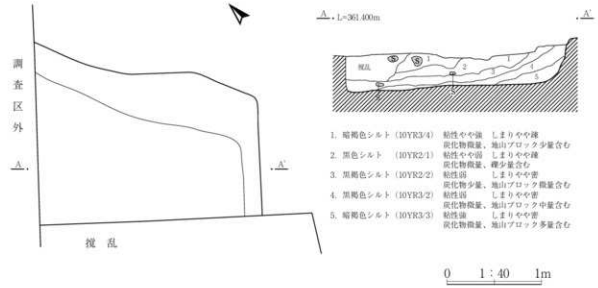
7号住居炉　1：20　0　1m
7号住居　1：40　0　1m

第39図　7号住居

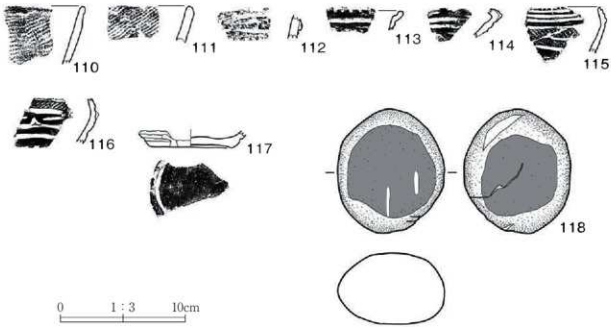


第40図　7号住居出土遺物

1号住居状遺構



第41図　1号住居状遺構



第42図　1号住居状遺構出土遺物

112～117は鉢の破片である。口唇部の刻み（113）や胴部の雲形文（115）といった文様の特徴から大洞BC式に比定される一群と考える。石器は1点図示した。118は敲磨器類で完形だが表面に若干の剥離が見受けられる。厚みのある円形の礫を素材とし、平坦な両面に磨った痕跡が認められる。また片面には磨った際に生じたやや幅のある線上痕が2か所認められた。

遺構の時期については出土遺物の時期から縄文時代晩期（大洞BC式期）と考える。

4　土　　坑

概　　要

今回の調査で見つかった土坑は135基である。内訳は調査Ⅰ区13基、調査Ⅱ区３基、調査Ⅲ区２基、調査Ⅳ区４基、調査Ⅴ区１基、調査Ⅵ区２基、調査Ⅶ区33基、調査Ⅷ区26基、調査Ⅸ区48基、調査Ⅹ区２基、また調査Ⅷ区の南東の試掘トレンチで１基（第９図右下）で、時期は早期中葉、前期前葉、中期後葉、後期前葉、晩期中葉にそれぞれ比定される。各土坑の属性については第５表に記した。以下、各調査区の土坑群の分布状況や推定される機能用途、また出土遺物について述べていく。

調査Ⅰ区（第７・43・44図、写真図版12～15、第５表）

１～13号土坑が相当する。調査区全体に散在しており、集中する場所はない（第７図）。また各土坑の形態や規模は様々で、規則性は見いだせない。遺構埋土の様相は黒褐色、暗褐色シルトを主体とするものが多く、他の調査区で検出した遺構群の埋土様相と類似する。調査Ⅰ区で検出した遺構は土坑のみで、竪穴住居のような集落の主体となる遺構がないため、これらの土坑群の性格付けも不明と言わざるを得ない。また各土坑は遺物を共伴しないので、詳細な時期も不明である。しいて言えば埋土の様相から縄文時代と推定する。なお６号土坑の埋土上位（２層）に十和田ａテフラがブロックで混入しているのを確認した（第Ⅶ章参照）。後述するが、他の調査区で検出した遺構で十和田ａテフラのブロックを層中に混入しているが、それらの遺構は縄文土器を共伴しており、縄文時代の遺構であっても十和田ａテフラの降下期まで埋没しきらなかったものと推定する。

調査Ⅱ区～Ⅵ区（第７・44～46図、写真図版15～18、第５表）

Ⅱ～Ⅵ区は検出数が少ないので一括して概観する。14～25号土坑が相当する。分布状況では各調査区で単体的に位置し（第７図）、形態や規模も調査Ⅰ区の土坑群と同様に規則性が見いだせない。埋土の様相は黒褐色シルト、暗褐色シルトを主体とし、他の調査区の土坑と類似する。土坑群の性格は他に遺構が分布しないため不明と言わざるを得ないが、14号土坑は検出面上を覆うように炭化物の広がりが認められたので炭窯の可能性もある。ただし焼成の痕跡はなく、その場での火の使用は認められなかった。また17・18号土坑では埋土中から石器のフレイク類が比較的多く出土した。石器製作等の施設の可能性も考えられるが、あくまで可能性の域を出ない。土坑群の時期であるが、時期を判断する土器などの遺物を共伴しないので不明である。しいて言えば埋土の様相から縄文時代と推定されるが、14号土坑は近世以降の可能性がある。

調査Ⅶ区（第８・46～51図、写真図版18～26、第５表）

26～59号土坑が相当する。１～５号住居の周辺、沢の南東岸、そして調査区東端の３か所に集中する傾向が見受けられる。１～５号住居周辺および沢の南東岸に分布する土坑群については、形態では円形、楕円形を呈するものが多いが、中には不整形のものもあり、全体的には規則性が見いだせない。規模では長辺100cmを超えるもの、また深さでは10～20cm前後のものが多く、また土器等の遺物を共伴する土坑が目立つ。機能としては竪穴住居に伴う貯蔵等を目的とした施設と考えられ、特に34・35・41号土坑は断面形態から貯蔵穴を想定できる土坑である。共伴する土器は大木９式新段階～10式古段階に比定するので遺構の時期もその時期に相当すると考える。なお35号土坑の埋土上位からは早期中葉に相当する土器群が出土しており、埋没しきらない段階での流れ込み等による混入と思われる。

第５表　土坑一覧（１）

調査区	グリッド名	遺構名	重複関係	長辺×短辺 (cm)	深さ (cm)	埋土主体土	時期	性格・その他の特徴
Ⅰ	ⅥN3d	1号土坑		126×(102)	15	黒褐色～褐色シルト		
Ⅰ	ⅥN5e	2号土坑		168×116	22	褐色シルト		
Ⅰ	ⅥN5d	3号土坑		144×87	9	黒褐色～褐色シルト		
Ⅰ	ⅥN4b	4号土坑		134×69	28	黒褐色シルト		
Ⅰ	ⅥN8c	5号土坑		91×78	9	黒褐色シルト		
Ⅰ	ⅥN8b	6号土坑	7号土坑（新）	638×638	16	黒褐色～褐色シルト		4層中に十和田a
Ⅰ	ⅥN8b	7号土坑	6号土坑（古）	(120)×30	34	褐色シルト		
Ⅰ	ⅥN7a	8号土坑		108×94	21	にぶい黄褐色シルト		4層中に十和田a
Ⅰ	ⅥN8b	9号土坑		140×74	22	黄褐色シルト		1層中に十和田a
Ⅰ	ⅥM7j	10号土坑		(307)×160	41	黒褐色～褐色シルト		
Ⅰ	ⅥM7j	11号土坑		119×100	11	黒褐色シルト		
Ⅰ	ⅥM7j	12号土坑		105×(99)	24	黄褐色シルト		
Ⅰ	ⅥN7a	13号土坑		121×(59)	8	黄褐色シルト		
Ⅱ	ⅥM10g	14号土坑		149×97	18	黒色～暗褐色シルト		
Ⅱ	ⅥM1i	15号土坑		127×124	8	暗褐色シルト		
Ⅱ	ⅥM10g	16号土坑		170×151	27	暗褐色シルト		
Ⅲ	ⅥM5c	17号土坑		569×216	17	暗褐色～褐色シルト		
Ⅲ	ⅥM6c	18号土坑		76×80	19	黒色～暗褐色シルト		
Ⅳ	ⅥL7h	19号土坑		121×91	15	黒色シルト		
Ⅳ	ⅥL7i	20号土坑		181×152	12	黒色～暗褐色シルト		
Ⅳ	ⅥL8i	21号土坑		84×75	14	黒色シルト		
Ⅳ	ⅥL9i	22号土坑		89×81	34	黒色シルト		
Ⅴ	ⅥL1a	23号土坑		146×74	13	黒色～黒褐色シルト		
Ⅵ	ⅥK9d	24号土坑		192×190	38	暗褐色～黒褐色シルト		
Ⅵ	ⅥK1e	25号土坑		194×122	21	黒色～暗褐色シルト		
Ⅶ	ⅥJ7f	26号土坑		130×120	25	暗褐色～褐色シルト	大木9式新段階	
Ⅶ	ⅥJ7f	27号土坑		227×(104)	33	暗褐色～褐色シルト	大木9式新段階	
Ⅶ	ⅥJ9g	28号土坑		82×79	13	黒色シルト		
Ⅶ	ⅥJ10g	29号土坑		82×59	16	褐色シルト		
Ⅶ	ⅥJ10f	30号土坑		123×104	29	暗褐色～明黄褐色シルト		
Ⅶ	ⅥJ10g	31号土坑	32号土坑（古）	117×100	22	褐色～黄褐色シルト		
Ⅶ	ⅥJ10g	32号土坑	31号土坑（新）	(102)×90	13	にぶい黄褐色シルト		
Ⅶ	ⅥJ1h	33号土坑		142×90	25	褐色～にぶい黄褐色シルト		
Ⅶ	ⅥJ1h	34号土坑		218×170	79	黒褐色～黄褐色シルト		
Ⅶ	ⅥJ9d	35号土坑		254×160	131	黒褐色～黄褐色シルト	物見台式期	
Ⅶ	ⅥJ1d	36号土坑	37号土坑（古）	473×287	66	黒褐色～暗褐色シルト	晩期？	
Ⅶ	ⅥJ1d	37号土坑	36号土坑（新）	264×194	32	黒褐色シルト	晩期？	出土遺物は流込みか
Ⅶ	ⅥJ3f	38号土坑		304×190	28	黄褐色～にぶい黄褐色シルト		
Ⅶ	ⅥJ10b	39号土坑		97×78	47	黒褐色シルト		
Ⅶ	ⅥJ2d	40号土坑		388×129	48	暗褐色～にぶい黄褐色シルト		
Ⅶ	ⅥJ3d	41号土坑		87×76	51	暗褐色～褐色シルト	蛇王洞Ⅱ式期	
Ⅶ	ⅥJ4d	42号土坑		195×152	15	暗褐色シルト		
Ⅶ	ⅥJ4d	43号土坑		125×75	32	暗褐色～褐色シルト		
Ⅶ	ⅥJ4e	44号土坑		207×138	22	黒褐色シルト	蛇王洞Ⅱ式期	
Ⅶ	ⅥJ7g	45号土坑		96×66	11	黒褐色シルト	大木2式期	
Ⅶ	ⅥJ5c	46号土坑		151×73	24	黒褐色シルト		
Ⅶ	ⅥJ5d	47号土坑		158×95	26	にぶい黄褐色シルト		
Ⅶ	ⅥJ5e	48号土坑		263×107	38	暗褐色シルト		
Ⅶ	ⅥJ6e	49号土坑		183×108	26	黒褐色シルト	大木2b式期	
Ⅶ	ⅥJ8f	50号土坑		140×69	23	褐色シルト		
Ⅶ	ⅥJ4c	51号土坑		106×91	18	黒褐色シルト		
Ⅶ	ⅥK3i	52号土坑		189×111	43	黒褐色シルト		
Ⅶ	ⅥK4i	53号土坑		101×72	33	黒褐色～暗褐色シルト		
Ⅶ	ⅥK4i	54号土坑		126×60	14	褐色シルト	大木7b式期	
Ⅶ	ⅥK4j	55号土坑		132×71	15	暗褐色シルト	中期？	
Ⅶ	ⅥJ5a	56号土坑		178×139	12	暗褐色シルト		
Ⅶ	ⅥJ8c	57号土坑		219×121	26	褐色シルト		
Ⅶ	ⅥJ9d	58号土坑		(164)×131	31	暗褐色～褐色シルト		
Ⅷ	ⅥⅢF3h	59号土坑		125×101	22	黒褐色シルト		
Ⅷ	ⅥⅢF4h	60号土坑		227×117	31	褐色～黒褐色シルト	後期？	
Ⅷ	ⅥⅢF3g	61号土坑		107×103	16	黒褐色シルト		
Ⅷ	ⅥⅢF4g	62号土坑		106×60	11	黒褐色シルト		

※時期無記入は出土遺物がなく不明。縄文時代と推定。　　（　）…残存値

第５表　土坑一覧（2）

調査区	グリッド名	遺構名	重複関係	長辺×短辺（cm）	深さ（cm）	埋土主体土	時期	性格・その他の特徴
Ⅷ	XⅢF4h	63号土坑		135×116	47	黒褐色シルト		
Ⅷ	XⅢF4f	64号土坑		138×77	45	黒褐色シルト		
Ⅷ	XⅢF4f	65号土坑		90×63	31	黒色～黒褐色シルト		
Ⅷ	XⅢF4f	66号土坑		117×90	38	黒褐色シルト	晩期	
Ⅷ	XⅢF5f	67号土坑		91×66	25	黒色シルト		
Ⅷ	XⅢF5f	68号土坑		69×58	33	黒褐色シルト		
Ⅷ	XⅢF5d	69号土坑		95×80	43	黒褐色シルト		
Ⅷ	XⅢF7f	70号土坑		286×268	63	黒褐色～暗褐色シルト	大洞BC式期	
Ⅷ	XⅢG8a	71号土坑		182×102	43	暗褐色シルト		
Ⅷ	XⅢG9a	72号土坑		202×140	20	暗褐色シルト		
Ⅷ	XⅢG10b	73号土坑		110×89	41	黒色～灰黄褐色シルト		
Ⅷ	XⅢG10a	74号土坑	75・76号土坑（古）	242×130	19	暗褐色シルト		
Ⅷ	XⅢG10a	75号土坑	74号土坑（新）	86×80	46	暗褐色シルト		
Ⅷ	XⅣG1a	76号土坑	74号土坑（新）	110×100	47	黄褐色シルト	後期	
Ⅷ	XⅢG10b	77号土坑		177×86	20	黒褐色～暗褐色シルト		
Ⅷ	XⅢF10j	78号土坑		80×76	20	黒褐色シルト		
Ⅷ	XⅣF1j	79号土坑		116×114	30	黒褐色～暗褐色シルト	後期	
Ⅷ	XⅢ10a	80号土坑		96×80	53	黒褐色シルト		
Ⅷ	XⅢ10a	81号土坑		138×96	29	黒褐色シルト	後期か大木７式期	
Ⅷ	XⅣG1b	82号土坑		128×111	17	黒褐色シルト		
Ⅷ	XⅣG4f	83号土坑		137×115	40	暗褐色シルト		
Ⅷ	XⅣG4d	84号土坑		230×97	16	黒褐色～暗褐色シルト	大洞BC式期	
Ⅸ	XⅣE3f	85号土坑		112×(102)	15	黒褐色シルト	晩期	
Ⅸ	XⅣE4e	86号土坑		108×98	42	黒褐色シルト	大洞BC式期	
Ⅸ	XⅣE4g	87号土坑		304×104	23	黒色～暗褐色シルト	大洞BC式期	
Ⅸ	XⅣE5f	88号土坑		105×102	19	黒褐色シルト	大洞BC式期	
Ⅸ	XⅣE5f	89号土坑		104×100	12	暗褐色シルト		
Ⅸ	XⅣE4j	90号土坑		148×132	16	暗褐色シルト		
Ⅸ	XⅣE4h	91号土坑		113×100	22	黒褐色シルト	晩期	
Ⅸ	XⅣE5h	92号土坑		119×119	54	黒褐色シルト	大洞BC式期	
Ⅸ	XⅣE5i	93号土坑		210×(168)	36	黒褐色シルト		
Ⅸ	XⅣE5h	94号土坑	95号土坑（古）	179×110	22	黒褐色シルト	大洞BC式期	
Ⅸ	XⅣE5i	95号土坑	94号土坑（新）・96号土坑（古）	173×147	50	黒褐色シルト	大洞BC式期	
Ⅸ	XⅣE5h	96号土坑	95号土坑（新）	203×140	48	黒褐色シルト	大洞BC式期	
Ⅸ	XⅣE6h	97号土坑		156×132	65	暗褐色シルト	大洞BC式期	
Ⅸ	XⅣE6g	98号土坑	99号土坑（古）	120×88	30	黒色～暗褐色シルト	後晩期	
Ⅸ	XⅣE5g	99号土坑	98号土坑（新）	140×110	29	黒褐色シルト	後晩期	
Ⅸ	XⅣE6g	100号土坑		112×98	42	黒褐色～にぶい黄褐色シルト		
Ⅸ	XⅣE6g	101号土坑		115×102	32	黒褐色シルト	晩期	
Ⅸ	XⅣE6g	102号土坑		450×356	116	暗褐色シルト	大洞BC式期	2層中に十和田a
Ⅸ	XⅣE6g	103号土坑		88×96	24	暗褐色シルト		
Ⅸ	XⅣE6h	104号土坑		76×68	37	黒褐色シルト		
Ⅸ	XⅣE5i	105号土坑		88×83	28	黒色～褐色シルト	晩期	
Ⅸ	XⅣE6h	106号土坑		208×140	56	黒褐色シルト	大洞BC式期	
Ⅸ	XⅣE6i	107号土坑		174×138	69	黒褐色シルト	大洞BC式期	
Ⅸ	XⅣE6h	108号土坑		100×83	19	暗褐色シルト	大洞BC式期	
Ⅸ	XⅣE7h	109号土坑		99×90	26	黒色～暗褐色シルト		
Ⅸ	XⅣE7g	110号土坑		120×112	55	黒色～暗褐色シルト	後期前葉	
Ⅸ	XⅣE8h	111号土坑		128×127	47	黒色～暗褐色シルト	埋付土器	
Ⅸ	XⅣE9h	112号土坑		100×90	34	黒色～褐色シルト	後期	
Ⅸ	XⅣE7h	113号土坑		367×100	70	黒褐色シルト	後期	
Ⅸ	XⅣE8i	114号土坑		302×101	71	黒褐色～暗褐色シルト	後期	
Ⅸ	XⅣE6f	115号土坑		114×85	18	暗褐色シルト		
Ⅸ	XⅣE6e	116号土坑		91×83	21	暗褐色シルト		
Ⅸ	XⅣE7e	117号土坑		180×132	7	暗褐色シルト		
Ⅸ	XⅣE8d	118号土坑		164×157	60	黒褐色シルト		
Ⅸ	XⅣE5b	119号土坑		(118)×(70)	29	黒褐色シルト		
Ⅸ	XⅣE6c	120号土坑		118×100	67	黄褐色～暗褐色シルト		
Ⅸ	XⅣE6b	121号土坑		160×70	15	黒褐色シルト		
Ⅸ	XⅣE6b	122号土坑		111×100	34	黒褐色～暗褐色シルト	後期	
Ⅸ	XⅣE7b	123号土坑		86×82	28	黒褐色～暗褐色シルト		

※時期無記入は出土遺物がなく不明。縄文時代と推定。　　（　）…残存値

第５表　土坑一覧（３）

調査区	グリッド名	遺構名	重複関係	長辺×短辺（cm）	深さ（cm）	埋土主体土	時期	性格・その他の特徴
Ⅸ	XⅣE8a	124号土坑		101×76	21	暗褐色シルト	十腰内Ⅰ～Ⅱ式期	
Ⅸ	XⅣE8b	125号土坑		112×104	41	黄褐色～黒褐色シルト	後期	
Ⅸ	XⅣE8b	126号土坑		91×86	21	黒褐色シルト	縄付土器	
Ⅸ	XⅣD8j	127号土坑		253×122	66	暗褐色シルト		
Ⅸ	XⅣE9a	128号土坑		79×67	42	暗褐色シルト		
Ⅸ	XⅣE10b	129号土坑		228×196	51	暗褐色～黒褐色シルト	後期中葉～後葉	
Ⅸ	XⅣE10f	130号土坑		91×88	40	黒褐色シルト		
Ⅸ	XⅣF5c	131号土坑		92×88	20	黒色シルト		
Ⅸ	XⅣF7c	132号土坑		104×56	19	黒褐色～暗褐色シルト		
Ⅹ	XⅤF7b	133号土坑		114×101	25	暗褐色～褐色シルト		
Ⅹ	XⅤF4e	134号土坑		123×119	11	黒褐色～暗褐色シルト		
Ⅹ	XⅤH6d	135号土坑		128×96	23	暗褐色シルト		

※時期無記入は出土遺物がなく不明。縄文時代と推定。　　（　）…残存値

調査区東端に集中する土坑群は、形態が不整な長楕円形や楕円形などかなりばらつきが目立ち、規模も長軸が200cmを超えるものから100cmに満たないものまで様々で、規則性が見いだせず、また底面も平坦であったり、底面よりさらに深く窪むものもあったりと一定ではない。こうした点から、同地点で検出した土坑群は竪穴住居周辺で検出したものとはやや性格を異にすると考えられる。遺構の時期であるが、共伴する土器は早期中葉、前期前葉に帰属するものが多い。また周辺の遺構外からも早期、前期の遺物が多く見つかっており、土坑群の時期も早期中葉、前期前葉の可能性がある。ただし、該期の遺構については形態的特徴について具体的に分かっていない点も多く、これらの遺構群をその時期に帰属するものと決定づけられるほど共伴遺物の出土状況が良好なわけでもない。したがってあくまでも可能性に留めておく。

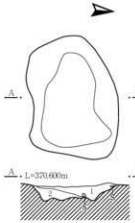
調査Ⅷ区（第９・51～55図、写真図版26～32、第５表）

59～84号土坑が相当し、調査区北西側の最も高い段と一段下がった平坦面に集中する。形態規模を見てみると、径100～150cm規模の円形を呈するものが多い。埋土様相は黒褐色シルト、褐色シルトを主体とし、他の調査区の土坑と類似する。遺構の断面形はフラスコ型や筒型を呈するものが多く、貯蔵穴と考える。また70号土坑は開口部規模が250cmを超える大型の貯蔵穴と推定され、底面には副穴を２個有する。埋土中からほぼ完形の鉢が１点（第69図171）正位の状態で出土するなど、他の土坑とは様相が異なる。ほかにも不整な楕円形を呈する土坑も多いが、開口部からの深さがあるものが多く、同様の貯蔵用施設ではないかと推察する。特に６号住居の周辺に位置する土坑群は、狭い平坦面上に６号住居と共伴するように立地していることから、竪穴住居と関連の強い遺構群と考えられる。ただし竪穴住居１棟に対しての土坑（貯蔵穴）にしては数が多く、調査区外に別の竪穴住居等の遺構が存在し、それらに伴われる可能性が高い。時期は共伴する土器から縄文時代晩期中葉（大洞BC式期）に帰属するものと考える。

調査Ⅸ・Ⅹ区（第10・55～63図、写真図版33～45、第５表）

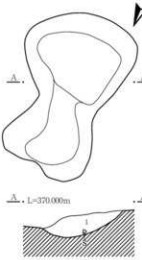
調査Ⅸ区は85～132号土坑が相当し、散在的に分布する。平面形・規模は径100cm前後の円形を呈するものが多く、断面形はフラスコ型や筒型で、貯蔵穴と考えられる。埋土様相は黒褐色シルト、褐色シルトを主体とし、他の調査区の土坑と類似する。また埋土上位に50cm大以上の礫が多数混入する土坑が多く、礫の廃棄に何らかの意味がある可能性が高い。出土遺物の量は他の調査区の土坑と比べ多い。また102号土坑は開口部規模が450×356cm、深さ116cmで他に類しない大型土坑である。底面は狭く、外へと大きく開きながら立ち上がる形態で、底面には副穴が１個付く。規模や形態から貯蔵穴と

1号土坑



1. 黒褐色シルト（10YR2/3）粘性やや強　しまりやや密　木根多量含む
2. 褐色シルト　（10YR4/4）粘性やや強　しまりやや密　黒褐色シルトブロック少量含む

2号土坑

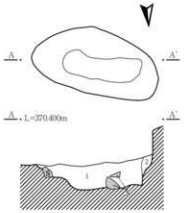


1. 褐色シルト（10YR4/6）粘性やや弱　しまりやや密　地山ブロック少量含む

3号土坑

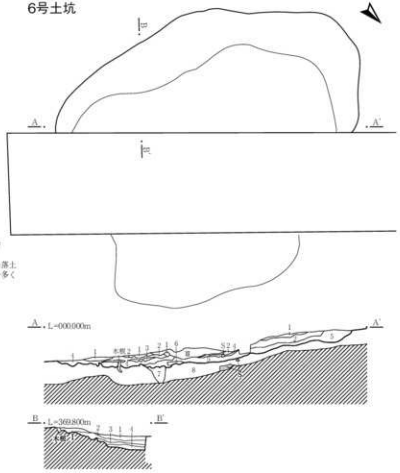
1. 黒褐色シルト（10YR2/3）粘性やや強　しまりやや密　地山ブロック少量含む
2. 褐色シルト　（10YR4/6）粘性やや強　しまりやや密　地山ブロック少量含む

4号土坑



1. 黒褐色シルト（10YR3/2）粘性やや強　しまりやや密　地山ブロック少量含む
2. 黄褐色シルト（10YR5/6）粘性強　しまりやや弱　崩落土　暗褐色シルトブロックやや多く含む

6号土坑



1. 黒色シルト　（10YR1.7/1）粘性やや強　しまりやや密　木根多量含む
2. 黒褐色シルト　（10YR2/2）粘性やや強　しまりやや密　木根中量含む
3. 黒褐色シルト　（10YR3/1）粘性やや強　しまりやや密
4. にぶい黄褐色シルト（10YR4/3）粘性やや強　しまりやや密　褐灰色細砂（Toaテフラ）中量含む
5. 褐色シルト　（10YR4/6）粘性やや強　しまりやや密　炭化物少量、礫少量含む
6. 褐色シルト　（10YR4/4）粘性やや強　しまりやや密　炭化物少量含む
7. 黄褐色シルト　（10YR5/6）粘性やや強　しまりやや密　炭化物少量含む
8. 基本層序　V層土

5号土坑

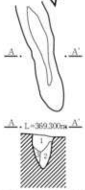
1. 黒褐色シルト（10YR2/2）粘性やや強　しまりやや密

6号土坑　0　1：80　2m

1-5号土坑　0　1：40　1m

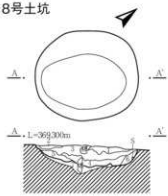
第43図　1～6号土坑

7号土坑



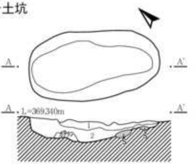
1. 褐色シルト　（10YR4/4）　粘性やや強　しまりやや密　炭化物少量含む
2. 褐色シルト　（10YR4/6）　粘性やや強　しまりやや密
3. 黄褐色シルト（10YR5/6）　粘性やや強　しまりやや密　地山ブロック少量含む

8号土坑



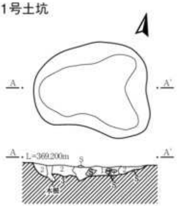
1. 黒色シルト　（10YR2/1）　粘性やや強　しまりやや密
2. 褐灰色シルト　（10YR4/1）　粘性やや強　しまりやや密
3. にぶい黄橙色シルト（10YR6/4）　粘性やや弱　しまりやや密　にぶい黄橙色シルト少量含む
4. にぶい黄橙色シルト（10YR7/4）　粘性やや弱　しまりやや密　灰白色細砂（火山灰か）ブロックで少量含む
5. 明黄褐色シルト　（10YR5/8）　粘性やや強　しまりやや密
6. 黄褐色シルト　（10YR5/6）　粘性やや強　しまりやや密
7. 基本層序　Ⅴ層

9号土坑



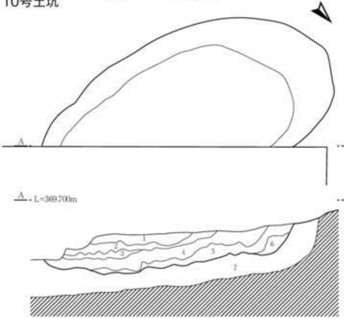
1. にぶい黄橙色シルト（10YR6/4）　粘性やや弱　しまりやや密　灰白色細砂（火山灰か）ブロックで少量含む
2. 黄褐色シルト　（10YR5/6）　粘性やや強　しまりやや密　地山ブロック少量含む

11号土坑



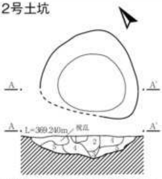
1. にぶい黄褐色シルト（10YR4/3）　粘性やや弱　しまりやや密　礫多量含む
2. 黒褐色シルト　（10YR3/1）　粘性やや強　しまりやや密　地山ブロック中量含む

10号土坑



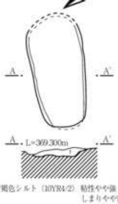
1. 黒色シルト　（10YR1.7/1）　粘性やや強　しまりやや密　木根多量含む
2. 黒褐色シルト（10YR2/3）　粘性やや強　しまりやや密　黒色シルトブロック少量含む
3. 褐色シルト　（10YR4/6）　粘性やや強　しまりやや密
4. 褐色シルト　（10YR4/4）　粘性やや強　しまりやや密　地山ブロック微量含む
5. 褐色シルト　（10YR4/6）　粘性やや強　しまりやや密　炭化物微量含む
6. 黄褐色シルト（10YR5/8）　粘性やや強　しまりやや密　褐色シルトブロック少量含む
7. 基本層序　Ⅴ層

12号土坑



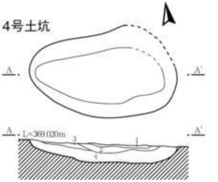
1. にぶい黄橙色シルト（10YR7/4）　粘性弱　しまり密　灰白色細砂少量（火山灰か）少量含む
2. にぶい黄橙色シルト（10YR6/4）　粘性やや弱　しまりやや密　灰白色細砂少量（火山灰か）少量含む
3. 黄褐色シルト　（10YR5/6）　粘性やや強　しまりやや密
4. 黄褐色シルト　（10YR5/8）　粘性やや強　しまりやや密　炭化物微量含む
5. 黄褐色シルト　（10YR5/6）　粘性やや強　しまりやや密

13号土坑



1. 黄褐色シルト（10YR4/2）　粘性やや強　しまりやや密　地山ブロック微量含む

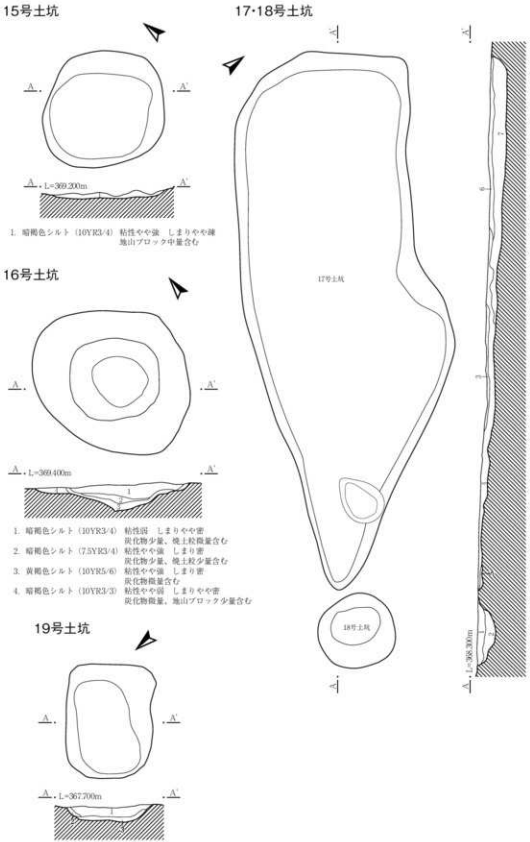
14号土坑



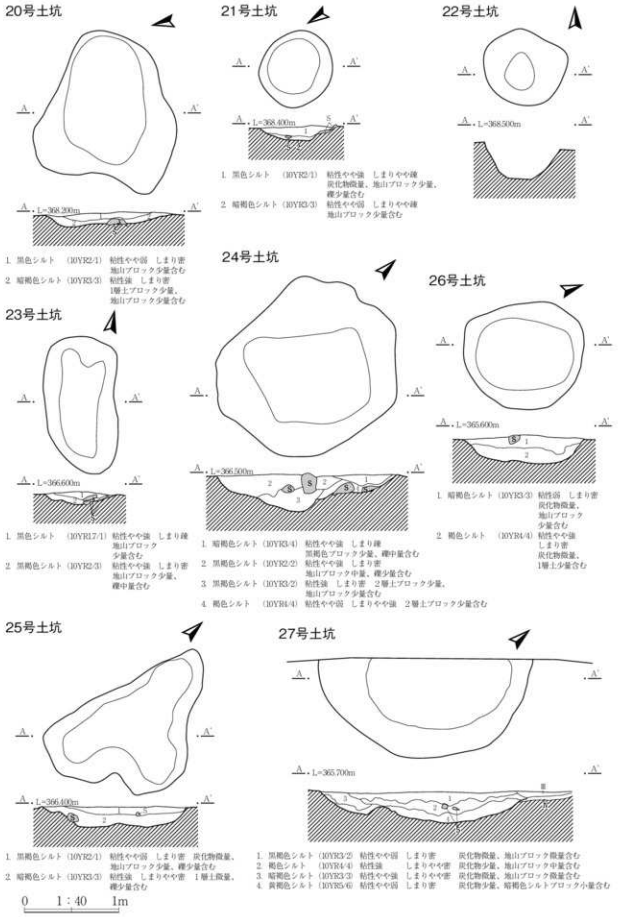
1. 暗褐色シルト（10YR3/3）　粘性やや強　しまりやや密　炭化物多量含む
2. 黒色シルト　（10YR1.7/1）　粘性やや強　しまりやや疎　炭化物微量、1層土少量含む
3. 黒褐色シルト（10YR3/2）　粘性やや強　しまりやや密　炭化物微量含む
4. 暗褐色シルト（10YR3/4）　粘性弱　しまり密　地山ブロック少量含む

0　1：40　1m

第44図　7～14号土坑

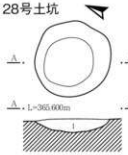


第45図　15～19号土坑



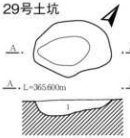
第46図　20～27号土坑

28号土坑



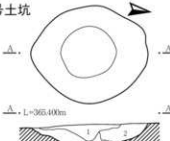
1. 黒色シルト（10YR12/1）粘性やや強　しまり緩　炭化物多量含む

29号土坑



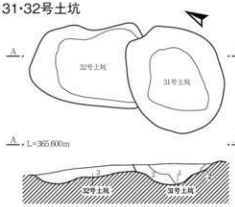
1. 褐色シルト（10YR4/4）粘性やや強　しまりやや密　地山ブロック中量、炭化物微量含む

30号土坑



1. 暗褐色シルト　（10YR3/3）粘性やや弱　しまりやや密　にぶい黄褐色シルトブロック中量、炭化物少量含む
2. 褐色シルト　（10YR4/4）粘性やや強　しまりやや密　にぶい黄褐色シルトブロック少量、炭化物微量含む
3. 明黄褐色シルト（10YR6/6）粘性やや強　しまりやや密

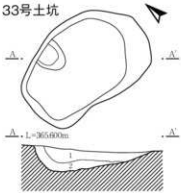
31・32号土坑



31号土坑
1. 褐色シルト　（10YR4/4）粘性やや強　しまり密　炭化物少量、地山ブロック中量含む
2. 黄褐色シルト　（10YR5/4）粘性やや強　しまり密　炭化物微量、地山ブロック少量含む

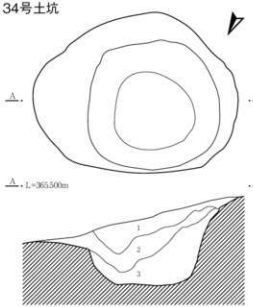
32号土坑
3. にぶい黄褐色シルト（10YR5/3）粘性やや強　しまりやや密　炭化物微量、地山ブロック微量含む

33号土坑



1. 褐色シルト　（10YR4/4）粘性強　しまりやや密　炭化物微量、地山ブロック微量含む
2. にぶい黄褐色シルト（10YR5/4）粘性強　しまり密　1層土ブロック少量含む

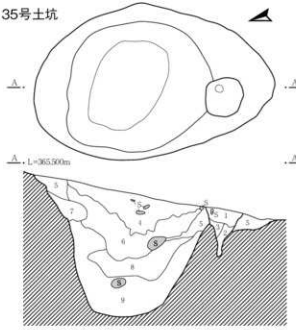
34号土坑



1. 黒褐色シルト（10YR2/3）粘性強　しまりやや疎　炭化物微量、地山ブロック少量、礫少量含む
2. 暗褐色シルト（10YR3/4）粘性やや強　しまりやや密　炭化物微量、地山ブロック中量、礫少量含む
3. 黄褐色シルト（10YR5/6）粘性やや強　しまり密　炭化物微量、2層土ブロック少量含む

0　1：40　1m

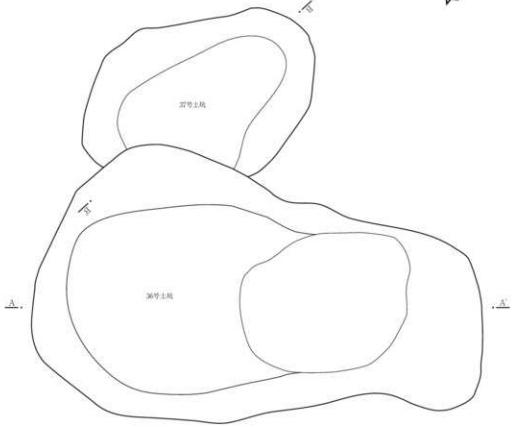
35号土坑

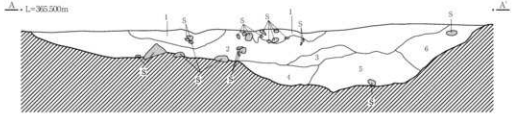


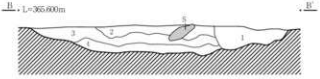
1. 黒褐色シルト　（10YR2/2）粘性やや強　しまりやや密　草根中量含む
2. 灰黄褐色シルト（10YR6/2）粘性やや強　しまりやや密　地山ブロック少量含む
3. 灰黄褐色シルト（10YR4/2）粘性やや強　しまりやや密　地山ブロック中量含む
4. 黒色シルト　（10YR2/1）粘性やや強　しまりやや密　草根少量含む
5. 褐色シルト　（10YR4/4）粘性やや強　しまりやや密　地山ブロック中量含む
6. 黒褐色シルト（10YR3/2）粘性やや強　しまりやや密　炭化物微量、地山ブロック少量含む
7. 褐色シルト　（10YR4/6）粘性やや強　しまりやや密　黒色シルトブロック少量、地山ブロック多量含む
8. 褐色シルト　（10YR4/4）粘性やや強　しまりやや密　地山ブロック少量、礫少量含む
9. 黄褐色シルト（10YR5/6）粘性やや強　しまりやや密　地山ブロック中量、礫中量含む

第47図　28～35号土坑

36･37号土坑







36号土坑（A-A'）

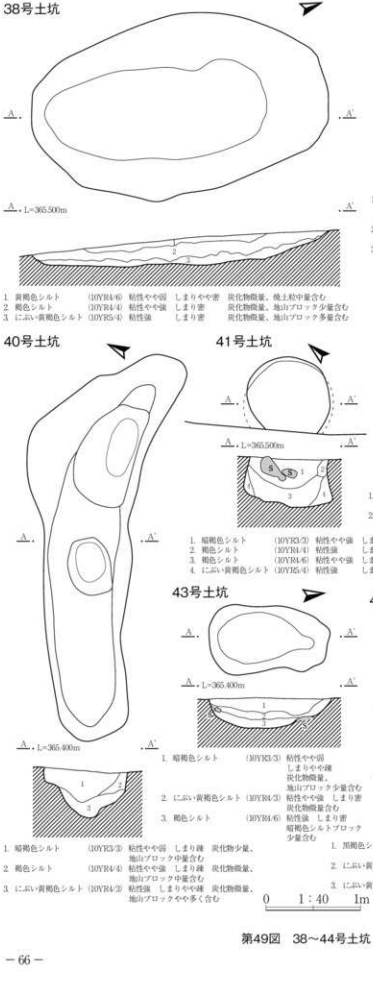
1. 黒褐色シルト（10YR3/2）　粘性やや強　しまりやや疎　炭化物微量、地山ブロック少量、礫少量含む
2. 褐色シルト　（10YR4/4）　粘性やや弱　しまり密　　炭化物微量、地山ブロックやや多く含む
3. 黒褐色シルト（10YR2/1）　粘性やや強　しまりやや密　炭化物微量含む
4. 暗褐色シルト（10YR3/4）　粘性強　　しまりやや密　炭化物微量、地山ブロック中量含む
5. 黒褐色シルト（10YR2/3）　粘性強　　しまり密　　地山ブロック少量含む
6. 暗褐色シルト（10YR3/3）　粘性やや弱　しまりやや疎　炭化物微量、地山ブロック少量含む

37号土坑（B-B'）

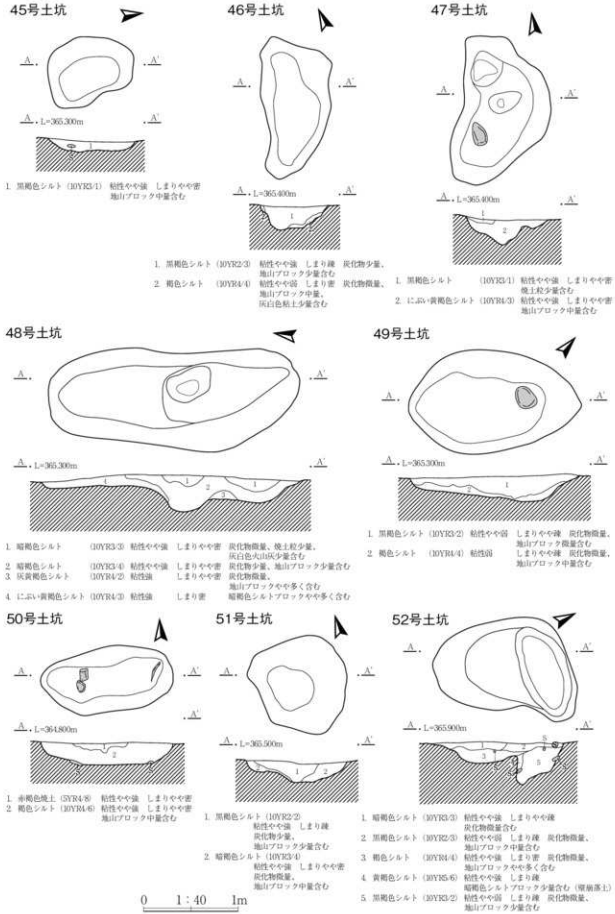
1. 36号土坑２層土に相当
2. 黒褐色シルト（10YR2/2）　粘性やや弱　しまりやや疎　炭化物微量含む
3. 黒褐色シルト（10YR2/3）　粘性強　　しまりやや疎　炭化物微量、地山ブロック少量含む
4. 暗褐色シルト（10YR3/3）　粘性強　　しまりやや密　炭化物微量、地山ブロック中量含む

0　1：40　1m

第48図　36・37号土坑

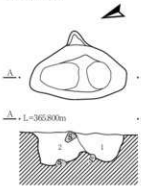


第49図　38～44号土坑



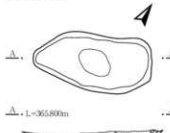
第50図　45～52号土坑

53号土坑



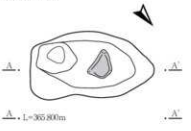
1. 暗褐色シルト（10YR3/3）粘性やや強　しまり強
　炭化物微量、礫少量含む
2. 黒褐色シルト（10YR2/3）粘性やや弱　しまり強
　炭化物微量、
　地山ブロックやや多く含む

54号土坑



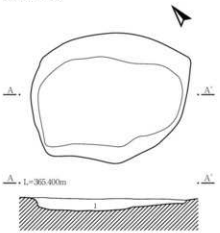
1. 褐色シルト（10YR4/4）粘性やや強　しまりやや密
　炭化物少量含む。土器多量含む

55号土坑



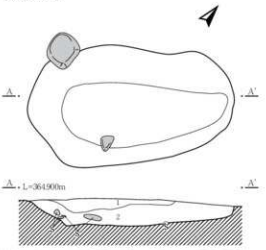
1. 暗褐色シルト（10YR3/4）粘性やや強　しまりやや密
　土器多量含む
2. 褐色シルト　（10YR4/6）粘性やや強　しまりやや密
　地山ブロック中量含む

56号土坑



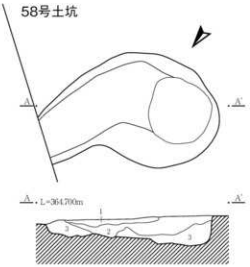
1. 暗褐色シルト（10YR3/3）粘性やや強　しまりやや密
　地山ブロック中量、礫少量含む

57号土坑



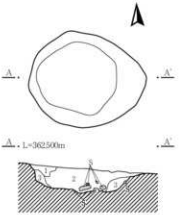
1. 黒褐色シルト（10YR3/1）粘性やや強　しまりやや密　炭化物微量含む
2. 褐色シルト　（10YR4/4）粘性やや強　しまりやや密　地山ブロック中量、
　礫少量含む。

58号土坑



1. 褐色焼土　　（7.5YR4/6）粘性やや強　しまりやや密
2. 暗褐色シルト（10YR3/4）粘性やや強　しまりやや密
　地山ブロック少量含む
3. 褐色シルト　（10YR4/6）粘性やや強　しまりやや密
　地山ブロック中量、礫少量含む

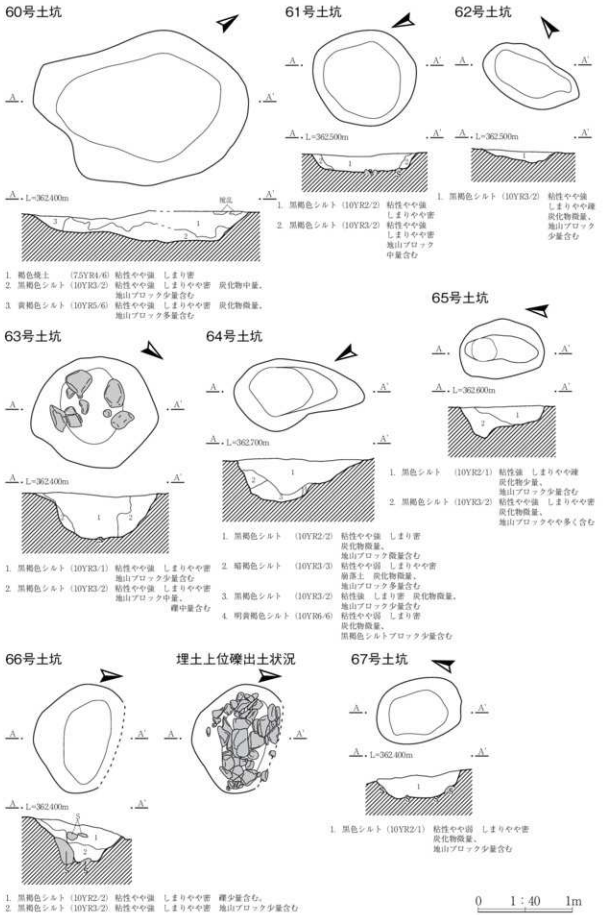
59号土坑



1. 黄褐色シルト（10YR5/6）粘性やや強　しまりやや密
　地山ブロック中量含む。
2. 黒褐色シルト（10YR2/2）粘性やや強　しまりやや密
　炭化物微量含む。
3. 黒褐色シルト（10YR3/2）粘性やや強　しまりやや密
　地山ブロック少量含む

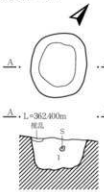
0　1：40　1m

第51図　53～59号土坑



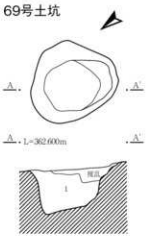
第52図　60～67号土坑

68号土坑



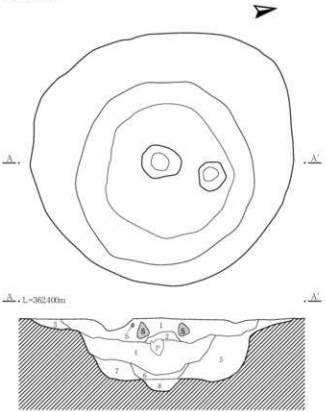
1. 黒褐色シルト（10YR2/2）粘性やや強　しまりやや緩　炭化物微量、地山ブロック少量、礫少量含む

69号土坑



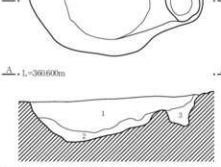
1. 黒褐色シルト（10YR2/2）粘性やや弱　しまり緩　人為堆積　炭化物微量、地山ブロック少量、礫少量含む

70号土坑



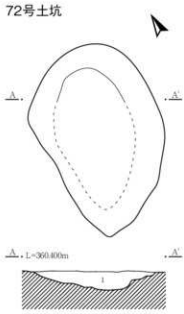
1. 黒褐色シルト　(10YR3/1)　粘性やや弱　しまり密　炭化物微量含む
2. 黒褐色シルト　(10YR2/3)　粘性やや強　しまりやや緩　炭化物微量、焼土粒中量含む
3. 暗褐色シルト　(10YR3/3)　粘性やや弱　しまりやや密　地山ブロック少量含む
4. 黒褐色シルト　(10YR2/3)　粘性弱　しまりやや密　炭化物少量、地山ブロック少量含む
5. 暗褐色シルト　(10YR3/4)　粘性弱　しまりやや密　炭化物微量、地山ブロックやや多く含む
6. にぶい黄褐色シルト　(10YR5/4)　粘性強　しまりやや密　炭化物微量含む
7. 黒褐色シルト　(10YR3/2)　粘性やや強　しまりやや緩　炭化物微量、地山ブロック少量含む
8. 黒褐色シルト　(10YR2/3)　粘性やや強　しまり緩　炭化物微量、地山ブロック少量含む

71号土坑



1. 暗褐色シルト（10YR3/3）粘性やや強　しまりやや密　炭化物少量、礫少量含む
2. 褐色シルト　（10YR4/4）粘性やや強　しまりやや密　炭化物微量、地山ブロックやや多く含む
3. 黒褐色シルト（10YR3/2）粘性強　しまりやや密　地山ブロック少量、礫少量含む

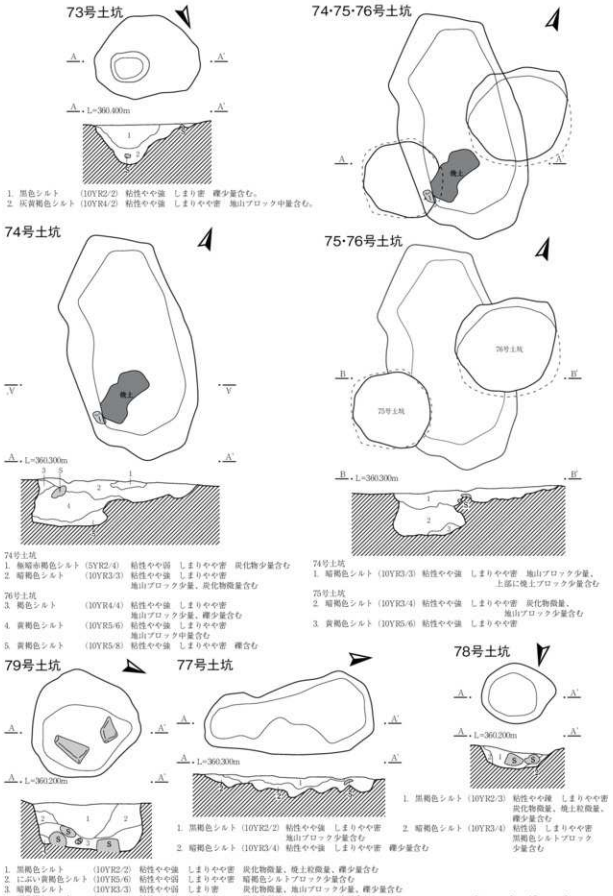
72号土坑



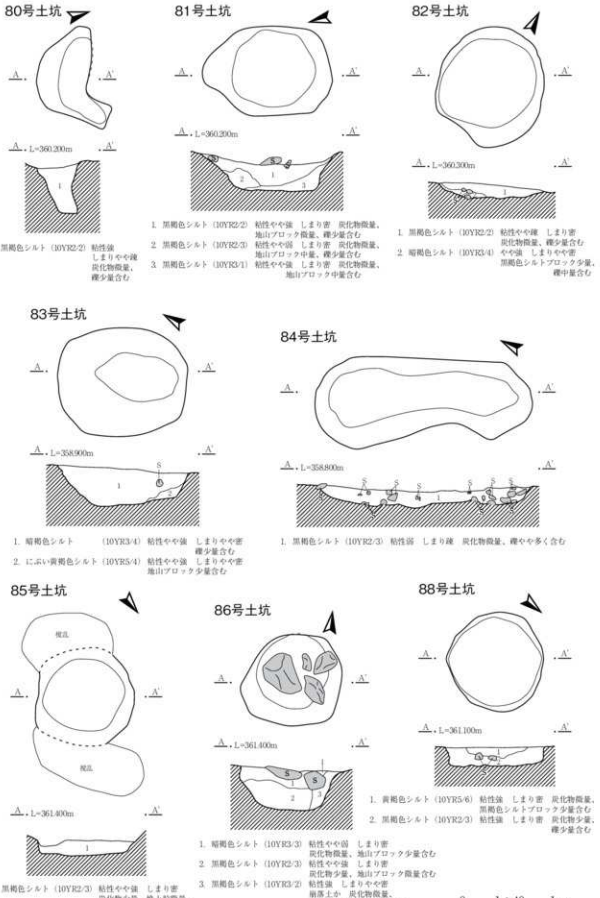
1. 暗褐色シルト（10YR3/4）粘性やや強　しまりやや密　炭化物微量、地山ブロック少量含む

0　1:40　1m

第53図　68～72号土坑

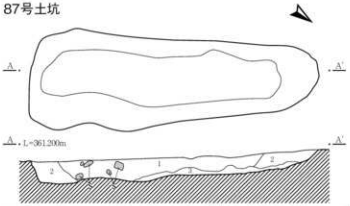


第54図　73～79号土坑



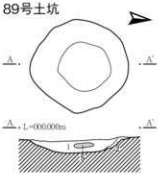
第55図　80～86・88号土坑

87号土坑



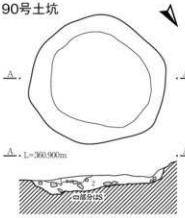
1. 黒褐色シルト（10YR2/3）粘性やや弱　しまり密　炭化物少量、焼土粒微量、地山ブロック少量、
　　礫少量含む
2. 暗褐色シルト（10YR3/3）粘性弱　しまり密　炭化物微量、地山ブロック多量含む
3. 褐色シルト　（10YR4/4）粘性弱　しまりやや密　1層土ブロック中量含む

89号土坑



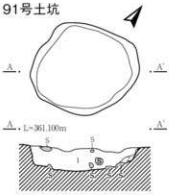
1. 暗褐色シルト（10YR3/3）粘性強　しまり密　炭化物微量、
　　焼土微量、礫少量含む
2. 黄褐色シルト（10YR5/6）粘性やや弱　しまり密
　　暗褐色シルトブロック少量含む

90号土坑



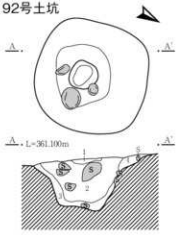
1. 暗褐色シルト（10YR3/3）粘性やや強　しまりやや密　炭化物微量、礫少量含む
2. 褐色シルト　（10YR4/6）粘性やや強　しまりやや密　炭化物少量、礫少量含む

91号土坑



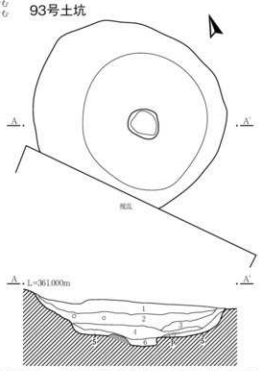
1. 黒褐色シルト（10YR2/3）粘性やや強　しまり密　炭化物少量、
　　地山ブロック少量、礫少量含む
2. 褐色シルト　（10YR4/4）粘性強　しまり密
　　黒褐色シルトブロックやや多く含む

92号土坑



1. 褐色シルト　（10YR4/4）粘性やや弱　しまり密　炭化物微量、
　　焼土粒少量、地山ブロック微量含む
2. 黒褐色シルト（10YR2/3）粘性強　しまりやや密　炭化物少量、
　　礫少量含む
3. 暗褐色シルト（10YR3/3）粘性やや強　しまり密　炭化物微量、
　　地山ブロック少量含む
4. 黒褐色シルト（10YR3/2）粘性強　しまりやや密　炭化物微量、
　　地山ブロック中量含む

93号土坑

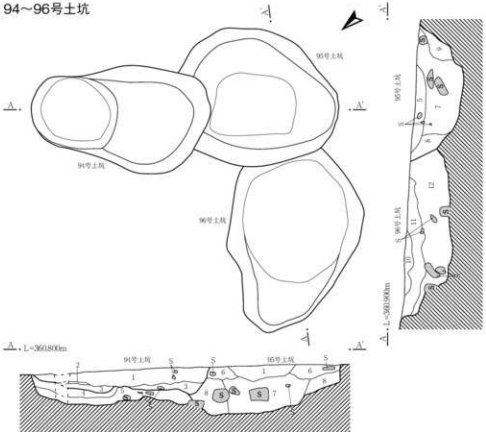


1. 黒褐色シルト（10YR2/3）粘性強　しまりやや密　炭化物少量、焼土粒微量、地山ブロック少量含む
2. 黒褐色シルト（10YR3/2）粘性弱　しまりやや密　炭化物微量、焼土粒微量、地山ブロックやや多く含む
3. 黒褐色シルト（10YR3/1）粘性強　しまり密　炭化物微量、地山ブロック多量含む
4. 黄褐色シルト（10YR5/6）粘性強　しまり密　炭化物微量、黒褐色シルトブロック中量含む
5. 黒褐色シルト（10YR2/2）粘性やや強　しまりやや密　炭化物微量、地山ブロック微量含む
6. 暗褐色シルト（10YR3/3）粘性強　しまり密　炭化物微量含む（副穴）

0　1:40　1m

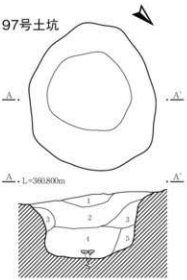
第56図　87・89～93号土坑

94～96号土坑



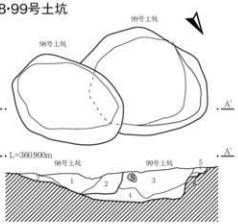
1. 黒褐色シルト　(10YR3/2)　粘性やや弱　しまり密　炭化物少量、地山ブロック微量、礫少量含む
2. にぶい黄褐色シルト　(10YR4/3)　粘性強　しまりやや密　炭化物多量含む
3. 暗褐色シルト　(10YR3/3)　粘性やや強　しまりやや密　炭化物微量、地山ブロックやや多く含む
4. 黒褐色シルト　(10YR2/2)　粘性やや強　しまりやや緩　炭化物微量、地山ブロック少量含む
5. 黒褐色シルト　(10YR2/3)　粘性やや弱　しまり密　炭化物微量、地山ブロック少量含む
6. 黒褐色シルト　(10YR2/2)　粘性やや強　しまり密　炭化物中量　地山ブロック微量含む
7. 黒褐色シルト　(10YR2/2)　粘性やや強　しまりやや密　炭化物少量、礫少量含む
8. 暗褐色シルト　(10YR3/3)　粘性やや弱　しまり密　炭化物微量、地山ブロックやや多く含む
9. 暗褐色シルト　(10YR3/4)　粘性やや弱　しまりやや密　炭化物少量、地山ブロックやや多く含む
10. 暗褐色シルト　(10YR3/3)　粘性弱　しまり密　炭化物微量、地山ブロック少量含む
11. 褐色シルト　(10YR4/4)　粘性やや弱　しまり密　炭化物微量、地山ブロック多量含む
12. 黒褐色シルト　(10YR3/2)　粘性やや強　しまりやや緩　炭化物微量、地山ブロック中量含む

97号土坑



1. 褐色シルト　(7.5YR4/6)　粘性やや強　しまり密
地土粒多量、炭化物微量含む
2. 暗褐色シルト　(10YR3/4)　粘性強　しまり密
炭化物微量、礫少量含む
3. にぶい黄褐色シルト　(10YR4/3)　粘性強　しまりやや密
炭化物微量、地山ブロック中量含む
4. 灰黄褐色シルト　(10YR4/2)　粘性強　しまり密
炭化物微量、地山ブロックやや多く含む
5. 暗褐色シルト　(10YR3/3)　粘性強　粘性やや密
炭化物少量、礫少量含む

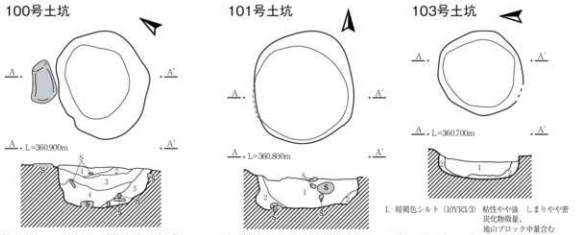
98·99号土坑

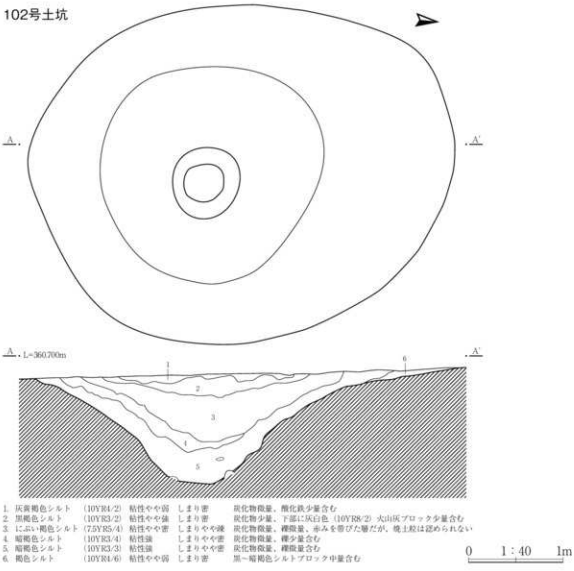


1. 黒褐色シルト　(10YR2/3)　粘性やや強　しまり密　炭化物微量、地山ブロック微量含む
2. 暗褐色シルト　(10YR3/4)　粘性強　しまり密　炭化物微量、地山ブロックやや多く含む
3. 黒褐色シルト　(10YR2/2)　粘性強　しまり密　炭化物少量、地山ブロック少量、礫少量含む
4. 黒褐色シルト　(10YR2/3)　粘性強　しまり密　炭化物微量、地山ブロック中量含む
5. 暗褐色シルト　(10YR3/3)　粘性強　しまり密　黄褐色シルトブロック多量含む
6. 黄褐色シルト　(10YR5/3)　粘性弱　しまり密　黒褐色シルトブロックやや多く含む

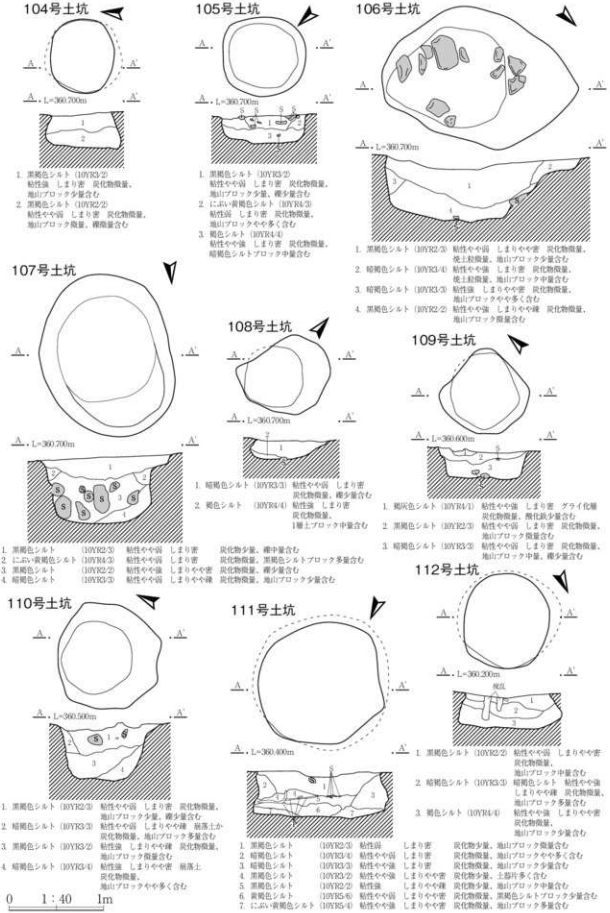
0　1：40　1m

第57図　94～99号土坑

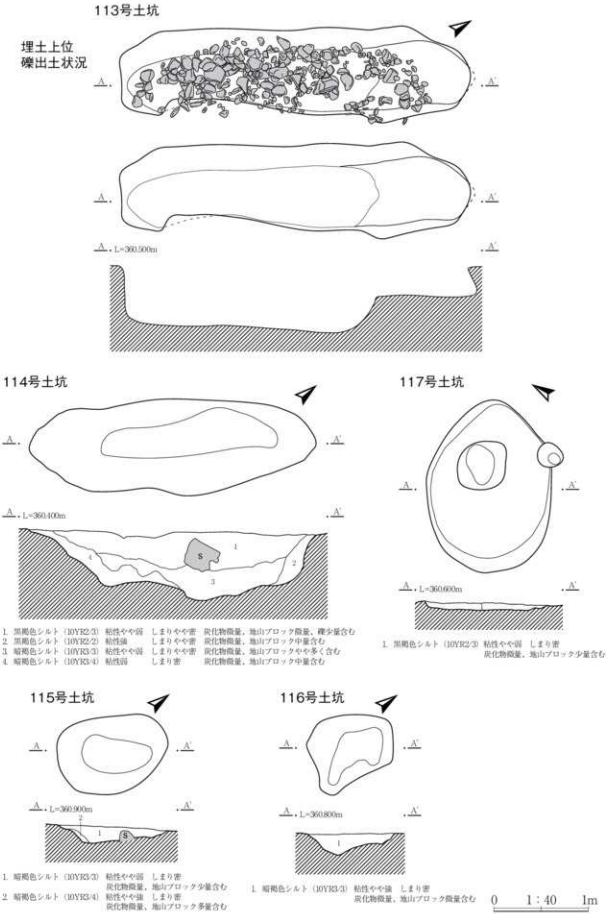




第58図　100～103号土坑

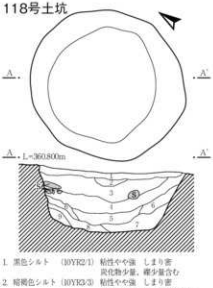


第59図　104～112号土坑



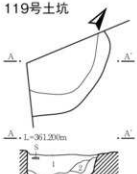
第60図　113～117号土坑

118号土坑



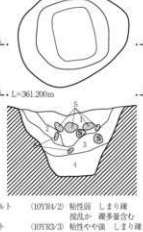
1. 黒褐色シルト　(10YR2/1)　粘性やや強　しまり密
　　炭化物少量、礫少量含む
2. 暗褐色シルト　(10YR3/3)　粘性やや強　しまり密
　　炭化物微量、焼土粒多量含む
3. 黒褐色シルト　(10YR3/2)　粘性強　しまりやや密
　　炭化物微量、地山ブロック少量含む
4. 黒褐色シルト　(10YR2/3)　粘性強　しまりやや密
　　炭化物微量、地山ブロック微量、礫少量含む
5. 暗褐色シルト　(10YR3/3)　粘性強　しまりやや密
　　炭化物微量、地山ブロックやや多く含む
6. 黒褐色シルト　(10YR3/2)　粘性強　しまりやや密
　　炭化物微量、地山ブロック中量含む
7. 暗褐色シルト　(10YR3/4)　粘性強　しまり疎
　　炭化物微量、地山ブロック少量含む
8. 黒褐色シルト　(10YR2/2)　粘性強　しまりやや密
　　炭化物微量、地山ブロック微量含む
9. 黄褐色シルト　(10YR5/6)　粘性強　しまりやや密
　　炭化物微量、黒褐色シルトブロック少量含む

119号土坑



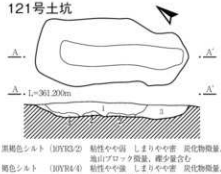
1. 黒褐色シルト　(10YR2/3)　粘性やや強　しまりやや密　炭化物微量、地山ブロック微量、礫少量含む
2. 暗褐色シルト　(10YR3/3)　粘性やや強　しまりやや密　炭化物微量、地山ブロックやや多く含む
3. 褐色シルト　(10YR4/6)　粘性やや強　しまりやや密　炭化物微量、地山ブロック中量含む

120号土坑



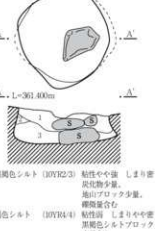
1. 灰黄褐色シルト　(10YR4/2)　粘性弱　しまり疎
　　炭化小　礫多量含む
2. 暗褐色シルト　(10YR3/3)　粘性やや強　しまり疎
　　炭化物微量、
　　地山ブロックやや多く含む
3. にぶい黄褐色シルト (10YR5/4)　粘性強　しまりやや密
　　炭化物微量、
　　地山ブロック多量含む
4. 暗褐色シルト　(10YR3/3)　粘性やや弱　しまりやや疎
　　炭化物微量、
　　地山ブロック中量含む

121号土坑



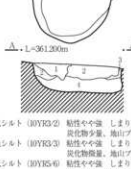
1. 黒褐色シルト　(10YR3/2)　粘性やや弱　しまりやや密　炭化物微量、地山ブロック微量、礫少量含む
2. 褐色シルト　(10YR4/4)　粘性やや強　しまりやや密　炭化物微量、地山ブロック多量含む
3. 暗褐色シルト　(10YR3/4)　粘性やや強　しまりやや密　炭化物微量、地山ブロック中量含む

122号土坑



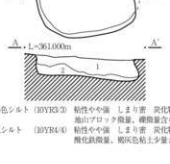
1. 黒褐色シルト　(10YR2/3)　粘性やや強　しまり密
　　炭化物少量、
　　地山ブロック少量、
　　礫微量含む
2. 褐色シルト　(10YR4/4)　粘性弱　しまりやや密
　　黒褐色シルトブロック
　　少量含む
3. 暗褐色シルト　(10YR3/4)　粘性やや強
　　しまりやや密
　　炭化物微量、
　　地山ブロック中量、
　　礫少量含む

123号土坑



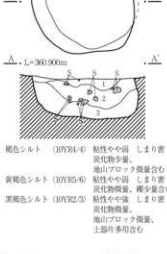
1. 黒褐色シルト　(10YR3/2)　粘性やや強　しまりやや密
　　炭化物少量、地山ブロック少量含む
2. 暗褐色シルト　(10YR3/3)　粘性やや強　しまりやや密
　　炭化物微量、地山ブロック少量、土器片含む
3. 明褐色シルト　(10YR5/6)　粘性やや強　しまりやや密　崩落土
　　地山ブロック中量含む
4. 暗褐色シルト　(10YR3/4)　粘性やや強　しまりやや密
　　地山ブロック少量含む

124号土坑



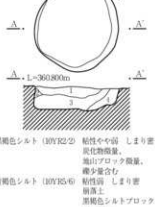
1. 暗褐色シルト　(10YR3/3)　粘性やや強　しまり密　炭化物少量、地山ブロック微量、礫微量含む
2. 褐色シルト　(10YR4/4)　粘性やや強　しまり密　炭化物微量、酸化鉄微量、暗灰色粘土少量含む

125号土坑



1. 褐色シルト　(10YR4/4)　粘性やや強　しまり密
　　炭化物少量、
　　地山ブロック微量含む
2. 黄褐色シルト　(10YR5/6)　粘性やや強　しまり密
　　炭化物微量、礫少量含む
3. 黒褐色シルト　(10YR2/3)　粘性やや強　しまり密
　　炭化物微量、
　　地山ブロック微量、
　　土器片多用含む

126号土坑



1. 黒褐色シルト　(10YR2/2)　粘性やや弱　しまり密
　　炭化物微量、
　　地山ブロック微量、
　　礫少量含む
2. 黄褐色シルト　(10YR5/6)　粘性弱　しまり密
　　崩落土
　　黒褐色シルトブロック
　　中量含む
3. 黒褐色シルト　(10YR3/2)　粘性やや強　しまり密
　　炭化物少量、
　　地山ブロック
　　少量含む
4. 暗褐色シルト　(10YR3/3)　粘性やや強
　　しまりやや密
　　炭化物微量、
　　地山ブロック
　　やや多く含む

0　1:40　1m

第61図　118～126号土坑

127号土坑

A. L=361.100m

1. 褐灰色シルト（10YR4/1）粘性強　しまり密　グライ化した層　炭化物微量含む
2. 暗褐色シルト（10YR3/4）粘性やや弱　しまり密　炭化物微量、地山ブロック微量含む

128号土坑

A. L=360.900m

1. 暗褐色シルト（10YR3/3）粘性やや強　しまり密　人為堆積
炭化物微量、黒褐色シルトブロック少量、
地山ブロック中量含む

129号土坑

A. L=360.600m

1. 暗褐色シルト（10YR3/3）粘性やや弱　しまりやや密　炭化物微量、酸化鉄微量含む
2. 黒褐色シルト（10YR2/3）粘性強　しまりやや密　炭化物微量、礫微量含む
3. 暗褐色シルト（10YR3/4）粘性強　しまりやや密　炭化物微量、礫少量含む
4. 黒褐色シルト（10YR3/2）粘性やや強　しまりやや緩　炭化物微量、礫多量含む
5. 褐色シルト　（10YR4/6）粘性強　しまり密　炭化物微量、礫少量含む

130号土坑

A. L=360.000m

1. 暗褐色シルト（10YR3/4）粘性強　しまりやや緩　炭化物少量含む
2. 黒褐色シルト（10YR2/3）粘性強　しまりやや密　炭化物微量、
地山ブロック少量含む
3. 黒褐色シルト（10YR3/2）粘性強　しまりやや密　炭化物微量、
地山ブロック中量含む
4. にぶい黄褐色シルト（10YR4/3）粘性強　しまりやや緩　炭化物微量、
暗褐色シルトブロックやや多く含む

131号土坑

A. L=359.200m

1. 黒色シルト　（10YR1.7/1）粘性やや弱　しまりやや密
炭化物微量含む
2. 黒褐色シルト（10YR2/2）粘性弱　しまりやや密
炭化物微量、地山ブロックやや多く含む

132号土坑

A. L=359.400m

1. 黒褐色シルト（10YR2/3）粘性やや緩　しまりやや密
炭化物微量、地山ブロック少量含む
2. 暗褐色シルト（10YR3/4）粘性弱　しまりやや密
炭化物微量、地山ブロックやや多く含む

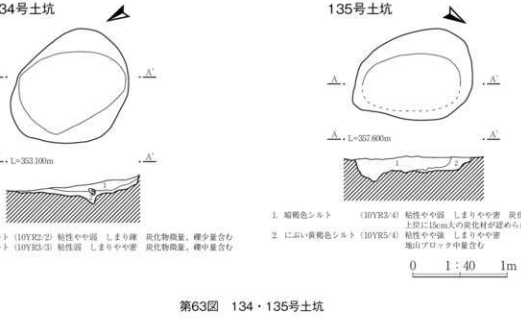
133号土坑

A. L=357.500m

1. 暗褐色シルト（10YR3/4）粘性やや強
しまりやや緩
礫少量、
草根多量含む
2. 褐色シルト　（10YR4/4）粘性やや強
しまりやや密
地山ブロック少量、
礫中量含む

0　1:40　1m

第62図　127～133号土坑



第63図　134・135号土坑

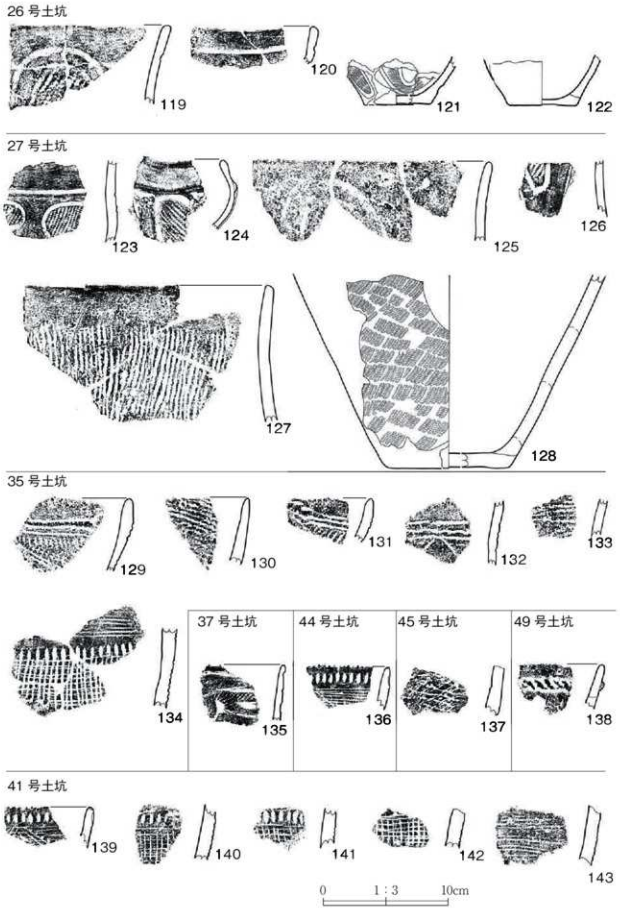
は考えられず、用途は不明である。埋土下位から縄文晩期の土器片が出土しているが、埋土２層中に十和田ａテフラが混入している。したがって、102号土坑は十和田ａテフラ降下期ごろまで埋没しきらずにいたと考えられる。土坑群の時期については共伴する土器群の時期から晩期後葉(大洞BC式期)と考える。

調査Ｘ区は134・135号土坑のみで、両者は離れており、それぞれ単体と考える。形態・規模は不整な円形で、どちらも規模は100cm前後である。埋土様相は黒褐色シルト、褐色シルトを主体とし、他の調査区の土坑と類似する。時期は共伴遺物がないので定かではない。埋土の様相や周辺に分布する７号住居や１号住居状遺構の時期を参考にすれば縄文時代後期前葉と考えられる。

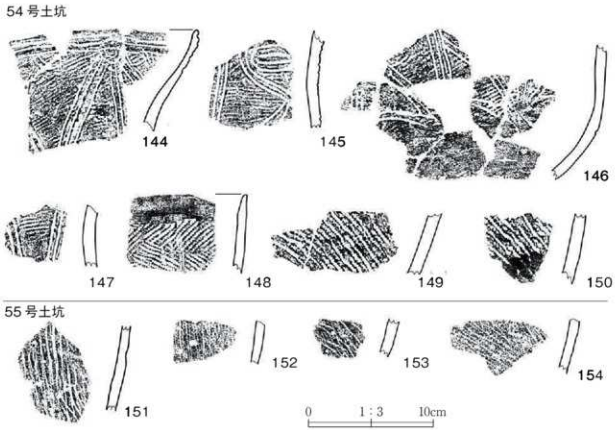
出土遺物（第64～82図、写真図版53～58・66～69、第４・７表）

土坑からは縄文土器と石器が出土しており、内容については第４表に記した。各土坑からの出土遺物の中で時期判断の可能な遺物を次頁以降、図示している。

26号土坑から土器４点（119～122）図示した。119は深鉢で口縁部に逆「Ｕ」字状の区画文が施される。121は深鉢の底部片で底面付近にも区画文が施されるが、区画文の形態は不明。119や121は文様から大木９式新段階から大木10式古段階と考える。石器は石匙（155）で、縦型を呈し、片面加工で刃部を作出している。27号土坑から土器６点（123～128）、石器１点（156）図示した。123は胴部片で区画文が施文される。124は鉢で口縁部下に隆帯が巡り胴部には楕円形の区画文と縦位の隆帯が施される。125は深鉢で口縁部から胴部へ区画文が垂下する。これらの文様は大木９式新段階の特徴といえる。127・128は粗製の深鉢で、127には胴部に縦位の撚糸文が巡る。石器は不定形石器（156）で、縦型で厚みのある剥片を素材とし、両面から二次加工を施し刃部を作出する。二次加工がやや粗い。30号土坑から石器１点を図示した。石鏃（157）である。凹基無茎鏃で、先端が欠損する。35号土坑から土器６点（129～135）、石器１点（159）図示した。129は深鉢で胴部に貝殻腹縁文が施され、物見台式の特徴を有する。130は口縁部から非結束の羽状縄文が巡る。134は胴部に刺突が巡り、またその下には格子状の沈線が施される。蛇王洞Ⅱ式に類する。いずれも早期中葉と考える。石器は不定形石器(159)で、幅広の縦型剥片を素材とし、縁辺の一端のみに片面のみから加工を施し、刃部を作出している。37号土坑から１点(135)図示した。鉢の口縁部で、口縁部片で縄文を施文後、沈線による区画文が施される。

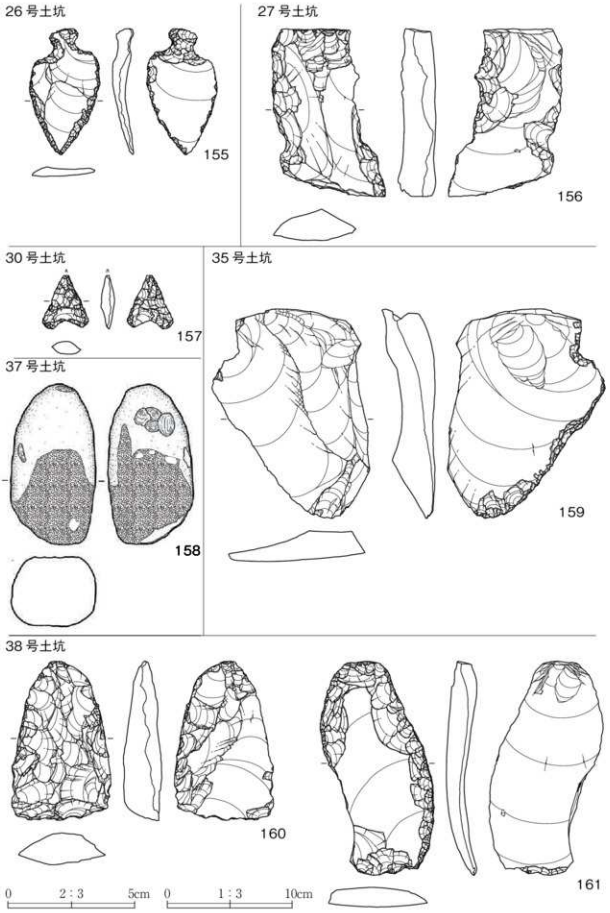


第64図　26～49号土坑出土土器



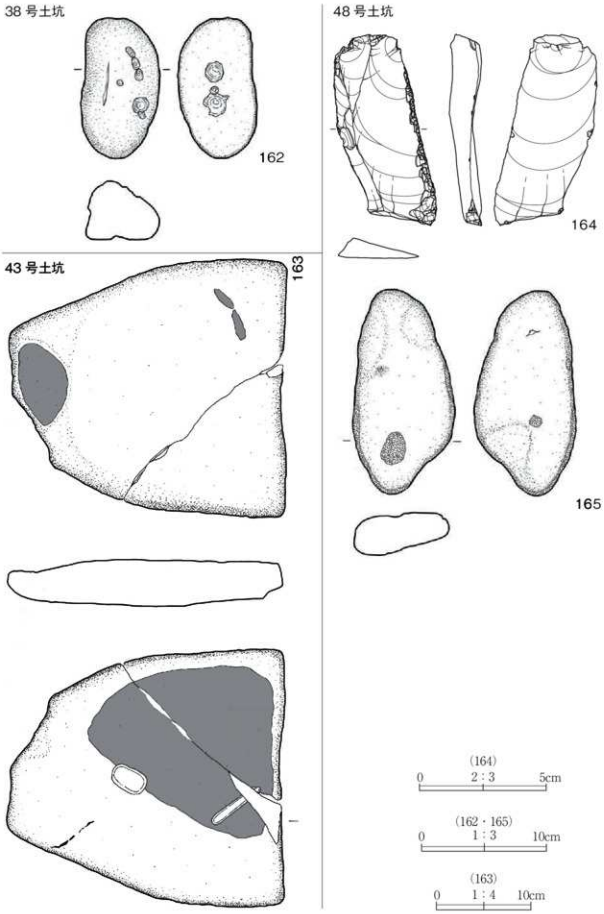
第65図　54・55号土坑

文様の特徴から晩期に比定されるものと考える。流れ込みの可能性が高い。石器は敲磨器類（158）で棒状の礫を素材とし、一方向の端部に敲打痕が認められる。38号土坑は石器３点（160～163）図示した。箆状石器（160）、不定石器（161）、敲磨器類（162）で、160は撥状の形態で、片面からの加工が著しい。161はややいびつな縦型剥片を素材とし、縁辺部のほぼ全周で片面から加工し刃部を作出している。162は棒状のやや厚みのある礫を素材とし、幅広の面に複数の凹痕が見受けられる。41号土坑からは４点（139～143）図示した。139～142は爪形状の刺突文と格子状の沈線が施文される。いずれも蛇王洞Ⅱ式の特徴を有し、早期中葉に比定される。143は摩滅が激しく、文様が定かではないが、横位に沈線が巡る。早期か。43号土坑は石器のみ図示した。石皿（163）で破損はしているものの、ほぼ完形である。偏平な台形状の礫を素材とし、両面を使用面としている。44号土坑からは１点（136）図示した。蛇王洞Ⅱ式。45号土坑からは１点（137）図示した。深鉢の胴部片で胎土に繊維が混入する。縄文前期前葉、大木２a式と判断した。48号土坑は石器。不定形石器（164）と敲磨器類（165）を図示した。164は縦型剥片を素材とし、一方向の縁辺のみ片面から加工し、刃部を作出している。165は楕円形でやや偏平な礫を素材とし、端部に敲打痕が巡る。49号土坑からは１点（138）、石器２点図示した。138は深鉢の口縁部片で胎土に繊維が混入する。刻みを施した隆帯が巡り、その下に補修孔が１個穿たれている。前期前葉大木２b式と判断した。石器は両極石器（166）、箆状石器（167）で、166は上下左右４方向から打撃が加えられている。167は片面のみ二次加工が、もう片面は自然面が残る。53号土坑からは石器（168）１点のみ図示した。敲磨器類で偏平な楕円形の礫を素材とし、側面に敲打痕が見受けられる。54号土坑からは土器７点図示した。144は深鉢で口縁部に横位の沈線が巡りそこから放射

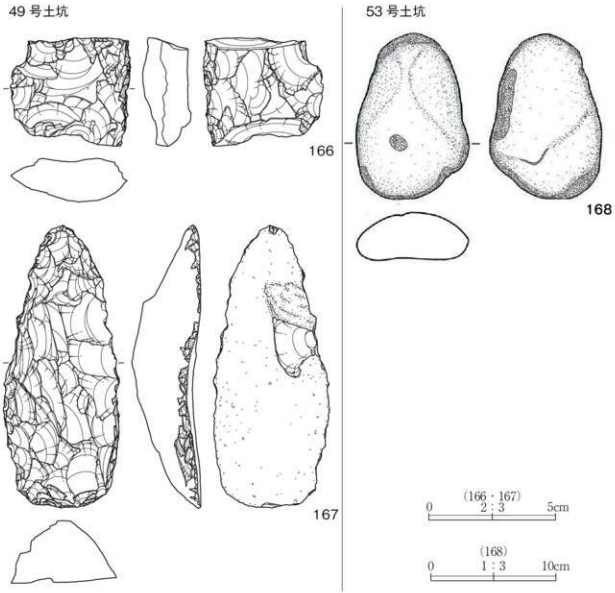


第66図　26～38号土坑出土土器

状に沈線が垂下する。中期初頭大木7b式に比定されると判断した。55号土坑から4点（151～154）4点図示した。いずれも深鉢の胴部片で縦位に条線文が施文される。縄文時代後期前葉ころか。60号土坑から1点（169）図示した。深鉢の胴部片で浅い縄文が施文される。縄文時代中期頃か。66号土坑から1点（170）図示した。深鉢で口縁部が無文、胴部には縄文が施文される。縄文時代晩期に比定される。70号土坑から土器、土製品5点（171～175）図示した。171は大洞BC式の鉢でほぼ完形である。遺構埋土2層と4層の境界から正位の状態で出土した。172も大洞BC式の鉢で、口縁部が内側に屈曲し、口端部に突起が付く。173は深鉢で口縁部に4条の沈線が巡る。174は鉢で口端部が外へと屈曲し沈線と刻みが巡る。口縁部には沈線が5条巡る。175は土製円盤で無文の土器片を利用している。71号土坑からは石器1点（297）を図示した。敲磨器類で、厚みのある楕円形の礫を素材とし、平坦面と端部の一部に敲打痕と磨痕が見受けられる。74号土坑から1点（176）図示した。深鉢の胴部片で撚りの緩い縄文が施文される。縄文時代後晩期か。75号土坑から1点（177）、石製品1点（299）図示した。177は深鉢の胴部片で縄文が施文される。縄文時代後晩期か。石製品はミニチュア（299）で、形態から石皿を模したと推定する。76号土坑から土器2点（178・179）図示した。178は深鉢の胴部片で縄文が施文される。179は深鉢で縦位に複数条の沈線文と縄文を充填した区画文が施文される。縄文時代後期と思われる。79号土坑から4点（180～183）図示した。180は深鉢の口縁部片で刻みの施した隆帯が巡る。182は縄文を施文後、沈線が垂下する。183は縦位に沈線と円形の刺突が施文される。いずれも縄文時代後期前葉と思われる。81号土坑から8点（184～191）、石器1点（192）図示した。184～186は深鉢で口端部下に沈線を伴う隆帯が巡り、その下には刻みが施される隆帯が垂下する。187・188は2～3条1単位の沈線により文様が施文される。189は183と同様の文様で複数条の沈線と刺突が施文される。これらの文様から縄文時代後期前葉に比定されるものと考える。190・191は粗製の深鉢で、縄文のみが施文される。190は口縁部が無文である。石器は石皿（303）で、不整で偏平な大型礫を素材とし、両面に磨面と砥溝が見受けられる。84号土坑から1点（192）、石器1点（298）図示した。192は鉢の口縁部片で口端部に刻みが施され、口縁部には沈線が巡る。大洞BC～C1式。304は敲磨器類でやや不整な球状の礫を素材とし、扁平な面に敲打痕が見受けられる。85号土坑から3点（193～195）図示した。193は深鉢で口端部に押圧が巡り、その下は沈線、胴部には縄文が施文される。縄文時代晩期。195は鉢か。口縁部は無文、胴部には縄文が施文される。石器は石皿（304）で、厚みのある大型礫を素材とし、片面のみ使用し、面自体が浅く窪んでいる。86号土坑から3点（196～198）、石器3点（300～302）図示した。196は深鉢で口端部に刻み、口縁部に沈線文が施される。197は鉢で口端部に刻み、口縁部には羊歯状文が施文される。大洞BC式に比定される。198は粗製の鉢で器面全体に縄文が施文される。300はフレイク類で剥離面を打点とし、背面には自然面が残る。301・302は敲磨器類で301は2分の1ほどが欠損する。不整で細長い礫を素材とし、各面に凹痕が認められる。302は細長い球状の礫を素材とし、片面のみ磨痕が見受けられる。87号土坑から土器2点（199・200）、石器2点図示した。199は鉢の胴部片で口縁部の下部に突起が付く。わずかに見受けられる沈線文は大洞BC式の特徴をもつ。200は深鉢の口縁部片で横位に数条の沈線が巡る。石器は石鏃1点（305）と敲磨器類1点（306）で、305は尖基鏃で基部が欠損している。また茎部に付着物が見受けられ、アスファルトではないかと推察する。306は厚みのある楕円形の礫を素材とし、平坦面に凹痕が見受けられる。88号土坑から5点（202～206）図示した。202は深鉢で口端部に刻みが施され、口縁部は上下端に沈線が巡る。203・204は浅鉢で雲形文が描かれる。大洞C1～C2式。205は鉢で口端部に刻み、口縁部には羊歯状文が施文される。大洞BC式か。石器は敲磨器類（307）とした。扁平で方形な礫が素材とし、平坦面に線上痕と凹痕が見受けられる。92号土坑から土器7点（207～213）、石器4点（308～311）図示した。207は

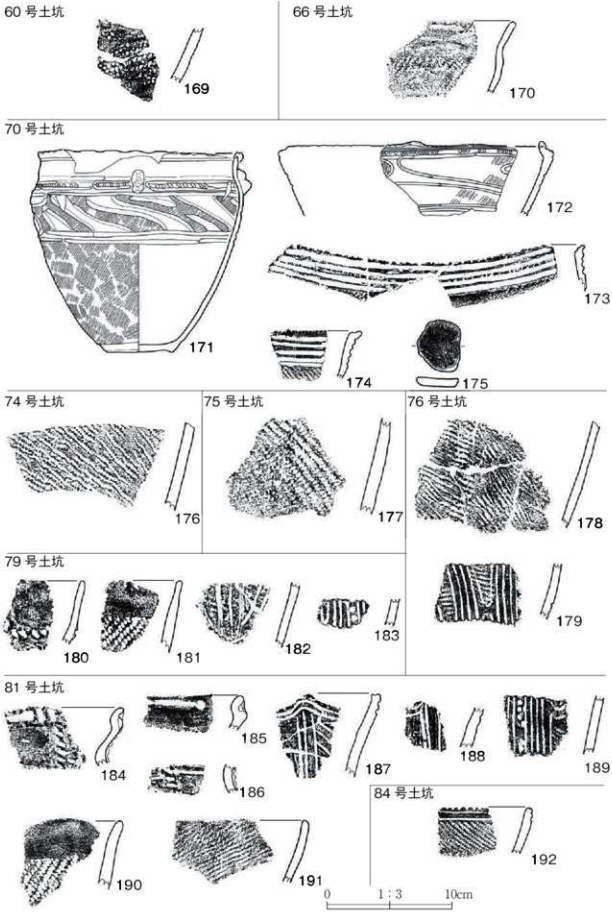


第67図　38～48号土坑出土土器

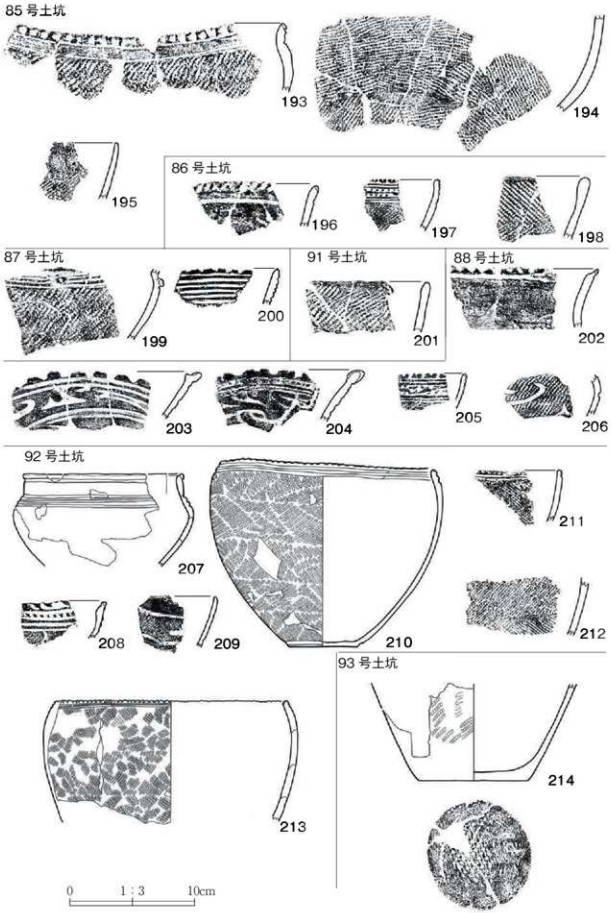


第68図　49・53号土坑出土土器

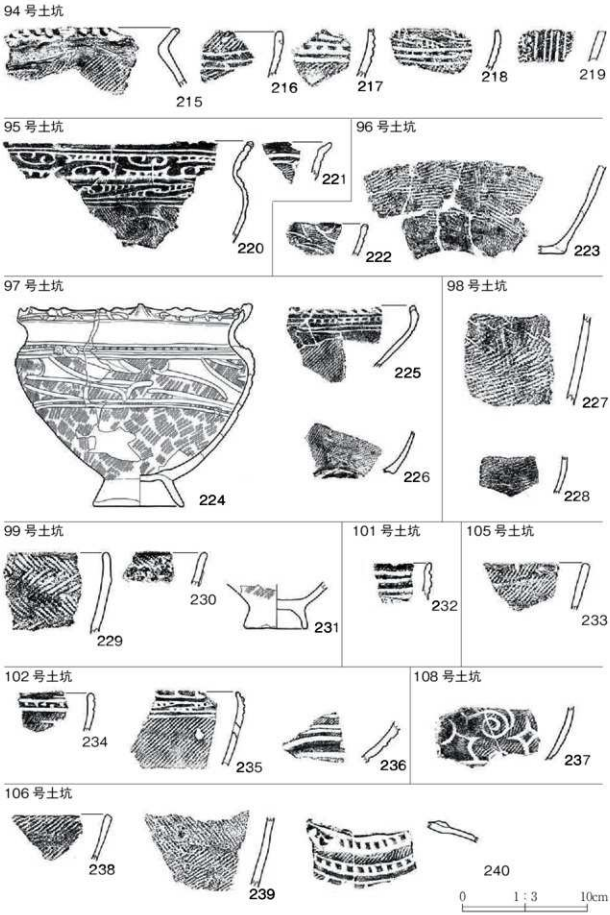
口縁部が直立気味に立ち上がる形態の鉢で頸部に沈線文が施文されるのみで無文である。208・209は鉢の小片で、わずかに雲形文が見受けられる。大洞C1～C2式。210はほぼ完形の鉢で口端部に刻み、その下に沈線が巡るほか縄文のみが施文される。213も同様な文様をもつ鉢の大型破片である。石器は石鏃（308）、石匙（309）、礫器（310）、敲磨器類（311）で、308は平基有茎鏃である。309は斜型の石匙で、両面から二次加工を施し、刃部を作出している。310は厚みのある礫を素材とし、左右縁辺の両面から二次加工を施す。311は扁平な楕円形の礫を素材とし、両面に凹痕が見受けられる。93号土坑から１点（214）図示した。深鉢の胴部下半部から底部のみで、底面には網代痕が見受けられる。94号土坑から５点（215～219）石器１点図示した。215は深鉢で口縁部が屈曲して外へと開く形態で、口唇部に押圧が巡る。217は鉢の胴部片で羊歯状文が施文される。218も鉢の胴部片で、沈線文が描かれる。いずれも大洞BC式の特徴をもつ。石器は敲磨器類（312）で角の丸い立方体状の礫を素材とし、全面に磨面が見受けられる。95号土坑から土器２点（220・221）、石器１点図示した。220は鉢で口唇部に



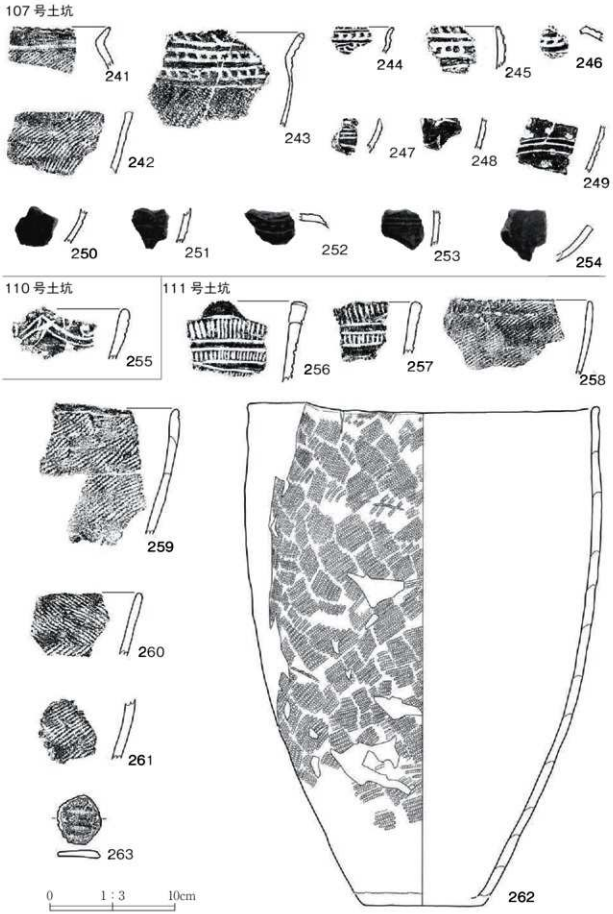
第69図　60～84号土坑出土土器



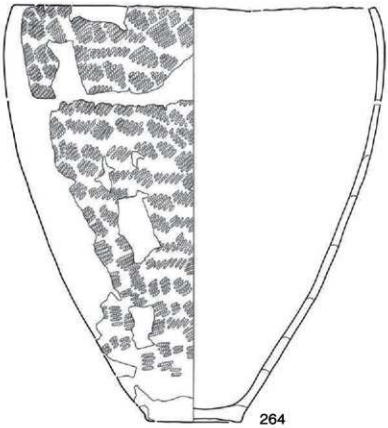
第70図　85～93号土坑出土土器

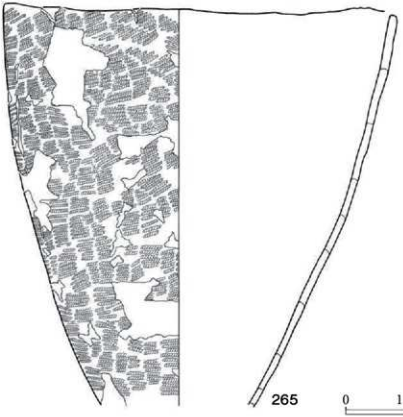


第71図　94～106号土坑出土土器



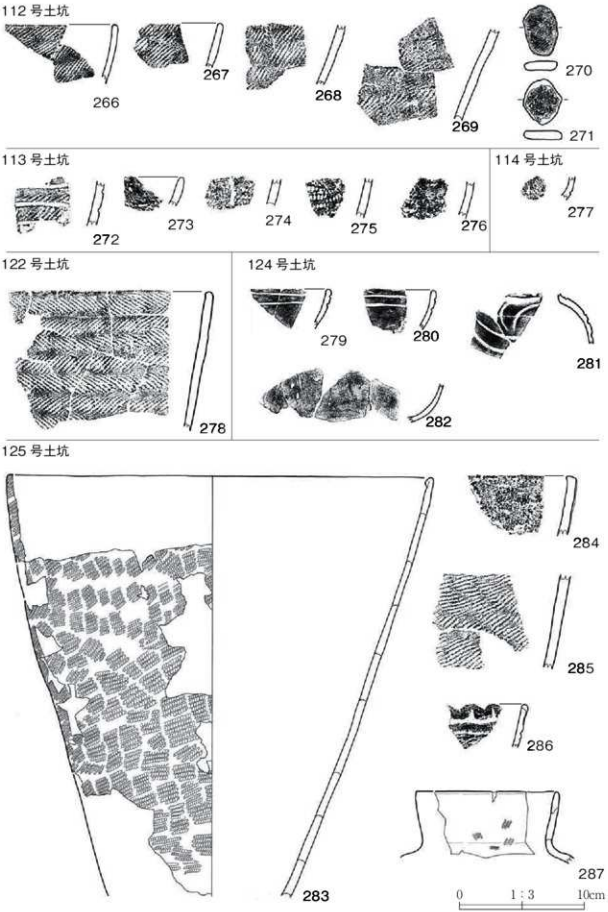
第72図　107～111号土坑出土土器



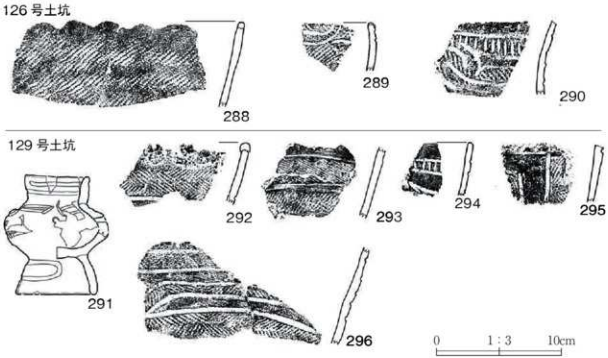


0　1：3　10cm

第73図　111号土坑出土土器



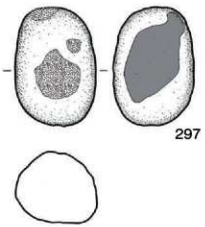
第74図　112～125号土坑出土土器



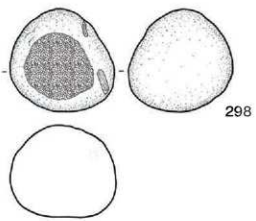
第75図　126・129号土坑出土土器

B突起が付き、口縁部には羊歯状文、胴部には入組三叉文が施文されている。大洞BC式の特徴をもつ。石器は石皿（313）で、両面を使用面とし、磨面が見受けられる。96号土坑から２点（222・223）図示した。222は鉢の口縁部片でわずかだが入組三叉文が見受けられる。223は深鉢の底部片である。97号から３点（224～226）、石器１点図示した。224は鉢で、遺構の埋土中に小片の状態で出土したが、接合してほぼ完形と分かった。口唇部にA突起とB突起が交互に付き、胴部に雲形文が描かれている。225も鉢で口端部に刻み、口縁部には羊歯状文が施文される。石器は敲磨器類（314）で厚みのある楕円形の礫を素材とし、縁辺部に敲打痕が全周する。98号土坑から土器２点（227・228）、石器１点図示した。227は深鉢の胴部片で結節のある縄文が施文される。228は鉢の胴部片である。遺物の詳細な時期は定かではないが、228の文様や断面の厚みから晩期に比定されると推察する。石器は敲磨器類（316）で欠損しているが扁平な円形の礫を素材とし、平坦面に凹痕と浅いが砥溝が見受けられる。99号土坑から３点（229～231）図示した。229は深鉢で口縁部から胴部にかけ横位の羽状縄文が施文される。230も深鉢で口縁部から縄文が施文され、炭化物が付着する。231は鉢の台部分でわずかに残る胴部に縄文が施文され、台部分は無文である。いずれも晩期に比定されると推察する。石器は敲磨器類（315）で、棒状の礫を素材とし各面の中央部に凹痕が見受けられる。101号土坑から１点（232）図示した。鉢の口縁部で横位に沈線が巡る。晩期に比定される。102号土坑から３点（234～236）石器２点図示した。234・235は鉢の口縁部片で、羊歯状文が施文される。また235の胴部には１箇所補修孔が認められる。236は鉢の胴部片で沈線文と縄文が施文される。いずれも文様から大洞BC式に比定されると考える。石器は石鏃（317）、敲磨器類（318）で、317は尖基鏃で形態がやや歪である。318は扁平な楕円形の礫を素材とし、偏平な両面には凹痕が、縁辺には敲打痕が見受けられる。104号土坑からは石器１点（320）図示した。敲磨器類で偏平な礫を素材とし、両面に凹痕が見受けられる。106号土坑から３点（238～240）石器１点図示した。238は粗製の深鉢で縄文のみが施文される。また239は

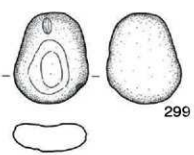
71 号土坑



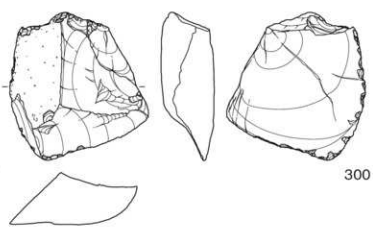
84 号土坑

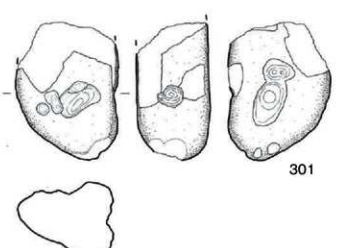


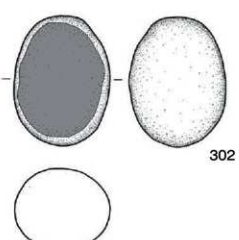
75 号土坑



86 号土坑





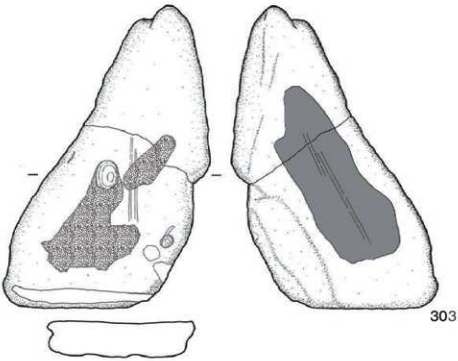


(297 ～ 299・301・302)　0　1：3　10cm

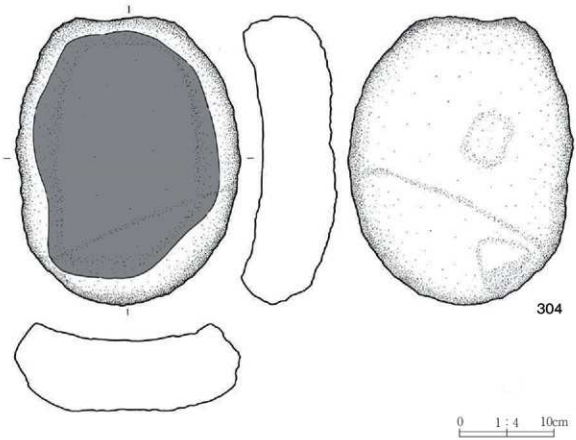
(300)　0　2：3　5cm

第76図　71～86号土坑出土石器

81 号土坑

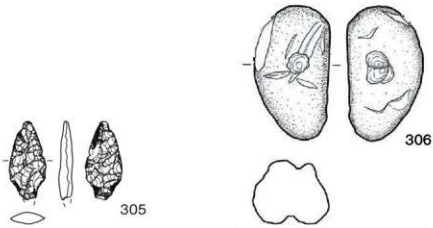


85 号土坑

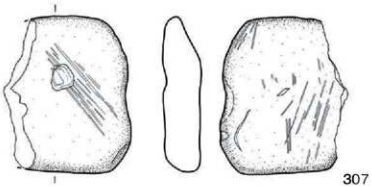


第77図　81・85号土坑出土石器

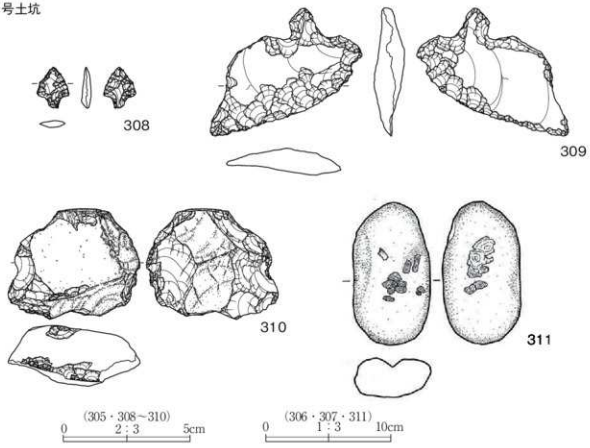
87 号土坑



88 号土坑

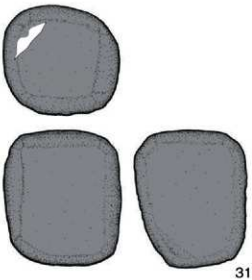


92 号土坑



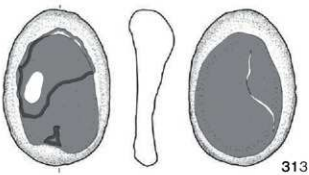
第78図　87～92号土坑出土石器

94 号土坑



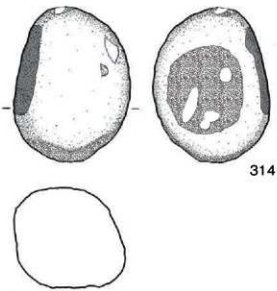
312

95 号土坑



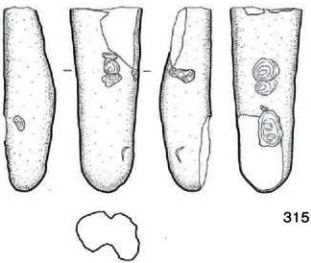
313

97 号土坑



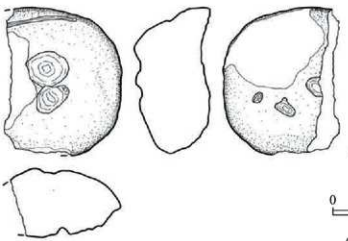
314

99 号土坑



315

98 号土坑

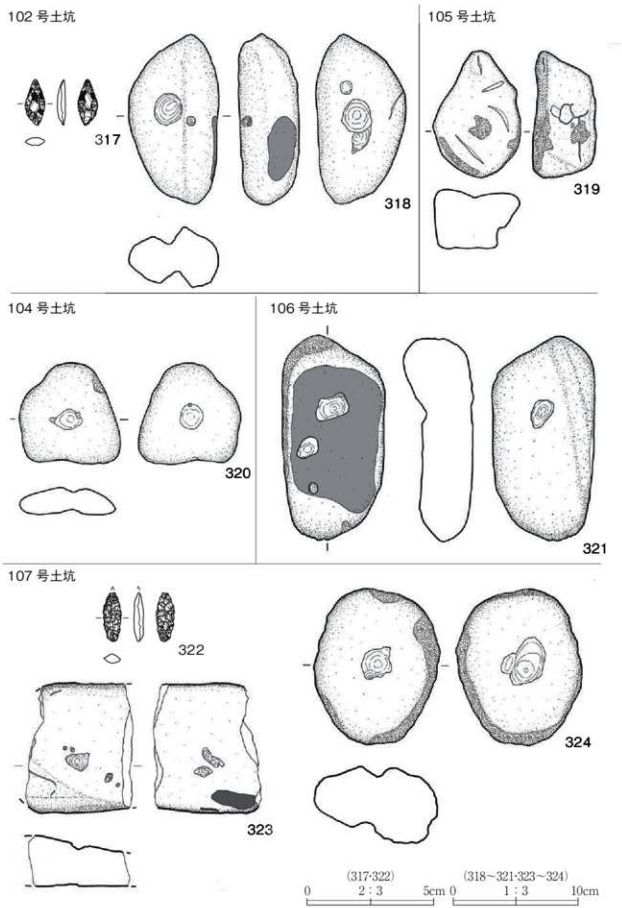


316

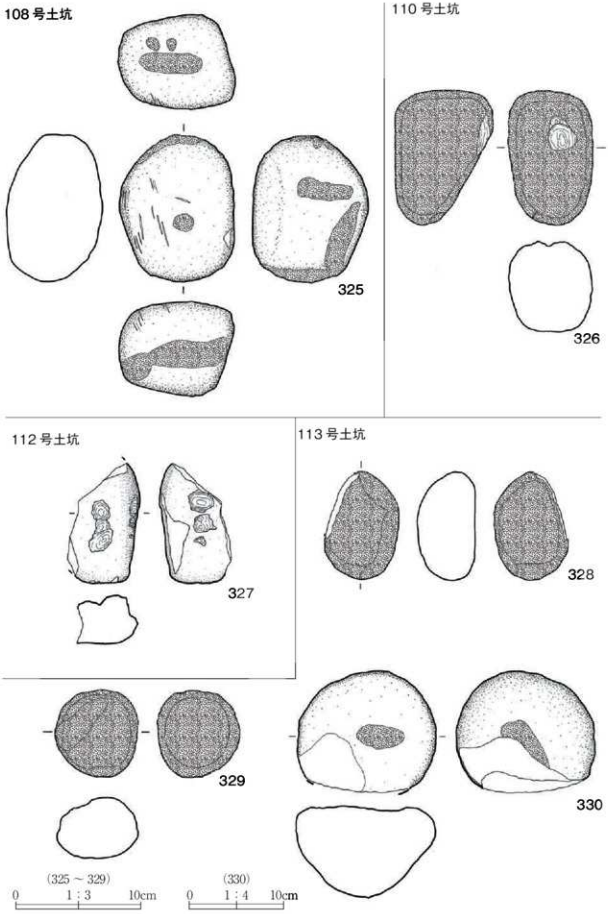
(312～315)
0　1：3　10cm

(316)
0　1：4　10cm

第79図　94～99号土坑出土石器

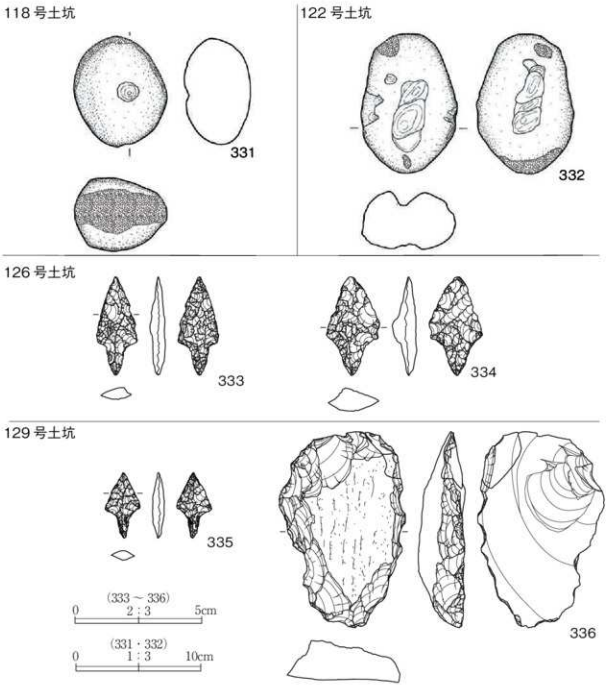


第80図　102～107号土坑出土石器



第81図　108～113号土坑出土石器

非結束の羽状縄文が施文される。240は注口土器か。胴部片で突起が付き、沈線文と羊歯状文が施文される。大洞BC式の特徴をもつ。石器は敲磨器類（331）で偏平で方形基調の礫を素材とし、平坦面に凹痕が、また縁辺の一部には敲打痕が見受けられる。107号土坑から14点（241～254）図示した。241は口縁部が外へと屈曲する形態の深鉢で、口縁部は無文、胴部には縄文が施文される。243～246は鉢の破片で口縁部に羊歯状文が施文される。大洞BC式と判断した。249は浅鉢の胴部片か。器面は丁寧にミガキが施され、沈線文が巡る。250～254は器面が朱塗りされている土器片である。小片で器種の判別も難しいが、厚みから鉢の胴部片ではないかと推定する。252は羊歯状文が施文される。石器は石錐（322）、敲磨器類２点（323・324）である。322は棒状の形態を呈し、先端を欠損する。323は両端を欠損する。偏平で方形の礫を素材とし、平坦面に凹痕が見受けられる。また炭化物状の付着物が認められた。324は楕円形の礫を素材とし、縁辺を利用して敲打を加えており、そのため縁辺部は歪に変形している。平坦部に凹痕が見受けられる。108号土坑から土器１点（237）図示した。鉢の胴部片で縄文を地文とし、沈線で渦巻き文などを描いている。大洞BC式の特徴をもつ。石器は敲磨器類（325）で、歪な楕円形の礫を素材とし、各面に敲打痕と線上痕が見受けられる。敲打痕はいずれも小さい。110号土坑から１点（255）図示した。鉢の口縁部か。波状口縁を呈し、口縁部の形状に合わせて沈線が巡る。後期前葉と推定される。石器は敲磨器類（326）で、厚みのある楕円形の礫を素材とし、全面に敲打痕が、また１か所凹痕が見受けられた。111号土坑から10点（256～265）図示した。256・257は深鉢の口縁部で縦位の刻目文が多段化する。瘤付土器３段階に相当する。258～262・264・265は粗製の深鉢で縄文のみが施文される。262・264・265は大型に類し、262は胴長でほぼ直立気味に立ち上がる形態、264は底面がすぼまり口縁部が内湾する形態、そして265は直線的に外へと広がる形態と、それぞれ形態が異なる。264は一部、縄文原体の結節部が見受けられる。土製品は土製円盤１点（263）で、厚みから鉢の破片の二次利用と推測する。112号土坑から土器４点（266～269）土製品２点、石器１点図示した。266～269は深鉢で、縄文のみが施文される。土製品は土製円盤２点（270・271）でどちらも無文である。石器は敲磨器類（327）で、半分以上欠損する。厚みのある楕円形の礫を素材とし、偏平な面に凹痕が見受けられる。113号土坑から５点（272～276）、石器３点図示した。272は深鉢の口縁部片で縄文を地文とし、横位に沈線が巡る。273～276は小片で器種の判別も難しいが、いずれも器面に朱塗りが施された土器片である。石器は敲磨器類２点（328・329）と台石１点（330）である。328・329はどちらも楕円形の礫を素材とし、全面に敲打痕が見受けられる。330は一部欠損しているが、厚みのある大型の礫で、両面の中央に敲打痕が見受けられた。114号土坑から１点（277）図示した。鉢の胴部片で、器面に朱塗りが施されている。118号土坑は石器のみ（331）図示した。敲磨器類で厚みのある楕円形の礫を素材とし、縁辺には敲打痕が、平坦面の中央には凹痕が見受けられる。122号土坑から１点（278）、石器１点図示した。278は深鉢で、口縁部から胴部にかけ非結束の羽状縄文が横位に巡る。後期に比定される。332は敲磨器類で、楕円形の礫を素材とし、縁辺の端部には敲打痕、平坦面には複数の凹痕が見受けられる。124号土坑から４点（279～282）図示した。いずれも注口土器。279・280は口縁部片でミガキの施された器面に横位の沈線が巡る。281は胴部片で沈線文施文後、ミガキを施す。十腰内Ⅰ～Ⅱ式に比定される。125号土坑から５点（283～287）図示した。283は直線的に外へ開く形態の深鉢で、口縁部から胴部へと縄文のみが施文される。284は口縁部片であるが、文様が見えないほど器面に炭化物が厚く付着する。286は鉢の口縁部片で波状口縁を呈し、口縁形態に合わせて沈線が施文される。287は壺で胴部は丸く膨らみ、口縁部が直立気味の形態である。口縁部にはわずかに縄文が施文された痕跡が見受けられるが、全体に施文されたかは不明である。これらの遺物は後期に比定されるものと考える。126号土坑から３点（288～290）、石器２点図示した。288は深鉢で波状口縁を呈し、縄文のみが施文される。289・290は鉢で、沈線による区画文や縦位の刻目文が施文される。瘤付土器に見られる文様である。石



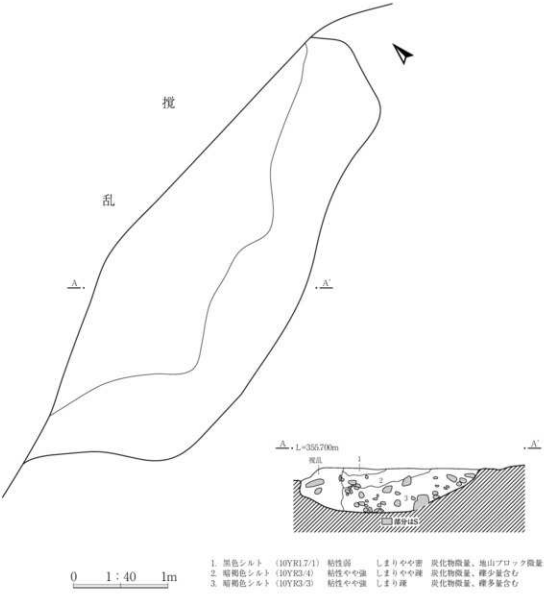
第82図　118～129号土坑出土石器

器は石鏃２点（333・334）で、どちらも凸基有茎鏃である。129号土坑から６点（291～296）、石器２点図示した。291は香炉形土器である。器面の磨滅が激しいが、かろうじて口縁部から台部まで沈線で文様が描かれているのが確認できる。292･293は深鉢で口唇部に突起が付き、口縁部には非結束の羽状縄文が巡る。294は鉢か。横位に２条の沈線が巡り、沈線間には刻目文が充填される。瘤付土器第３段階の295はクランク状の区画文に磨消縄文が施文される。後期中葉。296は深鉢の胴部で沈線による区画内に縄文が充填される。瘤付土器の深鉢胴部文様に類する。石器は石鏃（335）・礫器（336）である。335は凸基有茎鏃である。336は自然面の残る大型の剥片を素材とし、片面からやや粗く二次加工を施し、刃部を作出している。

5　性格不明遺構

1号性格不明遺構（第83・84図、写真図版47、第7表）

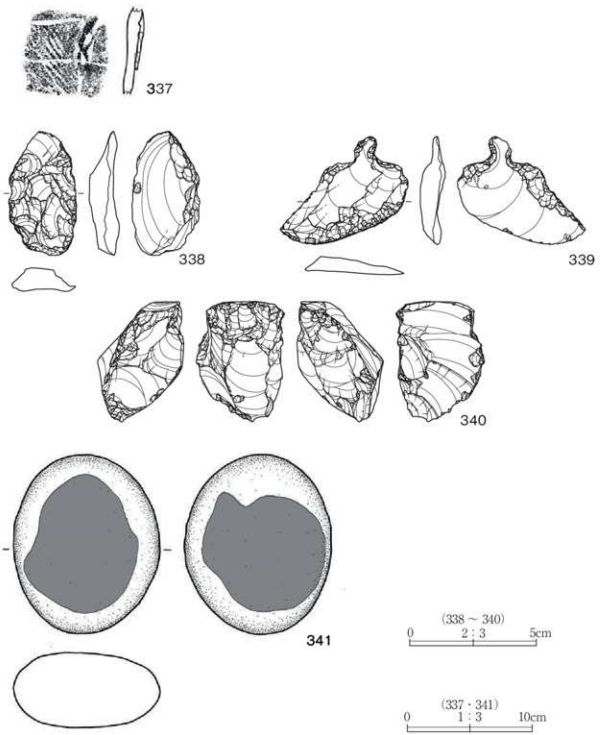
調査X区北西端X VE10jグリッドに位置する。V層上面で検出した。検出時、住居に類似する方形プランで確認したが、北側は壁が認められず、底面の平面形態もいびつであることが分かった。一方、埋土中からの遺物量は比較的多いこともあり、竪穴住居ではなく、性格不明遺構とした。ただし立地する地形が北側へ傾斜しており、斜面地に形成した窪みに遺物が溜まった自然地形である可能性も捨てきれない。他の遺構との重複はない。平面形はいびつな楕円形で、開口部径は550×(196)cmである。北壁は撹乱による削平で消失したものと思われるが、元々無い可能性もある。底面は概ね平坦で、壁は緩やかに広がりながら立ち上がる。確認面から底面まで最深45cmである。埋土は3層からなる。暗褐色シルトを主体とし、炭化物・礫が混入する。堆積状況から自然堆積と推定する。出土遺物は縄文土器1231.5g、石器25点である。縄文土器の出土量は多いが、形態を復元できるものはない。1点(337)



第83図　1号性格不明遺構

図示した。深鉢の胴部片で、地文に縄文を施文し、連鎖状隆帯が縦に垂下する。後期前葉門前式に比定される。石器は４点図示した。338は石鏃未成品で、剥離の二次加工が全周していない。横型の剥片を素材としている。339は斜型の石匙で、刃部は片面からの二次加工により作出している。340は石核で一方向を主に作業面とし、数回にわたり剥離作業が行われている。341は敲磨器類で偏平な楕円形の礫を素材とし、両面に磨った痕跡が見受けられる。

遺構の性格は不明である。時期は出土遺物（337）から縄文時代後期前葉門前式と判断した。



第84図　１号性格不明遺構出土遺物

6　焼　土　遺　構

1号焼土遺構（第85図、写真図版46・47）

調査Ⅶ区北東側Ⅸ J4i グリッドに位置する。Ⅴ層上面で焼土の広がりとして検出した。他の遺構との重複はない。平面形は楕円形で、開口部径は78×68cmである。焼土の堆積は確認面から底面まで最深10cmである。埋土は焼土の堆積も含め２層からなる。１層は焼土の堆積、２層は被熱により地山が赤色化した層として捉えている。また1層中に炭化物が混入する。遺物は出土していない。周辺に遺構はないが、屋外炉の可能性が高い。時期は不明だが縄文時代の可能性が高い。

2号焼土遺構（第85図、写真図版46）

調査Ⅶ区南東側Ⅹ J8d グリッドに位置する。Ⅴ層上面で検出した。他の遺構との重複はない。平面形は歪な楕円形で、開口部径は58×43cmで、南側に暗褐色シルトが堆積する。焼土の堆積は確認面から底面まで最深８cmである。埋土は焼土の堆積も含め４層からなる。１～３層は焼土堆積層。ただ２・３層は被熱による赤色化がやや薄い層である。４層には焼土は堆積せず、また赤色化もしていない。遺構自体の掘り方と捉えるべきか不明である。遺物は出土していない。周辺遺構に伴う屋外炉の可能性が高い。時期は周辺の遺構から縄文時代と判断した。

3号焼土遺構（第85図、写真図版46）

調査Ⅶ区南東側Ⅹ J8c グリッドに位置する。Ⅴ層上面で検出した。他の遺構との重複はない。平面形は歪な楕円形で、開口部径は50×50cmである。焼土の堆積は確認面から底面まで最深２cmである。埋土は２層からなり、１層は焼土堆積層で、２層は被熱により地山面が赤色化するが、まだ焼土化していない層である。２層が中央部分にしか確認されていないことから、被熱自体は弱く、遺構全体に及ばなかったと捉えられる。遺物は出土していない。周辺遺構に伴う屋外炉と考えられる。時期は周辺の遺構から縄文時代と判断した。

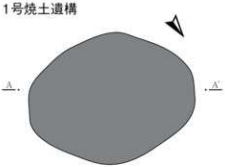
4号焼土遺構（第85図、写真図版46）

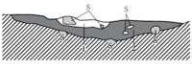
調査Ⅶ区南東側Ⅹ J9d グリッドに位置する。Ⅴ層上面で検出した。他の遺構との重複はない。平面形は不整な楕円形で、開口部径は45×43cmである。底面は概ね平坦で、壁は緩やかに広がりながら立ち上がる。焼土の堆積は確認面から底面まで最深８cmである。埋土は２層からなり、焼土は２層が相当し、１層は被熱によりやや赤色化したシルトである。出土遺物は縄文土器11.4gである。小片のみで図示していない。遺構の性格は周辺遺構に伴う屋外炉と考えられる。時期は出土遺物から縄文時代と判断した。

5号焼土遺構（第85図、写真図版47）

調査Ⅶ区南東側Ⅻ G10b グリッドに位置する。Ⅴ層上面で検出した。他の遺構との重複はない。平面形は円形で、開口部径は68×66cmである。焼土の堆積は確認面から底面まで最深19cmである。埋土は３層からなり、焼土は２・３層であるが、３層は赤色化が薄く、被熱が弱かったと推定される。また１層は黒色シルト層であり、焼土をかき出して穴状になっていた所に堆積したと推測する。出土遺物は縄文土器43.2gで、小片のみで図示していない。遺構の性格は周辺遺構に伴う屋外炉と考えられる。時期は出土遺物から縄文時代と判断した。

1号焼土遺構



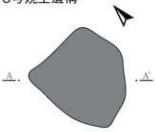


1. 暗赤褐色焼土　(5YR3/2)　粘性強　しまりやや疎
　　炭化物微量含む
　　(焼土に灰層土が混入したものか)
2. にぶい赤褐色焼土 (5YR4/4)　粘性やや強　しまり密
　　礫少量含む (地山が焼成した層)

2号焼土遺構

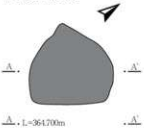
1. 明赤褐色焼土 (5YR5/6)　粘性やや強　しまり密
2. 明褐色シルト (7.5YR5/6)　粘性やや強　しまりやや密
3. 明褐色シルト (7.5YR5/6)　粘性やや強　しまりやや密
　　焼土ブロック少量含む
4. 褐色シルト　(10YR4/4)　粘性やや強　しまり密
　　炭化物微量含む

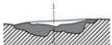
3号焼土遺構



1. 赤褐色焼土　(5YR4/8)　粘性やや強　しまりやや密
2. にぶい赤褐色シルト (5YR4/4)　粘性やや強　しまりやや密
　　焼土ブロック少量含む

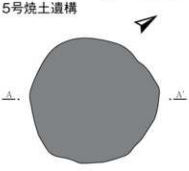
4号焼土遺構

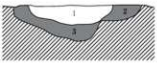




1. 赤褐色シルト (5YR4/8)　粘性やや強　しまり密
2. 暗赤褐色焼土 (5YR3/2)　粘性やや強　しまりやや密
　　焼土ブロック微量含む

5号焼土遺構





1. 黒褐色シルト (10YR2/2)　粘性やや弱　しまり疎　炭化物少量、
　　焼土粒微量含む
2. 暗褐色焼土　(10YR3/3)　粘性やや強　しまり密　炭化物微量、
　　地山ブロック少量含む
3. 赤褐色焼土　(5YR4/6)　粘性弱　しまり密　焼土粒少量含む
　　(地山が被熱により変色、焼成はあまり強くない)

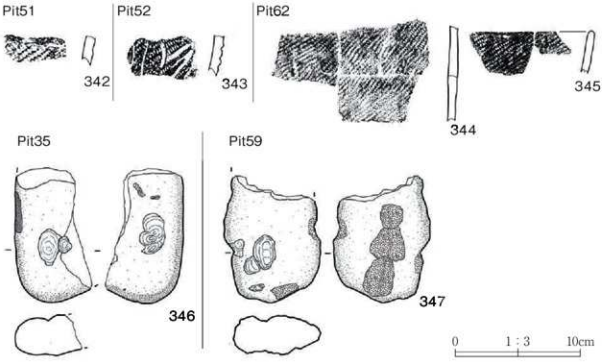
0　1：20　1m

第85図　1～5号焼土遺構

7　柱　穴　群（第7～9・86図、写真図版58・69、第6・7表）

各調査区から合わせて70個の柱穴が見つかっている。分布状況では集中する場所などは認められず、散在する。したがって掘立柱建物跡を構成する柱穴ではないと考え、周辺の竪穴住居や土坑に付属して、その補助的に利用された柱ではないかと推測する。規模は概ね径10～20cm、深さ5～30cmの範囲に収まる。埋土は黒褐色シルトを主体とし、単層が多い。また柱痕跡が認められた柱穴はない。遺物を共伴する柱穴は少なく、あっても埋土中に縄文土器片や石器が含まれる程度である。出土した縄文土器はいずれも小片であり、意図的な混入ではなく、流れ込みの可能性が高い。3個の柱穴から出土した4点を図示した。342は深鉢の胴部片で、縄文のみが施文される。343は縄文を地文とし、沈線で文様を描くが、小片なのでどのような意匠か定かではない。後期中葉～後葉と推定する。344・345はPit62から出土している。どちらも粗製の深鉢で、縄文のみが施文される。石器は2点図示した。346・347どちらも敲磨器類である。なお他の柱穴から出土した石器も敲磨器類などの礫石器がほとんどである。346は3分の1以上欠損するが、偏平な楕円形の礫を素材とし、偏平な面に凹痕が見受けられる。347も同様であるが、偏平面の片面に凹痕、もう一面には敲打痕が見受けられる。

柱穴群の時期については、周辺に分布する遺構の時期や、出土遺物から縄文時代に帰属するものと判断した。



第86図　柱穴群出土遺物

第6表　柱穴一覧

番号	調査区	グリッド名	開口部標高(m)	底面標高(m)	深さ(cm)	色調		粘性	しまり	混入物
1	Ⅰ	Ⅵ N4e	370.53	370.34	18.6	10YR2/3	黒褐色シルト	やや弱	やや密	炭化物・焼土粒微量
2	Ⅰ	Ⅵ N4d	370.26	370.11	14.3	10YR3/3	暗褐色シルト	やや弱	疎	地山ブロック微量、礫少量
3	Ⅰ	Ⅵ N4c	370.43	370.20	23.7	10YR2/1	黒色シルト	弱	疎	白色粒子微粒、礫少量
4	Ⅰ	Ⅵ N4e	370.49	370.37	12.4	10YR3/3	暗褐色シルト	弱	密	炭化物微量、地山ブロック少量、礫少量
5	Ⅰ	Ⅵ N4d	370.39	370.19	20.0	10YR2/1	黒色シルト	やや強	やや疎	礫少量
6	Ⅰ	Ⅵ N3c	370.48	370.32	16.5	10YR2/3	黒褐色シルト	やや強	やや疎	地山ブロック多量
7	Ⅰ	Ⅵ N3e	370.53	370.42	10.9	10YR2/3	黒褐色シルト	やや弱	やや密	地山ブロック微量、礫少量
8	Ⅰ	Ⅵ N8e	369.48	369.28	19.8	10YR3/3	暗褐色シルト	やや弱	やや密	地山ブロック少量
9	Ⅰ	Ⅵ N3d	370.54	370.44	9.8	10YR2/1	黒色シルト	やや弱	やや密	地山ブロック少量
10	Ⅰ	Ⅵ M4c	368.01	367.96	5.4	10YR3/2	黒褐色シルト	やや弱	やや密	炭化物微量、地山ブロック少量
11	Ⅲ	Ⅵ M4b	368.02	366.01	0.3	10YR3/2	黒褐色シルト	やや強	やや密	地山ブロック中量
12	Ⅲ	Ⅵ M5c	368.08	368.00	8.7	10YR2/1	黒色シルト	やや弱	やや密	炭化物微量、地山ブロック少量
13	Ⅲ	Ⅵ M4b	367.99	367.81	17.6	10YR2/3	黒褐色シルト	弱	やや密	炭化物微量、地山ブロック中量
14	Ⅲ	Ⅵ M5b	368.01	367.76	25.1	10YR3/2	黒褐色シルト	強	やや疎	炭化物微量、地山ブロック少量
15	Ⅲ	Ⅵ M5c	368.06	367.90	16.1	10YR2/1	黒色シルト	やや強	密	暗褐色シルトブロック少量
16	Ⅲ	Ⅵ M5b	368.03	367.94	8.9	10YR2/3	黒褐色シルト	強	やや密	地山ブロック少量
17	Ⅲ	Ⅵ M6c	368.12	368.08	3.7	10YR3/2	黒褐色シルト	やや強	やや密	酸化鉄微量、地山ブロック少量
18	Ⅲ	Ⅵ M6c	368.21	368.05	15.3	10YR2/3	黒褐色シルト	やや弱	やや疎	炭化物微量、地山ブロック少量
19	Ⅲ	Ⅵ M6c	368.18	368.15	3.5	10YR2/3	黒褐色シルト	やや強	密	焼土粒微量、地山ブロック中量
20	Ⅰ	Ⅵ M7j	369.08	368.96	11.3	10YR3/3	暗褐色シルト	やや弱	やや密	地山ブロック少量
21	Ⅰ	Ⅵ M7j	369.13	368.90	23.1	10YR2/2	黒褐色シルト	やや弱	やや密	地山ブロック中量
22	Ⅶ	Ⅸ J7f	365.52	365.36	16.8	10YR4/4	褐色シルト	やや弱	やや疎	炭化物微量、地山ブロック少量
23	Ⅶ	Ⅹ J3e	365.32	365.11	21.0	10YR4/4	褐色シルト	やや強	やや疎	炭化物微量、地山ブロック少量
24	Ⅶ	Ⅹ J4b	365.37	364.74	62.8	10YR2/3	黒褐色シルト	強	やや疎	炭化物微量、地山ブロック微量、礫少量
25	Ⅶ	Ⅹ J1a	365.63	365.54	9.8	10YR2/3	黒褐色シルト	やや弱	やや疎	炭化物微量、地山ブロック少量、礫少量
26	Ⅶ	Ⅹ J4c	365.33	365.06	27.1	10YR3/3	暗褐色シルト	やや弱	やや疎	炭化物微量、地山ブロック少量
27	Ⅶ	Ⅹ J2c	365.45	365.31	14.5	10YR2/3	黒褐色シルト	やや強	やや疎	炭化物微量、酸化鉄少量
28	Ⅶ	Ⅹ J5g	365.15	365.03	12.4	10YR4/4	褐色シルト	やや強	やや密	輝土上位に焼土（暗赤褐色）少量
29	Ⅶ	Ⅹ J4j	365.59	364.89	70.2	10YR4/4	褐色シルト	やや強	やや密	輝土上位に焼土（暗赤褐色）少量
30	Ⅶ	Ⅹ I3j	365.61	365.28	32.7	10YR3/1	黒褐色シルト	やや強	やや密	なし
31	Ⅶ	Ⅹ I6j	365.21	364.88	32.8	10YR3/1	黒褐色シルト	やや強	やや密	なし
32	Ⅶ	Ⅹ Ⅱ F5g	362.32	362.16	16.1	10YR2/3	黒褐色シルト	やや弱	やや密	炭化物微量、地山ブロック少量
33	Ⅶ	Ⅹ Ⅱ F5g	362.27	362.02	24.5	10YR3/2	黒褐色シルト	やや強	やや密	炭化物微量、地山ブロック中量
34	Ⅶ	Ⅹ Ⅱ F4g	362.34	361.97	36.7	10YR3/2	黒褐色シルト	やや弱	密	炭化物微量、地山ブロック中量
35	Ⅶ	Ⅹ Ⅱ F6f	362.24	361.87	36.9	10YR2/1	黒色シルト	やや強	やや密	地山ブロック少量、炭化物微量
36	Ⅶ	Ⅹ Ⅱ F4f	362.41	362.32	9.0	10YR3/3	暗褐色シルト	やや強	やや密	炭化物微量、地山ブロックやや多く
37	Ⅶ	Ⅹ Ⅱ F6g	362.09	361.90	19.8	10YR3/1	黒褐色シルト	やや強	やや密	地山ブロック少量、縄文土器片多量
38	Ⅶ	Ⅹ Ⅱ F4g	362.43	362.23	20.1	10YR4/4	褐色シルト	やや強	やや密	地山ブロック中量、炭化物微量
39	Ⅶ	Ⅹ Ⅱ F4g	362.42	362.26	16.9	10YR4/4	褐色シルト	やや強	やや密	地山ブロック中量
40	Ⅶ	Ⅹ Ⅱ F5g	362.23	362.05	18.8	10YR3/3	暗褐色シルト	やや弱	やや密	地山ブロック少量
41	Ⅶ	Ⅹ Ⅱ G8a	362.30	362.26	4.6	10YR2/1	黒色シルト	やや強	やや密	地山ブロック少量、71号土坑と重複
42	Ⅶ	Ⅹ Ⅱ F4g	362.40	362.33	7.4	10YR2/1	黒色シルト	やや強	やや密	地山ブロック少量
43	Ⅶ	Ⅹ Ⅱ F4g	362.50	362.29	20.6	10YR2/1	黒色シルト	やや強	やや密	
44	Ⅶ	Ⅹ Ⅱ F5e	362.38	362.19	19.7	10YR2/1	黒色シルト	やや強	やや密	
45	Ⅶ	Ⅹ Ⅱ F9j	360.26	360.11	14.2	10YR2/1	黒色シルト	やや弱	やや密	地山ブロック中量
46	Ⅶ	Ⅹ Ⅱ F10j	359.95	359.57	38.7	10YR4/4	褐色シルト	やや強	やや密	地山ブロック中量、焼土粒少量
47	Ⅶ	Ⅹ Ⅱ F5i	362.23	362.06	17.6	10YR2/3	黒褐色シルト	やや強	密	地山ブロック少量
48	Ⅶ	Ⅹ Ⅳ G5f	358.62	358.47	14.5	10YR3/2	黒褐色シルト	やや弱	やや密	炭化物微量、地山ブロック少量、礫少量
49	Ⅶ	Ⅹ Ⅳ G5f	358.62	358.37	24.5	10YR2/3	黒褐色シルト	やや強	やや密	炭化物微量、地山ブロック微量
50	Ⅶ	Ⅹ Ⅳ G4f	358.76	358.62	13.5	10YR3/2	黒褐色シルト	やや強	やや密	地山ブロック少量
51	Ⅸ	Ⅹ Ⅲ G10a	360.13	359.85	27.7	10YR2/2	黒褐色シルト	やや強	やや密	炭化物微量、地山ブロック微量
52	Ⅸ	Ⅹ Ⅲ F10j	359.85	359.68	17.0	10YR3/3	暗褐色シルト	やや強	やや密	地山ブロック少量、縄文土器片少量
53	Ⅸ	Ⅹ Ⅲ F10j	359.97	359.83	13.9	10YR3/1	黒褐色シルト	やや強	やや密	
54	Ⅸ	Ⅹ Ⅲ F10j	359.95	359.59	35.1	10YR2/2	黒褐色シルト	やや強	やや疎	地山ブロック少量
55	Ⅸ	Ⅹ Ⅲ G10a	359.94	359.78	16.6	10YR3/3	暗褐色シルト	やや弱	やや密	地山ブロック少量
56	Ⅸ	Ⅹ Ⅲ G10a	359.91	359.75	16.4	10YR3/3	暗褐色シルト	やや弱	やや密	地山ブロック少量
57	Ⅸ	Ⅹ Ⅳ E5b	360.81	360.72	9.0	10YR3/3	暗褐色シルト	やや強	やや密	炭化物微量、地山ブロック少量
58	Ⅸ	Ⅹ Ⅳ E7e	360.41	360.13	27.8	10YR2/3	黒褐色シルト	強	やや密	炭化物微量、地山ブロック少量
59	Ⅸ	Ⅹ Ⅳ E5i	360.67	360.54	12.8	10YR2/3	黒褐色シルト	やや弱	密	炭化物少量、地山ブロック少量
60	Ⅸ	Ⅹ Ⅳ E7e	360.80	360.56	24.3	10YR2/3	黒褐色シルト	やや強	密	炭化物微量、地山ブロック微量
61	Ⅸ	Ⅹ Ⅳ E6c	360.99	360.79	19.4	10YR3/3	暗褐色シルト	やや強	やや密	地山ブロック少量
62	Ⅸ	Ⅹ Ⅳ E8a	360.81	360.76	4.9	10YR2/3	黒褐色シルト	やや強	密	炭化物少量、地山ブロック少量
63	Ⅸ	Ⅹ Ⅳ E4i	360.91	360.72	19.4	10YR4/3	にぶい黄褐色シルト	やや強	やや密	地山ブロック少量、炭化物粒少量
64	Ⅸ	Ⅹ Ⅳ E6b	361.09	361.03	6.6	10YR3/3	暗褐色シルト	やや強	やや疎	地山ブロック少量
65	Ⅸ	Ⅹ Ⅳ F5b	359.00	358.88	12.4	10YR3/2	黒褐色シルト	やや弱	やや密	炭化物微量、礫少量
66	Ⅸ	Ⅹ Ⅳ F6c	358.99	358.91	8.4	10YR2/2	黒褐色シルト	やや強	やや密	炭化物微量、地山ブロック少量
67	Ⅸ	Ⅹ Ⅳ F5b	359.19	359.11	7.6	10YR3/2	黒褐色シルト	やや弱	やや密	炭化物微量、地山ブロック少量
68	Ⅸ	Ⅹ Ⅳ F9b	359.10	358.98	12.4	10YR3/2	黒褐色シルト	やや弱	やや密	炭化物微量、礫少量
69	Ⅹ	Ⅹ Ⅵ I5j	351.69	351.36	33.0	10YR3/2	黒褐色シルト	やや強	やや密	炭化物微量、地山ブロック少量
70	Ⅹ	Ⅹ Ⅵ I5j	351.91	351.71	20.0	10YR3/2	黒褐色シルト	やや密	やや密	炭化物微量、地山ブロック少量

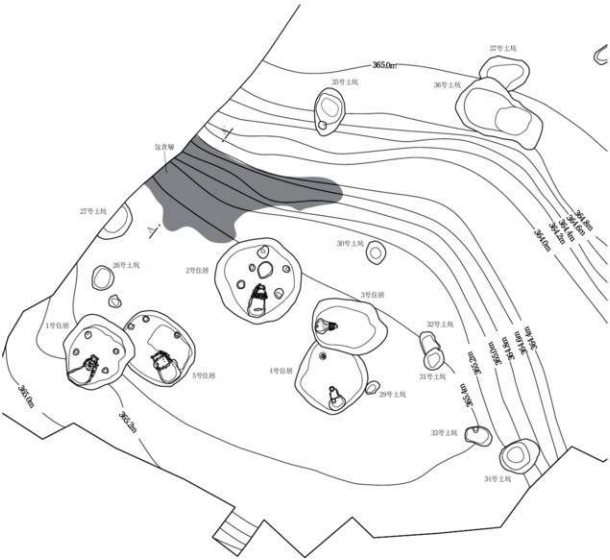
8　包　含　層（第87～90図、写真図版47・58～60、第７表）

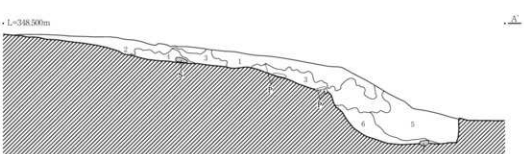
調査Ⅶ区の北端Ⅸ J8e～Ⅸ J9eグリッド周辺に位置する谷の南西側斜面において、遺物の出土量が顕著に多い地点が認められた。遺物はⅣ層下位に混入し、また地形が斜面地であることもあり、「捨て場」の可能性を考えた。そこで、この範囲については「包含層」と呼称し、この範囲からの出土遺物は遺構外出土遺物とは別にして取り上げた。包含層に相当する範囲は第87図のアミかけで示した範囲である。斜面の肩部15mに及び、谷の底面まで続いている。遺物は斜面に堆積するⅣ層（第87図断面２～４層）から出土している。出土位置から埋土上位、埋土下位に分けて遺物の取り上げを行ったが、後述するが出土遺物からは時期的な差異が認められないので、概ね短期間の内に堆積したものと思われる。また周辺の竪穴住居群と同時期に比定される土器が主体を占めており、その点から住居群と関連がある「捨て場」であったことが想定される。ただし、所謂「土器捨て場」とするには出土量はそれほど多くない。従って、利用期間はかなり限定されていたことが想定される。なお、谷斜面下方から底にかけて、地形をえぐるように大きく窪む場所がある（５・６層が相当）が、これは谷の形成時に上方から降下する土により地形（Ⅴ層土）がえぐられたものと考える。この層からの遺物はほとんどなく、包含層形成時には埋没していた可能性もある。

出土遺物は縄文土器が20695.9g、石器が29点である。包含層の範囲は５×５ｍグリッドで３グリッド分に相当するので、縄文土器の出土量は１グリッドあたり7000gに換算でき、かなり多いことが分かる。ただし出土土器は大型の破片が目立つが、完形に近いものはほとんど見受けられない。

40点図示した。348～356は早期中葉～前期前葉に属する土器片である。348は貝殻腹縁文が施文され、早期中葉物見台式の特徴に類似する。349～350は格子状の沈線文が施文される。早期中葉蛇王洞Ⅱ式に類似する。351は横位の結節回転縄文が施文される。大木2a式。352は磨滅が激しく、縄文のみしか見えないが、繊維が混入しており、縄文前期前葉と考える。354は深鉢の胴部片でオオバコ文が施文される。中期初頭大木7a式と考える。355～367・369・370は中期大木９式新段階に比定される土器群である。355～367は口縁部から胴部に複数の楕円形区画文が施文される一群、369・370は２個の楕円形区画文が口縁部で連結する区画文が施文される一群で、どちらも区画内の縄文は磨消技法で施文する。355～357は大型深鉢で、355は口縁部がややすぼまり胴部が膨らむ形態、356は口縁部へと直線的に開く形態、357は所謂「キャリパー形」で、異なる形態をなす。また357は楕円形区画文が口縁部と胴部との２段になっており、口縁部の区画文間には円形の刺突文が２個一単位で縦位に施文される。他に359・362・365は区画を描く沈線文が二重になっており、縄文はその内側の沈線内にのみ施文される。どちらも口縁部が外へと直線的に開く形態である。369は区画内の縄文が単節の斜縄文であるのに対し、370は縦位の撚糸文が施文される。368・371～379は大木10式古段階に比定される一群である。368を除くと、小片が多い。いずれも器面に弧状の区画文が描かれ、区画内には充填縄文が施文される。368は大型破片で、胴部下半に最大径をもち、口縁部へと直立気味に立ち上がる形態である。大木９式新段階に比定される369などに見られる区画文にも類似するが、やや変化し「Ｃ」字状の区画文となっている。また区画には隆帯が施文されている。区画内の縄文は隆帯の貼り付け前に施文されている。胴部下半は区画文はなく、全体に縄文が施文される。381～387は粗製土器を一括した。いずれも口縁部は無文、胴部には斜縄文や縦位に撚糸文が施文される。381は形態を復元できた土器で、胴部上半はくびれ、口縁部で外反する。382～385は緩やかに外へと開く形態。386・387は胴部上半がふくらみ、口縁部は直立気味に立ち上がる形態である。

包含層形成の時期であるが、出土した土器群は大木９式新段階に比定される土器が圧倒的に多く、

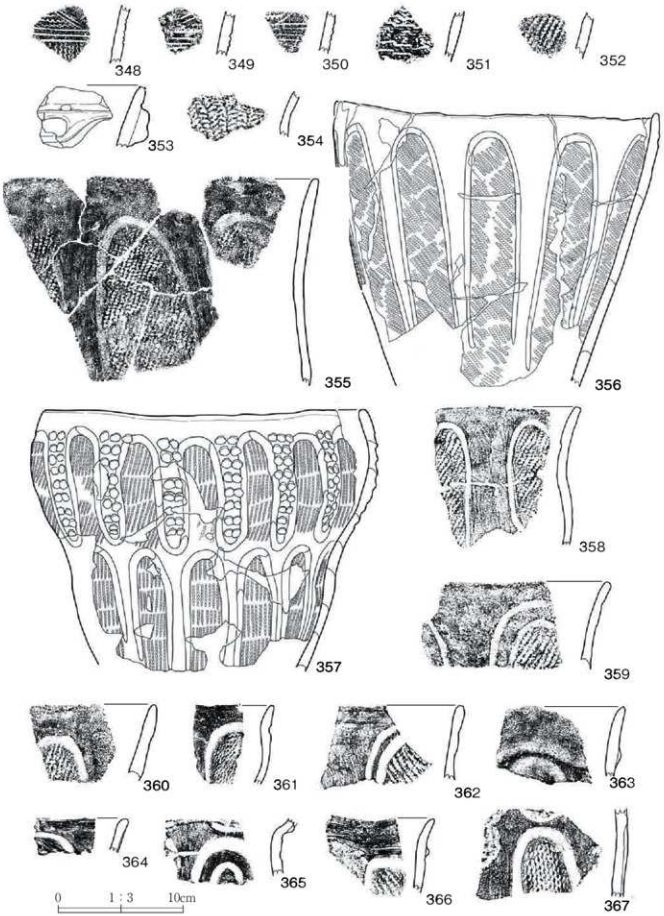




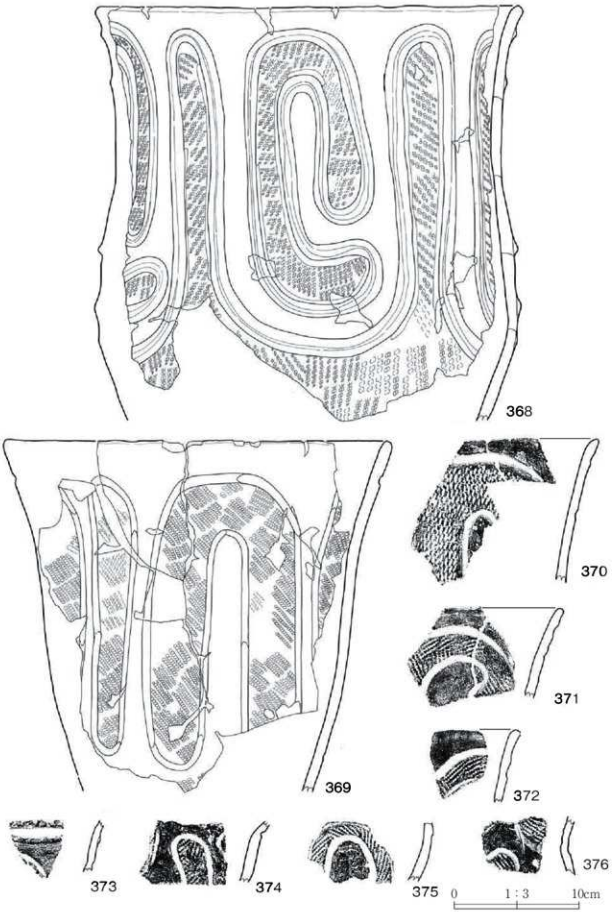
1. 暗褐色シルト（10YR3/4）　粘性やや強　しまりやや密　焼土ブロック少量、遺物多量含む
2. 褐色シルト　（10YR4/4）　粘性やや強　しまりやや密　炭化物少量含む
3. 褐色シルト　（10YR4/6）　粘性やや強　しまりやや密　焼土ブロック少量、地山ブロック中量、遺物多量含む
4. 黄褐色シルト（10YR5/6）　粘性やや強　しまりやや密　地山ブロック多量含む
5. 黒褐色シルト（10YR2/2）　粘性やや強　しまりやや密　沢を埋没させている層　焼土粒・炭化物少量、礫少量含む
6. 褐色シルト　（10YR4/4）　粘性やや強　しまりやや密　斜面の地山が崩落した層　下位（沢の底）に汗礫堆積

包含層断面図　0　1：40　1m　　平面図　0　1：200　10m

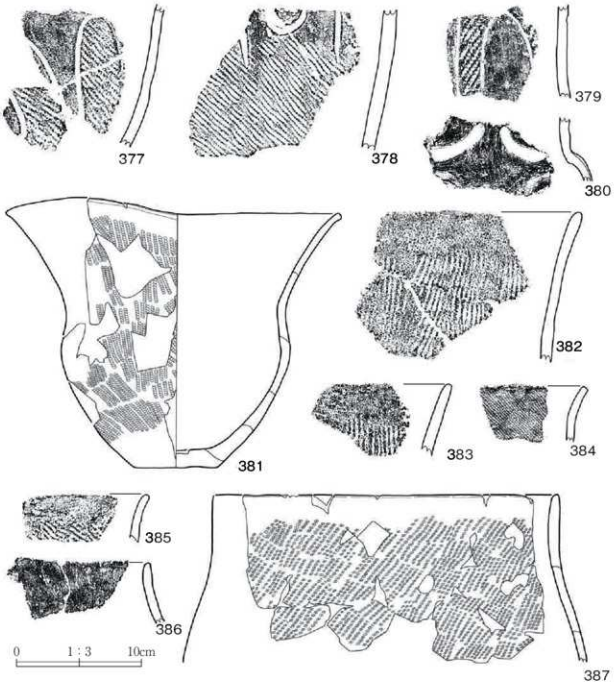
第87図　調査Ⅶ区包含層



第88図　調査Ⅶ区包含層出土遺物（1）



第89図　調査Ⅶ区包含層出土遺物（2）



第90図　調査Ⅶ区包含層出土遺物（3）

それに次ぐ大木10式古段階では369のような大型の土器も見受けられるが、大木９式新段階と比較すると出土量が顕著に減少する。また他に早期中葉、前期前葉、中期初頭の土器も認められたが、いずれも小片であることから流れ込みと考えた方が良さそうである。したがって包含層は大木９式期新段階の概ね限定された時期を中心に形成され、その後の継続性は弱いものと推測する。また周辺に分布する１～５号住居跡や土坑群の時期とも符合してくるので、周辺の遺構群との関連性が強いものと考える。

9　その他の遺構外出土遺物

調査区Ⅰ・Ⅱ・Ⅵ・Ⅶ～Ⅹ区において、遺構外から遺物が出土している。出土遺物の内訳は第４表に示した通りである。特にⅠ・Ⅶ～Ⅹ区において図示可能な遺物群が認められた。以下、調査区ごとにみていく。

調査Ⅰ区（第97図、写真図版69、第７表）

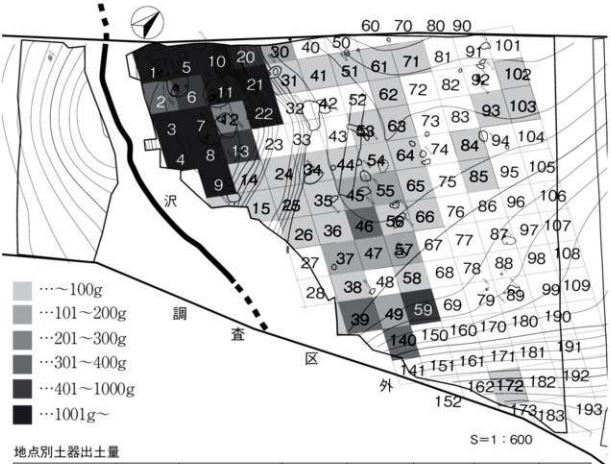
縄文土器157.6g、石器４点が出土している。縄文土器は小片のみで図示できるものはない。石器１点図示した。527は砥石である。約３分の１を欠損する。厚みのある方形の礫を素材とし、平坦面の中央に２条の研溝が重複している。

調査Ⅶ区（第91・93～95図、写真図版60～62、第７表）

前述の「包含層出土」遺物を除き、縄文土器20664.9g、石器411点が出土している。出土量は比較的多く、土器の時期をみても早期、前期、中期と幅が広い。特に沢の北側から谷斜面、また谷の北岸周辺にかけては遺物出土量が多い。調査Ⅶ区の遺物取り上げについては、調査区が谷や沢など、地形による制約が多い点や、また設定してあるグリッドの方向と調査区の軸方向とがうまく一致しないことから、設定してあるグリッドとは別に遺物取り上げ用に５m四方のグリッドを設け、グリッド番号を付した。第91図は遺物取り上げグリッド毎の土器出土量を色分けして示したものである。またその下には、各グリッドの土器出土量を重量で示した表を付している。第91図をみてみると谷と沢に挟まれたグリッド１～13で、出土量の多さが顕著であることが見て取れる。この範囲は１～５号住居が分布する場所でもあり、また谷の斜面は「包含層」が位置する。出土した土器の時期は大木９～10式を主体とし、竪穴住居や土坑の時期とも符合する。したがってこれらの遺構外遺物もこうした遺構群と関連の強い遺物群であるといえよう。一方、谷の北岸、グリッド30番台以降は北側にいくにつれ、出土量が少なくなる傾向にある。これらの広い範囲では主に縄文時代早期～前期の土器群が出土しており、中期の土器群がほとんど出土していない。つまり谷を挟んで南側は縄文時代中期の遺物群が、北側は早期～前期の遺物群がそれぞれ分布していることになる。またグリッド39・49・59・140で急激に出土量が増加する傾向も見受けられた。この範囲は地形が急に下がる場所でもある。ただし捨て場を形成していたと考えるほどの遺物量ではなく、この範囲で出土量が増えた理由は定かではない。

86点図示した。388～395は早期中葉に比定される一群である。388～391は貝殻腹縁文と沈線文が施文される。物見台式に相当するものと考える。392～395は口端部に細かい刻みが、また口縁部には爪形の刻みが巡り、胴部には細かい沈線が格子状に施文される。蛇王洞Ⅱ式に相当するものと考える。396～437は前期前葉大木2a、2b式に比定される一群で、いずれも胎土に繊維の混入が認められた。396・397は縄文のみが施文される。398・404～406は単軸絡条体５類が横位に施文される。401・402・408～412は胴部に横位のＳ字状連鎖沈線が巡る一群で、401には口縁部に刻みの施された隆帯が付される。415は結束羽状縄文が施文される。424は付加縄文が施文される。437は単軸絡条体５類が縦位に施文される。時期については401・402・408～412が大木2b式と判断できる。その他は大木2a式と考えられるが、小片も多く、大木2b式の範疇のものもあるかもしれない。

438～452は中期初頭大木７a式に比定される一群である。438～441は口縁部片で、太い沈線文が横位に巡る。直線状の沈線と波状沈線が交互に施文される。442・443は口縁部片で地文に斜縄文を施文した後、沈線文を描く。444・445は押圧縄文によって格子状の文様が描かれている。446・447は頸



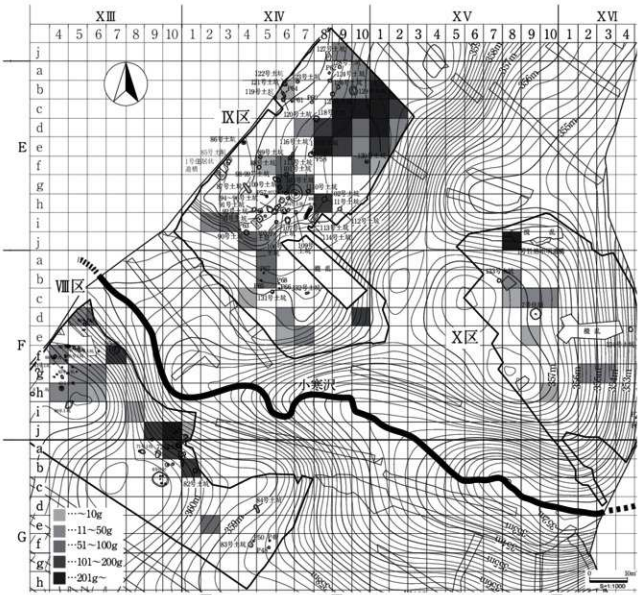
地点別土器出土量

出土地点	重量(g)	出土地点	重量(g)	出土地点	重量(g)	出土地点	重量(g)
Ⅶ区-1	3309.2	Ⅶ区-15	27.5	Ⅶ区-41	69.1	Ⅶ区-63	11.0
Ⅶ区-2	324.3	Ⅶ区-20（包含層）	4117.0	Ⅶ区-44	53.1	Ⅶ区-64	9.9
Ⅶ区-3	2399.4	Ⅶ区-21（包含層）	6604.1	Ⅶ区-45	195.9	Ⅶ区-65	5.5
Ⅶ区-4	2217.3	Ⅶ区-22	1315.9	Ⅶ区-46	312.1	Ⅶ区-66	18.1
Ⅶ区-5	1231.1	Ⅶ区-24	21.9	Ⅶ区-47	123.7	Ⅶ区-71	19.6
Ⅶ区-6	468.1	Ⅶ区-25	31.8	Ⅶ区-49	155.7	Ⅶ区-84	21.3
Ⅶ区-7	1366.2	Ⅶ区-26	34.9	Ⅶ区-51	42.9	Ⅶ区-85	16.5
Ⅶ区-8	2152.8	Ⅶ区-29	5.5	Ⅶ区-53	19.7	Ⅶ区-93	91.6
Ⅶ区-9	1652.8	Ⅶ区-30	173.1	Ⅶ区-54	9.0	Ⅶ区-102	27.4
Ⅶ区-10	544.2	Ⅶ区-31	9.4	Ⅶ区-55	108.6	Ⅶ区-103	20.3
Ⅶ区-10（包含層）	5178.7	Ⅶ区-34	4.1	Ⅶ区-56	12.9	Ⅶ区-140	363.5
Ⅶ区-11	769.6	Ⅶ区-35	2.6	Ⅶ区-57	137.0	Ⅶ区-149	56.3
Ⅶ区-11（包含層）	3480.2	Ⅶ区-36	34.2	Ⅶ区-58	30.0	Ⅶ区-172	21.0
Ⅶ区-12	388.9	Ⅶ区-37	125.5	Ⅶ区-59	433.2		
Ⅶ区-13	453.1	Ⅶ区-38	75.2	Ⅶ区-61	67.3		
Ⅶ区-14	20.7	Ⅶ区-39	354.8	Ⅶ区-62	22.0		

第91図　調査Ⅶ区土器分布図

部に「C」字状の隆帯を貼り付けている。448～452は胴部片で地文となる縄文のみが施文され、449～452は縦位に結束羽状縄文が施文される。

453～464は中期後葉大木９式に比定される一群で、これらの多くは竪穴住居や土坑の周辺から出土している。453は大型破片で、口縁部のみの破片と口縁部から胴部の破片があるが、接合点がなく、別々に図示している。口縁部から胴部に隆帯による渦巻き文が施文され、その先端は胴部へと垂下する。隆帯間に区画文が施文される。454も同様の文様である。455は横位に隆帯による楕円形区画文が施文



Ⅷ区

出土地点（グリッド）	重量（g）
XⅢF4f	13.0
XⅢF4h	25.8
XⅢF5d	17.6
XⅢF5g	16.8
XⅢF5h	38.7
XⅢF6d	51.6
XⅢF6g	38.6
XⅢF6h	5.9
XⅢF7f	123.4
XⅢF8i	6.3
XⅢF9i	155.9
XⅢF10j	607.1
XⅢG10a	352.3
XⅣ1i	2.8
XⅣG1b	109.5
XⅣG2e	90.6

Ⅸ区

出土地点（グリッド）	重量（g）	出土地点（グリッド）	重量（g）
XⅣD9j	41.5	XⅣE10c	359.9
XⅣD10j	6.1	XⅣE10d	58.8
XⅣE2g	316.4	XⅣE10e	35.2
XⅣE2i	18.6	XⅣE10f	92.7
XⅣE3i	82.8	XⅣF10d	147.6
XⅣE4j	66.3	XⅣF4c	6.8
XⅣE5f	3.1	XⅣF5a	76.4
XⅣE5j	14.0	XⅣF5b	90.9
XⅣE6b	9.9	XⅣF6d	13.6
XⅣE6f	94.5	XⅣF6e	9.7
XⅣE6g	175.1	XⅣF7e	14.8
XⅣE7d	13.2	XⅤE1a	162.1
XⅣE7g	75.1	XⅤE1b	718.1
XⅣE8d	131.0	XⅤE1c	1315.1
XⅣE8e	3916.8	XⅤE1d	266.3
XⅣE8h	119.8	XⅤE1e	119.8
XⅣE9b	40.5	XⅤE1f	3.0
XⅣE9c	659.5	XⅤE2b	405.3
XⅣE9d	483.4	XⅤE2c	170.3
XⅣE9e	118.1	XⅤE2d	10.2
XⅣE10a	34.1	XⅤE2e	18.6
XⅣE10b	49.7		

Ⅹ区

出土地点（グリッド）	重量（g）
XⅣF2g	23.3
XⅤE8j	266.8
XⅤF8b	18.6
XⅤF8c	2.0
XⅤF9c	45.2
XⅤF9e	5.7
XⅤF10c	33.0
XⅤF10h	4.4
XⅥF4g	29.8

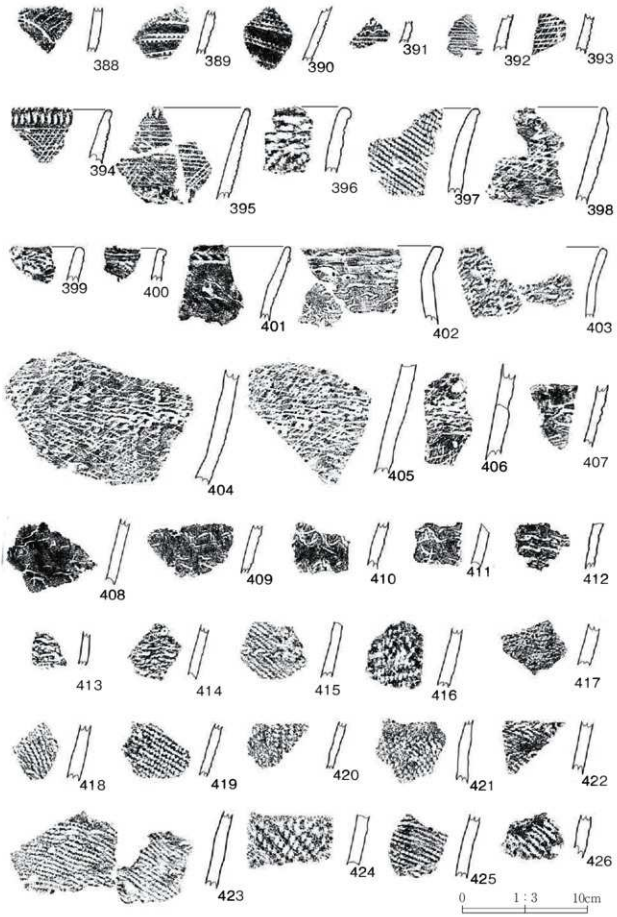
第92図　調査Ⅷ・Ⅸ・Ⅹ区土器分布図

される。456は胴部に２段の楕円形区画文が施文される。これらは区画文に隆帯を伴うので、大木９式古段階と判断した。457～464は大木９式新段階で、沈線文による楕円形区画文が施文される。464は区画内に刺突文が充填される。

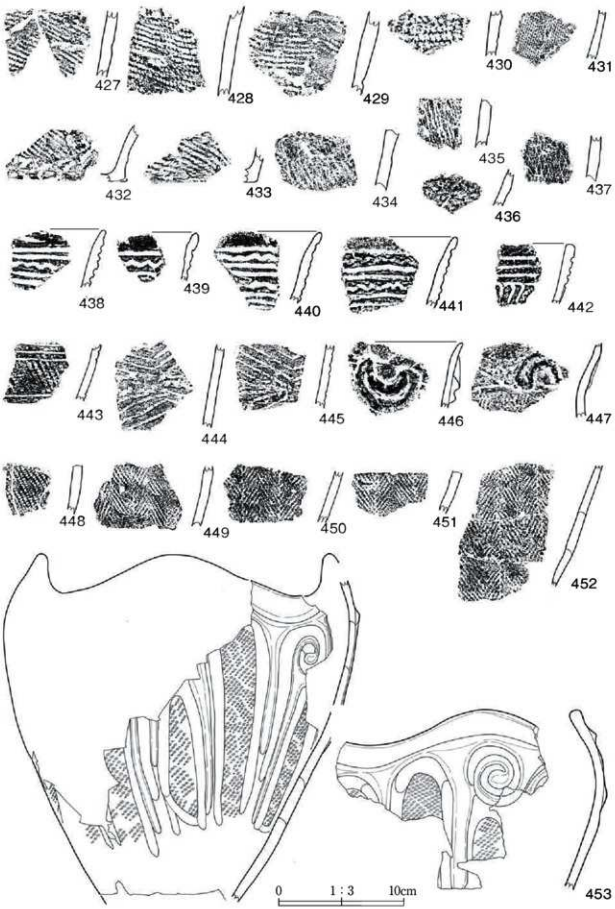
465～471は後期前葉～中葉と考える土器群で、出土量は少ない。465は口縁部に貫通孔が見受けられる。466・467は細かい沈線文で区画文が描かれる。468は口唇部に刻みが施文される。469は口縁部から胴部には２本１対の沈線で文様が描かれる。

土製品は土製円盤２点（472・473）である。どちらも厚みがなく、鉢の土器片を二次利用したと推定する。472は縄文が施文され、473は無文である。

石器は42点図示した。527～529は石鏃である。527・528は凹基無茎鏃で、どちらもやや茎部の括れが浅い。529は凸基有茎鏃で、両端を欠損する。基部にアスファルトが付着している。530・531は尖頭器である。530はやや小振りで片方の刃部と思われる先端部はややいびつである。531は約２分の１が欠損する。531と比べて大きい。残存する端部は丸く基部と考えられる。533～540は石匙である。532～538は縦型の石匙で、535は両面から、それ以外は片面から二次加工を施し、刃部を作出している。形態的な特徴については、532は摘み部の幅が他のものと比べ厚く、532・533・535は先端が尖った形態、537は先端が弧状に曲がる形態である。539は縦型に類似するが刃部が先端の平坦な縁辺に付き、摘み部に対し、やや斜めになる形態である。片面より二次加工を施す。540～542は両極石器である。540は上下２方向、541・542は上下左右４方向から打撃を加えた痕跡が見受けられる。543～545は篦状石器である。大きさは様々で、また片面のみ二次加工を施すもの（543・544）と、両面から二次加工を施すもの（545）がある。546～551は不定形石器である。546は先端の一部を欠損するが縦型剥片を素材とし、長辺の縁辺部に片面から二次加工を施し、刃部を作出する。547は三角形状の剥片で縁辺のほぼ全周に二次加工を施し、刃部を作出する。547は片方の縁辺部にのみ刃部が付く。549～551も縁辺の２分の１以上に二次加工が施されるが、546～548のものと比べ、二次加工が粗い。552・553は異形石器である。552は石鏃（平基無茎鏃）の先端部に、石匙に見られる摘み部が合成されたような形態である。二次加工の施し方からみても石鏃の未成品とは考えられないので異形石器とした。553は一部欠損しており、全体の形態が定かではないが、先端が鋭利な二叉状の形態で、縁辺部の全周にわたり両面から二次加工が施されている。554～556はフレイク類である。554はＲフレイクで2c類に相当するフレイクの縁辺に不連続な剥離と微細剥離が見受けられる。555はＵレイクで4d類に相当するフレイクの縁辺に微細剥離が見受けられる。556は4d類に相当するフレイクで縁辺に二次加工が施されるが、フレイク自体の大きさと二次加工の不規則さから考えても刃部の作出とは考えにくいのでＲフレイクとした。557・558は石核である。557は自然面が残るまだあまり剥離作業の進んでいないものとも考えられる。558は細長い形態で、長辺方向に直交する方向から剥離作業を行った痕跡が多く見受けられる。559･560は遺物取り上げ用グリッドの「調査Ⅶ区－37」から出土したフレイクである。同グリッドからは他にもフレイク類が集中的に出土している。デポの可能性もあるが、出土したフレイク類は559・560のように厚みが残り、また剥離作業も進んでない状態のものが多く、用途は不明なため、デポと断定して良いか定かではない。561は磨製石斧で基部のみである。562は偏平な楕円形の礫に縁辺の一部に打ち欠きが見受けられたので石錘とした。563は、打製石斧や石鍬に類似するがまだ両面に自然面が残り、縁辺部の二次加工も中途半端にみえるので、未成品の可能性があり、礫器とした。長軸縁辺の一部を欠損する。564～566は敲磨器類である。564はやや厚みのある円形の礫を素材とし、両面の広い範囲に磨った痕跡が見受けられる。565は偏平な楕円形の礫を素材とし、両面のほぼ中央に２ヵ所ずつ凹痕が見受けられる。566は厚みのある円形の礫を素材とし、両面の広い範囲

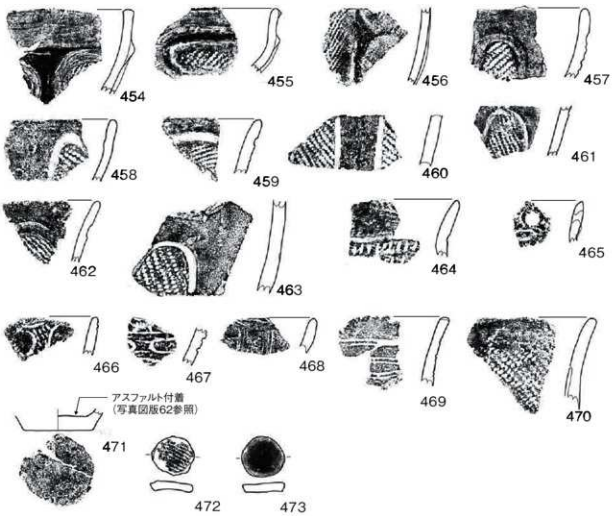


第93図　調査Ⅶ区遺構外出土土器（1）

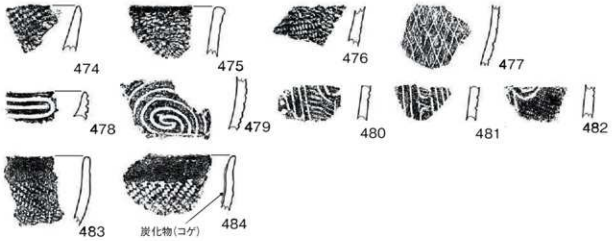


第94図　調査Ⅶ区遺構外出土土器（2）

調査Ⅶ区

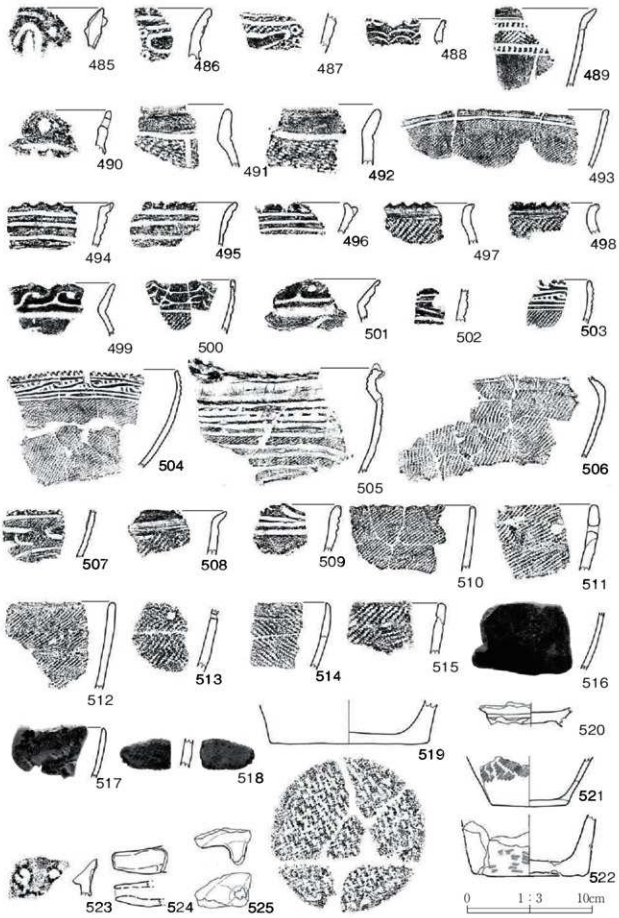


調査Ⅷ区



0　1:3　10cm

第95図　調査Ⅶ区遺構外出土土器



第96図　調査Ⅸ区遺構外出土土器

に磨った痕跡が見受けられる。567は石皿である。偏平でやや不整な楕円形の礫を素材とし、両面の広い範囲を磨り面として利用している。568は小片なので、断定はできないが、断面形態からみて石棒の体部片と考える。断面形は円形で、器面には整形した痕跡が見受けられた。

調査Ⅷ区（第92・95・102図、写真図版61・62・71、第７表）

調査区北端と東端の遺構が分布する範囲を中心に縄文土器1663.2g、石器12点が遺構外から出土している。第92図にはグリッド毎の土器出土量について、重量を基に色分けして示している。他の調査区と比べても出土量自体少なく、グリッド別にみても50g以下で、点数に換算して１～数点の土器片が出土したに過ぎない場所が多い。そのなかにおいてⅩⅢF7fグリッドやⅩⅢF10jグリッド周辺など、70号土坑のような大型の遺構が位置する場所や遺構が密集する場所では比較的出土量が多い傾向がみてとれ、遺構との関連性が強いことが推測される。縄文土器は11点図示した。いずれも小片で形態が復元できたものはない。474～476は前期前葉に比定される土器で、縄文のみが施文され、胎土に繊維が混入する。477は胴部片で単軸絡条体５類が縦位に施文される。前期末～中期初頭と推定するが定かではない。478～482は後期前葉に比定される。478は鉢の口縁部片で沈線による楕円形区画文が横位に描かれる。479は胴部片で沈線による渦巻き文が施文される。480～482は胴部片で縄文を地文とし、その上に縦位の沈線文が施文される。483・484は粗製の深鉢で、後晩期に比定される。どちらも口縁部は無文、胴部に縄文のみ施文される。484は内面に炭化物が付着していた。

石器は２点図示した。569・570は石鏃である。569は平基有茎鏃で基部にわずかだが、アスファルトが付着する。570は棒状の石鏃で先端を欠損する。

調査Ⅸ区（第92・96・103・104図、写真図版62・71、第７表）

縄文土器13585.1g、石器48点が遺構外から出土している。グリッド毎の縄文土器出土量については第92図に示した。出土量全体については比較的多いが、遺構が密集する調査区西側では遺物が出土しないグリッドが多く、遺物が出土していても100g以下と少ない。これはこの範囲が遺構検出面直上まで後世の削平を受けており、遺物を包含する層が消失していたためと考える。一方、調査区は北側へと緩やかに傾斜しており、そのために北になるにつれ、後世の削平を受けず、遺物の残りも良好で出土量が多い傾向が見受けられる。Ⅲ～Ⅳ層で遺物が出土している。ただし、捨て場を形成するほどの出土量ではなく、また出土している土器も小片が多い。

縄文土器は41点図示した。いずれも小片で形態が復元できた土器はない。485～492は縄文時代後期初頭～前葉に比定される一群である。486・487は帯縄文に円形刺突文が加えられる。後期前葉に比定される。488は深鉢で二重の弧状沈線が横位に巡る。489は刻目帯が２条横位に巡り、その間には縦位の羽状縄文が充填される。490～492は口縁部は無文で、頸部から胴部にかけて沈線が施文される。胴部は縄文のみ施文される。490は貫通孔が施される。494～496は晩期の深鉢で波状口縁に横位の沈線が数条巡る。497・498も晩期の深鉢で、口縁部が無文、胴部は縄文のみが施文される。499～502は鉢で口縁部に入組三叉文が描かれており、大洞Ｂ式の文様特徴をもつ。503・504は鉢で口端部に１刻みが巡り、口縁部には羊歯状文が施文される。505は口端部にＢ突起が付き、胴部には羊歯状文と帯縄文が施文される。503～505は大洞BC式に比定される。507は鉢の胴部片で、縄文を地文とし、沈線文が描かれる。大洞BC式にみられる文様特徴と考える。510～517は粗製の深鉢で口縁部から胴部へと縄文のみが施文される。510は波状口縁を呈する。511・513は補修孔が１か所ずつ見受けられる。518～520は朱塗りされた土器片で器種は定かではない。516・517は外面に、518は内外面に塗られている。

519～522は底部片で、524は深鉢、525・526は鉢である。524は注口土器の注口部で整形の痕跡が残るが、無文である。525はミニチュア土器で鉢か浅鉢を模したと思われる。胴部と脚１か所のみが確認できた破片である。手づくねで整形されている。

石器は15点図示した。571～573は石匙である。571・572は縦型、573は横型である。いずれも刃部は片面のみに作出している。574は篦状石器で他のものと比べて大型で、長辺方向の剥離が粗く、形態がやや不整形である。575はUフレイクで2b類に相当するフレイクの縁辺に微細剥離が見受けられる。576はRフレイクで1c類に相当するフレイクに不連続な二次加工が施される。577・578は敲磨器類である。577は楕円形の礫を素材とし、先端部に敲打した痕跡が見受けられる。578はやや厚みのある卵形の礫を素材とし、縁辺の半分以上で敲打した痕跡が見受けられる。579は砥石で、ほとんど欠損しており全容が定かではない。自然面の残る平坦な面に４条の研溝が同一方向に伸びている。580・581は台石である。580は厚みのある大型の礫を素材とし、頂部を中心に凹痕や敲打した痕跡が見受けられる。581はやや不整な立法形の礫を素材とし、片面の中央に大きな凹痕が１ヵ所見受けられる。582は用途不明の石製品で「C」状の礫を材料とし、括れ部に浅く打ち欠いた痕跡が見受けられる。

調査X区（第92・103・104図、写真図版71・72、第７表）

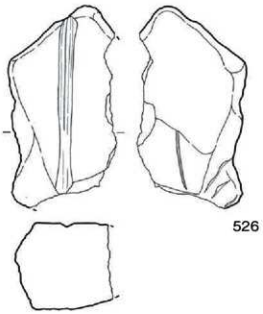
縄文土器428.0g、石器17点が出土している。他の調査区と比べても極端に出土量が少ない。グリッド毎の縄文土器出土量については第92図に分布を示したが、どのグリッドも概ね50g以下、点数に換算して１～数点の土器片が出土する程度であり、出土地点も散在気味である。この調査区はⅠ層土下がⅦ層（砂礫層）に達しており、遺物が包含層する層が認められない。そのため、遺構が分布する割に遺物の出土量が希薄なのではないかと考える。ただ１号性格不明遺構の西側X VE8Jグリッドだけは多量の土器が出土している。ただし地形からみても調査Ⅸ区の土器が多量に流れ込んだものの可能性が高い。

土器については小片ばかりで図示できるものがなかった。石器は２点（574・578）図示した。574は不定形石器で他のものと比べてやや大型である。長軸方向に施された二次加工がやや粗い。578は敲磨器類で、やや厚みのある卵形の礫を素材とし、縁辺の半分以上で敲打した痕跡が見受けられる。

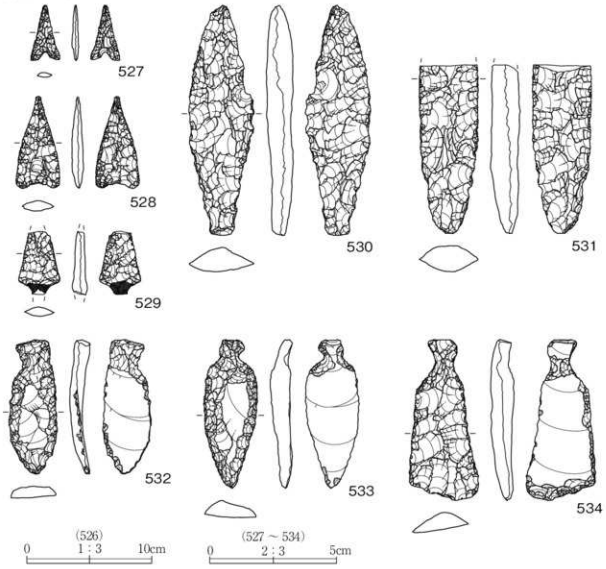
近代～現代遺物について（写真図版72、第８・９表）

調査Ⅸ区とその周辺のトレンチから近代以降の石臼１点と現代の瓶類が出土している。同地区は近代以降、周辺山間部からの木材の切り出し場に利用され、またはレジャー施設が建設されていた。したがって上記の近代以降の遺物はその頃に廃棄された遺物群と考える。遺跡そのものの性格を考える上では、関連性のない遺物であるが、遺跡がたどったその後の姿を考える上で、写真・表のみ掲載することとした。583～592はガラス瓶類である。ジュース瓶や五合瓶、牛乳瓶などである。593は磁器で五合瓶。「鹿松庵」の文字が見える。調査区内に建っていた施設の名称が記されたものと推測する。594は石臼で上臼に相当するものと思われる。挽き手の差し込み穴が見受けられる。非常に重い。詳しい時期は不明であり、近世以降と推測する。

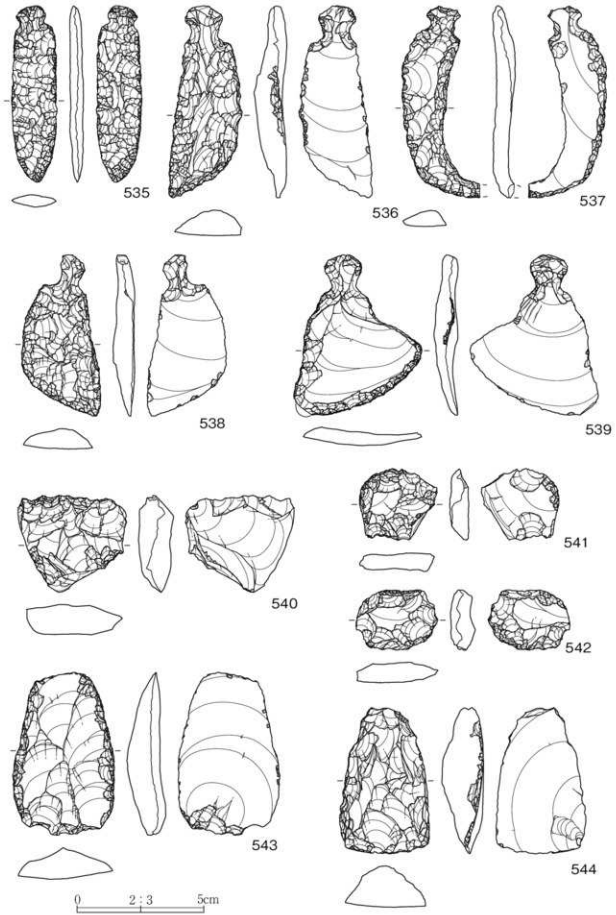
調査Ⅰ区



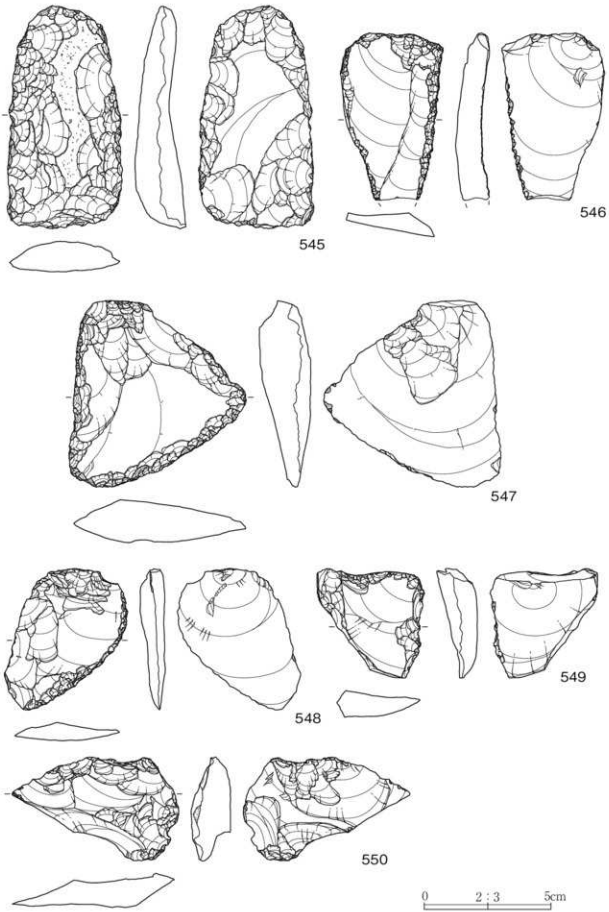
調査Ⅵ・Ⅶ区



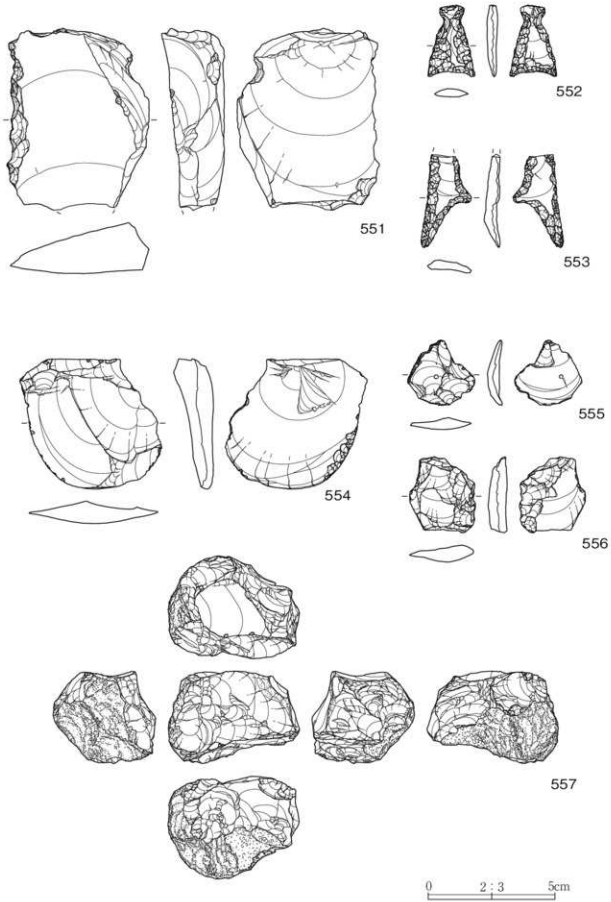
第97図　調査Ⅰ・Ⅶ区遺構外出土石器（1）



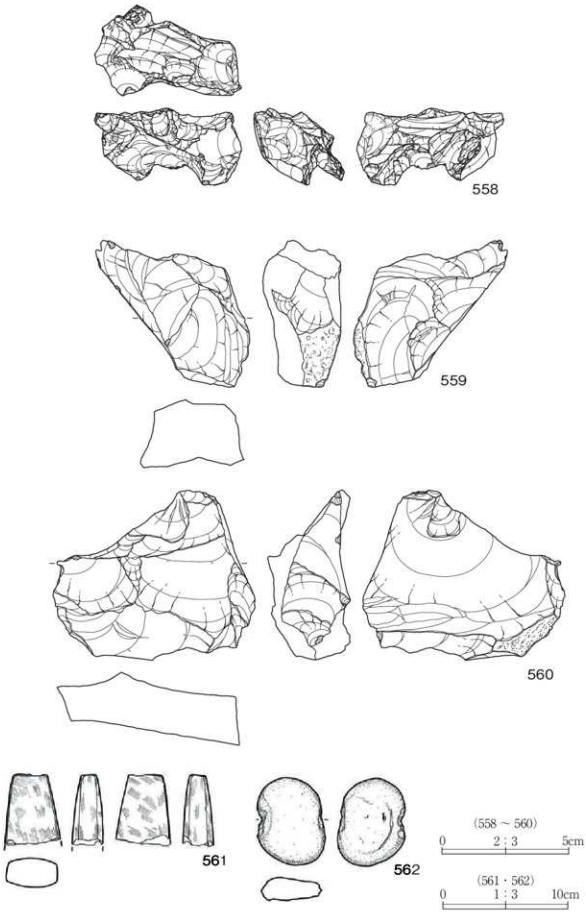
第98図　調査Ⅶ区遺構外出土石器（2）



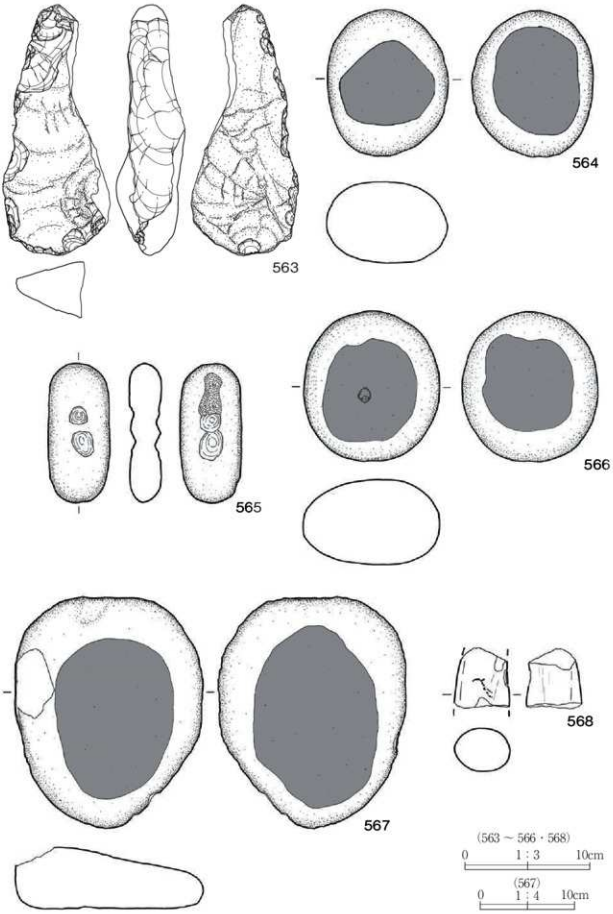
第99図　調査Ⅶ区遺構外出土石器（3）



第100図　調査Ⅶ区遺構外出土石器（4）

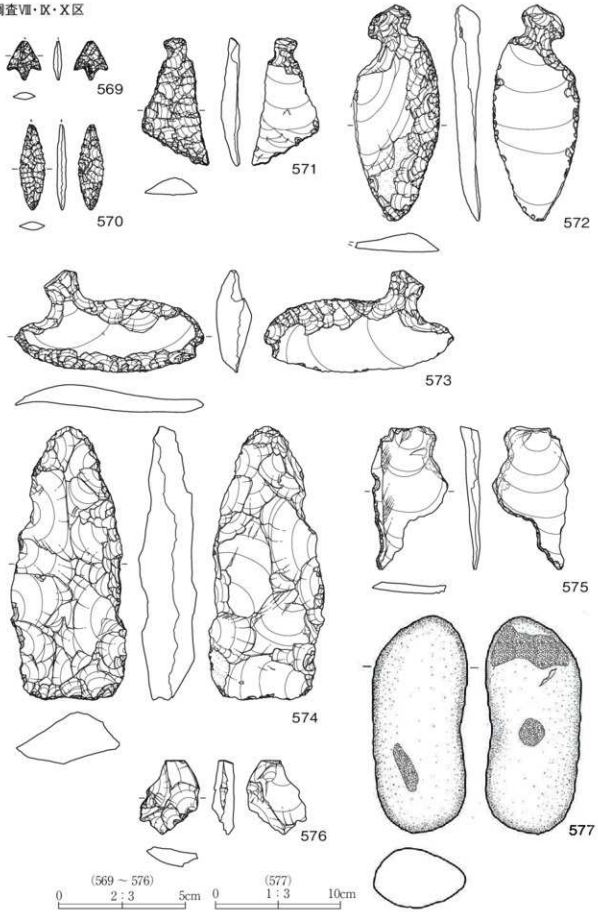


第101図　調査Ⅶ区遺構外出土石器（5）

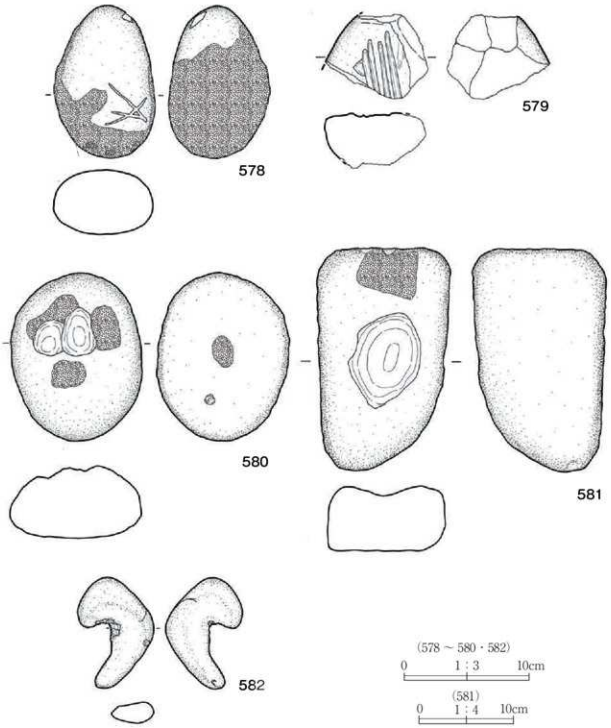


第102図　調査Ⅶ区遺構外出土石器（6）

調査Ⅶ・Ⅸ・Ⅹ区



第103図　調査Ⅶ・Ⅸ・Ⅹ区遺構外出土石器（1）



第104図　調査Ⅶ・Ⅸ・Ⅹ区遺構外出土石器（2）

第７表　遺物観察表（縄文土器）（１）

掲載番号	写真図版	図版	出土地点・層位	器種	型式（時期）	残存部位	外面文様	内面調整	外面色調 内面色調	焼成	スス・コゲ	備考
1	49	13	1号住居 覆土中	深鉢	大末10（古）	胴下半～底	胴：縄文（LR）→沈線によるＳ字状の区画文	ナデ（斜）	明黄褐 浅黄橙	良好		
2	49	13	1号住居 覆土 燃焼跡内	深鉢	大末10（古）	口縁部片	口：隆帯による区画文	ナデ（縦）	にぶい黄橙 にぶい黄橙	不良		
3	49	13	1号住居 覆土下位	深鉢	大末9～10	口縁部片	口：隆帯による楕円形区画文 胴：縄文（RLR）→沈線による区画文	ナデ（横）	にぶい黄橙 にぶい黄橙	不良	外面	
4	49	13	1号住居 床直	深鉢	大末10（古）	胴部片	胴：隆帯による区画文→縄文（LR）	ナデ（斜）	明黄褐 橙	良好		
5	49	13	1号住居 覆土下位	深鉢	大末10（古）	胴部片	胴：隆帯による区画文→縄文（RL）	ナデ（斜）	にぶい黄橙 橙	不良		
6	49	13	1号住居 覆土中	深鉢	大末10（古）	胴部片	胴：縄文（RL）→沈線による区画文	ナデ（斜）	黄褐 にぶい黄橙	不良		
7	49	13	1号住居 床直	深鉢	大末10（古）	胴部片	胴：縄文（LR）→沈線による区画文	ナデ（横）	灰黄褐 にぶい黄褐	不良		
8	49	13	1号住居 柱穴2覆土中	深鉢	大末9～10	胴部片	胴：縄文（RLR）→沈線による区画文	ナデ（縦）	褐灰 にぶい黄褐	不良		
9	49	13	1号住居 覆土中	深鉢	大末9（新）	胴部片	胴：縄文（LR）→沈線による区画文	ナデ（横）	褐灰 にぶい褐	やや不良		
10	49	13	1号住居 覆土下位	深鉢	大末9（新）	胴部片	胴：縄文（LR）→沈線による区画文	ナデ（縦）	灰黄褐 にぶい黄褐	不良		
11	49	13	1号住居 覆土中	深鉢	中期後～末葉	口縁部片	口：無文　胴：縄文（RL）	ナデ（横）	にぶい黄橙 浅黄	やや不良		
12	49	13	1号住居 床直	深鉢	中期後～末葉	胴部片	胴：縄文（RL）	ナデ（斜）	にぶい黄橙 にぶい黄橙	やや不良		
13	49	13	1号住居 覆土上位	土製円盤	中期後～末葉	ほぼ完形	無文	ナデ（不明）	橙明 黄褐	不良		
23	49	18	2号住居 覆設土器	深鉢	大末9（新）	胴部	縄文（LR）・刺突→沈線による区画文	ナデ（横）	にぶい黄橙 明黄褐	良好		※の使用時による二次焼成を受けている
24	49	18	2号住居 覆設土器	深鉢	大末9（新）	胴部下半	縄文（LR）→沈線	ナデ（斜）	明黄褐 にぶい黄橙	良好		※の使用時による二次焼成を受けている
25	49	18	2号住居 覆設土器	深鉢	中期後～末葉	胴部下半～底面	縄文（RL）	ナデ（斜）	にぶい黄橙 明黄褐	良好		
26	49	18	2号住居 覆土下位	深鉢	中期後～末葉	ほぼ完形	縄文（LR多条）	ナデ（斜）	にぶい黄橙 明黄褐	不良	外面	
27	50	18	2号住居 柱穴3底面	深鉢	大末9（新）	口縁部片	口：貫通孔　胴：縄文（RLR）→沈線・隆帯により楕円形区画文（潰消）	ナデ（横）	褐灰 にぶい黄	やや不良	内外面	
28	50	18	2号住居 覆土下位	深鉢	中期後～末葉	口縁部片	口：補修孔　胴：縄文（LR）	ナデ（不明）	浅黄 黒	不良	内面	アスファルト付着28と同一個体
29	50	18	2号住居 覆土上位	深鉢	中期後～末葉	口縁部片	縄文（LR）	ナデ（不明）	浅黄 黒	不良	内面	アスファルト付着29と同一個体
40	50	24	3号住居 覆設土器	深鉢	大末10（古）	口縁部片	口：無文 胴：縄文（LR）→沈線	ナデ（横）	にぶい黄橙 にぶい黄橙	不良	内外面	
41	50	24	3号住居 床面上	深鉢	大末9（新）	胴部片	口～胴：縄文（RLR）→沈線・隆帯により楕円形区画文（潰消）	ナデ（横）	にぶい黄橙 にぶい黄橙	やや良好	外面	輪積み痕上に穿孔あり
42	50	24	3号住居 床面上	深鉢	大末9（新）	口縁～胴1/4	口～胴：縄文（RLR）→沈線により「C」字状区画文（潰消）	ナデ（横）	にぶい黄橙 にぶい黄橙	やや良好		
43	50	24	3号住居 覆土下位	深鉢	大末10（古）	口縁部片	口～胴：縄文（LR）→沈線により区画文（潰消）	ナデ（横）	にぶい黄褐 灰黄褐	不良	外面	
44	50	24	3号住居 覆土下位	深鉢	大末10（古）	口縁部片	口～胴：縄文（多縄１）→沈線により区画文（潰消）	ミガキ（横）	橙 浅黄	良好		
45	50	24	3号住居 覆土中	深鉢	大末9～10	口縁部片	口：縄文（LR）→隆帯・沈線により区画（潰消）	ナデ（横）	橙 にぶい黄橙	不良	外面	
46	50	24	3号住居 覆土上位	深鉢	大末10（新）	胴部片	円形刺突文、沈線	ナデ（不明）	橙 にぶい黄橙	良好		
47	50	24	3号住居 覆土上位	深鉢	中期後～末葉	口縁部片	口：無文	ナデ（横）	灰黄褐 にぶい黄橙	やや良好	外面	
48	50	24	3号住居 覆土上位	深鉢	大末9（新）	胴部片	胴：縄文（LR）→沈線により楕円形区画文（潰消）	ナデ（横）	にぶい黄橙 橙	やや不良	外面	
49	50	24	3号住居 覆土下位	深鉢	中期後～末葉	口縁部片	口：縄文（無節ｒ）	ナデ（横）	黒褐 にぶい黄橙	良好		
50	50	24	3号住居 覆土下位	深鉢	中期後～末葉	口縁部片	口：無文　胴：撚糸（L）	ナデ（横）	橙 明黄褐	良好	内外面	
51	50	24	3号住居 覆土下位	深鉢	中期後～末葉	口縁部片	口：無文　胴：縄文（RL）	ナデ（横）	灰黄褐 褐灰	やや良好	外面	
52	50	24	3号住居 覆土上位	深鉢	中期後～末葉	口縁部片	口：無文　胴：撚糸（L）	ナデ（斜）	灰黄褐 にぶい褐	良好	外面	
53	50	25	3号住居 覆土中	深鉢	中期後～末葉	口縁部片	口：ケズリ整形　胴：縄文（多縄L）	ミガキ（横）	にぶい黄橙 灰黄褐	やや不良	外面	
54	50	25	3号住居 覆土上位	深鉢	中期後～末葉	口縁部片	無文	ナデ（横）	にぶい黄橙 浅黄橙	不良		
55	50	25	3号住居 覆土中	深鉢	中期後～末葉	底部片	ケズリ整形の痕跡	ナデ（横）	明赤にぶい黄橙	不良		
56	51	25	3号住居 覆土中	台付鉢	中期後～末葉	台部	台：縄文（LR）	ナデ（斜）	明黄褐 明黄褐	良好		
57	51	25	3号住居 覆土上位	ミニチュア	中期後～末葉	口縁部欠損	口～底：無文（指頭による整形）	ナデ（縦）	にぶい黄橙 にぶい黄橙	不良		
58	50	25	3号住居 覆土中	土製円盤	中期後～末葉	完形	無文	ナデ（不明）	にぶい黄橙 灰黄褐	やや不良		深鉢の土器片を転用

第7表　遺物観察表（縄文土器）（2）

掲載番号	写真図版	図版順番	出土地点・層位	器種	型式（時期）	残存部位	外面文様	内面調整	外面色調 内面色調	焼成	スス・コゲ	備考
66	51	29	4号住居祖1 縄盛土層	深鉢	大末10（古）	底部のみ欠損	口：無文　胴：沈線　胴：縄文（RL）→沈線による磨消・（C）字状などの区画文	ナデ（横）	橙 明黄褐色	良好 （二次焼）	内面 黒煤あり	底面網代痕
67	51	29	4号住居柱穴 縄上中	深鉢	中期後～末葉	胴下半～底	胴：縄文（LR）	ナデ（横）	にぶい黄褐 明黄褐	良好	内面	底面網代痕
68	51	29	4号住居 縄盛土層	深鉢	中期後～末葉	口縁・底部	口：無文　胴：縄文（RL）	ナデ（横）	にぶい黄褐 明黄褐	良好		
69	51	29	4号住居祖1 縄上下位	深鉢	大末9（新）	胴上半～底面	縄文（LR）→沈線による格円形区画文	ナデ（横）	にぶい橙 黄褐	やや良好		
70	52	29	4号住居祖1 熟成部西	深鉢	大末9（新）	胴部片	縄文（LR）→沈線による区画文（磨消）	ナデ（横）	暗灰黄 にぶい黄褐	不良	外面	
71	52	29	4号住居 縄上中	深鉢	大末9（新）	口縁部片	口：無文　胴：縄文（LR）→沈線による格円形区画文（磨消）	ナデ（横）	にぶい黄褐 浅黄橙	良好	外面	
72	52	29	4号住居 縄上下位	深鉢	大末9（新）	口縁部片	口：円形孕孔　胴：縄文（RLR）→沈線により格円形区画文（磨消）	ナデ（横）	明褐 浅黄橙	良好		
73	52	29	4号住居 縄上下位	深鉢	大末9（新）	口縁部片	縄文（LR）→沈線により区画文（磨消）	ナデ（横）	橙 明黄褐色	良好		
74	52	29	4号住居 縄上下位	深鉢	大末9～10	胴部片	縄文（LR）→沈線により格円形区画文（磨消）	ナデ（縦）	にぶい黄橙 にぶい黄橙	不良		
75	52	30	4号住居 縄上上位	深鉢	大末9（新）	口縁部・胴部欠損	口：沈線　胴：縄文（LR）→沈線による格円形区画文	ナデ（横）	にぶい黄橙 にぶい黄橙	不良	外面	
76	52	30	4号住居 縄上火葬	深鉢	大末9（古）	口～胴下半1/2	口：沈線→刺突　胴：刺突→沈線による区画文	ナデ（斜）	浅黄橙 明黄褐	良好		
77	52	31	4号住居 縄上下位	深鉢	前期前葉	口縁部片	口：縄文押圧（LR）胴：縄文（LR）	ナデ（斜）	にぶい黄橙 褐灰	不良	内面	繊維混入
78	52	31	4号住居 縄上下位	深鉢	大末9（新）	胴部片	縄文(RL)→沈線による格円形文（磨消）	ナデ（斜）	にぶい黄橙 明黄褐	やや不良	外面	
79	52	31	4号住居 縄上中	深鉢	中期後～末葉	胴下～底	胴：無文	ケズリ（斜）	にぶい黄橙 にぶい黄橙	不良	外面	
80	52	31	4号住居 縄上下位	深鉢	大末9（新）	胴部片	胴：縄文（LR）→沈線	ナデ（斜）	橙 にぶい黄橙	不良		
81	52	31	4号住居 縄上中	深鉢	中期後～末葉	胴部片	胴：無文・縄文（LR）	ナデ（横）	淡黄 にぶい黄橙	やや不良		
82	52	31	4号住居 縄上下位	深鉢	中期後～末葉	胴～底部	縄文（LR）	ナデ（横）	にぶい黄橙 にぶい黄橙	不良		
92	52	35	5号住居祖1 熟成調北中	深鉢	大末9（新）	口～胴部片	口～胴：縄文（LRL）→沈線による区画文	ナデ（斜）	にぶい褐橙 にぶい黄橙	不良	外面	
93	52	35	5号住居祖1 縄上中	深鉢	大末9～10	口縁部片	口：沈線による区画文	ナデ（横）	にぶい黄橙 にぶい黄橙	不良	外面	
94	53	35	5号住居祖1 縄上中	深鉢	大末9（新）	口縁部片	口：縄文（RL）→沈線による区画文	ナデ（横）	にぶい黄橙 浅黄	不良	外面	
95	53	35	5号住居祖1 縄上中	深鉢	大末9（新）	口縁部片	口～胴：縄文（RL）→沈線による区画文	ナデ（横）	にぶい橙 にぶい黄褐	不良	外面	
96	53	35	5号住居 縄上上位	深鉢	大末9（新）	口縁部片	口～胴：縄文（RL）→沈線による区画文	ナデ（横）	にぶい黄橙 灰黄褐	不良	内面	
97	53	35	5号住居 床直	深鉢	大末9（新）	胴部片	胴：縄文（LR）→沈線による区画文	ナデ（横）	褐灰 橙	不良		
98	53	35	5号住居 縄上下位	深鉢	大末9（新）	胴部片	胴：縄文（LR）→沈線による区画文	ナデ（横）	にぶい黄橙 にぶい橙	不良		
99	53	35	5号住居 縄上中	深鉢	大末10（古）	胴部片	胴：縄文（LR）→沈線による区画文	ナデ（横）	にぶい黄橙 にぶい黄橙	不良	内外面	
100	53	35	5号住居 縄上上位	深鉢	大末10（古）	胴部片	胴：縄文（LR）→沈線による区画文	ナデ（斜）	にぶい黄橙 橙	不良	内面	
101	53	35	5号住居 縄上下位	深鉢	中期後～末葉	口縁部片	口～胴：縄文（RL）	ナデ（横）	灰黄褐にぶい黄褐	不良	外面	
105	53	38	6号住居 炉上位～下位	深鉢	縄文（後晩期）	口縁部～胴1/3	縄文（LR）	ナデ（横）	にぶい黄橙 にぶい褐色	やや良好	外面	
108	53	40	7号住居祖 縄上中	鉢（浅鉢）	十腰内Ⅰ～Ⅱ	胴部片	胴：縄文（LR）→沈線による雲形文	ナデ（斜）	浅黄橙 灰黄褐	不良		
110	53	42	1号住居状 遺構縄上上位	深鉢	縄文（晩期）	口縁部片	口：縄文（LR）	ナデ（横）	黒褐 黒褐	やや不良	外面	
111	53	42	1号住居状 遺構縄上中	深鉢	縄文（晩期）	口縁部片	口：縄文（RL）	ナデ（横）	にぶい黄橙 にぶい黄橙	良好		
112	53	42	1号住居状 遺構縄上中	深鉢	大洞BC	口縁部片	口：隆帯（沈線）・沈線	不明	にぶい黄橙 にぶい黄橙	不良		
113	53	42	1号住居状 遺構縄上中	鉢（浅鉢）	大洞BC	口縁部片	羽：押圧による波状口縁　口：沈線	胴：ナデ（横）	明赤褐 黒褐	不良		
114	53	42	1号住居状 遺構縄上上位	深鉢	大洞BC	胴部片	胴：B突起・沈線	ナデ（横）	褐灰 灰黄褐	やや不良		
115	53	42	1号住居状 遺構縄上上位	鉢	大洞BC	胴部片	胴：沈線・刺突・縄文（RL）	ナデ（横）	灰黄褐 暗褐	不良		
116	53	42	1号住居状 遺構縄上上位	鉢	大洞C1	胴部片	胴：縄文（LR）・沈線・沈線	ナデ（横）	にぶい黄橙 黒褐	やや不良		
117	53	42	1号住居状 遺構縄上上位	鉢	大洞BC	底部片	底：沈線	ナデ（横）	褐灰 にぶい黄褐	不良		
119	53	52	26号土坑 縄上上位	深鉢	大末9（新）	口縁部片	口：縄文（RL）→沈線による格円形区画文	ナデ（横）	にぶい黄橙 浅黄橙	不良		
120	53	52	26号土坑 縄上上位	深鉢	大末9（新）	口縁部片	口：無文	ナデ（横）	にぶい橙 にぶい橙	不良		

第７表　遺物観察表（縄文土器）（３）

掲載番号	写真図版	図版順番	出土地点・層位	器種	型式（時期）	残存部位	外面文様	内面調整	外面色調 内面色調	焼成	スス・コゲ	備考
121	53	52	26号土坑 縄上十位	深鉢	大木10（古）	底部片	胴：縄文（LR）→沈線による区画文	ナデ（斜）	にぶい褐 にぶい褐	不良		
122	53	52	26号土坑 縄上上位	深鉢	中期後～末葉	胴下～底	胴：無文	ﾐｶﾞｷ ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙 浅黄	不良		
123	53	52	27号土坑 縄上下位	深鉢	大木9（新）	胴部片	胴：縄文（RL）→沈線による区画文	ナデ（横）	灰黄褐 灰黄褐	不良	外面	
124	53	52	27号土坑 縄上下位	鉢	大木9（新）	口縁部片	口：無文 要：隆帯 胴：縄文（LR）→隆帯による区画・刺突	ナデ（横）	明黄褐 褐灰	やや不良	外面	
125	53	52	27号土坑 縄上下位	深鉢	大木9（新）	口縁部片	口：縄文（RL？）→沈線による区画文	ナデ（横）	明黄褐 にぶい黄橙	不良	外面	
126	53	52	27号土坑 縄上下位	深鉢	大木9～10	胴部片	胴：縄文（RL）→沈線による区画文	ナデ（横）	橙 橙	不良		
127	53	52	27号土坑 覆面	深鉢	中期後～末葉	口縁部片	口～胴：撚糸（単軸絡条体第１類１）	ナデ（横）	にぶい黄橙 明黄褐	良好	外面	
128	53	52	27号土坑 縄上上位・下位	深鉢	中期後～末葉	胴下半～底面	胴：縄文（RL）	ナデ（横）	にぶい橙 にぶい褐	良好	外内面	
129	54	52	35号土坑 縄上中	深鉢	物見台	胴部片	胴：沈線・貝殻腹縁文	ナデ（不明）	明黄褐 明黄褐	やや良好		
130	54	52	35号土坑 縄上中	深鉢	縄文（前期）	口縁部片	縄文（０段多条？）	ナデ（横）	橙 明黄褐	不良		
131	54	52	35号土坑 縄上中	深鉢	物見台	胴部片	胴：刺突・沈線・貝殻腹縁文	ナデ（不明）	明黄褐明黄褐	やや不良		
132	54	52	35号土坑 縄上中	深鉢	大木2	胴部片	胴：沈線・刺突	ナデ（不明）	明黄褐 明黄褐	やや良好		
133	54	52	35号土坑 縄上中	深鉢	物見台	胴部片	胴：縄文（LR）	ナデ（不明）	にぶい黄橙 明黄褐	不良		
134	54	52	35号土坑 縄上上位	深鉢	蛇王洞Ⅱ	胴部片	胴：格子状沈線・爪形刺み	ナデ（不明）	にぶい黄橙 にぶい黄褐	不良		繊維微量に混入
135	54	52	37号土坑 縄上下位	深鉢	大洞C1？	口縁部片	胴：雲形文？	ナデ（不明）	暗褐 暗褐	不良	内外面	
136	54	52	44号土坑 縄上下位	深鉢	蛇王洞Ⅱ	口縁部片	唇：刺み　口：爪形刺み　胴：格子状沈線	ナデ（横）	黄橙 灰黄褐	不良		
137	54	52	45号土坑 縄上中	深鉢	大木2a	胴部片	胴：附加条縄文（Lr）	ナデ（横）	にぶい黄橙 灰黄褐	不良		繊維混入
138	54	52	49号土坑 縄上上位	深鉢	大木2b	口縁部片	口：隆帯（刺み）・縄文？	ナデ（横）	黒褐 灰黄褐	不良		補修孔あり
139	54	52	41号土坑 縄上中	深鉢	蛇王洞Ⅱ	口縁部片	唇：刺み　口：爪形刺み　胴：格子状沈線	ナデ（横）	にぶい黄橙 褐灰	不良		
140	54	52	41号土坑 縄上中	深鉢	蛇王洞Ⅱ	胴部片	胴：爪形刺み・格子状沈線	ナデ（斜）	灰黄褐 にぶい黄橙	不良		
141	54	52	41号土坑 縄上上位	深鉢	蛇王洞Ⅱ	胴部片	胴：爪形刺み・格子状沈線	ナデ（横）	にぶい黄橙 にぶい黄褐	不良		142と同一個体
142	54	52	41号土坑 縄上上位	深鉢	蛇王洞Ⅱ	胴部片	胴：格子状沈線	ナデ（横）	にぶい黄橙 にぶい黄褐	不良		141と同一個体
143	54	52	41号土坑 縄上上位	深鉢	蛇王洞Ⅱ？	胴部片	胴：縄文（LR）	ナデ（横）	明黄褐 にぶい黄褐	不良		
144	54	53	54号土坑 縄上中	深鉢	大木7b	口縁部片	口：沈線による区画文・刺突　胴：縄文（LR）・沈線	ナデ（横）	にぶい黄橙 灰黄褐	不良		
145	54	53	54号土坑 縄上中	深鉢	大木7b	胴部片	胴：縄文（LR）→沈線	ナデ（横）	にぶい橙 灰	不良		
146	54	53	54号土坑 縄上中	深鉢	大木7b	胴部片	胴：縄文（RL）→沈線	ナデ（横）	橙 にぶい黄褐	不良		
147	54	53	54号土坑 縄上中	深鉢	大木7b	胴部片	胴：縄文（RL）→沈線	ナデ（横）	にぶい黄橙 灰黄褐	やや不良		
148	54	53	54号土坑 縄上中	深鉢	中期	口縁部片	口：無文　胴：羽状縄文（赤結束RL・RL）	ナデ（横）	にぶい褐灰 黄褐	不良		
149	54	53	54号土坑 縄上中	深鉢	中期	胴部片	胴：縄文（LR）	ナデ（横）	浅黄橙 にぶい橙	不良		
150	54	53	54号土坑 縄上中	深鉢	中期	胴部片	胴：縄文（LR）	ナデ（横）	浅黄橙 にぶい橙	不良		
151	54	53	55号土坑 縄上中	深鉢	前期？	胴部片	胴：条縄	ナデ（斜）	明黄褐 にぶい黄橙	やや不良		
152	54	53	55号土坑 縄上中	深鉢	前期？	胴部片	胴：条縄	ナデ（斜）	明黄褐 にぶい黄橙	やや不良		
153	54	53	55号土坑 縄上中	深鉢	前期？	胴部片	胴：条縄	ナデ（斜）	明黄褐 にぶい黄橙	やや不良		
154	54	53	55号土坑 縄上中	深鉢	前期？	胴部片	胴：条縄	ナデ（横）	灰黄褐 浅黄橙	不良		
169	54	69	60号土坑 縄上中	深鉢	後晩期	胴部片	胴：縄文（LR）	ナデ（斜）	にぶい黄橙 黄灰	やや不良		
170	54	69	66号土坑 縄上中	深鉢	晩期	口縁部片	口：無文　胴：縄文（LR）	ナデ（横）	橙灰黄 にぶい黄褐	良好		
171	55	69	70号土坑 4層	鉢	大洞BC	ほぼ完形	唇：押圧による波状　口：刺突起・沈線・刺突　胴：雲形文・縄文（RL）	ナデ（横）	にぶい橙 にぶい橙	良好	内外面 煤状あり	
172	54	69	70号土坑 縄上上	浅鉢	大洞BC	口縁部片	唇：突起・刺み　口：沈線・刺み・沈線による雲形文	ナデ（横）	黒褐 暗褐	やや不良	内面	
173	54	69	70号土坑 縄上中	深鉢	晩期	口縁部1/3	口：沈線　胴：縄文（LR）	丁寧・ナデ（横）	灰黄褐 灰黄褐	やや不良	外面	

第７表　遺物観察表（縄文土器）（４）

掲載番号	写真図版	図版順番	出土地点・層位	器種	型式（時期）	残存部位	外面文様	内面調整	外面色調 内面色調	焼成	スス・コゲ	備考
174	54	69	70号土坑 縄上上位	鉢	大洞BC ～C1	口縁部片	特：刻み　口：刻み　胴：縄文（RL）	ナデ（横）	灰黄褐 灰黄褐	不良	外面	
175	54	69	70号土坑 縄上上位	土製円盤	晩期	ほぼ完形	無文	ナデ（不明）	にぶい黄橙 にぶい黄橙	やや不良		
176	54	69	71・76号土坑 縄上中	深鉢	晩期？	胴部片	胴：縄文（LR）	ナデ（縦）	灰黄褐 にぶい黄橙	不良	外面	59号土坑縄上出土破片と接合
177	54	69	75号土坑 縄上中	深鉢	後晩期	胴部片	胴：縄文（LR）	ナデ（斜）	にぶい橙 橙	やや不良		
178	54	69	76号土坑 縄上中	深鉢	後晩期	胴部片	胴：縄文（LR）	ナデ（縦）	明褐 橙	やや不良		
179	54	69	78号土坑 縄上上位	深鉢	後期初～前葉	胴部片	胴：沈線・縄文（LR）	ナデ（横）	にぶい黄橙 にぶい黄橙	不良		
180	54	69	79号土坑 縄上中	深鉢	後期初～前葉	口縁部片	口：無文　頸：隆帯（刺突）　胴：縄文（不明）	ナデ（横）	橙 褐灰	不良	外面	
181	54	69	79号土坑 縄上中	深鉢	後期初～前葉	口縁部片	口：無文　胴：（LR）	ナデ（横）	橙 橙	良好	外面	
182	54	69	79号土坑 縄上中	深鉢	後期初～前葉	胴部片	胴：縄文（LR）→沈線	ナデ（横）	橙 黒褐	不良		
183	54	69	79号土坑 縄上中	深鉢	後期初～前葉	胴部片	胴：沈線・刺突	ナデ（横）	にぶい褐 にぶい黄褐	不良		
184	54	69	81号土坑 縄上上位	深鉢	後期初～前葉	口縁部片	口：刺突・沈線・隆帯（刻み）	ナデ（横）	にぶい黄橙 にぶい黄橙	やや良好		159と同一個体
185	54	69	81号土坑 縄上上位	深鉢	後期初～前葉	口縁部片	口：刺突・沈線	ナデ（横）	にぶい黄褐 灰黄褐	やや不良		
186	54	69	81号土坑 縄上上位	深鉢	後期初～前葉	口縁部片	口：隆帯（刻み）	ナデ（横）	にぶい黄橙 にぶい黄橙	やや良好		156と同一個体
187	56	69	81号土坑 縄上中	深鉢	後期初～前葉	口縁部片	口～胴：沈線	ナデ（斜）	橙灰 黄褐	不良		155橙同一個体
188	56	69	82号土坑 縄上中	深鉢	後期初～前葉	胴部片	胴：沈線	ナデ（斜）	橙灰 黄褐	不良		153と同一個体
189	56	69	82号土坑 縄上中	深鉢	後期初～前葉	胴部片	胴：沈線・刺突・縄文（LR）	ナデ（斜）	明黄褐 灰黄褐	不良	内面	
190	56	69	82号土坑 縄上上位	深鉢	中期	口縁部片	口：無文　胴：縄文（LR）	ナデ（横）	橙 橙	良好	外面	
191	56	69	82号土坑 縄上上位	深鉢	中期	口縁部片	口：縄文（LR）	ナデ（横）	にぶい褐 にぶい黄橙	やや不良	外面	
192	56	69	84号土坑 縄上中	鉢	大洞BC ～C1	口縁部片	特：刻み　口：沈線　胴：縄文（RL）	ナデ（横）	黒褐 黒褐	不良		
193	56	70	85号土坑 縄上中	深鉢	晩期	口縁部片	特：押圧　口：沈線　胴：縄文（LR）	ナデ（横）	にぶい黄褐 灰黄褐	不良		
194	56	70	85号土坑 縄上中	鉢	晩期	胴部片	胴：縄文（LR）	ナデ（縦）	にぶい黄橙 灰黄褐	やや不良	外面	
195	56	70	86号土坑 縄上上位	深鉢	晩期	口縁部片	特：押圧　口：沈線	ナデ（横）	にぶい黄褐 にぶい黄褐	不良	外面	
196	56	70	85号土坑 縄上中	深鉢	晩期	口縁部片	口：縄文（LR）	ナデ（斜）	灰黄褐 黒褐	不良	外面	
197	56	70	86号土坑 縄上中	鉢	大洞BC	口縁部片	特：刻み　口：沈線・羊歯状文　胴：縄文（LR）	ナデ（横）	灰黄褐 黒褐	不良	外面	
198	56	70	86号土坑 縄上中	深鉢	晩期	口縁部片	口：羽状縄文（赤結束RL・RL）	ナデ（横）	褐灰 にぶい黄橙	不良	外面	
199	56	70	87号土坑 縄上中	鉢	大洞C1 ～2	胴部片	胴：B突起・沈線・縄文（LR）	ナデ（横）	にぶい黄橙 にぶい黄橙	不良		
200	56	70	87号土坑 縄上中	鉢	晩期	口縁部片	特：押圧　口：沈線	ナデ（斜）	褐灰 にぶい黄橙	不良		
201	56	70	91号土坑 縄上中	深鉢	晩期	口縁部片	口：縄文（LR）	ナデ（横）	にぶい黄橙 にぶい黄橙	不良		
202	56	70	88号土坑 縄上中	深鉢	晩期	口縁部片	特：押圧　口：沈線	ナデ（横）	灰黄褐 にぶい黄褐	不良		
203	56	70	88号土坑 縄上中	鉢（浅鉢）	大洞BC	口縁部片	特：B突起　口：縄文（RL）・雲形文	磨滅・ナデ（横）	にぶい黄橙 にぶい黄橙	やや良好		
204	56	70	88号土坑 縄上中	鉢（浅鉢）	大洞BC	口縁部片	特：B突起　口～胴：羊歯状文・雲形文	磨滅・ナデ（横）	灰黄褐 灰黄褐	不良	内面	
205	56	70	88号土坑 縄上中	鉢	大洞BC	口縁部片	特：刻み　口：沈線・羊歯状文　胴：縄文（LR）	ナデ（斜）	灰黄褐 灰黄褐	不良		
206	56	70	88号土坑 縄上中	鉢	大洞BC	胴部片	胴：縄文（LR）→沈線による雲形文	ナデ（横）	明黄褐 黒褐	不良		
207	55	70	92号土坑 縄上上位	鉢	大洞C1	口～胴 1/2欠損	口：隆帯　胴：沈線	磨滅・ナデ（横）	にぶい黄橙 橙	不良		
208	56	70	92号土坑 縄上上位	鉢	大洞BC ～C1	口縁部片	口：沈線による波状口縁・羊歯状文・沈線・縄文（LR）	磨滅・ナデ（横）	にぶい黄褐 黒褐	不良		
209	56	70	92号土坑 縄上中	鉢	大洞BC ～C1	口縁部片	口：縄文（LR）→沈線	ナデ（横）	褐灰 黒褐	不良	内外面	
210	56	70	92号土坑 縄上中	鉢	大洞BC	ほぼ完形	特：押圧による波状　口：沈線　胴：羽状縄文（赤結束第1種　LR・RL）	ミガキ（縦）	にぶい黄橙 橙	不良	内面黒斑・胴部以下	
211	56	70	92号土坑 縄上上位	深鉢（鉢）	大洞BC	口縁部片	口：沈線・胴：縄文（RL）	ナデ（横）	灰黄褐 黒褐	不良	外面	
212	56	70	92号土坑 縄上上位	鉢	縄文（晩期）	胴部片	胴：赤結束羽状縄文（LR・RL）	ナデ（横）	灰黄褐 黒褐	不良	内外面	

第７表　遺物観察表（縄文土器）（５）

掲載番号	写真図版	図版順番	出土地点・層位	器種	型式（時期）	残存部位	外面文様	内面調整	外面色調 内面色調	焼成	スス・コゲ	備考
213	56	70	92号土坑 縄上位	鉢	大洞BC ～C1	口～胴 2/3欠損	胴：無み　口：沈線　胴：羽状縄文（LR・RL）	ナデ（斜）	灰黄褐 灰黄褐	不良	内外面	
214	56	70	93号土坑 縄上下位	深鉢	晩期	胴下半～底面	胴：縄文（LR）	ナデ（横）	灰黄褐 明黄褐	不良	外面	
215	56	71	94号土坑 縄上中	深鉢	縄文	口縁部片	口：押圧による波状口縁　胴：縄文（LR）	ナデ（横）	にぶい黄橙 浅黄橙	やや不良		
216	56	71	94号土坑 縄上中	深鉢	後期？	口縁部片	口：縄文（LR）→無み	ナデ（横）	にぶい黄橙 にぶい黄褐	やや不良		
217	56	71	94号土坑 縄上中	鉢	大洞BC	胴部片	胴：沈線・縄文（RL）	ナデ（斜）	灰黄褐 にぶい黄褐	やや良好		
218	56	71	94号土坑 縄上中	鉢	大洞BC	口縁部片	口：縄文（LR）・入組三叉文	ナデ（横）	にぶい橙 橙	不良		
219	56	71	94号土坑 縄上上位	深鉢	後期初～前	胴部片	胴：沈線・円形刺突	ナデ（横）	にぶい黄橙 黒褐	やや不良		
220	56	71	95号土坑 縄上中	鉢	大洞BC	口縁部片	胴：沈線による半歯状文　胴：縄文（RL）→沈線	丁寧ナデ（横）	灰黄褐 暗灰黄	不良		
221	56	71	95号土坑 縄上中	鉢	大洞BC	口縁部片	口：沈線・縄文（LR）	丁寧ナデ（横）	黒褐 黒褐	不良		
222	56	71	96号土坑 縄上中	鉢	大洞BC	口縁部片	胴：押圧による波状口縁　口：縄文（RL）→沈線による雲形文	ナデ（横）	灰黄褐 褐灰	やや不良		
223	56	71	96号土坑 縄上中	深鉢	晩期	胴下～底 1/4	胴：縄文（RL）	ナデ（横）	にぶい黄橙 暗灰黄	不良		
224	55	71	97号土坑 底面	台付鉢	大洞BC	ほぼ完形	胴：突起、胴にによる波状口縁　口突起　基：無文・口突起・突突　基：縄文（LR）→沈線　台：無文	ナデ（横）	灰黄褐 黒褐	不良	内外面	
225	56	71	97号土坑 縄上中	鉢	大洞BC	口縁部片	胴：口突起　口：羊歯状文　胴：縄文（LR）	ナデ（横）	明黄褐 明黄褐	不良		
226	56	71	97号土坑 縄上中	鉢	晩期	底部片	胴：（LR）	ナデ（横）	黒褐 にぶい褐	不良	内面	
227	56	71	98号土坑 縄上中	深鉢	後晩期	胴部片	胴：縄文（LR・結節あり）	ナデ（斜）	にぶい黄橙 にぶい黄橙	不良	外面	
228	56	71	98号土坑 縄上中	鉢	後晩期	胴部片	胴：縄文（LR）	ナデ（横）	にぶい黄橙 黒褐	不良		
229	56	71	99号土坑 縄上中	深鉢	後晩期	口縁部片	口：羽状縄文（赤結束RL・RL）	ナデ（横）	灰黄褐 にぶい黄橙	良好	外面	外面朱塗り
230	56	71	99号土坑 縄上中	深鉢	後晩期	口縁部片	口：縄文（RL）	ナデ（横）	橙 にぶい橙	やや不良	外面	
231	55	71	99号土坑 縄上中	台付鉢	後晩期	胴下～台部	胴：縄文（LR）　台：無文	粗目ミガキ	灰黄褐 にぶい黄褐	やや不良		
232	56	71	101号土坑 縄上中	鉢	大洞BC	口縁部片	口：沈線	ナデ（横）	黒褐 黒褐	不良	外面	
233	56	71	105号土坑 縄上上位	深鉢	後晩期	口縁部片	口：縄文（LR）	ナデ（横）	灰黄褐 にぶい黄橙	良好	外面	
234	57	71	102号土坑 縄上中	鉢	大洞BC	口縁部片	胴：刺突　口：沈線・刺突　胴：縄文（LR）	ナデ（斜）	灰黄褐 灰褐	やや不良	外面	
235	57	71	102号土坑 縄上中	鉢	大洞BC	口縁部片	胴：刺突　口：沈線・刺突　胴：縄文（RL）	ナデ（横）	灰黄褐 褐灰	不良		補修孔あり
236	57	71	102号土坑 縄上中	鉢	大洞BC	胴部片	胴：縄文（LR）・沈線	ナデ（横）	灰黄褐 黒褐	やや良好		
237	57	71	106・108号土坑縄上中	鉢	大洞BC	胴部片	胴：縄文（L）→沈線による渦巻き文	ナデ（横）	褐灰暗 灰黄	不良		
238	57	71	106号土坑 縄上上位	深鉢	後晩期	口縁部片	口：縄文（L）	ナデ（横）	黒褐 にぶい褐	不良		
239	57	71	106号土坑 縄上中	深鉢	後晩期	胴部片	胴：赤結束羽状縄文（RL・RL）	ナデ（斜）	黒褐 にぶい黄褐	不良	外面	
240	57	71	106号土坑 縄上中	注口土器	大洞BC	胴部片	胴：突起・縄文（LR）・羊歯状文	ナデ（横）	黒褐 灰黄	不良		
241	57	72	107号土坑 縄上下位	深鉢	縄文	口縁部片	胴：押圧による波状口縁　口：無文　胴：縄文（LR）	ナデ（横）	にぶい黄橙 浅黄橙	やや良好		
242	57	72	107号土坑 縄上下位	深鉢	縄文	胴部片	胴：縄文（LR）	ナデ（横）	灰黄褐 にぶい黄橙	不良		
243	57	72	107号土坑 縄上中	鉢	大洞BC	口縁部片	胴：押圧による波状口縁　口：沈線・刺突　胴：縄文（LR？）	ナデ（横）	明黄褐 にぶい黄橙	やや良好		
244	57	72	107号土坑 縄上中	鉢	大洞BC	口縁部片	胴：押圧　口：羊歯状文	ナデ（横）	褐灰 浅黄橙	不良		
245	57	72	107号土坑 縄上中	鉢	大洞BC	口縁部片	口：無みによる波状口縁・羊歯状文	ナデ（横）	にぶい黄橙 浅黄	不良		
246	57	72	107号土坑 縄上中	注口土器	大洞BC	胴部片	胴：羊歯状文	ナデ（不明）	黒 にぶい黄褐	やや良好		外面朱塗り
247	57	72	107号土坑 縄上中	鉢	大洞BC	胴部片	胴：沈線	ナデ（横）	灰黄褐 灰黄褐	やや良好		外面朱塗り
248	57	72	107号土坑 縄上中	鉢	大洞BC	胴部片	胴：沈線	ナデ（横）	にぶい黄褐 灰黄褐	やや不良		外面朱塗り
249	57	72	107号土坑 縄上中	注口土器	大洞BC	胴部片	胴：沈線（ミガキ）	ナデ（斜）	にぶい褐明 赤褐	やや良好		
250	57	72	107号土坑 縄上中	浅鉢	大洞BC	胴部片	胴：沈線	ナデ（不明）	褐灰 灰黄褐	やや不良		外面朱塗り
251	57	72	107号土坑 縄上上位	鉢（浅鉢）	大洞BC	胴部片	胴：沈線	ナデ（不明）	黒褐 にぶい黄褐	良好		外面朱塗り

第７表　遺物観察表（縄文土器）（６）

掲載番号	写真図版	図版順番	出土地点・層位	器種	型式（時期）	残存部位	外面文様	内面調整	外面色調 内面色調	焼成	スス・コゲ	備考
252	57	72	107号土坑 縄上下位	注口土器	大洞BC	胴部片	胴：羊歯状文	ナデ（不明）	黒褐 灰黄褐	良好		外面朱塗り
253	57	72	107号土坑 縄上上位	鉢	大洞BC	胴部片	胴：沈線	ナデ（横）	黒褐 灰黄褐	良好		外面朱塗り
254	57	72	107号土坑 縄上上位	浅鉢	大洞BC	胴部片	胴：無文	ナデ（横）	灰黄褐 灰黄褐	良好		外面朱塗り
255	57	72	110号土坑 縄上中	鉢	後期前葉	口縁部片	口：沈線	ナデ（斜）	黒褐 黒褐	不良		
256	57	72	111号土坑 縄上上位	深鉢	瘤付３	口縁部片	将：山形突起　口：押引文・沈線	ナデ（横）	灰黄褐 にぶい黄橙	不良	外面	
257	57	72	111号土坑 縄上上位	深鉢	瘤付３	口縁部片	口：刺み・沈線	ナデ（横）	にぶい黄褐 にぶい黄褐	不良		
258	57	72	111号土坑 縄上下位	深鉢	後期	口縁部片	口：縄文（LR）	ナデ（横）	灰褐 灰黄褐	やや良好	外面	
259	57	72	111号土坑 縄上中	深鉢	後期	口縁部片	口：沈線　胴：縄文（LR）	ナデ（不明）	にぶい褐 にぶい黄橙	やや不良		
260	57	72	111号土坑 縄上上位	深鉢	後期	口縁部片	口～胴：縄文（RL）	ナデ（斜）	灰黄褐 にぶい黄橙	やや不良	外面	
261	57	72	111号土坑 縄上上位	深鉢	後期	胴部片	胴：縄文（LR）	ナデ（斜）	にぶい黄橙 にぶい黄橙	不良		
262	55	72	111号土坑 縄上下位	深鉢	後期	口～底 1/2	胴：縄文（LR）	ナデ（斜）	にぶい黄橙 にぶい黄橙	不良	内外面	
263	57	72	111号土坑 縄上上位	土製円盤	後期	完形	無文	ナデ（不明）	にぶい黄橙 にぶい黄橙	良好		深鉢の土器片を転用
264	55	73	111号土坑 縄上上位・下位	深鉢	後期	口縁部1/2・胴下～底1/4	胴：縄文（LR）	ナデ（斜）	にぶい黄橙 にぶい黄褐	不良		112号土坑第上上位の破片接合
265	55	73	111号土坑 縄上上位・下位	深鉢	後期	底部欠損	胴：縄文（LR）	ナデ（斜）	にぶい黄橙 にぶい黄橙	不良	外面	
266	57	74	112号土坑 縄上中	深鉢	後晩期	口縁部片	口～胴：縄文（LR）	ナデ（横）	灰黄褐 灰黄褐	不良	外面	
267	57	74	112号土坑 縄上中	深鉢	後晩期	口縁部片	口～胴：縄文（LR）	ナデ（斜）	灰黄褐 灰黄褐	良好		
268	57	74	112号土坑 縄上中	深鉢	後晩期	胴部片	胴：縄文（LR）	ナデ（横）	橙 にぶい橙	良好		
269	57	74	112号土坑 縄上上位	深鉢	後晩期	胴部片	胴：縄文（RL）	ナデ（斜）	にぶい黄橙 褐灰	不良	外面	
270	57	74	112号土坑 縄上上位	土製円盤	縄文（後晩期）	完形	無文	ナデ（不明）	にぶい黄橙 橙	不良		深鉢の土器片を転用
271	57	74	112号土坑 縄上上位	土製円盤	縄文（後晩期）	完形	無文	ナデ（不明）	橙 橙	良好		深鉢の土器片を転用
272	57	74	113号土坑 縄上中	深鉢	後期前葉	胴部片	胴：縄文（LR）→沈線	ナデ（斜）	にぶい黄褐 にぶい黄橙	やや不良		
273	57	74	113号土坑 縄上中	深鉢	後期	口縁部片	口：縄文（LR）	ミガキ	にぶい黄橙 赤褐	やや不良		内面朱塗り
274	57	74	113号土坑 縄上中	深鉢	後期	胴部片	胴：縄文（LR）	ミガキ	にぶい黄橙 赤褐	やや不良		内面朱塗り
275	57	74	113号土坑 縄上中	深鉢	後期	胴部片	胴：縄文（LR）	ナデ（不明）	浅黄橙 浅黄橙	やや不良		内外面朱塗り
276	57	74	113号土坑 縄上中	深鉢	後期	胴部片	胴：縄文（LR）	ナデ（不明）	にぶい黄橙 赤褐	やや良好		内面朱塗り
277	57	74	114号土坑 縄上中	鉢	後晩期	胴部片	胴：縄文（不明）	ミガキ	褐灰 褐灰	やや良好		内面朱塗り
278	57	74	122号土坑 縄上上位	深鉢	後晩期	口縁部片	口～胴：羽状縄文（非結束LR・RL）	ナデ（横）	にぶい褐 にぶい褐	やや不良	外面	
279	57	74	124号土坑 縄上下位	注口土器	十腰内Ⅰ	口縁部片	将：刺み　口：沈線	ナデ（横）	にぶい黄橙 にぶい黄褐	不良		
280	57	74	124号土坑 縄上下位	注口土器	十腰内Ⅰ	口縁部片	口：沈線	ナデ（斜）	灰黄褐 褐灰	不良		
281	57	74	124号土坑 縄上下位	注口土器	十腰内Ⅰ	胴部片	胴：沈線による雲形文	ナデ（不明）	黒褐 黒褐	不良		
282	57	74	124号土坑 縄上下位	注口土器	十腰内Ⅰ	胴部片	胴：無文	ナデ（斜）	褐灰 灰黄褐	不良		
283	55	74	125号土坑 縄上下位	深鉢	後晩期	口～胴 2/3	胴：縄文（LR）	ナデ（横）	灰黄褐 明褐	やや良好	外面	
284	57	74	125号土坑 縄上上位	深鉢	後晩期	口縁部片	口：縄文（LR）	ナデ（横）	灰黄褐 灰黄褐	やや不良	外面	
285	57	74	125号土坑 縄上中	深鉢	後晩期	胴部片	胴：縄文（LR）	ナデ（横）	にぶい黄 褐黒褐	不良		
286	57	74	125号土坑 縄上上位	鉢	大洞BC	口縁部片	将：波状口縁　口：沈線	ナデ（横）	灰黄褐 黒褐	不良	外面	
287	57	74	125号土坑 縄上下位	壺？	大洞BC	口縁部片	口：無文	ナデ（横）	橙 橙	良好	外面	
288	57	75	126号土坑 縄上中	深鉢	後晩期	口縁部片	将：波状口縁　口～胴：縄文（LR）	ナデ（横）	にぶい黄橙 にぶい黄橙	不良	外面	
289	58	75	126号土坑 縄上上位	深鉢	瘤付３	口縁部片	将：B突起　口：沈線　胴：縄文（RL）	ナデ（横）	にぶい黄橙 灰黄褐	やや良好	内面	
290	58	75	126号土坑 縄上下位	深鉢	瘤付３	口縁部片	口：沈線・縄文（RL）	ナデ（横）	黒褐 黒褐	やや良好	内外面	

第７表　遺物観察表（縄文土器）（７）

掲載番号	写真図版	図版	出土地点・層位	器種	型式（時期）	残存部位	外面文様	内面調整	外面色調 内面色調	焼成	スス・コゲ	備考
291	58	75	129号土坑 埋土上位	鉢形土器	後期	口～底 1/2	口：沈線　胴：沈線・穿孔　台：無文	ナデ（縦）	浅黄橙 にぶい黄橙	不良		
292	58	75	129号土坑 埋土中	鉢	堂付３？	口縁部片	将：羽状縄文（LR・RL）・沈線	ナデ（横）	灰黄褐 灰黄褐	不良	内外面	
293	58	75	129号土坑 埋土中	深鉢	堂付３？	胴部片	胴：縄文（RL）→沈線	ナデ（斜）	にぶい黄橙 黒褐	不良	内面	
294	58	75	129号土坑 埋土下位	深鉢	堂付３？	口縁部片	口：沈線・刺み	ナデ（斜）	灰黄褐 灰黄褐	不良		
295	58	75	129号土坑 埋土中	深鉢	後期前～中葉	胴部片	胴：縄文（RL）→沈線による区画文	ナデ（横）	にぶい黄橙 黒褐	不良	内面	
296	58	75	129号土坑 埋土上位	深鉢	後期前～中葉	胴部片	胴：羽状縄文（LR・RL）→沈線	ナデ（縦）	灰黄褐 黒褐	不良	内面	
337	58	84	1号性格不明 埋土中	深鉢	門前	胴部片	胴：縄文（RL）・沈線・連続状隆帯（刺突）	ナデ（斜）	明黄褐 にぶい黄褐	不良	外面	
342	58	86	Pit51埋土中	深鉢	後晩期	胴部片	縄文（LR）	ナデ（横）	にぶい黄橙 にぶい橙	良好	外面	
343	58	86	Pit52埋土中	深鉢	後期前～中葉	胴部片	胴：縄文（LR）→沈線	ナデ（斜）	にぶい橙 にぶい黄褐	不良	外面	
344	58	86	Pit62埋土中	深鉢	後晩期	胴部片	胴：縄文（LR）	ナデ（斜）	にぶい黄褐 にぶい橙	やや良好	外面	344と同一個体
345	58	86	Pit62埋土中	深鉢	後晩期	口縁部片	口：無文　胴：縄文（LR）	ナデ（斜）	にぶい黄褐 にぶい橙	やや良好	外面	345と同一個体
348	58	88	圓項弦合帯 埋土下位	深鉢	物見台	胴部片	胴：貝殻腹縁厚重・沈線	ナデ（不明）	明褐 明褐	良好		
349	58	88	圓項弦合帯 埋土下位	深鉢	蛇王洞Ⅱ	胴部片	胴：貝殻腹縁厚重・沈線	ナデ（横）	橙 にぶい黄橙	良好		
350	58	88	圓項弦合帯 埋土下位	深鉢	蛇王洞Ⅱ	胴部片	胴：貝殻腹縁厚重・沈線	ナデ（横）	橙 灰黄褐	良好		
351	58	88	圓項弦合帯 埋土上位	深鉢	前期	胴部片	胴：縄文（結節回転ｒ）	ナデ（斜）	にぶい黄橙 にぶい黄橙	不良		繊維混入
352	58	88	圓項弦合帯 埋土上位	深鉢	縄文（中期）	胴部片	胴：縄文（RLR）	ナデ（不明）	浅黄橙 灰黄褐	不良		
353	58	88	圓項弦合帯 埋土下位	深鉢	大木7a	口縁部片	口：浮状の隆帯	ナデ（横）	明黄褐 明黄褐	良好		
354	58	88	圓項弦合帯 埋土上位	深鉢	大木7a	胴部片	胴：オオバコ文	ナデ（横）	浅黄橙 にぶい黄橙	やや不良		
355	58	88	圓項弦合帯 埋土下位	深鉢	大木9（新）	口縁部片	口～胴：縄文（RLR）→沈線による区画文	ナデ（横）	にぶい黄橙 にぶい黄橙	やや良好	外面	
356	59	88	圓項弦合帯 埋土上位	深鉢	大木9（新）	口～胴	口～胴：縄文（LR）→沈線による区画文	ナデ（横）	にぶい黄橙 にぶい黄橙	不良	外面	
357	59	88	圓項弦合帯 埋土上位	深鉢	大木9（新）	口～胴 1/3	口～胴：押圧・撚糸（結束体第１類ｒ）→沈線による区画文	ナデ（横）	橙 にぶい黄橙	不良		
358	58	88	圓項弦合帯 埋土上位	深鉢	大木9（新）	口縁部片	胴：縄文（RLR）→沈線による区画文	ナデ（横）	にぶい黄橙 にぶい黄橙	やや不良	外面	
359	58	41	圓項弦合帯 埋土下位	深鉢	大木9（新）	口縁部片	口～胴：縄文（RLR）→沈線による区画文	ナデ（横）	にぶい黄橙 灰黄褐	不良		
360	58	88	圓項弦合帯 埋土上位	深鉢	大木9（新）	口縁部片	口：縄文（RLR）→沈線による区画文	ナデ（横）	にぶい黄橙 にぶい黄橙	良好		
361	58	88	圓項弦合帯 埋土上位	深鉢	大木9（新）	口縁部片	口～胴：撚糸（単軸絡条体第１類ｌ）→沈線による区画文	ナデ（横）	灰黄褐褐 にぶい黄橙	不良		
362	58	88	圓項弦合帯 埋土上位	深鉢	大木9（新）	口縁部片	口～胴：縄文（RL）→沈線による区画文	ナデ（斜）	にぶい褐 にぶい褐	不良		
363	58	88	圓項弦合帯 埋土上位	深鉢	大木9（古）	口縁部片	口：隆帯による区画文	ナデ（横）	にぶい黄橙 浅黄橙	不良		
364	58	88	圓項弦合帯 埋土下位	深鉢	大木9（新）	口縁部片	口：沈線による区画文	ナデ（横）	にぶい褐 にぶい褐	やや不良		
365	58	88	圓項弦合帯 埋土上位	深鉢	大木9（新）	胴部片	胴：沈線による区画文	ナデ（横）	にぶい黄橙 にぶい黄橙	やや良好		
366	58	88	圓項弦合帯 埋土下位	深鉢	大木9（新）	口縁部片	胴：隆帯・縄文（RLR）→沈線による区画文	ナデ（横）	浅黄 にぶい橙	不良	外面	
367	58	88	圓項弦合帯 埋土上位	深鉢	大木9（新）	胴部片	胴：縄文（RLR）→沈線による区画文	ナデ（横）	にぶい黄橙 にぶい黄橙	やや良好		
368	59	89	圓項弦合帯 埋土上位	深鉢	大木10（古）	口～胴 1/3	口～胴：縄文（RLR）→隆帯による区画文	ナデ（横）	にぶい黄橙 にぶい黄橙	やや不良	外面	
369	59	89	圓項弦合帯 埋土上位	深鉢	大木9（新）	口～胴 1/3	口～胴：縄文（LR）→沈線による区画文	ナデ（横）	にぶい黄橙 にぶい黄橙	不良	外面	
370	59	89	圓項弦合帯 埋土上位	深鉢	大木9（新）	口縁部片	口～胴：撚糸（単軸絡条体第１類ｌ）→沈線による区画文	ナデ（横）	灰黄褐 にぶい黄橙	やや不良		
371	58	89	圓項弦合帯 埋土上位	深鉢	大木10（古）	胴部片	胴：縄文（LR）→沈線による区画文	ナデ（横）	にぶい黄橙 明黄褐	良好		
372	58	89	圓項弦合帯 埋土上位	深鉢	大木10（古）	口縁部片	口：縄文（LR）→沈線による区画文	ナデ（横）	にぶい黄橙 にぶい黄橙	良好		
373	58	89	圓項弦合帯 埋土下位	深鉢	大木9～10	口縁部片	口：隆帯・沈線による区画文	ナデ（横）	にぶい黄橙 にぶい黄橙	やや不良		
374	58	89	圓項弦合帯 埋土上位	深鉢	大木10（古）	胴部片	胴：縄文（RL）→沈線による区画文	ナデ（斜）	にぶい黄褐 灰黄褐	不良	外面	
375	59	89	圓項弦合帯 埋土上位	深鉢	大木10（古）	胴部片	胴：縄文（RL）→沈線による区画文	ナデ（横）	にぶい褐 明褐	不良		

第7表　遺物観察表（縄文土器）（8）

掲載番号	写真図版	図版順番	出土地点・層位	器種	歴式（時期）	残存部位	外面文様	内面調整	外面色調 内面色調	焼成	スス・コゲ	備考
376	59	89	調査区北壁 埋土下位	深鉢	大本10（古）	胴部片	胴：縄文（LR）→沈線による区画文	ナデ（横）	明赤褐 淡黄	不良		
377	59	90	調査区北壁 埋土下位	深鉢	大本9（前）	胴部片	胴：縄文（RL）→沈線による区画文	ナデ（横）	灰黄褐 にぶい黄橙	やや不良		
378	59	90	調査区北壁 埋土下位	深鉢	大本9（前）	胴部片	胴：縄文（LR）→沈線による区画文	ナデ（横）	にぶい黄橙 にぶい黄橙	やや不良		
379	60	90	調査区北壁 埋土下位	深鉢	大本10（古）	胴部片	胴：縄文（RLR）→沈線による区画文	ナデ（横）	明黄褐 橙	良好		
380	60	90	調査区北壁 埋土下位	深鉢	大本10（古）	胴部片	胴：隆帯による区画文	ナデ（横）	にぶい黄橙 にぶい黄橙	不良		
381	59	90	調査区北壁 埋土下位	深鉢	中期後～末葉	口縁部片	口～胴 1/2欠損	口：無文　胴：縄文（LR）	ナデ（横）	明黄褐 にぶい黄橙	やや不良	外面
382	60	90	調査区北壁 埋土下位	深鉢	中期後～末葉	口縁部片	口：撚糸（単軸絡条体第1類1）	ナデ（横）	明黄褐 明黄褐	良好		
383	60	90	調査区北壁 埋土下位	深鉢	中期後～末葉	口縁部片	口：撚糸（単軸絡条体第1類1）	ナデ（横）	明黄褐 明黄褐	良好		
384	60	90	調査区北壁 埋土下位	深鉢	中期後～末葉	口縁部片	口：縄文（無節1）	ナデ（横）	にぶい黄橙 明黄褐	良好		
385	60	90	調査区北壁 埋土下位	深鉢	中期後～末葉	口縁部片	口：縄文（LR）	ナデ（横）	にぶい黄橙 にぶい黄橙	良好	外面	
386	60	90	調査区北壁 埋土下位	深鉢	中期後～末葉	口縁部片	口：無文	ナデ（横）	にぶい黄橙 明黄褐	不良		
387	60	90	調査区北壁 埋土下位	深鉢	中期後～末葉	口～胴 1/3	口：無文　胴：縄文（RLR）	ナデ（斜）	橙 明黄褐	やや良好		
388	60	93	1号住居 埋土上位	深鉢	物見台	胴部片	胴：貝殻腹縁圧痕文	ナデ（斜）	橙 にぶい黄橙	良好		
389	60	93	調査－8 IV層下位	深鉢	物見台	胴部片	胴：貝殻腹縁圧痕文	ナデ（斜）	にぶい褐 橙	良好	外面	
390	60	93	調査－2 IV層下位	深鉢	物見台	胴部片	胴：貝殻腹縁圧痕文	ナデ（斜）	にぶい黄褐 にぶい黄橙	やや良好		
391	60	93	調査－46 IV層下位	深鉢	蛇王洞 II	胴部片	胴：刺突・沈線	ナデ（斜）	明黄褐 黒褐	不良		
392	60	93	調査－45 IV層下位	深鉢	蛇王洞 II	胴部片	胴：格子状の沈線	ナデ（横）	にぶい黄橙 にぶい黄橙	不良		
393	60	93	調査－37 IV層下位	深鉢	蛇王洞 II	胴部片	胴：格子状の沈線	ナデ（不明）	灰黄褐 にぶい黄橙	良好		
394	60	93	調査－45 IV層下位	深鉢	蛇王洞 II	口縁部片	特：刺突　口～胴：刺突・沈線	ナデ（横）	灰黄褐 灰黄褐	不良		
395	60	93	調査－45 IV層下位	深鉢	蛇王洞 II	口縁部片	特：刺突　口～胴：刺突・沈線	ナデ（横）	灰黄褐 灰黄褐	不良		
396	60	93	調査－51 IV層下位	深鉢	大本2a	口縁部片	口～胴：縄文（LR）	ナデ（横）	明黄褐 明黄褐	不良		繊維混入
397	60	93	調査－55 IV層下位	深鉢	大本2a	胴部片	胴：縄文（RL）	ナデ（横）	にぶい黄橙 灰黄褐	不良		繊維混入
398	60	93	調査－49 IV層下位	深鉢	大本2a	口縁部片	口～胴：撚糸（単軸絡条体第5類r）	ナデ（横）	褐灰 褐灰	不良		繊維混入
399	60	93	調査－49 IV層下位	深鉢	大本2a	口縁部片	口：縄文（原体不明）	ナデ（横）	褐灰 褐灰	不良		繊維混入
400	60	93	調査東側斜面 IV層下位	深鉢	大本2a	口縁部片	口：沈線・縄文（LR）	ナデ（横）	灰黄褐 明黄褐	不良		繊維混入
401	60	93	調査－4 IV層下位	深鉢	大本2b	口縁部片	口：刺み・隆帯　胴：S字状連結沈線文	ナデ（横）	にぶい黄橙 灰黄褐	不良	外面	
402	60	93	調査－39 IV層下位	深鉢	大本2b	口縁部片	口：S字状連結沈文	ナデ（横）	褐灰 灰黄褐	やや不良	外面	繊維混入
403	60	93	調査－47 IV層下位	深鉢	大本2a	口縁部片	口～胴：縄文（原体不明）	ナデ（横）	橙 灰黄褐	不良		繊維混入
404	60	93	調査－59 IV層下位	深鉢	大本2a	胴部片	胴：撚糸（単軸絡条体第5類r）	ナデ（斜）	にぶい黄橙 にぶい黄橙	不良		繊維混入
405	60	93	調査－59 IV層下位	深鉢	大本2a	胴部片	胴：縄文（LR）	ナデ（縦）	にぶい黄橙 明黄褐	不良		繊維混入
406	60	93	調査－49 IV層下位	深鉢	大本2a	胴部片	胴：撚糸（単軸絡条体第5類1）	ナデ（横）	明黄褐 にぶい黄橙	不良		繊維混入
407	60	93	調査－9 IV層下位	深鉢	大本2b	胴部片	胴：S字状連結沈線文	ナデ（斜）	にぶい黄橙 灰黄褐	良好	内面	
408	60	93	調査－4 IV層下位	深鉢	大本2b	胴部片	胴：S字状連結沈線文	ナデ（斜）	橙 にぶい褐	やや不良		
409	60	93	調査－4 IV層下位	深鉢	大本2b	胴部片	胴：S字状連結沈線文	ナデ（横）	橙 橙	不良		
410	60	93	調査－4 IV層下位	深鉢	大本2b	胴部片	胴：S字状連結沈線文	ナデ（横）	黒褐 にぶい黄橙	不良		
411	60	93	調査－4 IV層下位	深鉢	大本2b	胴部片	胴：S字状連結沈線文	ナデ（横）	橙 にぶい黄橙	やや不良		
412	60	93	調査西側土層 IV層下位	深鉢	大本2b	胴部片	胴：結節縄文（LR）	ナデ（横）	にぶい褐 明褐	良好	内面	
413	60	93	調査－37 IV層下位	深鉢	大本2a	胴部片	胴：直前段合巻	ナデ（不明）	黒褐 黒褐	良好		繊維混入
414	60	93	調査－47 IV層下位	深鉢	大本2a	胴部片	胴：ループ文（LR）	ナデ（横）	橙 にぶい黄橙	不良		繊維混入

第７表　遺物観察表（縄文土器）（９）

掲載番号	写真図版	図版番号	出土地点・層位	器種	型式（時期）	残存部位	外面文様	内面調整	外面色調 内面色調	焼成	スス・コゲ	備考
415	60	93	調査－39 Ⅳ層下位	深鉢	大木2a	胴部片	胴：縄文（LR）	ナデ（横）	にぶい黄橙 にぶい黄橙	不良		繊維混入
416	60	93	調査－61 Ⅳ層下位	深鉢	大木2a	胴部片	胴：縄文（LR）	ナデ（斜）	明黄褐 にぶい黄橙	やや不良		繊維混入
417	60	93	調査東側拡張 Ⅳ層下位	深鉢	大木2a	胴部片	胴：結束羽状縄文（LR）	ナデ（横）	にぶい橙 にぶい黄橙	不良		繊維混入
418	60	93	調査－39 Ⅳ層下位	深鉢	大木2a	胴部片	胴：縄文（RL）	ナデ（横）	にぶい黄橙 にぶい黄橙	不良		繊維混入
419	60	93	調査西沢東部 1－Ⅳ層下位	深鉢	大木2a	胴部片	胴：縄文（LR）	ナデ（横）	橙 明黄褐	やや良好		繊維混入
420	61	93	調査－37 Ⅳ層下位	深鉢	大木2a	胴部片	胴：縄文（LR）	ナデ（不明）	にぶい橙 にぶい黄橙	やや不良		繊維混入
421	61	93	調査－172 Ⅳ層下位	深鉢	大木2a	胴部片	胴：縄文（RL）	ナデ（不明）	にぶい褐 にぶい橙	不良		繊維混入
422	61	93	調査－49 Ⅳ層下位	深鉢	大木2a	胴部片	胴：縄文（LR？）	ナデ（横）	明黄褐 にぶい黄橙	不良		繊維混入
423	61	93	調査－59 Ⅳ層下位	深鉢	大木2a	胴部片	胴：縄文（結束RL・LR）	ナデ（斜）	にぶい黄橙 明黄褐	不良	外面	繊維混入
424	61	93	調査－61 Ⅳ層下位	深鉢	大木2a	胴部片	胴：付加条縄文（RL）	ナデ（斜）	明黄褐 灰黄褐	やや不良		繊維混入
425	61	93	調査－20 Ⅳ層下位	深鉢	大木2a	胴部片	胴：縄文（LR）	ナデ（横）	明黄褐 にぶい黄橙	不良		繊維混入
426	61	93	調査－45 Ⅳ層下位	深鉢	大木2a	胴部片	胴：縄文（RL）	ナデ（横）	褐灰 にぶい黄橙	不良		繊維混入
427	61	94	調査－39 Ⅳ層下位	深鉢	大木2a	胴部片	胴：縄文（LR）	ナデ（横）	にぶい黄橙 にぶい黄橙	不良		繊維混入
428	61	94	調査－46 Ⅳ層下位	深鉢	大木2a	胴部片	胴：縄文（RL）	ナデ（横）	にぶい黄橙 灰黄褐	やや不良		繊維混入
429	61	94	調査－41 Ⅳ層下位	深鉢	大木2a	胴部片	胴：縄文（RL）	ナデ（横）	にぶい褐 明黄褐	不良		繊維混入
430	61	94	調査－51 Ⅳ層下位	深鉢	大木2a	胴部片	胴：縄文（RL）	ナデ（横）	明黄褐 にぶい黄褐	不良		繊維混入
431	61	94	３号住居 縄土上位	深鉢	大木2a	胴部片	胴：撚糸（L）	ナデ（不明）	明黄褐 明黄褐	やや良好		繊維混入
432	61	94	調査－13 Ⅳ層下位	深鉢	大木2a	胴～底部片	胴：縄文（LR）	ナデ（縦）	にぶい黄橙 暗褐	不良		繊維混入
433	61	94	調査－39 Ⅳ層下位	深鉢	大木2a	底部片	胴：縄文（LR）	ナデ（斜）	にぶい黄橙 にぶい黄褐	不良		繊維混入
434	61	94	調査－9 Ⅳ層下位	深鉢	大木2a？	胴部片	胴：条痕	ナデ（横）	明黄褐 にぶい黄橙	やや不良		
435	61	94	調査－37 Ⅳ層下位	深鉢	大木2a？	胴部片	胴：撚糸（単軸絡条体第１類ｒ）	ナデ（斜）	にぶい橙 橙	不良		
436	61	94	調査東側拡張 Ⅳ層下位	深鉢	大木2a	胴部片	不明	ナデ（横）	にぶい黄橙 にぶい黄褐	不良		繊維混入
437	61	94	３号住居 縄土上位	深鉢	大木7a	胴部片	網状撚糸（L）	ナデ（横）	にぶい橙 にぶい黄橙	不良		
438	61	94	調査－4 Ⅳ層下位	深鉢	大木7a	口縁部片	口：沈線	ナデ（横）	にぶい黄橙 明黄褐	良好		
439	61	94	調査－8 Ⅳ層下位	深鉢	大木7a	口縁部片	口：沈線	ナデ（不明）	浅黄 浅黄	やや不良		
440	61	94	調査－4 Ⅳ層下位	深鉢	大木7a	口縁部片	口：沈線	ナデ（横）	にぶい黄橙 明黄褐	やや良好		
441	61	94	調査－4 Ⅳ層下位	深鉢	大木7a	口縁部片	口：沈線	ナデ（横）	にぶい黄橙 明黄褐	やや良好		
442	61	94	調査－1 Ⅳ層下位	深鉢	大木7a	口縁部片	口：沈線	ナデ（縦）	にぶい黄褐 にぶい黄橙	不良		
443	61	94	調査－1 Ⅳ層下位	深鉢	大木7a	口縁部片	口：縄文（LR）→沈線	ナデ（縦）	黒褐 明黄褐	良好	外面	
444	61	94	調査 地点不明	深鉢	大木7a	胴部片	胴：縄文押圧（L）	ナデ（縦）	にぶい黄褐 灰黄褐	やや不良	外面	
445	62	95	調査 地点不明	深鉢	大木7a	胴部片	胴：縄文押圧（L）	ナデ（縦）	にぶい黄褐 灰黄褐	やや不良	外面	
446	61	94	調査－4 Ⅳ層下位	深鉢	大木7a～7b	口縁部片	口：隆帯による楕円形文	ナデ（横）	にぶい黄橙 明黄褐	不良		
447	61	94	調査－9 Ⅳ層下位	深鉢	大木7a～7b	口縁部片	口：隆帯　胴：縄文（RL）	ナデ（横）	橙 にぶい黄橙	やや良好		
448	61	94	調査 地点不明	深鉢	大木7a～7b	胴部片	胴：縄文（LR）→沈線	ナデ（横）	明褐橙	良好		
449	61	94	調査－4 Ⅳ層下位	深鉢	大木7a	胴部片	胴：羽状縄文（斜結束LR・RL）	ナデ（横）	橙 にぶい黄橙	不良		
450	61	94	調査－4 Ⅳ層下位	深鉢	大木7a	胴部片	胴：羽状縄文（斜結束LR・RL）	ナデ（斜）	明黄褐 浅黄橙	良好	外面	
451	61	94	調査－4 Ⅳ層下位	深鉢	大木7a	胴部片	胴：羽状縄文（斜結束LR・RL）	ナデ（横）	にぶい黄橙 にぶい黄橙	良好	外面	
452	61	94	調査－4 Ⅳ層下位	深鉢	大木7a	胴部片	胴：羽状縄文（斜結束LR・RL）	ナデ（横）	にぶい橙 明黄褐	良好	外面	
453	61	94	調査－16 Ⅳ層下位	深鉢	大木9（古）	口縁部片＋胴下半	縄文（ＲＬＲ）→沈線＋隆帯による渦巻文	ナデ（横）	にぶい黄橙 橙	不良	外面	

第７表　遺物観察表（縄文土器）（10）

掲載番号	写真図版	図版順番	出土地点・層位	器種	型式（時期）	残存部位	外面文様	内面調整	外面色調 内面色調	焼成	スス・コゲ	備考
454	61	95	調査－1 Ⅳ層下位	深鉢	大木9（新）	口縁部片	口：無文　胴：縄文（RLR）→隆帯・沈線	ナデ（斜）	にぶい黄橙 明黄褐	不良		
455	61	95	調査－5 Ⅳ層下位	深鉢	大木9（新）	口縁部片	口：無文　胴：縄文（LRL）→隆帯により楕円形文	ナデ（横）	にぶい橙 にぶい黄褐	やや不良	外面	
456	61	95	調査－1 Ⅳ層下位	深鉢	大木9（新）	胴部片	胴：縄文（RLR）→隆帯・沈線	ナデ（斜）	にぶい黄橙 灰黄褐	不良		
457	61	95	調査－8 Ⅳ層下位	深鉢	大木9（新）	口縁部片	口：縄文（RL）→沈線による区画文	ナデ（横）	灰黄褐 褐灰	不良	外面	
458	62	95	調査－9 Ⅳ層下位	深鉢	大木9（新）	口縁部片	口：縄文（LR）→沈線による区画文	ナデ（縦）	にぶい黄橙 黄灰	不良		
459	62	95	調査－4 Ⅳ層下位	深鉢	大木9（新）	口縁部片	口：縄文（LR）→沈線による区画文	ナデ（横）	にぶい橙 にぶい橙	良好	外面	
460	62	95	調査－3 Ⅳ層下位	深鉢	大木9（新）	胴部片	胴：縄文（LR）→沈線	ナデ（斜）	にぶい黄橙 にぶい黄橙	やや良好		
461	62	95	調査－4 Ⅳ層下位	深鉢	大木9（新）	胴部片	胴：縄文（LR）→沈線による区画文	ナデ（斜）	明黄褐 浅黄橙	良好	外面	
462	62	95	調査－7 Ⅳ層下位	深鉢	大木9（新）	口縁部片	口：縄文（LR）→沈線による区画文	ナデ（横）	にぶい黄橙 にぶい黄橙	不良		
463	62	95	調査－3 Ⅳ層下位	深鉢	大木9（新）	胴部片	胴：縄文（LR）→沈線による区画文	ナデ（斜）	灰褐 浅黄橙	やや不良	外面	
464	62	95	調査－3 Ⅳ層下位	深鉢	後期初～前葉	口縁部片	口：無文　胴：刺突	ナデ（横）	にぶい黄橙 にぶい黄橙	良好		
465	62	95	調査－1 Ⅳ層下位	深鉢	後期初～前葉	口縁部片	口：沈線・穿孔	ナデ（横）	にぶい黄橙 にぶい黄橙	良好		
466	62	95	調査－1 Ⅳ層下位	深鉢	後期初～前葉	胴部片	胴：沈線・刺突	灰黄褐（斜）	灰黄褐 にぶい黄橙	やや良好	外面	
467	62	95	調査－1 Ⅳ層下位	深鉢	後期初～前葉	口縁部片	口：沈線	ナデ（斜）	灰黄褐明黄褐	やや良好		
468	62	95	調査－1 Ⅳ層下位	深鉢	後晩期	口縁部片	口：条線	ナデ（横）	橙 明黄褐	良好		
469	62	95	調査－30 Ⅳ層下位	深鉢	後期？	口縁部片	羽：刺み　口－胴：半裁竹管状工具による沈線	ナデ（斜）	にぶい黄橙 にぶい黄橙	良好		
470	62	95	調査－9 Ⅳ層下位	深鉢	後期	口縁部片	口：縄文（LRL）	ナデ（横）	にぶい黄橙 明黄褐	不良		
471	62	95	調査－3 Ⅳ層下位	深鉢	不明	底面のみ	胴：無文	ナデ（不明）	にぶい黄橙 黒褐	良好		内面アスファルト付着
472	62	95	調査－8 Ⅳ層下位	土製円盤	後晩期	端部調整	縄文（LR）	ナデ（不明）	にぶい黄橙 にぶい黄橙	やや不良		
473	62	95	調査－6 Ⅳ層下位	土製円盤	後晩期	完形	無文	ナデ（不明）	にぶい褐灰 黄褐	やや不良		
474	62	95	調査 F-21Ⅳ層上面	深鉢	大木2a	口縁部片	口：縄文（RL）	ナデ（横）	灰黄褐 にぶい黄橙	不良		繊維混入
475	62	95	調査 F-102Ⅳ層上面	深鉢	大木2a	口縁部片	胴：結束縄文・縄文（LR）	ナデ（横）	明褐黄褐	やや不良		繊維混入
476	62	95	調査 F-102Ⅳ層上面	深鉢	大木2a	胴部片	胴：結束縄文・縄文（LR）	ナデ（横）	明褐にぶい黄褐	不良		繊維混入
477	62	95	調査 F-111Ⅳ層上面	深鉢	後期	胴部片	胴：撚糸（単軸絡条帯３類）	ナデ（斜）	橙 にぶい黄橙	やや不良		
478	62	95	調査 F-111Ⅳ層上面	深鉢	後期前葉	口縁部片	口：沈線による楕円形文	ナデ（横）	にぶい黄橙 にぶい黄橙	良好		
479	62	95	調査 F-107Ⅳ層上面	深鉢	後期前葉	胴部片	胴：沈線による渦巻文	ナデ（横）	灰黄褐 にぶい黄褐	やや不良	外面	
480	62	95	調査 F-106Ⅳ層上面	深鉢	後期前葉	胴部片	胴：縄文（RL）→沈線・円形刺突	ナデ（横）	明褐 褐	不良	外面	
481	62	95	調査 F-136Ⅳ層上面	深鉢	後期前葉	胴部片	胴：縄文（RL）→沈線	ナデ（縦）	にぶい黄橙 灰黄褐	不良		
482	62	95	調査 F-120Ⅳ層上面	深鉢	後期前葉	胴部片	胴：縄文（LR）→沈線	ナデ（横）	にぶい黄褐 にぶい黄褐	不良	内面	
483	62	95	調査 F-122Ⅳ層上面	深鉢	後期	口縁部片	口：無文　胴：縄文（RLR）	ナデ（斜）	橙 橙	不良		
484	62	95	調査 F-106Ⅳ層上面	深鉢	後期	口縁部片	口：無文　胴：縄文（LR）	ナデ（斜）	明赤褐 黒褐	不良	内面	
485	62	96	XⅣE8e Ⅲ・Ⅳ層	深鉢	円筒	口縁部片	口：隆帯・刺突	指ナデ 発泡	明黄褐 明黄褐	やや良好		
486	62	96	XⅣE10d Ⅲ・Ⅳ層	深鉢	後期初～前葉	胴部片	胴：赤結束羽状縄文（LR）→沈線→刺突	ナデ（縦）	にぶい褐黒褐	不良		
487	62	96	XⅤE2c Ⅲ・Ⅳ層	深鉢	後期初～前葉	口縁部片	口：竹管状工具による円形刺突・沈線	ナデ（横）	明赤褐 明褐	良好		
488	62	96	XⅤE2b Ⅲ・Ⅳ層	深鉢	後期初～前葉	胴部片	胴：縄文（RLR）→沈線・竹管状工具による円形刺突	ナデ（横）	明赤褐 橙	良好		
489	62	96	XⅣE5f Ⅳ層上面	鉢	後期中葉	口縁部片	口：沈線	ナデ（横）	黒褐 にぶい褐	やや不良	外面	
490	62	96	XⅣE7c Ⅲ・Ⅳ層	深鉢	後期前葉	口縁部片	口：円孔・無文	ナデ？	にぶい黄褐 明褐	不良		
491	62	96	XⅣE8e Ⅲ・Ⅳ層	深鉢	後期前葉	口縁部片	口：無文　胴：沈線・縄文（RL）	ナデ（横）	にぶい黄褐 にぶい黄褐	不良		
492	62	96	XⅣE8e Ⅲ・Ⅳ層	深鉢	後期前葉	口縁部片	口：無文　胴：縄文（RL）→沈線	ナデ（横）	にぶい黄褐 にぶい黄褐	不良		

第７表　遺物観察表（縄文土器）（11）

掲載番号	写真図版	図版番	出土地点・層位	器種	型式（時期）	残存部位	外面文様	内面調整	外面色調 内面色調	焼成	スス・コゲ	備考
493	62	96	XⅣE1b Ⅲ・Ⅳ層	深鉢（鉢）	後晩期	口縁部片	口：無文；胴：沈線・縄文（LR）	ミガキ（斜）	黒褐 黒褐	やや不良	内面	
494	62	96	XⅣE5f Ⅳ層上面	深鉢	晩期	口縁部片	口：押圧による波状口縁・沈線	ナデ（横）	にぶい褐 褐	不良	外面	
495	62	96	XⅣE1c Ⅲ・Ⅳ層	深鉢	晩期	口縁部片	口：押圧による波状口縁・沈線	ナデ（横）	明黄褐 にぶい黄褐	不良		
496	62	96	XⅣE2h Ⅳ層上面	浅鉢	晩期	口縁部片	口：B突起・沈線・縄文（LR）	ナデ（横）	にぶい黄褐 にぶい黄橙	やや不良		
497	62	96	XⅣE5f Ⅳ層上面	深鉢	晩期	口縁部片	口：押圧による波状口縁　胴：縄文（LR）	ナデ（横）	灰黄褐 にぶい黄褐	良好	外面	
498	62	96	XⅣE5f Ⅳ層上面	深鉢	晩期	口縁部片	口：押圧による波状口縁　胴：縄文（LR）	ナデ（横）	にぶい黄 にぶい黄橙	良好		
499	62	96	XⅣE9c Ⅲ・Ⅳ層	鉢	大洞B	口縁部片	口：三叉文　胴：縄文（L）	ナデ（横）	にぶい黄橙 黒褐	不良		
500	62	96	調査地点不明	鉢	大洞B	口縁部片	口：波状口縁・三叉文　胴：縄文(LR)	ナデ（横）	灰黄褐 黒褐色	不良		
501	62	96	XⅣE9c Ⅲ・Ⅳ層	鉢	大洞BC	口縁部片	口：円孔・沈線　胴：縄文（L）→沈線	ナデ（横）	褐灰 褐灰	不良		
502	62	96	XⅣE5f Ⅳ層上面	鉢	大洞B～BC	口縁部片	口：沈線	ナデ（不明）	灰黄褐 にぶい黄橙	やや不良		
503	60	96	調査北端 Ⅳ層上面	鉢	大洞BC	口縁部片	口：B突起・沈線　胴：縄文（LR）	ナデ（横）	にぶい黄褐 灰黄褐	不良		
504	62	96	XⅣE8e Ⅲ・Ⅳ層	鉢	大洞BC	口～胴 1/4	口：刺入による波状口縁・羊歯状文　胴：縄文（LR）	ナデ（斜）	黒褐 黒褐	やや不良		
505	62	96	XⅣE9d Ⅲ・Ⅳ層	鉢	大洞BC	口縁部片	口：二叉の突起・押圧による波状口縁　胴：刺突・沈線・縄文（LR）	ナデ（横）	黒褐 黒褐	良好	内外面	
506	62	96	XⅣE8d Ⅲ・Ⅳ層	深鉢	晩期	胴部片	胴：沈線　胴部：縄文（LR）	ナデ（斜）	灰黄褐 黒褐	不良		
508	62	96	XⅣE2h Ⅳ層上面	深鉢	晩期	口縁部片	口：無文　胴：縄文（LR）	ナデ（横）	にぶい黄橙 橙	不良	外面	
507	62	96	XⅣE2h Ⅲ・Ⅳ層	鉢	大洞BC	胴部片	胴：縄文（LR）→沈線	ミガキ？	にぶい黄橙 黒褐	不良	内面	
509	63	96	調査北端 地点不明	鉢	大洞BC	口縁部片	口：B突起・沈線	ナデ（横）	にぶい黄橙 黒褐	不良		
509	63	96	XⅣD9j Ⅳ層上面	深鉢	後晩期	口縁部片	口：縄文（LR）	ナデ（横）	にぶい黄橙 黒褐	不良	内外面	
511	63	96	XⅣE2h F-Ⅳ層上面	深鉢	後晩期	口縁部片	口：結束縄文（RL）	ナデ（横）	にぶい黄橙 にぶい黄橙	やや不良		
512	63	96	XⅣE5f Ⅳ層上面	深鉢	後晩期	口縁部片	口：縄文（LR）	ナデ（横）	にぶい黄橙 にぶい黄橙	やや不良		
513	63	96	XⅣE9c Ⅲ・Ⅳ層	深鉢	後晩期	胴部片	胴：縄文（LR）	ナデ（横）	黒褐にぶい褐	不良		
514	63	96	XⅣE9c Ⅲ・Ⅳ層	深鉢	後晩期	口縁部片	口：無文・蕨状の沈線　胴：縄文（RL）	ナデ（横）	灰黄褐 灰黄褐	やや不良		
515	63	96	XⅣE5f Ⅳ層上面	深鉢	後晩期	口縁部片	口：縄文（LR）	ナデ（横）	黒褐 にぶい黄橙	やや不良	外面	
516	63	96	XⅣE1c Ⅲ・Ⅳ層	鉢	後晩期	胴部片	胴：縄文（RL）	ナデ（不明）	明黄褐 明黄褐	良好		外面朱塗り
517	63	96	XⅣE6e Ⅲ・Ⅳ層	深鉢	後晩期	口縁部片	口：縄文（LR）	ナデ（不明）	明黄褐 浅黄	良好		
518	63	96	調査地点不明	深鉢	後晩期	胴部片	縄文（LR）	ナデ（横）	にぶい黄橙 にぶい黄橙	良好		内外面朱塗り
519	63	96	XⅣE1d Ⅲ・Ⅳ層	深鉢	後晩期	底面のみ	底：縄代痕	ナデ（不明）	明褐 にぶい黄橙	不良		
520	63	96	XⅤE1c Ⅲ・Ⅳ層	台付鉢	後晩期	鉢部底面	底：底面	ナデ（横）	灰黄褐 にぶい黄橙	やや不良	外面	
521	63	96	XⅣD9j Ⅲ・Ⅳ層	鉢	後晩期	胴下～底	胴：縄文（LR）	ナデ（斜）	にぶい黄褐 黒褐	不良		
522	63	96	XⅣE8d 西側5m Ⅱ・Ⅳ層	深鉢	後晩期	底部片	胴：縄文（RL）	ナデ（斜）	にぶい褐 にぶい黄橙	不良		
523	63	96	XⅣE8d Ⅲ・Ⅳ層	深鉢	後晩期	口縁部片	口：隆帯（渦巻文）・刺突	－	明黄褐 明黄褐	やや良好		
524	63	96	調査東端 地点不明	注口土器	後期	注口部	無文	ナデ	明黄褐 明黄褐	やや良好		
525	63	96	XⅣE5f Ⅳ層上面	壺（ミニチュア？）	後晩期	胴・脚	胴：無文	ナデ（斜）	橙 橙	やや不良		

第７表　遺物観察表（石器・石製品）（１）

掲載番号	写真番号	図版番号	種別	出土地点・層位	分類	残存部位	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材	産地/年代	備考
14	64	14	石鏃	1号住居覆土下位	平基鏃	完形	33.92	16.72	3.67	1.71	買岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	
15	64	14	石鏃	1号住居炉焼部内	凹基無茎鏃	先端欠損	(13.68)	14.61	(3.12)	(0.43)	買岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	
16	64	14	石鏃	1号住居炉前庭部	－	両端欠損	(31.60)	(13.83)	8.74	(2.81)	買岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	
17	64	14	石鏃	1号住居覆土上位	－	脚部欠損	(23.60)	18.87	5.89	(1.63)	買岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	
18	64	14	敲磨器類	1号住居炉前庭部	敲打	完形	103.36	74.60	33.24	277.31	砂岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	被熱有
19	64	14	敲磨器類	1号住居炉前庭部	敲打	一部剥離	146.58	(66.45)	69.89	744.09	買岩	不明/中～古生代	
20	64	14	石皿	1号住居炉石	磨面のみ	完形	345.00	243.50	65.00	7900.00	凝灰岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	
21	64	15	石皿	1号住居覆土上位	磨・敲打・研溝	完形	239.50	216.50	110.50	2503.74	砂岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	
22	64	15	台石	1号住居炉石	敲打	端部欠損	(202.50)	(121.50)	(90.00)	5500.00	凝灰岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	
30	64	19	石鏃	2号住居覆土下位	凹基無茎鏃	完形	19.19	13.40	2.96	0.46	買岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	
31	64	19	石鏃	2号住居炉前庭部	未成品	完形	39.65	30.08	11.21	10.93	買岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	
32	64	19	石錐	2号住居覆土下位	－	完形	66.44	19.75	10.85	9.65	買岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	
33	64	19	石匙	2号住居覆土下位	縦型	完形	57.23	28.76	5.67	9.29	買岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	
34	64	19	石匙	2号住居覆土上位	縦型	完形	92.70	62.41	8.48	52.00	買岩	不明/中～古生代	
35	64	19	不定形石器	2号住居覆土下位	3	完形	92.16	62.10	21.81	80.07	買岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	
36	64	20	敲磨器類	2号住居炉前庭部	磨・凹	完形	102.39	95.32	61.68	877.83	安山岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	
37	65	20	石皿	2号住居炉前庭部	磨面のみ	1/3残存	(389.50)	(174.00)	(76.50)	2644.38	凝灰岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	
38	65	20	石皿	2号住居床面下5見内	磨面のみ	完形	332.95	233.00	59.00	6000.00	デイサイト	奥羽山脈/新生代新第三紀	
39	65	21	台石	2号住居床面上	磨面のみ	完形	275.50	192.50	122.50	7500.00	砂岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	
59	65	25	石匙	3号住居床面上	縦型	端部欠損	(70.75)	23.46	7.53	(9.34)	買岩	不明/中～古生代	
60	65	25	異状石器	3号住居覆土上位	－	完形	93.77	40.83	25.98	75.08	買岩	不明/中～古生代	
61	65	25	異状石器	3号住居覆土上位	－	完形	51.25	28.28	10.60	16.49	買岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	
62	65	25	不定形石器	3号住居覆土下位	1	完形	63.78	44.06	11.74	20.89	買岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	
63	65	25	フレイク類	3号住居覆土下位	Uフレイク(2c)	－	52.70	44.77	10.95	14.17	買岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	
64	65	26	敲磨器類	3号住居床面上	磨	完形	137.07	128.67	77.40	1440.37	デイサイト	奥羽山脈/新生代新第三紀	
65	65	26	敲磨器類	3号住居覆土上位	敲・研溝	完形		275.85	44.07	889.61	砂岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	敲打痕あり
83	65	31	石鏃	4号住居覆土下位	凹基無茎鏃	完形	19.75	13.99	3.58	0.60	買岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	
84	65	31	石鏃	4号住居覆土上位	平基鏃	完形	12.65	12.77	3.61	0.41	黒曜石	奥羽山脈/不明	分析結果北上地区北上A
85	65	31	石匙	4号住居覆土下位	縦型	先端欠損	(49.65)	(20.31)	6.85	(7.01)	買岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	
86	65	31	両極石器	4号住居覆土上位	－	－	29.28	36.87	10.60	11.67	買岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	
87	65	31	不定形石器	4号住居覆土上部内	1	1/2欠損	47.23	59.57	17.16	37.88	買岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	
88	66	32	敲磨器類	4号住居覆土下位	凹	2/3欠損	(109.78)	(79.54)	(38.38)	426.55	凝灰岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	
89	66	32	石皿	4号住居炉石	磨面のみ	端部欠損	192.50	(122.86)	50.88	1375.33	砂岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	
90	66	32	石皿	4号住居炉	敲打痕のみ	完形	243.50	182.00	48.50	2241.13	砂岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	
91	66	32	石皿	4号住居炉石	敲打面のみ	完形	244.50	125.97	58.01	1842.05	砂岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	
102	66	36	石匙	5号住居炉前庭部	縦型	端部欠損	(88.42)	18.11	10.07	(14.37)	買岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	
103	66	36	敲磨器類	5号住居覆土中	磨	完形	124.16	100.17	75.57	1366.91	凝灰岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	
104	66	36	敲磨器類	5号住居礫群内	磨・敲打	完形	121.92	91.01	75.66	1086.24	凝灰岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	
106	66	38	フレイク類	6号住居覆土上位	4b	－	24.54	20.19	6.06	2.32	黒曜石	奥羽山脈/不明	分析（IKK2-009）

第７表　遺物観察表（石器・石製品）（２）

掲載番号	写図番号	図版番号	種別	出土地点・層位	分類	残存部位	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材	産地/年代	備考
107	66	38	敲磨器類	6号住居 覆土中	磨	完形	62.48	53.98	28.58	102.61	砂岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	
109	66	40	敲磨器類	7号住居 覆土上位	凹	完形	103.37	82.86	49.29	405.65	砂岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	
118	66	42	敲磨器類	11号住居覆土上層	磨	完形	98.06	84.51	55.57	657.85	安山岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	擦痕？あり
155	66	54	石匙	26号土坑 覆土中	縦型	完形	48.65	27.47	8.17	5.97	頁岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	
156	66	54	不定形石器	27号溝 覆土下位	3	完形	67.81	39.83	14.65	40.34	頁岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	
157	66	54	石鏃	30号土坑 覆土上位	凹基無茎鏃	完形	20.98	18.15	5.58	1.28	頁岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	
158	66	54	敲磨器類	37号土坑 覆土上位	敲打・凹	完形	125.78	64.10	62.48	565.10	砂岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	
159	66	54	不定形石器	35号土坑 覆土中	2	完形	85.11	62.76	17.18	70.90	頁岩	不明/中～古生代	
160	67	54	異状石器	38号土坑 覆土中	－	完形	63.29	39.99	15.76	35.35	頁岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	
161	67	54	不定形石器	36号土坑 覆土下位	1	刃部欠損	84.85	(41.83)	10.62	(34.98)	頁岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	
162	67	55	敲磨器類	36号土坑 覆土下位	凹	完形	108.67	57.68	51.19	394.84	凝灰岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	
163	67	55	石皿	43号土坑 覆土上位	磨面のみ	完形	294.50	272.50	48.50	2818.28	砂岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	
164	67	55	不定形石器	48号土坑 覆土下位	1	端部欠損	(79.65)	32.43	11.16	(24.84)	頁岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	
165	67	55	敲磨器類	48号土坑 覆土中	敲打	完形	162.00	79.03	35.55	461.99	凝灰岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	
166	67	56	錘石器	49号土坑 覆土中	－	－	42.66	46.60	17.97	36.31	頁岩	不明/中～古生代	
167	67	56	異状石器	49号土坑 覆土中	－	完形	111.65	45.95	24.90	117.97	頁岩	不明/中～古生代	
168	67	56	敲磨器類	53号土坑 覆土中	敲打	完形	131.13	90.32	39.46	508.94	砂岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	
297	67	76	敲磨器類	71号土坑 覆土下位	磨・敲打	完形	93.87	61.82	53.01	335.12	砂岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	
298	67	76	敲磨器類	84号土坑 覆土中	敲打・凹	完形	78.46	84.48	69.65	472.62	凝灰岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	
299	67	76	ミニチュア	75号土坑 覆土下位	石皿型	完形	72.09	58.55	27.19	114.45	砂岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	
300	67	76	フレイク類	86号土坑 覆土下位	Uフレイク(3c)	－	55.65	53.70	21.19	57.16	頁岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	
301	67	76	敲磨器類	86号土坑 覆土中	凹	1/2欠損	(107.66)	(86.15)	(55.24)		砂岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	
302	67	76	敲磨器類	86号土坑 覆土下位	磨	完形	102.47	76.94	65.24	749.08	安山岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	
303	68	77	石皿	81号土坑 覆土上位	磨面＋敲打痕	完形	321.00	221.00	38.50	2495.74	砂岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	付着物あり
304	68	77	石皿	85号土坑 覆土中	磨面のみ	完形	305.50	235.50	92.00	7700.00	凝灰岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	
305	67	78	石鏃	87号土坑 覆土中	凸基有茎鏃	茎部欠損	(30.94)	14.49	5.53	(2.08)	珪質頁岩	不明/不明	
306	67	78	敲磨器類	87号土坑 覆土中	凹	一部剥離	104.98	59.50	52.50	331.45	凝灰岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	被熱有，研ぎ痕？
307	67	78	敲磨器類	88号土坑 覆土中	凹・研溝	2	123.12	(101.15)	(30.46)	474.03	砂岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	
308	67	78	石鏃	92号土坑 覆土中	平基有茎鏃	完形	(16.18)	12.56	3.62	(0.56)	珪質頁岩	不明/不明	
309	67	78	石匙	92号土坑 覆土中	斜型	完形	52.86	65.98	11.21	21.46	珪質頁岩	不明/不明	
310	67	78	礫器	92号土坑 覆土上位	－	完形	86.77	107.35	46.94	410.46	頁岩	不明/中～古生代	
311	67	78	敲磨器類	92号土坑 覆土下位	凹	完形	112.54	59.54	34.71	258.18	凝灰岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	
312	68	79	敲磨器類	94号土坑 覆土下位	磨	完形	106.71	89.89	87.27	1368.46	砂岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	
313	68	79	石皿	96号土坑 覆土中	磨面のみ	完形	163.50	117.12	49.25	648.51	凝灰岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	
314	68	79	敲磨器類	97号土坑 覆土中	磨・敲打	完形	120.40	87.89	81.24	989.67	砂岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	
315	68	79	敲磨器類	99号土坑 覆土中	凹	先端欠損	(145.41)	56.70	39.42	351.58	頁岩	不明/中～古生代	
316	68	79	敲磨器類	98号土坑 覆土中	凹	1/2欠損	(113.29)	(85.03)	(62.41)	592.79	凝灰岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	被熱痕あり
317	68	80	石鏃	102号土坑 覆土下位	尖基鏃	完形	17.78	7.71	3.19	0.39	珪質頁岩	不明/不明	
318	68	80	敲磨器類	102号土坑 覆土上位	凹・磨	完形	134.72	70.38	47.64	460.32	砂岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	

第７表　遺物観察表（石器・石製品）（３）

掲載番号	写図番号	図版番号	種別	出土地点・層位	分類	残存部位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石材	産地/年代	備考
319	68	80	敲磨器類	105号土坑 覆機土中	敲打	完形	98.68	67.76	49.35	319.92	凝灰岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	
320	68	80	敲磨器類	104号土坑 埋土上位	凹	完形	81.18	76.46	22.89	162.98	砂岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	
321	68	80	敲磨器類	106号土坑 埋土中	磨・凹・敲打	完形	160.50	80.23	50.49	670.07	砂岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	
322	68	80	石錘	107号土坑 埋土中	欠基錘（棒状）	完形	19.36	7.21	3.99	0.52	玉髓	不明/不明	
323	68	80	敲磨器類	107号土坑 埋土中	磨・凹	端部欠損	100.37	83.05	41.66	386.04	砂岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	
324	68	80	敲磨器類	107号土坑 埋土中	凹・敲打	完形	120.69	(99.00)	60.77	763.73			
325	68	81	敲磨器類	108号土坑 埋土中	敲打	完形	113.37	90.26	72.01	628.71	砂岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	擦痕あり
326	69	81	敲磨器類	110号土坑 埋土上位	磨・凹	完形	110.32	65.48	77.94	571.06	砂岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	
327	69	81	敲磨器類	11 2号土坑埋土上位	凹	1/3欠損	(94.97)	(55.58)	37.25	173.44	凝灰岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	
328	69	81	敲磨器類	113号土坑 覆亀中範囲	敲打	一部剥離	84.53	55.68	45.51	215.88	砂岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	
329	69	81	敲磨器類	113号土坑 埋土下位	敲打	完形	69.04	63.45	62.79	275.73	砂岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	
330	69	81	台石	113号土坑 覆亀中	敲打面のみ	端部欠損	(126.90)	146.07	91.66	1728.80	砂岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	
331	69	82	敲磨器類	118号土坑 埋土上位	敲打・凹	完形	84.89	72.31	58.16	359.99	凝灰岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	
332	69	82	敲磨器類	122号土坑 埋土上位	敲打・凹	完形	110.44	74.85	45.86	374.64	砂岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	被熱痕
333	69	82	石錘	126号土坑 埋土上位	凸基有茎錘	完形	38.94	15.71	6.14	2.33	珪質頁岩	不明/不明	
334	69	82	石錘	126号土坑 埋土下位	未成品	完形	39.16	21.42	9.47	4.16	頁岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	
335	69	82	石錘	129号土坑 埋土上位	凸基有茎錘	完形	25.81	13.66	4.57	0.91	頁岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	アスファルト付着
336	69	82	不定形石器	129号土坑 埋土上位	3	完形	77.57	49.59	15.67	61.06	頁岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	
338	69	84	石錘	1号焼都不明遺構埋土中	未成品	完形	49.10	26.61	12.07	11.99	頁岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	
339	69	84	石鏃	1号焼都不明遺構埋土中	斜型	完形	42.70	52.35	6.96	9.13	頁岩	不明/中～古生代	
340	69	84	石核	1号焼都不明遺構埋土中	－	－	52.51	36.68	32.39	53.26	頁岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	
341	69	84	敲磨器類	1号焼都不明遺構埋土中	磨	完形	142.60	115.71	58.42	141.159	デイサイト	奥羽山脈/新生代新第三紀	
346	69	86	敲磨器類	Pit35 埋土中	磨・凹	1/3欠損	(105.87)	(57.82)	35.65	144.35	凝灰岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	
347	69	86	敲磨器類	Pit59 埋土中	敲打・凹	1/3欠損	(102.87)	75.31	33.41		凝灰岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	
526	69	97	砥石	調１文化課トレンチ内	－	3/4欠損	(162.50)	(83.47)	(73.60)	958.90	凝灰岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	
527	69	97	石鏃	調塔北側IV層下位	凹基無茎鏃	完形	21.53	11.30	2.40	0.33	頁岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	
528	69	97	石鏃	調塔－46 IV層下位	平基鏃	完形	36.33	17.12	4.46	2.17	頁岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	
529	69	97	石鏃	調塔－11 IV層下位	凸基有茎鏃	7	(25.01)	16.24	(5.81)	(1.72)	頁岩	不明/中～古生代	アスファルト付着
530	69	97	尖頭器	調塔－1 IV層下位	－	端部欠損	(90.94)	25.50	10.42	(21.30)	頁岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	
531	69	97	尖頭器	調塔－7 IV層下位	－	1/2欠損	(66.56)	23.13	(10.80)	(18.84)	頁岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	
532	69	97	石鏃	調塔－37 IV層下位	縦型	完形	53.03	18.97	7.03	6.18	頁岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	洞片集中区
533	69	97	石鏃	調塔－40 IV層下位	縦型	完形	58.91	21.25	7.72	8.59	頁岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	
534	70	97	石匙	調塔－3 本柵内	縦型	完形	63.19	27.33	6.84	10.61	頁岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	
535	70	98	石匙	調塔－13 IV層下位	縦型	完形	69.83	18.15	5.27	7.71	頁岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	
536	70	98	石匙	調塔－140 IV層下位	縦型	完形	73.07	28.14	11.20	20.18	頁岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	
537	70	98	石匙	調塔－47 IV層下位	縦型	端部欠損	71.88	(31.91)	6.66	(11.87)	頁岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	
538	70	98	石匙	調塔－56 IV層下位	縦型	完形	60.36	33.04	8.57	14.50	頁岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	
539	70	98	石匙	調塔－54 IV層下位	斜型	完形	63.50	52.40	7.49	16.09	頁岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	
540	70	98	両側石器	調塔－9 IV層下位	－	－	38.41	43.24	11.69	20.98	頁岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	

第７表　遺物観察表（石器・石製品）（４）

掲載番号	写図番号	図版番号	種別	出土地点・層位	分類	残存部位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石材	産地/年代	備考
541	70	98	両極石器	調査－12 Ⅳ層下位	－	－	29.51	29.14	7.00	7.57	頁岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	
542	70	98	両極石器	T29中央 Ⅳ層下位	－	－	24.24	32.69	10.16	8.40	頁岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	
543	70	98	無茎石器	調査－南側 Ⅳ層下位	－	完形	63.89	40.48	14.34	31.83	頁岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	
544	70	98	無茎石器	調査－12 Ⅳ層下位	－	完形	58.01	35.68	16.57	24.70	頁岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	
545	70	99	無茎石器	調査－46 Ⅳ層下位	－	完形	88.67	45.54	18.43	72.69	頁岩	不明/中～古生代	
546	70	99	不定形石器	調査－1 表面内	1	端部欠損	(68.79)	42.84	12.23	(24.44)	頁岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	
547	70	99	不定形石器	調査－47 Ⅳ層下位	1	完形	74.89	68.18	20.34	79.96	頁岩	不明/中～古生代	
548	70	99	不定形石器	調査－37 Ⅳ層下位	1	完形	55.53	49.39	9.50	18.51	頁岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	剥片集中範囲
549	70	99	不定形石器	調査西端 沢斜面	3	完形	46.65	42.91	12.49	19.66	頁岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	
550	70	99	不定形石器	調査－4 Ⅳ層中	3	完形	40.91	67.48	15.56	36.73	頁岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	
551	70	100	不定形石器	調査－8 Ⅳ層中	3	完形	72.51	54.00	23.90	93.22	頁岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	
552	70	100	異形石器	調査－7 Ⅳ層下位	－	完形	28.11	18.37	4.03	1.68	頁岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	
553	70	100	異形石器	調査－11 Ⅳ層下位	－	端部欠損	(37.02)	17.54	5.59	2.52	珪質頁岩	不明/不明	
554	70	100	フレイク類	調査－13 Ⅳ層中	Uフレイク (1c)	－	52.12	52.80	12.24	24.73	頁岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	
555	70	100	フレイク類	調査－38 Ⅳ層下位	Uフレイク (4d)	－	25.37	26.48	8.39	2.12	黒曜石	奥羽山脈/不明	分析（IKK2-010）
556	70	100	フレイク類	調査－7 Ⅳ層上位	Rフレイク (4d)	－	29.24	36.12	6.31	5.83	頁岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	
557	71	100	石核	調査－21 包含層 東上段	－	－	45.96	52.81	37.25	80.83	珪質頁岩	不明/不明	
558	71	101	石核	調査－21 包含層 東上段	－	－	43.41	60.72	15.64	34.88	頁岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	
559	71	101	フレイク類	調査－37 Ⅳ層下位	4a	－	48.87	67.80	32.11	78.06	頁岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	剥片集中範囲
560	71	101	フレイク類	調査－37 Ⅳ層下位	4a	－	66.97	82.05	28.72	137.88	頁岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	剥片集中範囲
561	71	101	磨製石斧	調査－1 Ⅳ層下位	－	基部のみ	(56.00)	(43.22)	(23.19)	(96.44)	頁岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	被熱痕
562	71	101	石錘	調査-53 Ⅳ層下位	－	完形	70.79	52.68	18.94	84.08	頁岩	不明/中～古生代	
563	71	102	礫器	調査北東端 I層	－	刃部欠損	190.00	(79.63)	(55.83)	597.99	頁岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	石敷か
564	71	102	敲磨器類	調査－21 包含層 東上段	1	完形	115.71	94.83	63.20	946.39	デイサイト	奥羽山脈/新生代新第三紀	
565	71	102	敲磨器類	調査－46 Ⅳ層下位	敲打・凹	完形	109.20	47.55	25.40	184.23	頁岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	
566	71	102	敲磨器類	調査－3 Ⅳ層下位	磨	完形	119.24	107.48	65.59	1260.46	安山岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	
567	71	102	石皿	調査－21 東上段	磨面のみ	ほぼ完形	245.50	197.00	65.50	3500.00	凝灰岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	
568	71	102	石棒	調査－2 Ⅳ層下位	－	体部片	(50.61)	(43.44)	(33.75)	66.52	安山岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	付着物有
569	71	103	石鏃	XⅢF10 LⅣ層下位	凹基有茎鏃	完形	15.28	13.24	3.24	0.41	チャート	不明/不明	分析（IKK2-008）
570	71	103	石鏃	XⅢF10 Ⅳ層下位	先基鏃（棒状）	完形	33.62	9.90	3.83	0.94	頁岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	
571	71	103	石匙	XⅢF7I Ⅳ層下位	縦型	完形	51.79	28.42	7.02	6.49	頁岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	
572	71	103	石匙	調査－7 包含層	縦型	刃部欠損	74.92	(52.66)	9.06	(24.60)	頁岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	
573	71	103	石匙	調査－37 包含層	横型	完形	41.80	74.87	11.28	24.39	頁岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	
574	71	103	不定形石器	調査東端 Ⅱ～Ⅳ層	3	完形	108.37	44.96	23.64	90.73	頁岩	不明/中～古生代	
575	71	103	フレイク類	XⅥE3g Ⅳ層下位	Rフレイク (2b)	完形	57.66	31.03	9.83	7.18	頁岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	
576	71	103	フレイク類	XⅤE1c 包含層	Rフレイク (4c)	－	29.30	23.35	8.48	4.15	頁岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	
577	72	103	敲磨器類	調査東端 Ⅱ～Ⅳ層	敲打	完形	172.50	75.17	47.02	633.24	凝灰岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	
578	72	104	敲磨器類	XⅤE8i Ⅳ層下位	敲打	完形	119.19	77.39	50.82	488.92	凝灰岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	
579	72	104	砥石	調査東端 Ⅳ層下位	－	破片	(65.78)	(80.43)	(45.99)	171.33	凝灰岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	

第７表　遺物観察表（石器・石製品）（５）

掲載番号	写図番号	図版番号	種別	出土地点・層位	分類	残存部位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石材	産地/年代	備考
580	72	104	台石	XⅣE5d Ⅳ層中	敲打＋凹み	完形	177.00	137.78	75.50	1988.41	砂岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	
581	72	104	台石	XⅣE5ef Ⅳ層下位	凹痕	完形	265.50	136.00	68.50	2947.50	砂岩	奥羽山脈/新生代新第三紀	
582	72	104	石製品	XⅤE4d Ⅳ層下位	－	完形	86.88	60.08	18.06	66.31	頁岩	不明/中～古生代	

第８表　近代以降の遺物（瓶類）

掲載番号	種別	遺構名	層位	時期	残存部位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	備考
583	ガラス瓶	調査区区周辺	Ⅰ～Ⅱ層	近代以降	完形	1.9	19.4	5.5	「Coca-Cola」の印字
584	ガラス瓶	調査区区周辺	Ⅰ～Ⅱ層	近代以降	完形	1.9	19.4	5.5	「ファンタ　登録商標」の印字
585	ガラス瓶	調査区区周辺	Ⅰ～Ⅱ層	近代以降	完形	1.9	28.2	5.5	
586	ガラス瓶	調査区区周辺	Ⅰ～Ⅱ層	近代以降	完形	6.2	10.5	5.3	「UniCup」の印字
587	ガラス瓶	調査区区周辺	Ⅰ～Ⅱ層	近代以降	完形	1.9	21.0	5.1	
588	ガラス瓶	調査区区周辺	Ⅰ～Ⅱ層	近代以降	完形	1.9	21.0	5.1	「いわて　桜顧」の印字
589	ガラス瓶	調査区区周辺	Ⅰ～Ⅱ層	近代以降	完形	3.3	14.1	5.2	「Meiji」の印字
590	ガラス瓶	調査区区周辺	Ⅰ～Ⅱ層	近代以降	完形	3.3	14.1	5.2	「Zenraku　ゼンラク」の印字
591	ガラス瓶	調査区区周辺	Ⅰ～Ⅱ層	近代以降	完形	3.3	14.1	5.2	「みちのく」の印字
592	ガラス瓶	調査区区周辺	Ⅰ～Ⅱ層	近代以降	完形	3.3	14.1	5.2	「小岩井」の印字
593	磁器　瓶	調査区区周辺	Ⅰ～Ⅱ層	近代以降	完形	3.1	13.0	5.9	「ホテル　鹿松庵」の印字

第９表　近代以降の遺物（石製品）

掲載番号	写真図版	種別	遺構名	層位	残存部位	時期	石材	産地		径 (cm)	高さ (cm)	彫込み径 (cm)	備考
594	72	石臼	調査範囲北端トレンチ	Ⅰ～Ⅱ層	上臼のみ	近代以降	安山岩	奥羽山脈	新生代新第三紀	33.0	13.2	4.5	

Ⅶ 自然科学分析

1 放射性炭素年代測定（AMS測定）

株式会社　加速器分析研究所

（1） 測定対象試料

大平野Ⅱ遺跡は、岩手県奥州市胆沢区若柳字大平野１ほか（北緯39° 05' 34"、東経140° 52' 05"）に所在する。胆沢川の支流、前川北岸の段丘上に立地し、遺跡から0.5km南東に前川が流れる。測定対象試料は、３号住居（SK33）炉埋設土器内出土炭化物（№１：IAAA－111854）、92号土坑（SK102）埋土上位出土炭化物（№２：IAAA－111855）の合計２点である（表１）。

（2） 測定の意義

炭化物が出土した遺構の埋没時期や出土土器の廃絶時期を明らかにする。

（3） 化学処理工程

1）メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
2）酸-アルカリ-酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常１mol/１（１M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001Mから１Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が１Mに達した時には「AAA」、１M未満の場合は「AaA」と表１に記載する。
3）試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO_2）を発生させる。
4）真空ラインで二酸化炭素を精製する。
5）精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。
6）グラファイトを内径１mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

（4） 測定方法

加速器をベースとした^{13}C－AMS専用装置（NEC社製）を使用し、^{14}Cの計数、^{13}C濃度（^{13}C/^{12}C）、^{14}C濃度（^{14}C/^{12}C）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOxⅡ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

（5） 算出方法

1）δ^{13}Cは、試料炭素の^{13}C濃度（^{13}C/^{12}C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（表1）。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
2）^{14}C年代（Libby Age：yrBP）は、過去の大気中^{14}C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。^{14}C年代はδ^{13}Cによって同位体効果を補正す

る必要がある。補正した値を表１に、補正していない値を参考値として表２に示した。^{14}C年代と誤差は、下１桁を丸めて10年単位で表示される。また、^{14}C年代の誤差（±１σ）は、試料の^{14}C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2％であることを意味する。

３）pMC（percent Modern Carbon）は、標準現代炭素に対する試料炭素の^{14}C濃度の割合である。pMCが小さい（^{14}Cが少ない）ほど古い年代を示し、pMCが100以上（^{14}Cの量が標準現代炭素と同等以上）の場合Modernとする。この値もδ^{13}Cによって補正する必要があるため、補正した値を表１に、補正していない値を参考値として表２に示した。

４）暦年較正年代とは、年代が既知の試料の^{14}C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の^{14}C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、^{14}C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、１標準偏差（１σ=68.2％）あるいは２標準偏差（２σ=95.4％）で表示される。グラフの縦軸が^{14}C年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、δ^{13}C補正を行い、下一桁を丸めない^{14}C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal09データベース（Reimer et al. 2009）を用い、OxCalv4.1較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表２に示した。暦年較正年代は、^{14}C年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」（または「cal BP」）という単位で表される。

（６）測定結果

炭化物の^{14}C年代は、SK33炉 埋設土器内出土の№１が4110±20yrBP、SK102埋土上位出土の№２が2860±20yrBPである。暦年較正年代（１σ）は、№１が2849～2586cal　BC、№２が1054～949cal BCの間に各々複数の範囲で示され、№１は縄文時代中期後葉頃、№２は晩期中葉頃に相当する。

試料の炭素含有率はいずれも60％を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

（７）調査担当者のコメント

今回の調査で縄文時代中期後葉から末葉（大木９～10式期）、および晩期中葉（大洞BC式期）に帰属する遺構を多く検出した。そこで、両時期の遺構から採取できた炭化物を元にそれぞれの時期のAMS年代測定を試みるべく、依頼した。

３号住居は炉の埋設土器が大木10式古段階に比定され、その炉内で採取した炭化物を試料とした。92号土坑は埋土下位から大洞BC式の鉢が出土しており、その鉢の周囲で採取した炭化物を試料とした。

同定結果については上記に示された通りである。概ね、想定された年代観であり、過去に当センターが調査した同時代同時期の遺跡から採取した炭化物年代測定の結果とほぼ一致する。

表１

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ ^{13}C (‰) (AMS)	δ ^{13}C補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA－111854	№１	SK339炉　埋設土器内	炭化物	AAA	-22.06±0.36	4,110±20	59.95±0.18
IAAA－111855	№２	SK102　埋土上位	炭化物	AAA	-24.31±0.34	2,860±20	70.08±0.20

[#4735]

表２

測定番号	δ ^{13}C補正なし		暦年較正用 (yrBP)	１σ暦年代範囲	２σ暦年代範囲
	Age（yrBP）	pMC（%）			
IAAA－111854	4,060±20	60.31±0.18	4,110±24	2849calBC-2813calBC（19.2%） 2741calBC-2730calBC（4.8%） 2694calBC-2688calBC（2.5%） 2679calBC-2619calBC（35.5%） 2607calBC-2600calBC（3.2%） 2593calBC-2586calBC（3.0%）	2861calBC-2808calBC（24.2%） 2757calBC-2719calBC（11.8%） 2705calBC-2577calBC（59.4%）
IAAA－111855	2,840±20	70.18±0.20	2,856±23	1054calBC-976calBC（66.8%） 952calBC-949calBC（1.4%）	1116calBC-971calBC（86.0%） 961calBC-934calBC（9.4%）

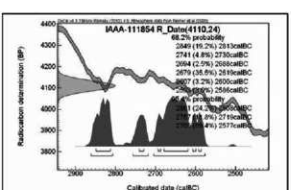
［参考値］

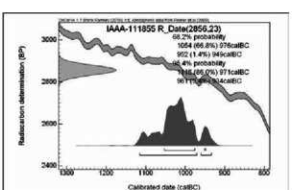
参考文献

Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion：Reporting of ^{14}C data, Radiocarbon 19 (3) , 355-363

Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51 (1) , 337-360

Reimer, P.J. et al. 2009 IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 51 (4) , 1111-1150





【参考】暦年較正年代グラフ

2　火山灰同定分析

株式会社　火山灰考古学研究所

（1）は　じ　め　に

東北地方岩手県南部とその周辺に分布する後期更新世以降に形成された地層や土壌の中には、焼石、栗駒、鳴子、肘折、十和田など東北地方の火山のほか、洞爺、浅間、御岳、三瓶、阿蘇、姶良、鬼界など遠方の火山に由来するテフラ（火山砕屑物，いわゆる火山灰）が数多く認められる（Arai et al., 1986，町田・新井，1992，2003など）。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている指標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっている。

そこで、テフラ層またはテフラ粒子を多く含む可能性のある堆積物が認められた奥州市大平野Ⅱ遺跡でも、発掘調査担当者により採取された試料を対象に、テフラ検出分析、火山ガラス比分析と重鉱物組成分析を合わせたテフラ組成分析、火山ガラスの屈折率測定を実施して、その起源を明らかにすることになった。

分析の対象となった試料は、試料１（６号土坑・４層）および試料２（102号土坑・２層）の２点である。

（2）テフラ検出分析

①分析試料と分析方法

試料１（６号土坑・４層）および試料２（102号土坑・２層）を対象として、テフラ粒子の量や特徴を定性的に求めるテフラ検出分析を行った。分析の手順は次の通りである。

1）試料1（６号土坑・４層）について７g、また試料２（102号土坑・２層）について６gを秤量。
2）超音波洗浄により泥分を除去。
3）80℃で恒温乾燥。
4）実体顕微鏡下でテフラ粒子の相対的な量や特徴を観察。

②分析結果

テフラ検出分析の結果を第７表の表①に示す。いずれの試料からも、軽石やスコリアは検出されなかった。試料１（６号土坑・４層）には、軽石型、分厚い中間型、平板状のいわゆるバブル型の火山ガラスが多く含まれている。軽石型には白色や無色透明、中間型には無色透明や褐色、バブル型には無色透明のものが多い。火山ガラスの最大径は0.7㎜である。試料２（102号土坑・２層）にも、軽石型、分厚い中間型、平板状のいわゆるバブル型の火山ガラスが比較的多く含まれている。軽石型には白色や無色透明、中間型には無色透明や褐色、バブル型には無色透明のものが多い。火山ガラスの最大径は0.9㎜である。

（3）テフラ組成分析（火山ガラス比分析・重鉱物組成分析）

①分析試料と分析方法

試料１（６号土坑・４層）および試料２（102号土坑・２層）について、火山ガラス比分析と重鉱物組成分析を合わせたテフラ組成分析を行い、火山ガラスの色調形態別含有率や、重鉱物組成を定量的に

求めた。分析の手順は次の通りである。

1）テフラ検出分析済みの試料について、分析篩を用いて1/4～1/8㎜と1/8～1/16㎜の粒子を篩別。

2）偏光顕微鏡下で1/4～1/8㎜粒径の250粒子を観察し、火山ガラスの色調形態別含有率を求める（火山ガラス比分析）。合わせて軽鉱物と重鉱物の含有率についても明らかにする。

3）偏光顕微鏡下で1/4～1/8㎜粒径の重鉱物250粒子を観察し、重鉱物組成を求める（重鉱物組成分析）。

②分析結果

テフラ組成分析の結果をダイヤグラムにして第105図に、火山ガラス比と重鉱物組成の内訳を第7表の表②と表③に示す。試料1（6号土坑・4層）では、火山ガラスが44.4%を占める。含まれる火山ガラスは、多い順に繊維束状の軽石型（24.4%）、スポンジ状の軽石型（16.8%）、中間型（2.0%）、無色透明のバブル型（1.2%）である。また、軽鉱物と重鉱物の含有率は、各々19.2%と7.2%で、重鉱物としては、多い順に不透明鉱物（黒色で光沢をもつもの：おもに磁鉄鉱，49.2%）、斜方輝石（30.4%）、単斜輝石（18.4%）が認められる。

試料2（102号土坑・2層）でも、火山ガラスが54.0%を占める。含まれる火山ガラスは、多い順に繊維束状の軽石型（28.4%）、スポンジ状の軽石型（23.2%）、中間型（2.0%）、無色透明のバブル型（0.4%）である。また、軽鉱物と重鉱物の含有率は、各々19.2%と7.2%で、重鉱物としては、多い順に不透明鉱物（黒色で光沢をもつもの：おもに磁鉄鉱，49.2%）、斜方輝石（33.2%）、単斜輝石（16.4%）が認められる。

（4）屈折率測定

①測定試料と測定方法

テフラ組成分析の対象となった2試料に含まれる火山ガラスについて、温度変化型屈折率測定装置（古澤地質社製MAIOT）により屈折率（n）の測定を行って、指標テフラとの同定精度の向上を図った。屈折率測定の対象は、1/8－1/16㎜粒径の火山ガラスである。

②測定結果

屈折率測定の結果を第8表に示す。試料1（6号土坑・4層）に含まれる火山ガラス（31粒子）の屈折率（n）は、1.501－1.509（中央値：1.504）である。また、試料2（102号土坑・2層）に含まれる火山ガラス（31粒子）の屈折率（n）は、1.501－1.506（中央値：1.503）である。

（5）考　　察

試料1（6号土坑・4層）および試料2（102号土坑・2層）に含まれるテフラ粒子は、火山ガラスの屈折率が後者でやや低い傾向にあるものの、火山ガラスの色調形態別組成や最大径、さらに重鉱物の組み合わせなどから、同じテフラに由来すると推定される。この繊維束状や軽石型の火山ガラスに富み、斜方輝石と単斜輝石が多いいわゆる両輝石型のテフラについては、火山ガラスの屈折率特性も合わせると、915年に十和田火山から噴出した十和田ａテフラ（To－a，大池，1972，町田ほか，1981，町田・新井，1992，2003）の可能性が高い。

なお、これら2試料が採取された堆積物については、分析者が現地の土層を観察していないことか

ら、ここで一次堆積層か否かの判断は難しい。今後、現地調査を含めた分析に期待したい。なお、さらに同定精度を向上させる必要がある場合には、信頼度の高いエレクトロンプローブX線マイクロアナライザーを利用した火山ガラスの主成分化学組成が有効と考えられる。

（6）　ま　と　め

奥州市大平野Ⅱ遺跡で採取されたテフラ試料２点を対象に、テフラ検出分析、テフラ組成分析（火山ガラス比分析・重鉱物組成分析）、火山ガラスの屈折率測定を行った。その結果、いずれからも十和田ａテフラ（To－a，A.D.915年）に由来する可能性が高いテフラ粒子が多く検出された。

（7）　調査担当者のコメント

調査Ⅰ・Ⅶ・Ⅸ区において、遺構埋土、特に埋土上位に灰白色の火山灰がブロックで混入するのを数箇所で確認した。各調査区に分布する遺構群は縄文時代を主体とする。ただし細かくみてみると各調査区同士は時期が少しずつずれており、重複していない。そういった環境中で、遺構埋土火山灰ブロックが混入する点は共通していた。今回、Ⅰ区の６号土坑、Ⅷ区の102号土坑で検出した火山灰について産地同定を依頼した。そして上記の通り、どちらも十和田ａテフラであるとの同定結果を得た。十和田ａテフラの降下期は915年と考えられており、縄文時代に帰属すると考えている両遺構の時期とは異なる。ただし重要なのはどちらの調査区でも同じ火山灰が埋土上位にブロックで混入していた点であり、これはすなわち縄文時代の遺構が火山灰降下期まで埋没しきらずに浅い窪地として残存していたことを推定される。同様に埋土上位へ火山灰が混入する遺構は多く、遺構の埋没過程を考える上でも、意義のある同定結果となったと考える。

参考文献

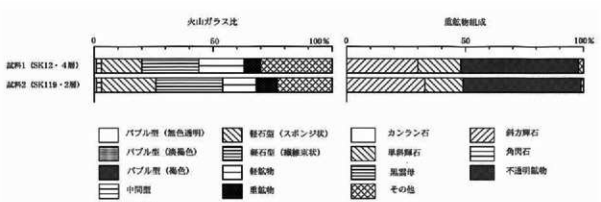
Arai, F., Machida, H., Okumura, K., Miyauchi, T., Soda, T. and Yamagata, K. (1986) Catalog for late Quaternary marker- tephras in Japan Ⅱ -tephras occurring in northeast Honshu and Hokkaido-. Geogr. Rept. Tokyo Metropol. Univ., 21, p.223-250.

町田　洋・新井房夫（1992）火山灰アトラス．東京大学出版会，276p.

町田　洋・新井房夫（2003）新編火山灰アトラス．東京大学出版会，336p.

町田　洋・新井房夫・森脇　広（1981）日本海を渡ってきたテフラ．科学，51,p.562-569.

大池昭二（1972）十和田火山東麓における完新世テフラの編年．第四紀研究，11,p.232-233.



第105図　火山灰テフラ組成ダイヤグラム

第10表　火山灰分析ガラス重鉱物分析結果

表① テフラ検出分析結果

試料（層位）	軽石・スコリア			火山ガラス			
	量	色調	最大径	量	形態	色調	最大径
試料1（SK12・4層）				***	pm（fb,sp）> md，bw	wh，cl,br	0.7mm
試料2（SK119・2層）				**	pm（fb,sp）> md，bw	wh，cl,br	0.9mm

bw：バブル型，md：中間型，pm：軽石型，cl：透明，wh：白色，sp：スポンジ状，fb：繊維束状．
***：とくに多い，**：多い，*：多い，*：少ない．

表② 火山ガラス比分析結果

試料	bw（cl）	bw（ph）	bw（br）	md	pm（sp）	pm（fb）	軽鉱物	重鉱物	その他	合計
試料1（SK12・4層）	3	0	0	5	42	61	48	18	73	250
試料2（SK119・2層）	1	0	0	5	58	71	36	22	57	250

bw：バブル型，md：中間型，pm：軽石型，cl：透明，wh：白色，sp：スポンジ状，fb：繊維束状．
数字は粒子数．

表③ 重鉱物組成分析結果

試料	ol	opx	cpx	am	bi	opq	その他	合計
試料1（SK12・4層）	0	76	46	0	0	123	5	250
試料2（SK119・2層）	0	83	41	0	0	123	3	250

ol：カンラン石，opx：斜方輝石，cpx：単斜輝石，am：角閃石，bi：黒雲母，opq：不透明鉱物（おもに磁鉄鉱）．
数字は粒子数．

第11表　屈折率測定結果

試料（地点・層位）	火山ガラスの屈折率（n）	測定粒子数	文献
大平野Ⅱ遺跡・試料1（SK12・4層）	1.501-1.509（1.504）	31	本報告
大平野Ⅱ遺跡・試料2（SK119・2層）	1.501-1.506（1.503）	31	本報告
十和田a（To-a，915AD）	1.500-1.508（註1）		町田・新井（2003）
十和田中掘（To-Cu，6ka）	1.508-1.512		町田・新井（2003）
（安家火山灰，岩手県岩泉町）	1.507-1.513		早田はか（1988）
（吾妻火山灰，福島県東吾妻）	1.507-1.512		早田はか（1988）
鬼界アカホヤ（K-Ah，7.3ka）	1.508-1.516		町田・新井（2003）
射折尾花沢（Hj-O，11-12ka*1）	1.499-1.504		町田・新井（2003）
十和田八戸（To-H，15ka）	1.505-1.509		町田・新井（2003）
浅間草津（As-K,15-16.5ka）	1.501-1.503		町田・新井（2003）
浅間板鼻黄色（As-YP，15-16.5ka）	1.501-1.505		町田・新井（2003）
鳴子苅沼上原（Nr-KU）	1.492-1.500		町田・新井（2003）
姶良Tn（AT,28-30ka）	1.499-1.501		町田・新井（2003）
十和田大不動（To-Of,≅32ka）	1.505-1.511		町田・新井（2003）
幾石山形（Yk-Y）	1.500-1.503		町田・新井（2003）
鳴子横沢（Nr-Y，41-43ka）	1.500-1.503		町田・新井（2003）
阿蘇4（Aso-4，85-90ka）	1.506-1.510		町田・新井（2003）
鳴子荷坂（Nr-N，90ka）	1.500-1.502		町田・新井（2003）
射折北原（Hj-Kth，90-100ka）	1.499-1.502		町田・新井（2003）
三瓶木次（SK，110-115ka）	1.496-1.498		町田・新井（2003）
洞爺（Toya，112-115ka）	1.494-1.498		町田・新井（2003）

註1：岩手・秋田地域での屈折率，（）：中央値，ka：1,000年前，*1：放射性炭素（14C）年代．

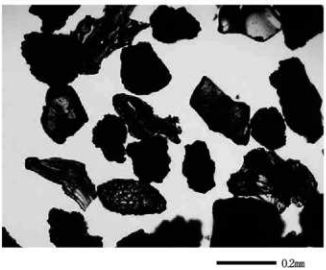


写真１　試料１（SK12・４層）
繊維束状軽石型ガラス：中央左・左上・左下
スポンジ状軽石型ガラス：中央左・左下
斜方輝石：中央右・左中央

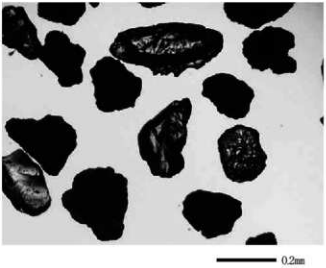


写真２　試料１（SK12・４層）
単斜輝石：中央

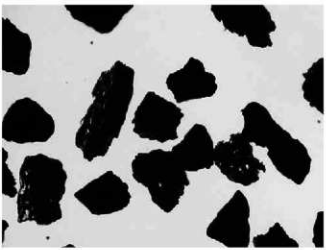


写真３　試料２（SK119・２層）
繊維束状軽石型ガラス：中央左・左下
スポンジ状軽石型ガラス：中央右下

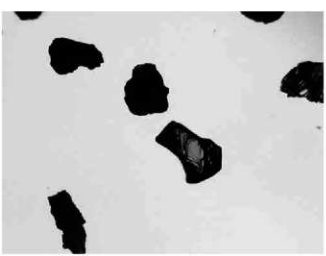


写真４　試料２（SK119・２層）
単斜輝石：中央

3　黒曜石産地同定分析

明治大学文化財研究施設運営委員　杉原重夫
明治大学文化財研究施設　金成太郎
明治大学文学部ＲＡ　佐藤裕亮・弦巻千晶

（1）測定方法

蛍光Ｘ線法を用いて黒曜石の正確な元素分析値を得るには、内部が均質で表面形態が一様な試料を作成し、検量線法などによって定量的に分析を行うのが一般的である。そのためには、試料を粉砕してプレスしたブリケットを作成するか、もしくは溶融してガラスビードを作成する必要がある。しかしながら、遺跡から出土した遺物は、通常、非破壊での測定が要求されるため、上記の方法をとることは困難である。そのため、遺物に直接Ｘ線を照射する定性（半定量）分析が行われている。このような直接照射によって発生する蛍光Ｘ線の強度そのものは、試料の状態や装置の経年変化によって変動する可能性が高いが、特定元素の強度同士の比を採った場合はその影響は小さいと考えられている。今回は測定強度比をパラメータとして原産地推定を行った。

（2）試料の前処理

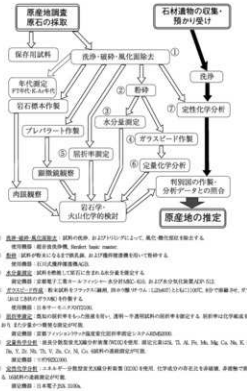
比較用の産出地採取原石については、必要に応じて新鮮な破断面または研磨面を作製し、超音波洗浄器によるクリーニングを行った。遺跡出土石器は、多くの場合新鮮で平滑な剥離面があるため、試料表面をメラミンスポンジとアルコールで洗浄してから測定を行った。特に汚れがひどい遺物のみ超音波洗浄器を用いた。

（3）装置・測定条件

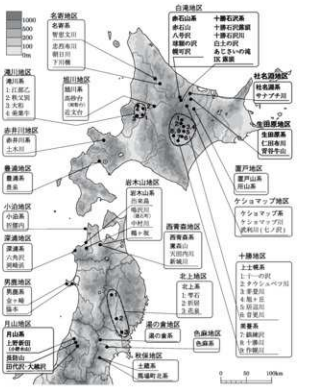
蛍光Ｘ線の測定にはエネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置JSX－3100s（日本電子株式会社）を用いた。Ｘ線管球は、ターゲットがRh（ロジウム）のエンドウインドウ型を使用した。管電圧は30kV、電流は抵抗が一定となるよう自動設定とした。Ｘ線検出器はSi（ケイ素）/Li（リチウム）半導体検出器を使用した。試料室内の状態は真空雰囲気下とし、Ｘ線照射面径は15㎜とした。測定時間は、240secである。測定元素は、主成分元素はケイ素（Si）、チタン（Ti）、アルミニウム（Al）、鉄（Fe）、マンガン（Mn）、マグネシウム（Mg）、カルシウム（Ca）、ナトリウム（Na）、カリウム（K）の計９元素、微量元素はルビジウム（Rb）、ストロンチウム（Sr）、イットリウム（Y）、ジルコニウム（Zr）の計４元素の合計13元素とした。また、Ｘ線データ解析ソフトには、明治大学文化財研究施設製：JsxExtを使用した。

（4）原産地推定の方法

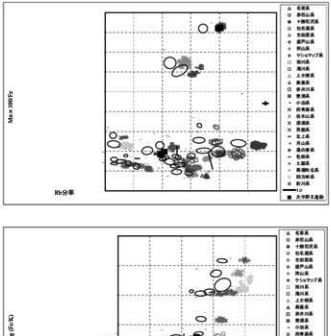
黒曜石はケイ酸、アルミナ等を主成分とするガラス質火山岩であるが、その構成成分は産出地による差異が認められる。とりわけ微量元素のRb、Sr、Y、Zrでは産出地ごとの組成差がより顕著となっている。望月は、この産地間の組成差から黒曜石の産地推定が可能であると考え、上記の４元素にK、Fe、Mnの３元素を加えた計７元素の強度比を組み合わせることで産地分析を行っている（望月ほか1994，望月1997）。これら7元素による原産地分析の有効性は、ガラスビードを用いた定量分析によっ



第106図　分析作業フローチャート



第107図　北日本の黒曜石原産地



第108図　分析グラフ

ても裏付けられている（嶋野ほか2004）。ここでも、上記した望月の判別方法に準拠する形をとることとし、原産地推定のパラメータにRb分率〔Rb強度×100/（A=Rb強度+Sr強度+Y強度+Zr強度）〕、Sr分率（Sr強度×100/A）、Mn強度×100/Fe強度、log（Fe強度/K強度）を用いて判別図を作製し、判別分析はZr分率（Zr強度×100/A）を加えて行った。

（5）　黒曜石原産地の判別

①判別図

判別図は、視覚的に分類基準が捉えられる点、および判定基準が分かりやすいというメリットがある。また、測定結果の提示に際し、読者に理解しやすいという点も有効であろう。まず、各産出地採取試料（基準試料）の測定データを基に２種類の散布図（Rb分率vs　Mn×100/Fe、Sr分率vs　log（Fe/K））を作製し、各原産地を推定するための判別域を決定した。次に遺物の測定結果を重ね合わせて大まかな判別を行った。基準試料の測定強度比の平均値を第108図に示す。

②判別分析

判別図や測定値の比較による原産地の推定は、測定者ごとの恣意的な判断を完全に排除することは難しい。そこで、多変量解析の一つである判別分析を行った。判別分析では、上記のパラメータを基にマハラノビス距離を割り出し、各原産地に帰属する確率を求めた。距離と確率とは反比例の関係にあり、資料と各原産地の重点間の距離が最も短い原産地（群）が第一の候補となる。なお、分析用ソフトには明治大学文化財研究施設製：MDR1.02を使用した。また、判別結果の参考資料として、各原産地（重点）間のマハラノビス距離を提示した（第12表）。

（6）　石器の原産地推定結果

今回測定したのは、岩手県奥州市大平野Ⅱ遺跡（縄文時代前～晩期）から出土した黒曜石製遺物である。測定した遺物は７点であり、原産地が判別できた遺物は５点である。

原産地推定の結果は、北上地区北上系Ａが３点、男鹿地区男鹿系が２点であった。

第12表　黒曜石製遺物の原産地推定結果

試料No.	Rb分率	Sr分率	Zr分率	Mn×100/Fe	Log(Fe/K)	候補１	確率	距離	候補２	確率	距離
IKK2008	チャート										
IKK2009	20.814	22.672	41.118	3.934	0.420	北上系Ａ	1.000	5.130	登浦系	0.00	525.34
IKK2010	19.303	23.421	42.971	3.659	0.457	北上系Ａ	1.000	7.901	霧戸山系	0.00	542.71
IKK2011	19.465	24.786	40.766	3.628	0.118	判別不可	-	-	-	-	-
IKK2012	40.239	22.575	21.553	16.467	-0.073	男鹿系	1.000	2.263	岩本山系	0.00	366.64
IKK2013	19.621	24.830	41.721	3.664	0.476	北上系Ａ	1.000	5.111	ケショマップ系	0.00	624.89
IKK2014	39.617	23.118	21.339	16.396	-0.075	男鹿系	1.000	6.149	岩本山系	0.00	353.01

（7）　調査担当者のコメント

今回、出土した石器のなかで黒曜石を石材とするものの石材同定を依頼した。結果は上記の通りであり、この結果は第７表にも反影させている。北上山地系３点出土しているということで、本遺跡の黒曜石が遠来の産地ではなく周辺地域を選択する傾向が強いのかもしれない。ただ男鹿地区も２点あるので断定はできない。なお、他の石器石材について言えば周辺地域から産出したものを多く利用する傾向が強い。

Ⅷ 総　括

（1）は　じ　め　に

今回の調査を含め、6回にわたる発掘調査を経て、大平野Ⅱ遺跡は遺跡推定範囲のほぼ全域が調査されたことになる。そしてその調査の結果、縄文時代早期中葉～後葉・前期前葉・中期初頭・中期後葉～末葉・後期初頭～後葉・晩期中葉～後葉の遺物が出土し、また縄文時代早期中葉・前期前葉・中期後葉～末葉・後期前葉・晩期中葉の遺構を検出した。その他に古代・中世の遺構・遺物もみつかっており、長きにわたる、人間の生活の痕跡が残された遺跡であることが判明した。この章では、今回調査の出土遺物・検出遺構について概観し、その中で、特に遺跡の主要となる縄文時代中期と後晩期の集落についてみていき、大平野Ⅱ遺跡の性格付けを行うこととする。

（2）出土した縄文土器について（第109図）

早期中葉

蛇王洞Ⅱ式と物見台式に比定される土器片が見つかっている。どちらも出土した土器は小片で、出土量も少ない。出土地点・層位は調査Ⅶ区の北側、Ⅳ層下位を主体とし両者の分布に偏りは見いだせない。なお、両型式は今日、時期差があるものとの指摘もあり、特に蛇王洞Ⅱ式は早期前葉に位置づけられる可能性もある。ただ今回は少量であることも鑑み中葉の範疇に含めた。なお平成22年度の調査では早期後葉に比定される条痕文土器が出土しているが、今回の調査では見つかっていない。

前期前葉

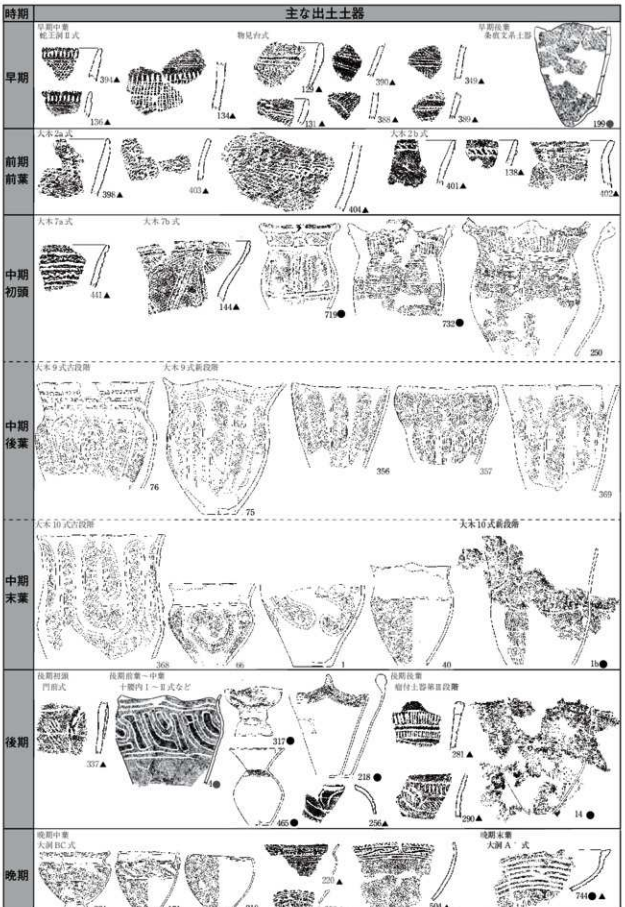
大木2a・2b式に比定される土器が見つかっている。どちらも出土した土器は破片で、出土量も少ない。出土地点・層位は調査Ⅶ区の北側、Ⅳ層下位を主体とし、また同範囲に分布する土坑の埋土中からも出土している。またⅣ層とその前後の土層を観察したが中振テフラの堆積は認められなかった。なお両者に層位的な差異が見いだせたわけではないので、明確に大木2b式と判断できる土器はＳ字状連鎖沈線文が施文されるもののみとし、それ以外は大木2a式に含めた。したがって縄文や組紐などが施文される土器が大木2b式にないとは限らず、大木2a式とした一群には本来大木2b式の可能性がある土器も含まれている。

中期初頭

大木7a・7b式に比定される土器が見つかっている。出土した土器は144のように形態が復元できるものは少なく、概ね破片で、出土量はごく少ない。特に大木7a式は小片が多く、文様が明瞭でないものばかりなので、441のみ提示した。出土地点・層位は調査Ⅶ区の中央から北側、Ⅳ層下位を主体とするが散在的な分布である。なお大木７b式の土器については平成20年度調査区で形態の復元できた土器が出土している（第109図中期初頭―719・732・250）。

中期後葉～末葉

大木９～10式に比定される土器が見つかっている。今回の調査で最も出土量が多い。特に大木９式新段階に比定される土器群は多く、調査Ⅶ区の中央、１～５号住居やその周辺の土坑群、包含層から出土している。器種は概ね深鉢で、竪穴住居出土では炉の埋設土器にも採用されている。一方、大木



第109図　出土した縄文土器

9式古段階は少なく、わずかに認められるものも文様は新段階との類似性が強く、したがって古段階でも新段階に近く時間差がないと思われる。なお76は古段階であるが区画内に刺突文が充填され、他に例がない。新段階については竪穴住居出土で大型の土器（75・356・357・369）が出土しており、他にも形態まで復元できる大型の破片資料は多い。いずれも形態や区画文の形状や縄文の種類など、類似性は高く、新段階のなかで時期差は感じられない。大木10式も竪穴住居や包含層から出土している。古段階に比定されるものがほとんどで、文様も368のように大木9式新段階の文様が変化したと考えられる区画文が施文される土器が目立つ。新段階については区画文に刺突が加えられるもの（第109図中期末葉―1b）が平成18年度調査で出土している。

後期初頭～中葉

門前式、十腰内Ⅰ～Ⅱ式、瘤付土器3段階に相当する土器が見つかっている。第109図に示した通り、いずれも破片である。門前式と分かるものは1号性格不明遺構の埋土から出土した1点のみである。小片であり、出土状況からも遺構に伴うものかは定かではない。十腰内Ⅰ～Ⅱ式は深鉢・浅鉢・注口土器の破片で、調査Ⅷ区北側の遺構外を中心に出土している。平成20年度調査区では形態の分かる深鉢や鉢などが出土している（第109図後期―4・317・218）が、今回の調査では出土していない。瘤付土器第3段階に相当するものは深鉢の破片で細沈線が充填される一群である。平成18年度の調査では形態の復元できる深鉢が1点見つかっている（第109図後期―14）が、今回の調査では破片のみである。なお、粗製の深鉢で形態の分かるものが出土しているが、縄文が施文されるのみで詳細な時期についてはわからない。いずれも出土地点・層位は調査Ⅷ区北側を中心に、Ⅳ層下位から出土している。

晩期中葉

大洞B・BC・C1式に相当する土器が見つかっている。大洞B式・C1式は破片がほとんどで形態の分かるものはない。一方、大洞BC式は残りの良いものも多く、特に鉢の中で形態の復元できたものがある。大洞B式は鉢の破片で、調査Ⅸ区の北側に分布する土坑群の埋土中から出土しており、大洞BC式と共伴するものも多い。大洞BC式は調査Ⅷ・Ⅸ区の土坑群埋土を中心に出土している。調査Ⅷ・Ⅸ区での晩期土器の出土量は過去も含め別の調査区と比べても顕著であり、晩期では同調査区周辺が主要な集落域であったことが窺える。大洞C1式としたものは破片が多く、出土地点は調査Ⅸ区を主体とする。なお大洞B・BC・C1式いずれも出土層位はⅣ層下位であり、層位的な差異は認められない。なお晩期後葉以降の土器については平成20年度の調査で大洞A'式の破片（第109図晩期―744）が1点のみ見つかっているに過ぎない。

以上のように、大平野Ⅱ遺跡から出土した縄文土器について概観した。出土土器の内容とその出土量から概観すると、大平野Ⅱ遺跡は早期から晩期に至るまで、細かい断絶期を挟みながら、連綿と継続して遺物が出土しており、特に中期後葉～末葉、晩期中葉に大きなピークがあったことが窺える。当然ながらその時期には竪穴住居や土坑群といった遺構群も存在し、集落の最盛期と遺物の出土量とはおおむね符合してくる。

（3） 出土した石器について

今回の調査で出土した石器は1247点を数える。共伴する遺構の時期は一様ではなく、前述の通り早・前・中・後・晩期に及んでいるため、出土した石器群も出土地点によって時期が異なることは言うま

でもない。ただし、調査区毎に一定の偏りはは見受けられるので、範囲を限定しつつ、その石器群を観察することで大平野Ⅱ遺跡での各時期における石器様相は明らかにできるものと考える。そこで調査区別に出土石器の器種組成・石材組成、また器種ごとの分類別点数比を提示する。なお石器の出土量の時期については共伴する縄文土器を基に、早期～前期、中期後葉～末葉、後晩期の３分類し、調査Ⅶ区１～５号住居・26～37号土坑、および遺物取り上げグリッド（第91図）１～35を中期後葉～末葉（以下、中期）、調査Ⅶ区38～58号土坑、および遺物取り上げグリッド35以降を早期中葉、前期前葉（以下、早前期）、また調査Ⅷ・Ⅸ・Ⅹ区を一括して後晩期とする。またここでは出土点数が少なかった調査Ⅰ～Ⅵ区の石器は除いている。

[調査区別　出土点数] 第110図上参照。上記の地区別に出土点数を棒グラフに示しており、またトゥール類と石製品、石核・フレイク類の点数もそれぞれ提示した。遺構数の多さと比例し中期の石器が最も多い。また早前期においては全体の６割以上が石核・フレイク類であり、石器製作の場である可能性も考えられる。なお、どの時期も石製品はごくわずかしか見受けられない。

[器種組成製比率] 第110図中の上の円グラフは各時期のトゥール類、石製品の出土点数の割合を示したものである。出土点数も示したが、早前期が少なく、中期、後晩期は偶然、同点数であった。しかし、それぞれの器種組成には差異が認められ、すなわち早前期は６割近くを剥片石器が占め、特に石鏃・石匙・不定形石器は多い。一方、中期では６割が礫石器で、そのほとんどを敲磨器類・石皿になる。また後晩期でも８割以上が礫石器であり、したがって敲磨器類の占める割合がかなり大きくなる。器種の種類の多寡についてみてみると、早前期の段階で10種であり、中期では13種に増え、後晩期には９種と減少する。

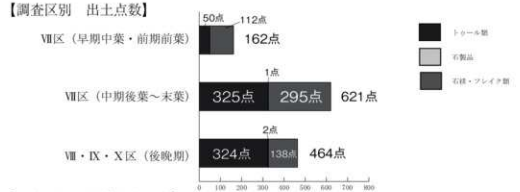
[調査区別　石材組成比率] 第110図中の下に剥片石器、礫石器別に石材組成比を円グラフに示した。なおここでは石核・フレイク類も剥片石器の方に含んでいる。まず剥片石器についてであるが、３時期とも頁岩がほとんどを占めており、後晩期に若干珪質頁岩が増えるものの、本遺跡における剥片石器製作には頁岩の利用が主であったことは間違いない。また第10表で示した石材産地をみての通り、そのほとんどが奥羽山脈系、すなわち周辺山間部からの石材であることが窺える。なおわずかに出土した黒曜石について、産地同定を行ったところ（第Ⅶ章）、北上山地系と秋田の男鹿地区産であることが判明しており、遠方からの搬入ではなかった。礫石器の石材組成についても同様に各時期類似する傾向が見受けられ、特に凝灰岩、砂岩、頁岩の３種がほとんどを占めている。他に目立ったところでは中期、後晩期で安山岩・デイサイトが約２割を占める。石材の産地については第10表に示した通り、概ね奥羽山脈系で周辺山間部から採取された石材と考える。前述の通り、時期ごとに器種組成に差異が見受けられつつも、このように剥片石器、礫石器どちらの石材組成も時期的な差異が見受けられない。細かい石器の器種と石材選択とには関連がなく、必要な石材を周辺山間部でまかなうものと推測される。

[器種　分類別出土点数] 第110図下の表は特に出土点数の多い器種について、分類別に点数を示したものである。また表中には各時期で多い傾向にある分類をアミかけで示している。

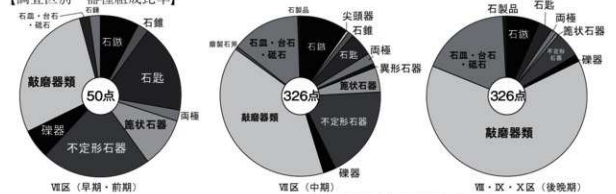
[石鏃について] 点数の少ない早前期は除き、中期と後晩期とで比較した場合、中期は無茎鏃が、後晩期は有茎鏃が多い傾向にあり、概ね鈴木氏などが示唆する傾向（鈴木1991）に類似する。ただし完全に分かれるものではなく、その証拠に各分類の石鏃が数点ずつ認められる。また中期では未成品が多く、周辺で石鏃の製作が行われていた可能性もある。

[石匙について] 早前期・中期では縦型が、後晩期では横型が多く、時期的な差異が認められた。ま

【調査区別　出土点数】

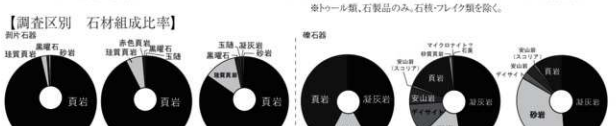


【調査区別　器種組成比率】



※トゥール類、石製品のみ。石核・フレイク類を除く。

【調査区別　石材組成比率】



【器種　分類別出土点数】

石鏃

調査区＼分類	円基無茎鏃	凹基無茎鏃	平基無茎鏃	凹基有茎鏃	平基有茎鏃	凸基有茎鏃	尖基無茎鏃	未製品	分類不明
Ⅶ区（早期・前期）		1		2					1
Ⅶ区（中期）	1	9	8			2	2	10	
Ⅷ・Ⅸ・Ⅹ区（後晩期）		4		1	1	9	3	3	1

石匙

調査区＼分類	縦型	横型	斜型
Ⅶ区（早期・前期）	7		2
Ⅶ区（中期）	10	5	
Ⅷ・Ⅸ・Ⅹ区（後晩期）	1	5	3

不定形石器・篦状石器

調査区＼分類	1類	2類	3類	篦状石器
Ⅶ区（早期・前期）	8	1	2	5
Ⅶ区（中期）	39	9	13	16
Ⅷ・Ⅸ・Ⅹ区（後晩期）	8	4	3	2

敲磨器類

調査区＼分類	磨製のみ	凹凸のみ	敲打のみ	磨・凹凸	磨・敲打	凹凸・敲打	磨・凹凸・敲打	磨製・凹凸・敲打
Ⅶ区（早期・前期）	1	3	6		3	1		
Ⅶ区（中期）	24	14	71	2	12	6	1	
Ⅷ・Ⅸ・Ⅹ区（後晩期）	29	38	96	8	23	12	1	

石皿・台石・砥石

調査区＼分類	磨製のみ	凹凸のみ	敲打のみ	磨・凹凸	磨・敲打	凹凸・敲打	磨・凹凸・敲打	磨製・凹凸・敲打
Ⅶ区（早期・前期）	1							
Ⅶ区（中期）	24	1	14		5			
Ⅷ・Ⅸ・Ⅹ区（後晩期）	17	7	22	1	6	2	4	

※小片で使用痕が確認できないものは除く。

フレイク類・チップ・石核

調査区＼分類	1a	1b	1c	2a	2b	2c	3a	3b	3c	4a	4b	Rフレイク	Uフレイク	チップ (1.0g未満)	チップ (1.0g以上)	石核
Ⅶ区（早期・前期）		1 (2.7%)	1 (2.0%)		2 (66.0%)	8 (2.5%)		1 (41.1%)	13 (12.9%)	9 (386.9%)	34 (103.2%)	9 (261.9%)	27 (520.0%)	32 (412.3%)	288 (615.1%)	7
Ⅶ区（中期）	1 (5.6%)	4 (25.3%)	4 (25.2%)	2 (18.8%)	11 (118.4%)	32 (105.2%)	1 (16.8%)	3 (25.6%)	34 (161.0%)	14 (95.2%)	75 (195.1%)	37 (205.4%)	68 (990.0%)	55 (818.2%)	1924 (3537.3%)	9
Ⅷ・Ⅸ・Ⅹ区（後晩期）	2 (115.5%)	2 (195.8%)	3 (311.2%)		3 (7.1%)	16 (124.1%)	1 (19.1%)	3 (12.3%)	13 (61.8%)	6 (44.8%)	41 (96.5%)	15 (298.7%)	28 (71.3%)	39 (526.2%)	276 (737.3%)	5

（　）内…総重量(g)

第110図　石器分析

た中期では横型も少なくない。横型が中期ごろから少しずつ増加し、後晩期で縦型にとって代わったとも考えられる。

[不定形石器・篦状石器について] 各時期で傾向は類似しており、すなわち１類（削器が相当する）が多く、また刃部の加工が粗い３類がそれに次ぐ。篦状石器は中期の出土がほとんどを占めている。

[敲磨器類について] 使用痕の種類で分類している。各時期で敲打痕が認められるものが圧倒的多く、また凹痕が認められるものも時期が新しくなるにつれ、増加する。一方で磨痕が認められるものも決して少なくないが、前者に比べるとその割合は小さい。

[石皿・台石・砥石について] 使用痕で分類している。使用面で磨痕と敲打痕が認められるものがほとんどであるが、早前期・中期では磨痕が認められるものが多い一方、後晩期では敲打痕が認められるものの方が多くなる傾向が見受けられる。また複数種の使用痕が認められるものは少なく、複合的な使われ方はあまりないものと考える。

[フレイク類・チップ・石核について] フレイク類については打面と背面の組み合わせにおいて分類し、また二次加工の様相でＲ・Ｕフレイクを示した。他に１㎝四方以下のフレイクは全てチップとし、自然面の有無で分類している。それらの結果を表に示しており、点数と分類の総重量を表示した。時期別に比較した際に差異は見いだせない。すなわち、フレイク類については2c・3c類が多く、ある程度剥離段階の進んだものが残っている傾向が認められ、またチップでは自然面のないものが圧倒的に多い。一方、フレイク類・チップどちらも自然面の残るものは少ない。すなわち、本遺跡においてはフレイク類の出土量から考えて、遺跡内での石器製作の可能性は高いものの、その際の石材についてはすでにある程度、自然面を取り除いたものが搬入されているものと推測する。またＵフレイクは各時期多いが、時期によって多寡が認められる。そしてその多寡は前述の器種組成比でみた不定形石器の時期ごとの割合と概ね符合しており、両者は同様の使用目的を有するものとも推察する。Ｒフレイクも決して少なくない。何かの利用目的があり製作されたと推測するが、傾向が読み取れなかった。

以上、器種ごとの分類別に出土点数を見てきた。石鏃や石匙のように形態的には時期で変化がある。その一方、敲磨器類や石皿、またフレイク類では形態ではなく使用痕についての分類とその比較ではあるものの、時期的な差異が認められない傾向が読み取れる。

（４） 検出遺構からみた縄文集落の変遷

以上、大平野Ⅱ遺跡から出土した縄文土器・石器についてみてきた。これを踏まえ、検出遺構について概観する。

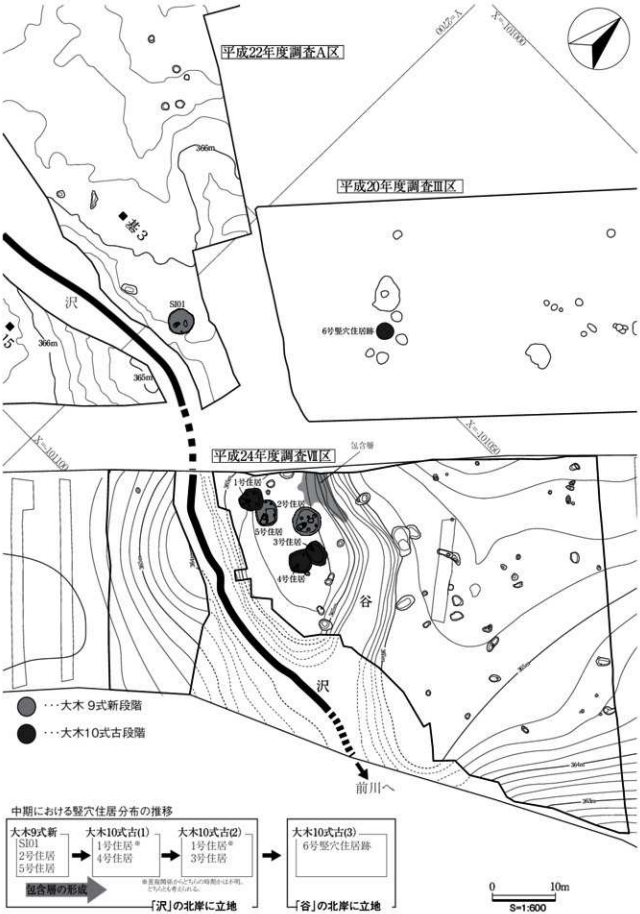
早期中葉・前期前葉（第111図）

調査Ⅶ区の北東側に分布する土坑群が該当する。遺構埋土中から土器片が出土したことから判断した。第Ⅳ章でも述べたが、遺構埋土から該期の土器が出土したものについては該期のものと判断しているが、土器自体流れ込みの可能性もあるため、この時期の遺構と断定できないものもある。遺構の平面形や断面形は不規則で、遺構の性格も定かではない。また分布もまばらで狭い範囲に集中する傾向は認められない。竪穴住居などの居住施設とは考えられないので、集落域とは考えがたい。

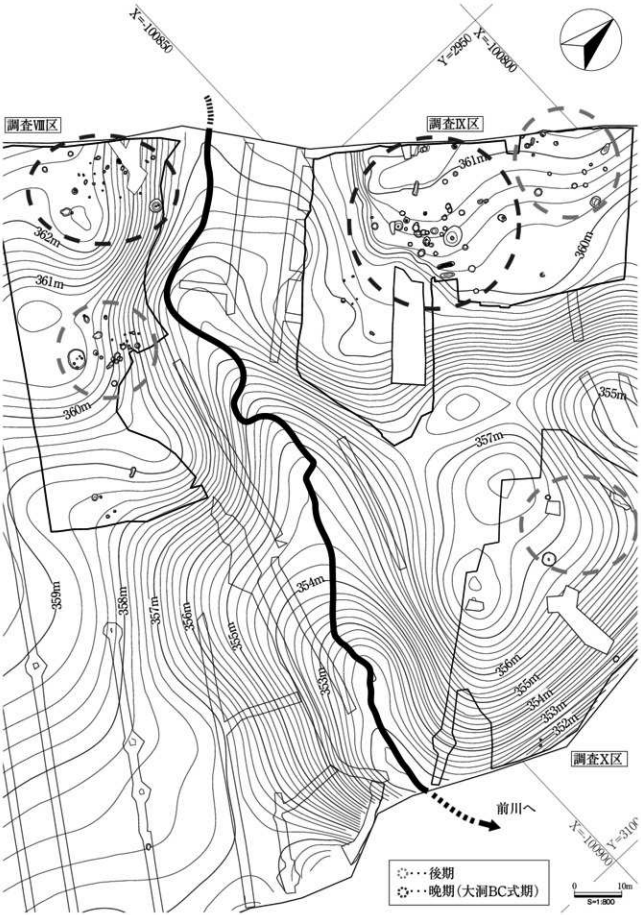
中期後葉～末葉（第111図）

調査Ⅶ区のほぼ中央から東側周辺に大木９～10式期の小規模な集落が展開する。

調査Ⅶ区の地形は概ね平坦であるとはいえ、西から東へと緩やかに傾斜する。そして西側の山間部



第111図　縄文時代中期を中心とした遺構分布（過去調査区を含む）



第112図　調査Ⅷ～Ⅹ区の遺構分布

から流れる沢と現在枯れている旧沢と推定される谷により開析された中洲状の地形に集中的に遺構が分布する。

竪穴住居は大木９式新段階が２棟、大木10時期古段階が３棟であり、また重複関係から大木10式古段階は２時期に分割される。またこれに平成22年度調査Ａ区のSI01（第111図左上・大木９式新段階）と平成20年度調査Ⅲ区の６号竪穴住居跡（第111図右上・大木10式古段階）を加えるとこの周辺には大木９式新段階から大木10式古段階にかけて、８棟で３～４期にわたる集落が展開していたことが推測される（第111図下参照）。そして包含層（捨て場）については出土土器の主体時期から大木９式新段階の時期に形成されたものと考える。大平野Ⅱ遺跡においては大木９式新段階よりも古い時期の竪穴住居は確認されていない。したがってこの時期より、同地における本格的な定住の形成がはじまり、竪穴住居や土坑が構築され、谷部斜面を捨て場として利用していったものと推定される。そしてそれは直後の大木10式古段階にまで継続したものの、何らかの理由から谷を越え、その北側の６号竪穴住居跡の方へ移動したものと考える。ちなみに平成20年度調査のⅣ区（大寒沢周辺）やⅡ区（小寒沢周辺）でも中期末葉から後期初頭の竪穴住居群が見つかっており、集落は中期末葉以降、調査Ⅶ区の沢周辺を離れ、別の沢周辺へと移動、あるいは分散していったものと想像される。

後期初頭初頭～前葉

調査Ⅷ・Ⅹ区に分布する遺構群が該当し、特に６号・７号住居の周辺の土坑、性格不明遺構である。調査Ⅷ区の６号住居周辺や調査Ⅸ区の土坑群は後期前葉、７号住居周辺は後期初頭に相当すると考える。

まず調査Ⅷ～Ⅹ区の地形について触れておく。調査区の西側が最も高く、前川の流れる東側に向かって平坦面と斜面が繰り返され低くなる段状の地形を呈する。遺構はその段状の地形の平坦面に分布する。

Ⅷ区とⅩ区の間には小寒沢が流れ、その両岸は大きく開析を受けており、したがって両調査区にそれぞれ分布する遺構群は同一集落の時期差というより、別々の集落と考えた方が適しているかもしれない。したがって竪穴住居１棟と土坑群で構成される非常に小規模で、おそらく短時期のみの集落が展開していたと考えられる。特にⅩ区に分布する７号住居や１号性格不明遺構の周辺地形は南東側を急斜面に囲まれており、斜面下は前川につづく。７号住居が位置する場所も狭く、これ以上遺構が展開する場所がない。したがって７号住居はきわめて短時期に営まれた集落ではなかったかと考える。

晩期中葉

調査Ⅷ・Ⅸ区の西側に分布する土坑群が該当する。土坑群は貯蔵穴が主体である。前述の通り、小寒沢による開析作用のため、遺構が分布する両岸には位置的に距離がある。ただし遺構に共伴する遺物には時期差はみられないので、同時期に存在したものと推測される。したがって小寒沢を挟む両岸に展開する貯蔵穴群は、それぞれ別の集落に付属するものであるかもしれないが、同時に沢を含んだ大規模集落が展開し、その集落内にみられる２箇所の貯蔵穴エリアである可能性もある。残念ながら居住施設となる遺構が見つかっていない。また今回調査区の東側にひろがる過去の調査区でも見つかっていないので、上記の点は明らかにできない。遺構はまったく別の場所に居住施設があるかもしれない。または平地式住居のような遺構であった可能性もあるが、今回の調査ではそのような遺構（柱穴など）は確認できなかった。

以上のように、検出遺構についてみてきた。大平野Ⅱ遺跡においては早期中葉から遺構の展開が始まり、広い意味での集落形成があった。それが数回にわたる断絶期を経て、中期後葉（大木９式新段

階）には小規模集落が調査Ⅶ区の沢周辺に形成されるようになる。これは大木10式古段階にも継続、次第に場所を移動、あるいは集落が分散し、別の沢（大寒沢・小寒沢）沿いに別の集落として展開する。後期初頭以降にはさらに１棟単位の小規模な集落が小寒沢周辺に散在し、また断絶期を経て晩期中葉（大洞BC式）には貯蔵穴群を有する大規模な集落が展開したものと推測する。ただこれ以降、本遺跡での遺構の存在は途絶え、また出土遺物もごくわずかになることから、大平野Ⅱ遺跡内にみられる縄文集落もこの晩期中葉を最期に姿を消すものと思われる。

参考文献

胆沢町史刊行会　1981　『胆沢町史Ⅰ　原始古代編』

（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

2004　『九重沢遺跡発掘調査報告書』（岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第435集）

2008　『袈帯遺跡発掘調査報告書』（岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第522集）

2010　『坪洞Ⅱ遺跡発掘調査報告書』（岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第554集）

2011　『大平野Ⅱ遺跡発掘調査報告書』（岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第576集）

2012　『川目Ａ遺跡第5次発掘調査報告書』（岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第589集）

2012　『大平野Ⅱ遺跡発掘調査報告書』（岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第593集）

小林達雄ほか　1988　『縄文土器大観３－中期Ⅱ－』（小学館）

小林達雄ほか　1988　『縄文土器大観4－後期・晩期・続縄文－』（小学館）

鈴木克彦　2001　『北日本の縄文後期土器編年の研究』（雄山閣）

鈴木道之助　1991　『図録・石器入門事典（縄文）』（柏書房）

永峰光一ほか　1981　『縄文土器大成２－中期－』（講談社）

永峰光一ほか　1981　『縄文土器大成３－後期－』（講談社）

永峰光一ほか　1981　『縄文土器大成４－晩期－』（講談社）

日本考古学協会　2005　『日本考古学協会2005年度福島大会シンポジウム資料集』

盛岡市遺跡の学び館　2009　『盛岡の縄文草創期～早期の土器文化【資料集】』

写　真　図　版

調査Ⅶ区全景（直上・写真上が南東）

調査Ⅸ・Ⅹ区全景（直上・写真上が南東）

写真図版１　調査区全景（１）

調査Ⅶ区近景（北西から）

調査Ⅰ区全景（南西から）

写真図版２　調査区全景（２）

調査Ⅰ区基本土層（南西から）

調査Ⅶ区基本土層（南西から）

調査Ⅸ区基本土層（南西から）

写真図版３　基本土層

1号住居全景（南西から）

1号住居断面B-B'（南東から）

1号住居炉全景（南西から）

写真図版4　1号住居

２号住居全景（南西から）

２号住居断面A-A'（北西から）

２号住居炉全景（南西から）

写真図版５　２号住居

３号住居全景（西から）

３号住居断面B-B'（西から）

３号住居炉全景（西から）

写真図版６　３号住居

4号住居全景（南東から）

4号住居断面B-B'（南から）

4号住居炉全景（南東から）

写真図版７　４号住居

５号住居全景（南東から）

５号住居断面B-B'（南東から）

５号住居炉全景（南東から）

写真図版８　５号住居

6号住居全景（南西から）

6号住居断面B-B'（西から）

6号住居炉全景（北西から）

写真図版９　６号住居

７号住居全景（東から）

７号住居断面（北西から）

７号住居炉全景（南東から）

写真図版10　７号住居

1号住居状遺構全景（西から）

1号住居状遺構断面（南西から）

試掘風景（北西から）

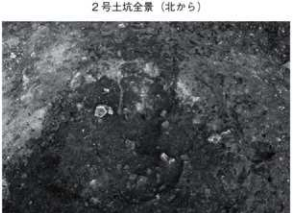
写真図版11　1号住居状遺構・試掘風景

1号土坑全景（北から）

1号土坑断面（東から）

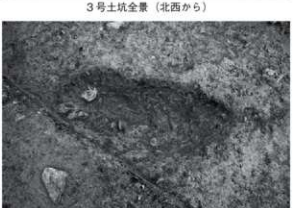
2号土坑全景（北から）

2号土坑断面（北から）



3号土坑全景（北西から）

3号土坑断面（南東から）



4号土坑全景（南から）

4号土坑断面（北から）

写真図版12　1～4号土坑

５号土坑全景（北西から）

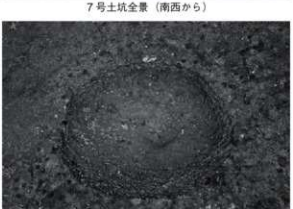
５号土坑断面（西から）

６号土坑全景（北西から）

６号土坑断面（北西から）

７号土坑全景（南西から）

７号土坑断面（南西から）



８号土坑全景（北西から）

８号土坑断面（南東から）

写真図版13　５～８号土坑

9号土坑全景（北西から）

9号土坑断面（南西から）

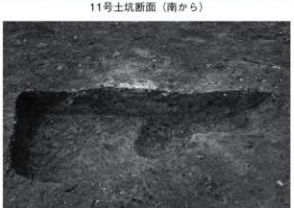
10号土坑全景（南西から）

10号土坑断面（北東から）

11号土坑全景（南から）

11号土坑断面（南から）

12号土坑全景（南西から）



12号土坑断面（南西から）

写真図版14　9～12号土坑

13号土坑全景（北東から）

13号土坑断面（北西から）

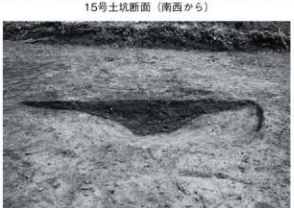
14号土坑全景（西から）

14号土坑断面（南から）

15号土坑全景（北西から）

15号土坑断面（南西から）

16号土坑全景（南東から）



16号土坑断面（南西から）

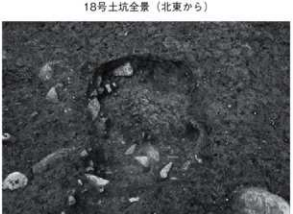
写真図版15　13～16号土坑

17号土坑全景（北東から）

17号土坑断面（東から）

18号土坑全景（北東から）

18号土坑断面（北東から）



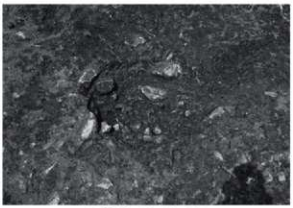
19号土坑全景（南東から）

19号土坑断面（北西から）

20号土坑全景（西から）

20号土坑断面（西から）

写真図版16　17～20号土坑

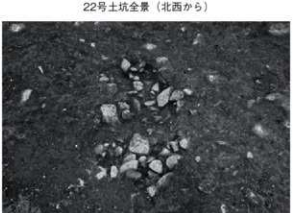


21号土坑全景（東から）

21号土坑断面（北西から）

22号土坑全景（北西から）

作業風景



23号土坑全景（北から）

23号土坑断面（南から）

24号土坑全景（南東から）

24号土坑断面（南東から）

写真図版17　21～24号土坑

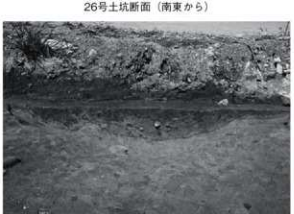
25号土坑全景（西から）

25号土坑断面（南東から）

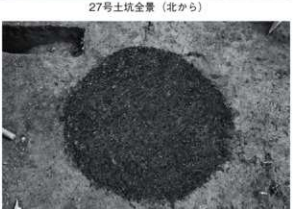
26号土坑全景（北東から）

26号土坑断面（南東から）

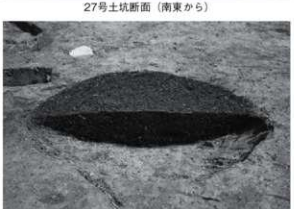
27号土坑全景（北から）



27号土坑断面（南東から）



28号土坑検出状況（南西から）

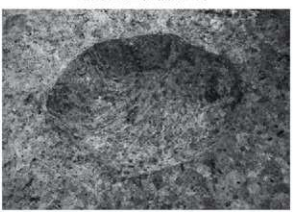


28号土坑断面（南西から）

写真図版18　25～28号土坑

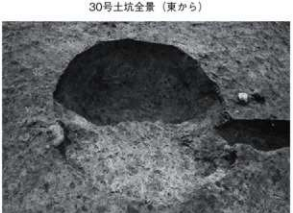
29号土坑全景（南西から）

29号土坑断面（南東から）



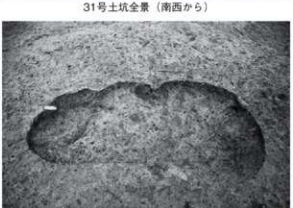
30号土坑全景（東から）

30号土坑断面（東から）



31号土坑全景（南西から）

31号土坑断面（北西から）



31・32号土坑全景（南西から）

作業風景

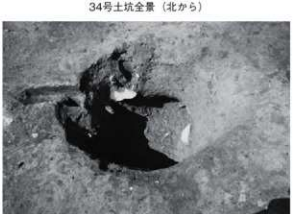
写真図版19　29～32号土坑

33号土坑全景（西から）

33号土坑断面（南西から）

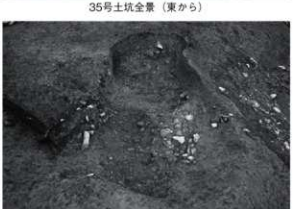
34号土坑全景（北から）

34号土坑断面（北から）

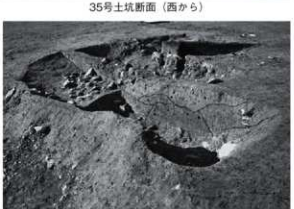


35号土坑全景（東から）

35号土坑断面（西から）



36号土坑全景（西から）

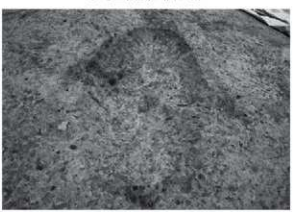


36号土坑断面（南から）

写真図版20　33～36号土坑

37号土坑全景（西から）

37号土坑断面（北西から）



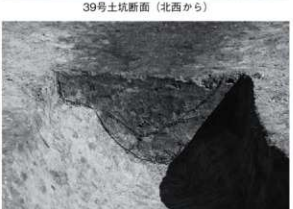
38号土坑全景（南から）

38号土坑断面（東から）

作業風景

39号土坑断面（北西から）

40号土坑全景（北西から）

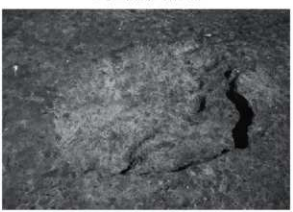


40号土坑断面（南西から）

写真図版21　37～40号土坑

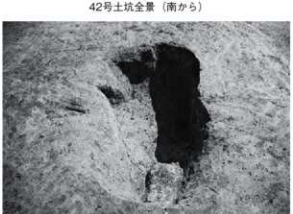
41号土坑全景（北から）

41号土坑断面（南西から）



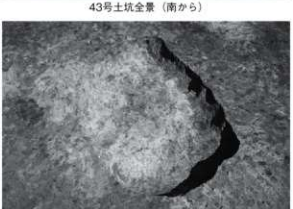
42号土坑全景（南から）

42号土坑断面（南から）

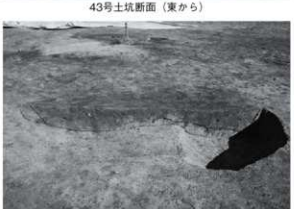


43号土坑全景（南から）

43号土坑断面（東から）



44号土坑全景（南から）



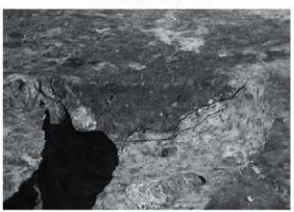
44号土坑断面（西から）

写真図版22　41～44号土坑

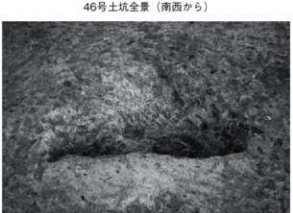
45号土坑全景（北東から）

45号土坑断面（北東から）

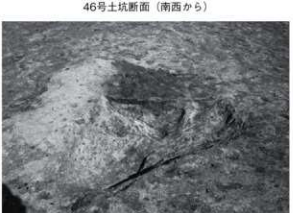
46号土坑全景（南西から）



46号土坑断面（南西から）

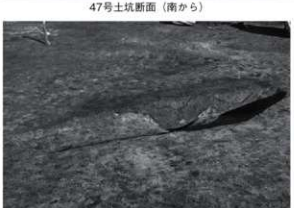


47号土坑全景（西から）



47号土坑断面（南から）

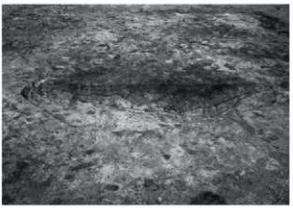
48号土坑全景（南から）



48号土坑断面（北西から）

写真図版23　45～48号土坑

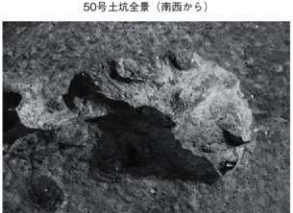
49号土坑全景（南東から）



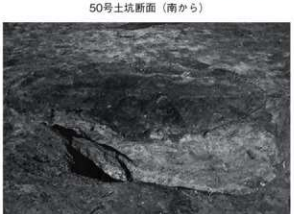
49号土坑断面（南東から）

50号土坑全景（南西から）

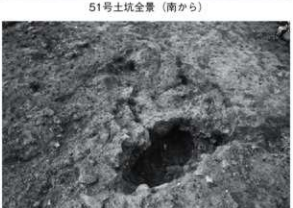
50号土坑断面（南から）



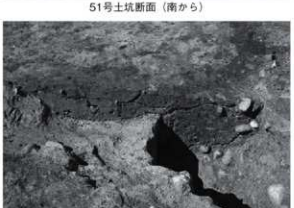
51号土坑全景（南から）



51号土坑断面（南から）



52号土坑全景（北東から）



52号土坑断面（南東から）

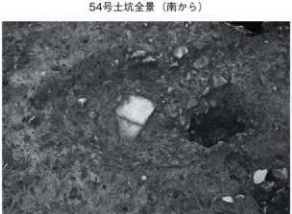
写真図版24　49～52号土坑

53号土坑全景（北から）

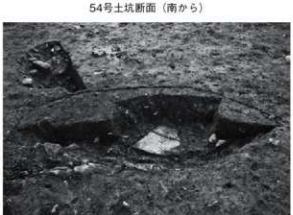
53号土坑断面（西から）

54号土坑全景（南から）

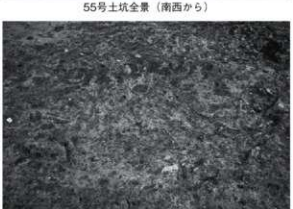
54号土坑断面（南から）



55号土坑全景（南西から）



55号土坑断面（北東から）



56号土坑全景（南西から）

56号土坑断面（南西から）

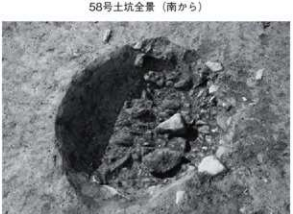
写真図版25　53～56号土坑

57号土坑全景（南東から）

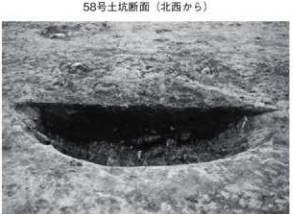
57号土坑断面（南東から）

58号土坑全景（南から）

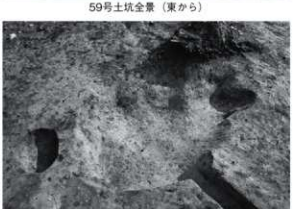
58号土坑断面（北西から）



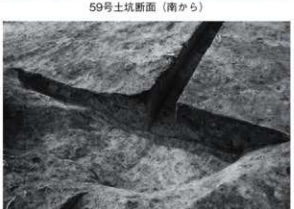
59号土坑全景（東から）



59号土坑断面（南から）



60号土坑全景（北東から）



60号土坑断面（南西から）

写真図版26　57～60号土坑

61号土坑全景（東から）

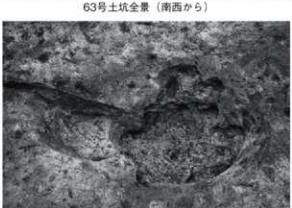
61号土坑断面（北西から）

62号土坑全景（北西から）

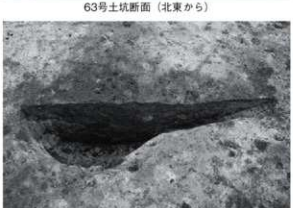
62号土坑断面（南西から）

63号土坑全景（南西から）

63号土坑断面（北東から）

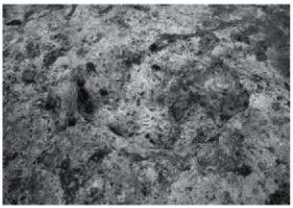


64号土坑全景（北東から）



64号土坑断面（北西から）

写真図版27　61～64号土坑

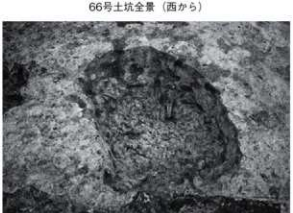


65号土坑全景（東から）

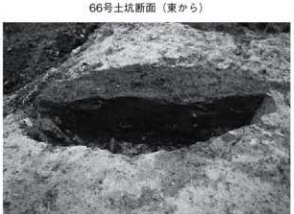
65号土坑断面（西から）

66号土坑全景（西から）

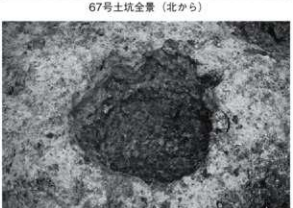
66号土坑断面（東から）



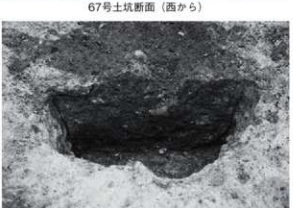
67号土坑全景（北から）



67号土坑断面（西から）



68号土坑全景（北西から）



68号土坑断面（南東から）

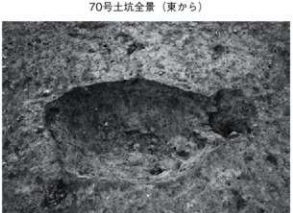
写真図版28　65～68号土坑

69号土坑全景（東から）

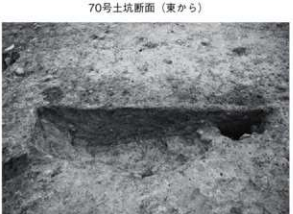
69号土坑断面（北西から）

70号土坑全景（東から）

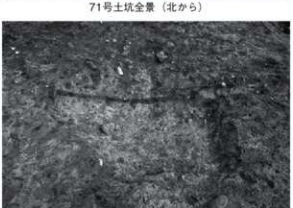
70号土坑断面（東から）



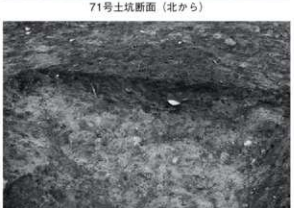
71号土坑全景（北から）



71号土坑断面（北から）



72号土坑全景（南西から）



72号土坑断面（南西から）

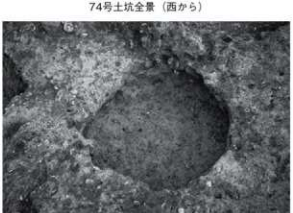
写真図版29　69～72号土坑

73号土坑全景（北東から）

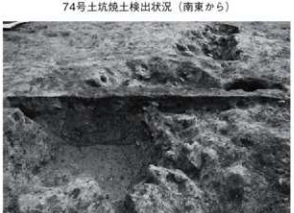
73号土坑断面（北東から）

74号土坑全景（西から）

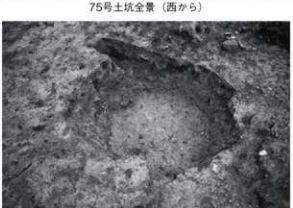
74号土坑焼土検出状況（南東から）



75号土坑全景（西から）



74・75号土坑断面（南から）



76号土坑全景（西から）

74・76号土坑断面（北から）

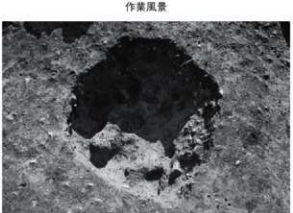
写真図版30　73～76号土坑

77号土坑全景（東から）

77号土坑断面（東から）

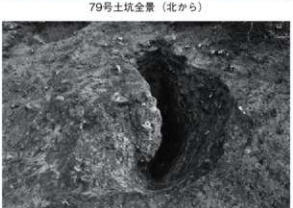
作業風景

78号土坑断面（北から）

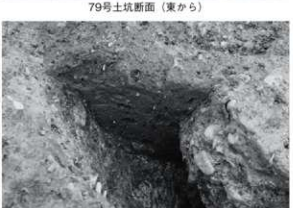


79号土坑全景（北から）

79号土坑断面（東から）

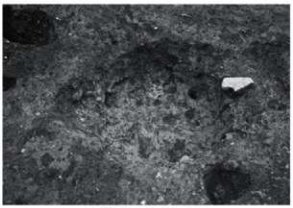


80号土坑全景（西から）



80号土坑断面（東から）

写真図版31　77～80号土坑

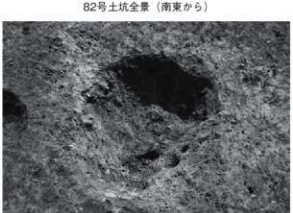


81号土坑全景（西から）

81号土坑断面（西から）

82号土坑全景（南東から）

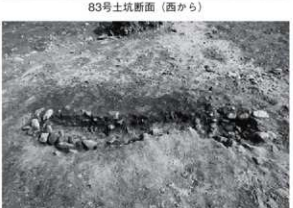
82号土坑断面（南から）



83号土坑全景（北から）

83号土坑断面（西から）

84号土坑全景（西から）



84号土坑断面（西から）

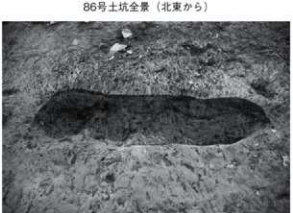
写真図版32　81～84号土坑

85号土坑全景（南東から）

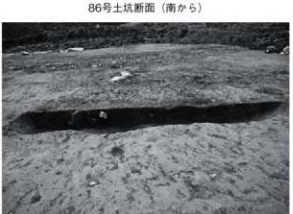
85号土坑断面（北東から）

86号土坑全景（北東から）

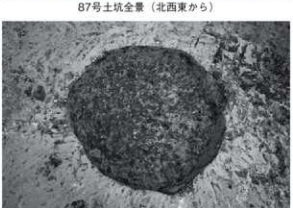
86号土坑断面（南から）



87号土坑全景（北西東から）



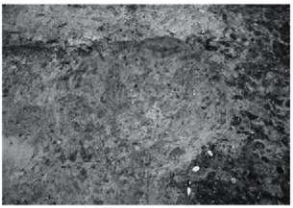
87号土坑断面（北東から）



88号土坑全景（東から）

88号土坑断面（北東から）

写真図版33　85～88号土坑



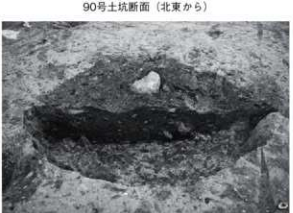
89号土坑全景（北から）

89号土坑断面（東から）

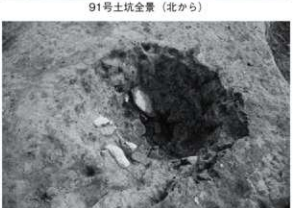
90号土坑全景（北から）

90号土坑断面（北東から）

91号土坑全景（北から）



91号土坑断面（北東から）



92号土坑全景（西から）

92号土坑断面（東から）

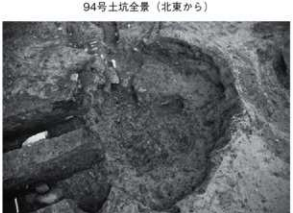
写真図版34　89～92号土坑

93号土坑全景（西から）

93号土坑断面（南西から）

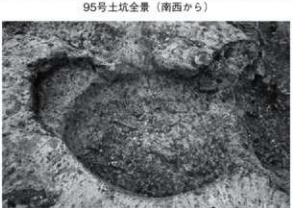
94号土坑全景（北東から）

94・95号土坑断面（北西から）

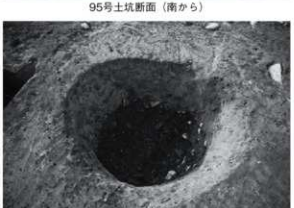


95号土坑全景（南西から）

95号土坑断面（南から）



96号土坑全景（南西から）



97号土坑全景（東から）

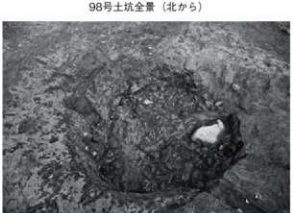
写真図版35　93～97号土坑

97号土坑埋土中土器出土状況（西から）

97号土坑断面（北東から）

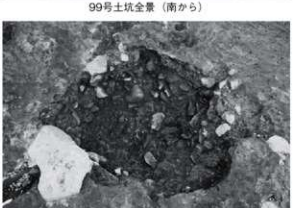
98号土坑全景（北から）

98・99号土坑断面（北東から）

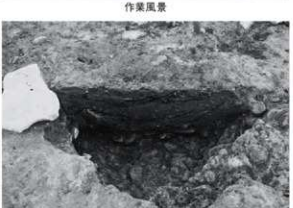


99号土坑全景（南から）

作業風景



100号土坑全景（南西から）



100号土坑断面（南西から）

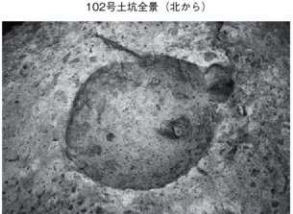
写真図版36　97～100号土坑

101号土坑全景（南から）

101号土坑断面（南から）

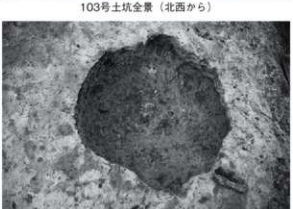
102号土坑全景（北から）

102号土坑断面（東から）

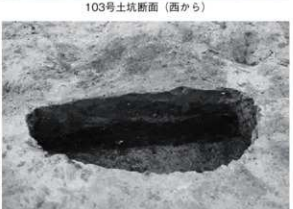


103号土坑全景（北西から）

103号土坑断面（西から）



104号土坑全景（西から）



104号土坑断面（西から）

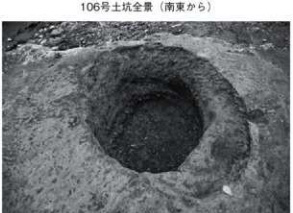
写真図版37　101～104号土坑

105号土坑全景（北西から）

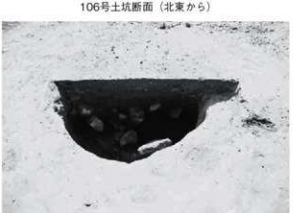
105号土坑断面（北西から）

106号土坑全景（南東から）

106号土坑断面（北東から）

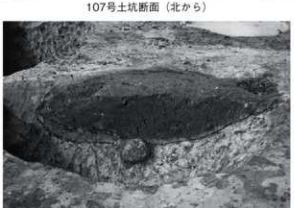


107号土坑全景（北東から）



107号土坑断面（北から）

108号土坑全景（北東から）



108号土坑断面（南東から）

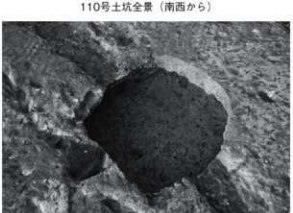
写真図版38　105～108号土坑

109号土坑全景（北から）

109号土坑断面（南西から）

110号土坑全景（南西から）

110号土坑断面（西から）



111号土坑全景（南東から）

111号土坑断面（北から）

112号土坑全景（南から）

112号土坑断面（北東から）

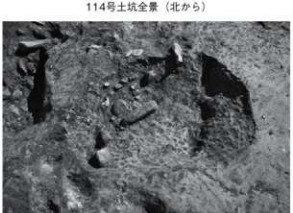
写真図版39　109～112号土坑

113号土坑全景（北西から）

113号土坑礫出土状況（北から）

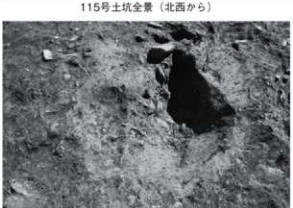
114号土坑全景（北から）

114号土坑断面（東から）



115号土坑全景（北西から）

115号土坑断面（南東から）



116号土坑全景（北西から）

116号土坑断面（南東から）

写真図版40　113～116号土坑

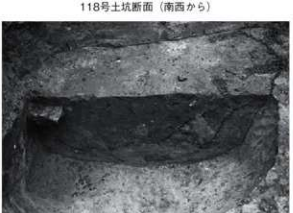
117号土坑全景（南東から）

117号土坑断面（南西から）

118号土坑全景（西から）

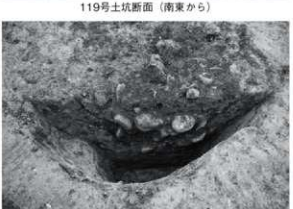
118号土坑断面（南西から）

119号土坑全景（北東から）



119号土坑断面（南東から）

120号土坑全景（南東から）



120号土坑断面（南東から）

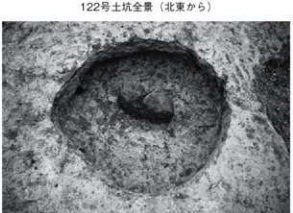
写真図版41　117～120号土坑

121号土坑全景（北東から）

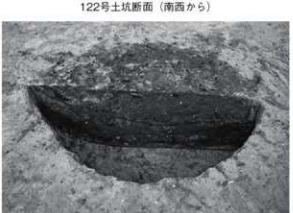
121号土坑断面（南西から）

122号土坑全景（北東から）

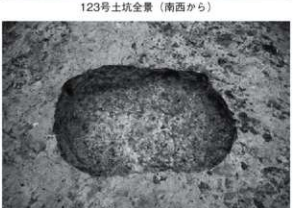
122号土坑断面（南西から）



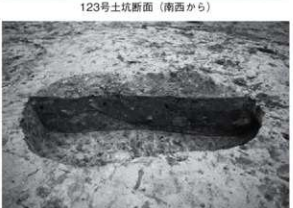
123号土坑全景（南西から）



123号土坑断面（南西から）



124号土坑全景（南から）



124号土坑断面（南から）

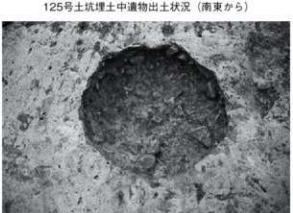
写真図版42　121～124号土坑

125号土坑全景（南西から）

125号土坑断面（南西から）

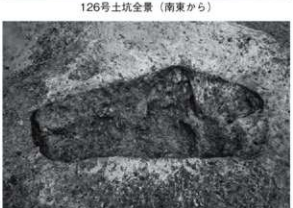
125号土坑埋土中遺物出土状況（南東から）

作業風景



126号土坑全景（南東から）

126号土坑断面（南西から）



127号土坑全景（西から）

127号土坑断面（西から）

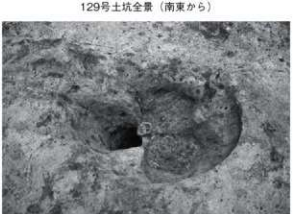
写真図版43　125～127号土坑

128号土坑全景（南から）

128号土坑断面（西から）

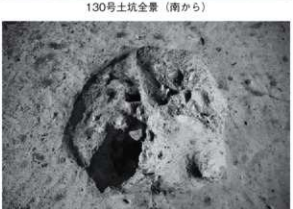
129号土坑全景（南東から）

129号土坑断面（北から）



130号土坑全景（南から）

130号土坑断面（南西から）



131号土坑全景（南東から）

131号土坑断面（南西から）

写真図版44　128～131号土坑

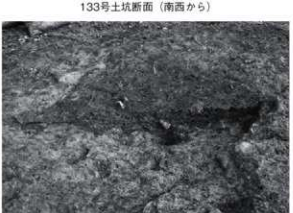
132号土坑全景（北から）

132号土坑断面（南から）

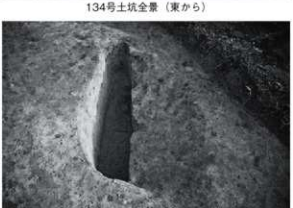
133号土坑全景（南西から）

133号土坑断面（南西から）

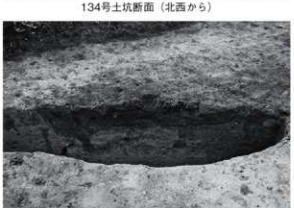
134号土坑全景（東から）



134号土坑断面（北西から）



135号土坑全景（北西から）



135号土坑断面（北東から）

写真図版45　132～135号土坑

1号焼土全景（北東から）

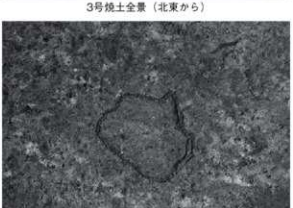
1号焼土断面（北東から）

2号焼土全景（北東から）

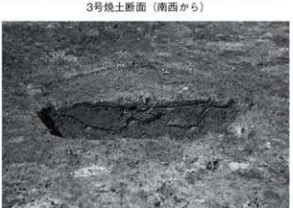
2号焼土断面（東から）

3号焼土全景（北東から）

3号焼土断面（南西から）



4号焼土全景（東から）



4号焼土断面（南東から）

写真図版46　1～4号焼土

5号焼土断面（南東から）

1号性格不明遺構断面（南西から）

調査区VII包含層断面（南東から）

包含層土器出土状況（東から）

包含層土器出土状況（南西から）

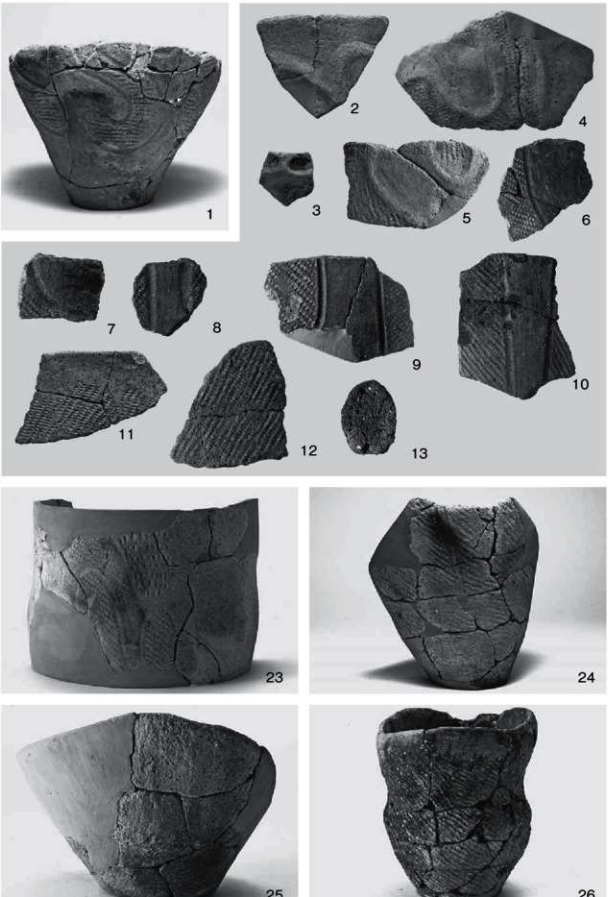
写真図版47　5号焼土・1号性格不明遺構・包含層

調査Ⅸ区周辺（北から）

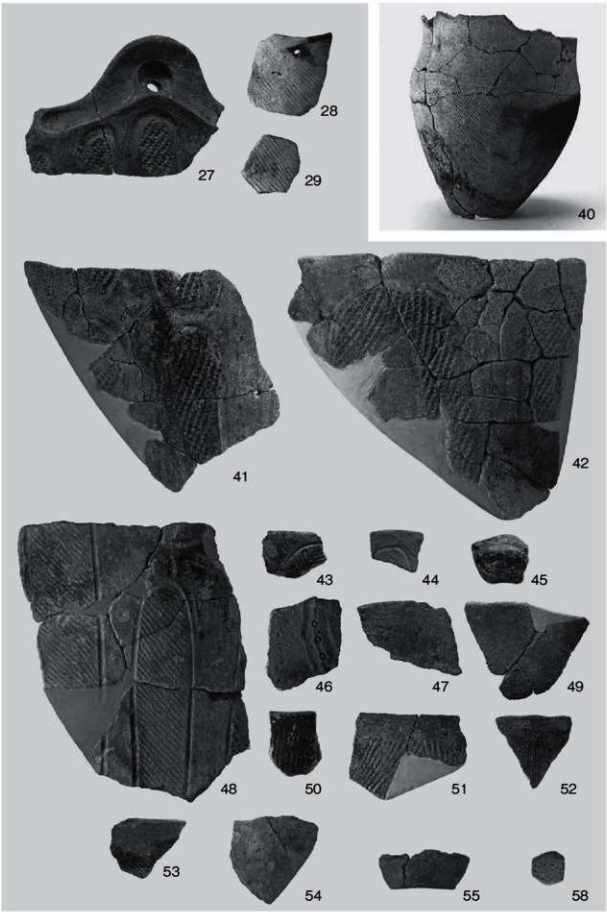
調査Ⅶ区周辺（南東から）

調査Ⅷ区周辺（西から）

写真図版48　試掘トレンチ



写真図版49　1・2号住居出土土器



写真図版50　2・3号住居出土土器

56

57

66

67

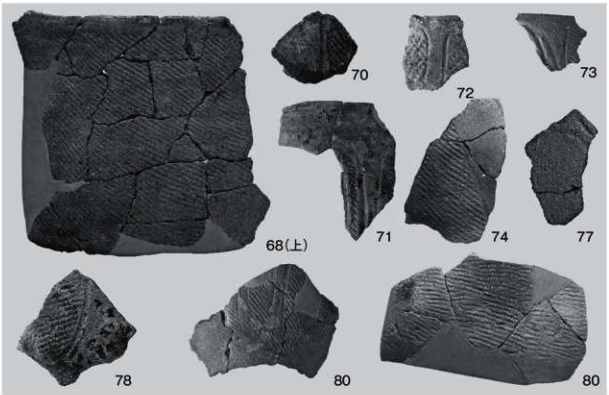
68(下)

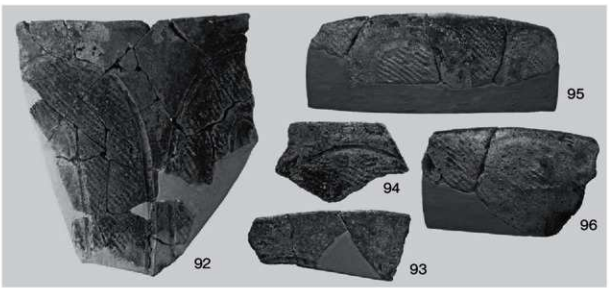
69

75

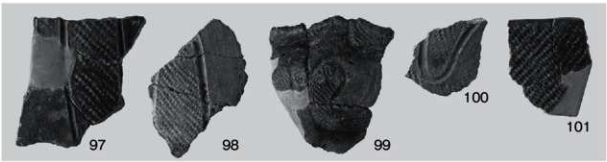
76

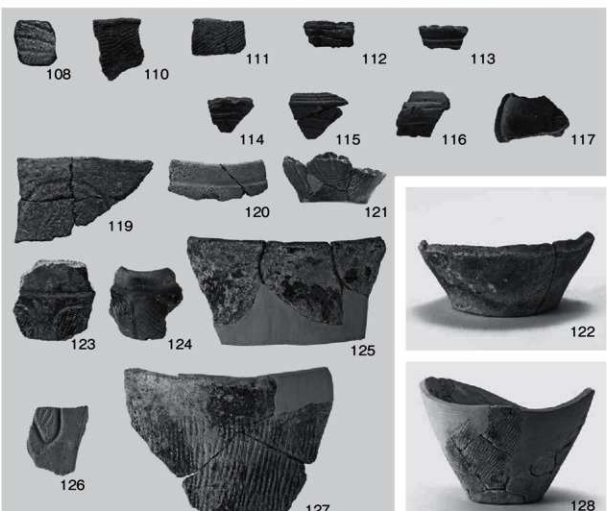
写真図版51　3・4号住居出土土器



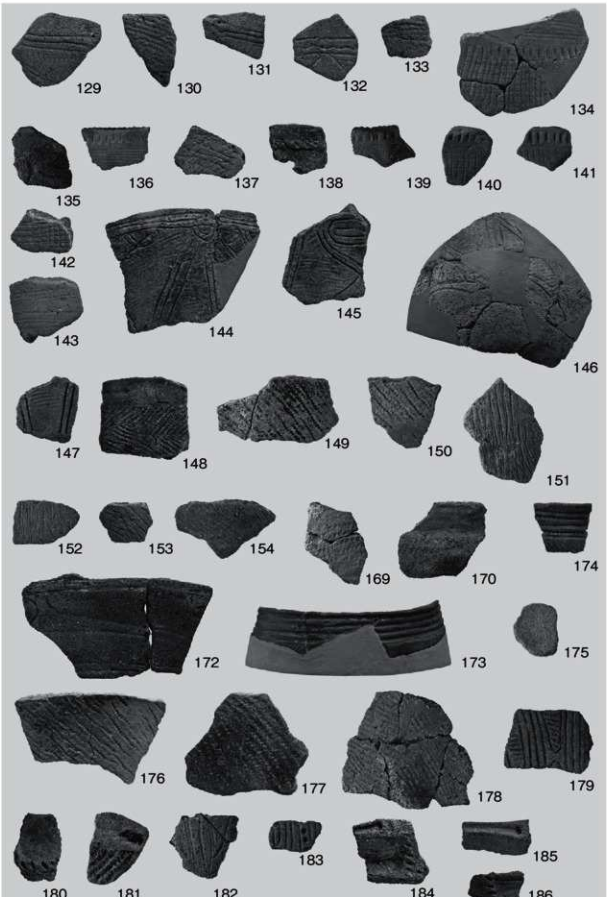


写真図版52　4・5号住居出土土器





写真図版53　5～7号住居・1号住居状遺構・土坑出土土器



写真図版54　35～81号土坑出土土器

171

207

210

224

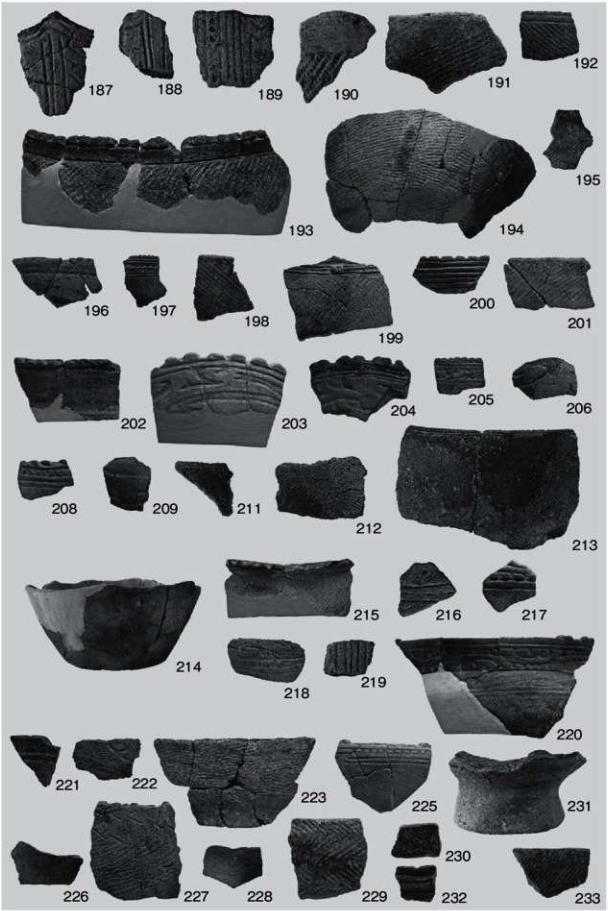
262

264

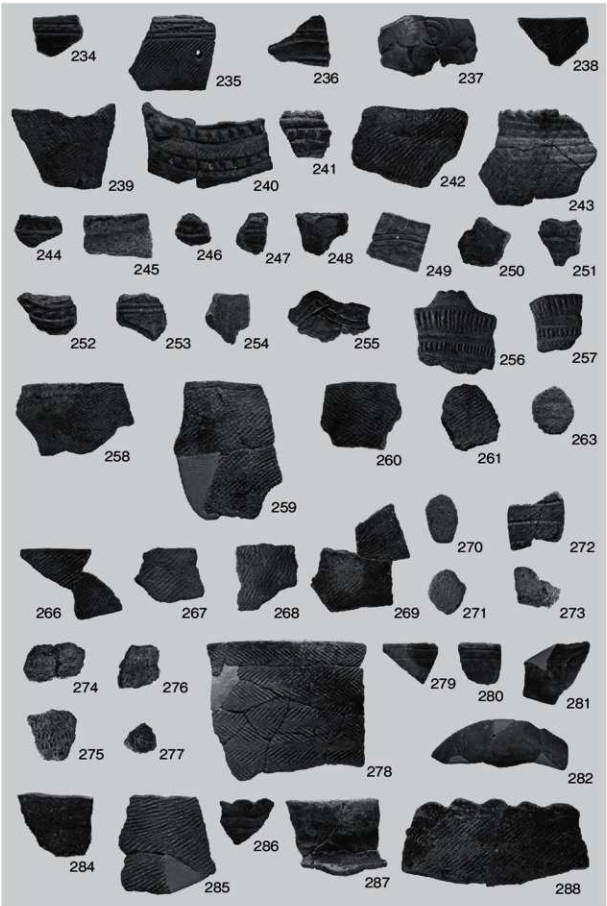
265

283

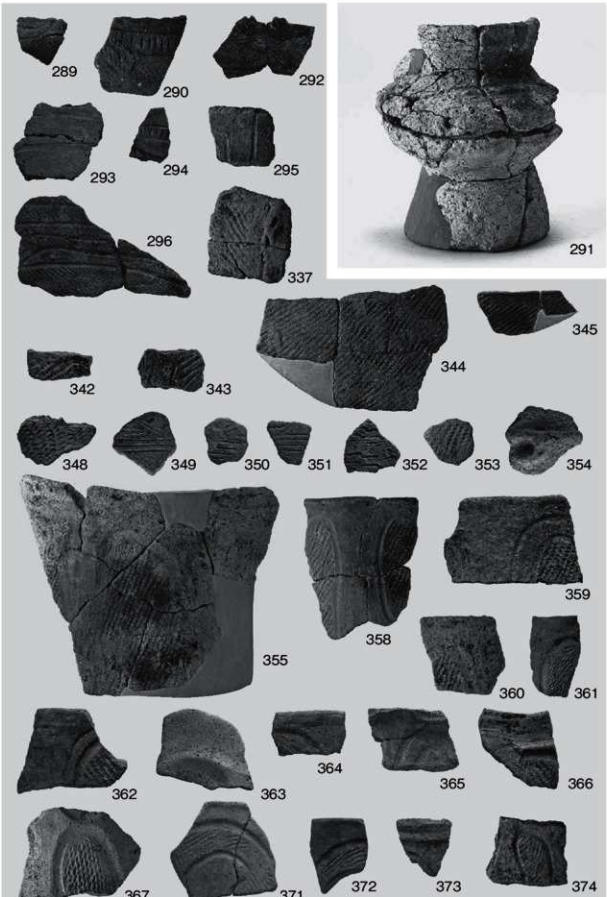
写真図版55　70～125号土坑出土土器



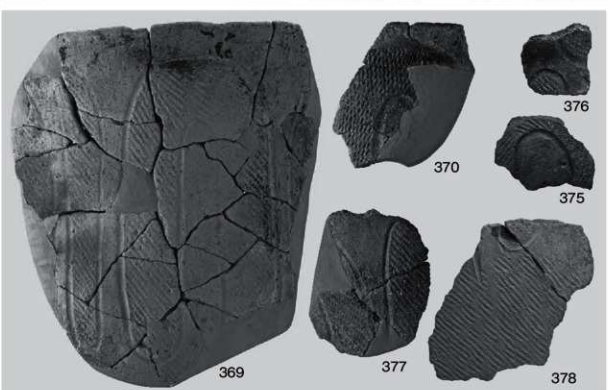
写真図版56　81～105号土坑出土土器



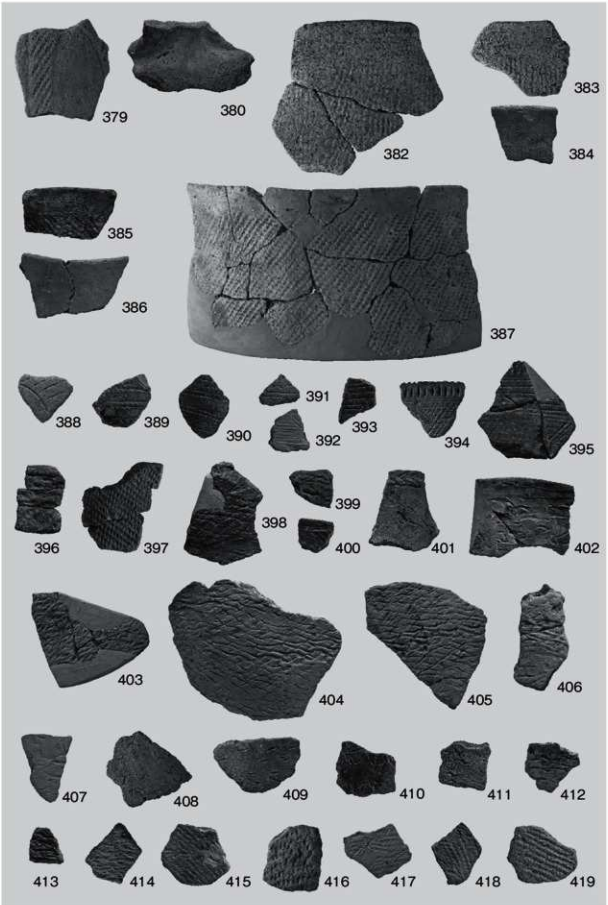
写真図版57　102～126号土坑出土土器



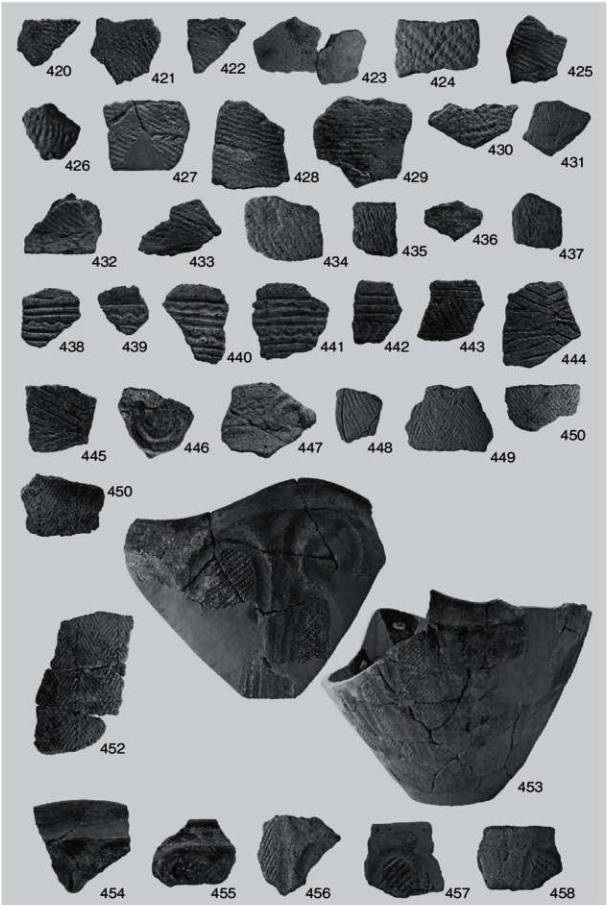
写真図版58　126・129号土坑・1号性格不明遺構・柱穴・包含層出土土器



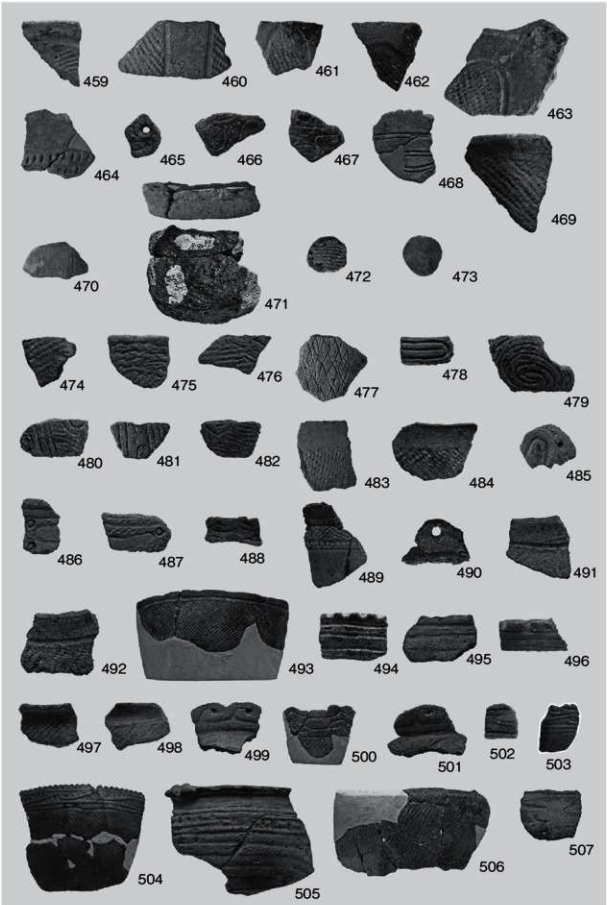
写真図版59　包含層出土土器



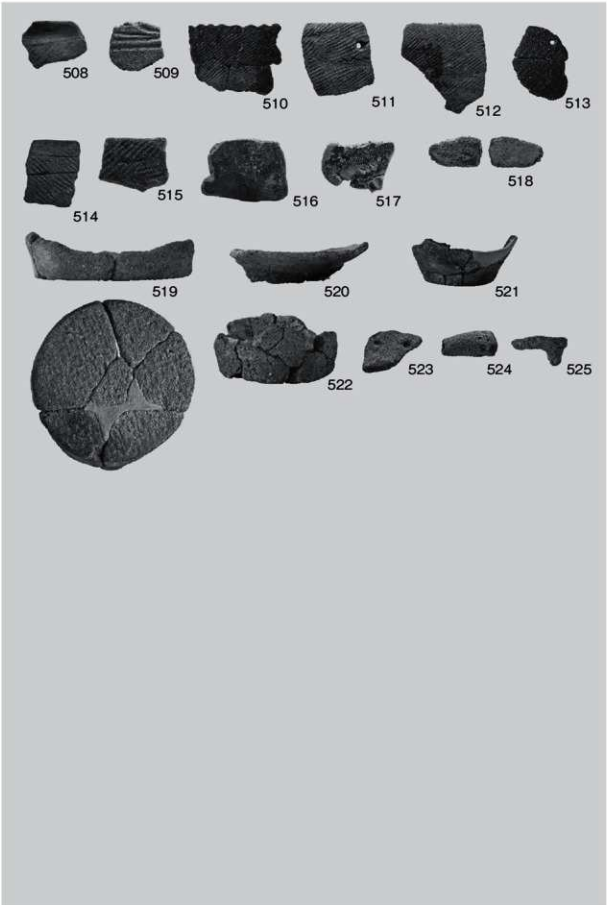
写真図版60　包含層・調査Ⅶ区遺構外出土土器



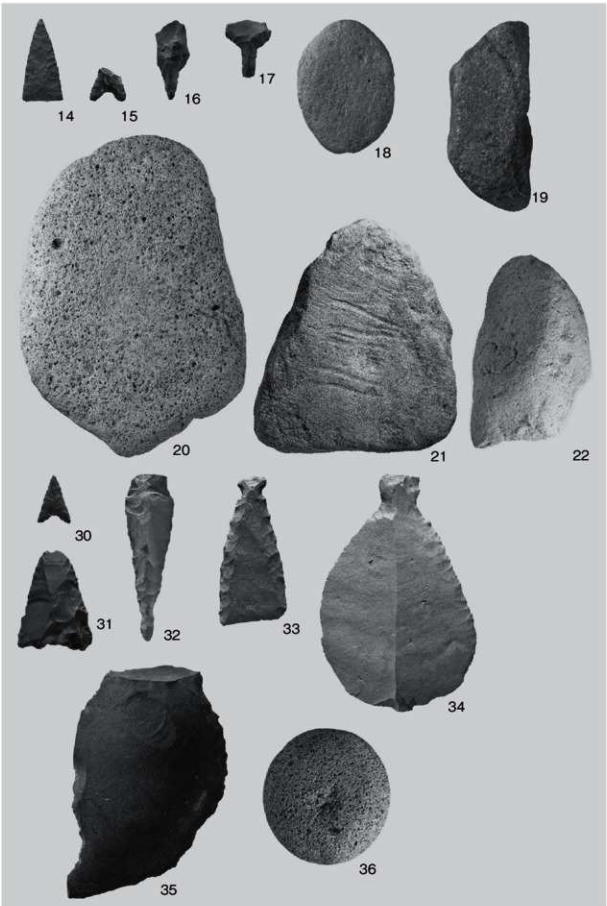
写真図版61　調査Ⅶ区遺構外出土土器



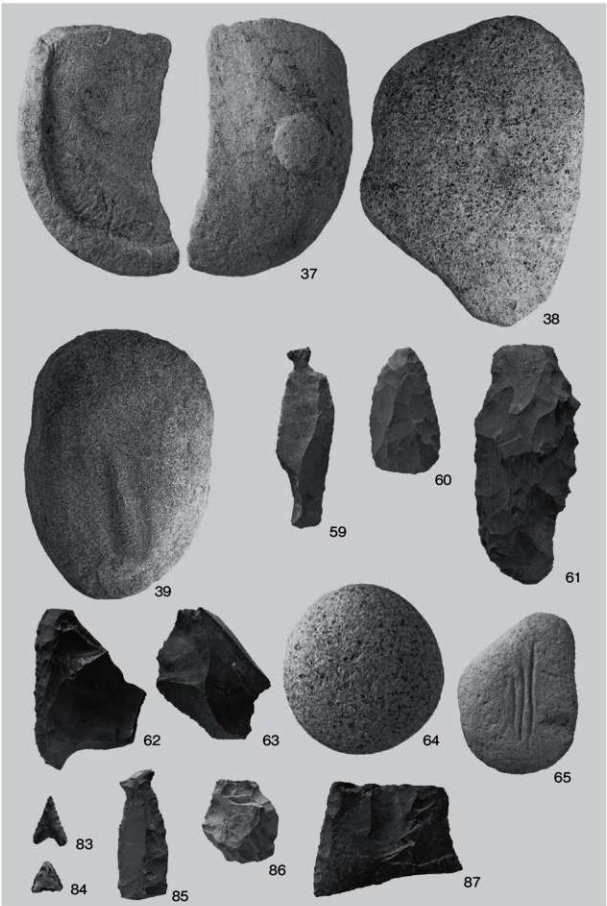
写真図版62　調査Ⅶ～Ⅸ区遺構外出土土器



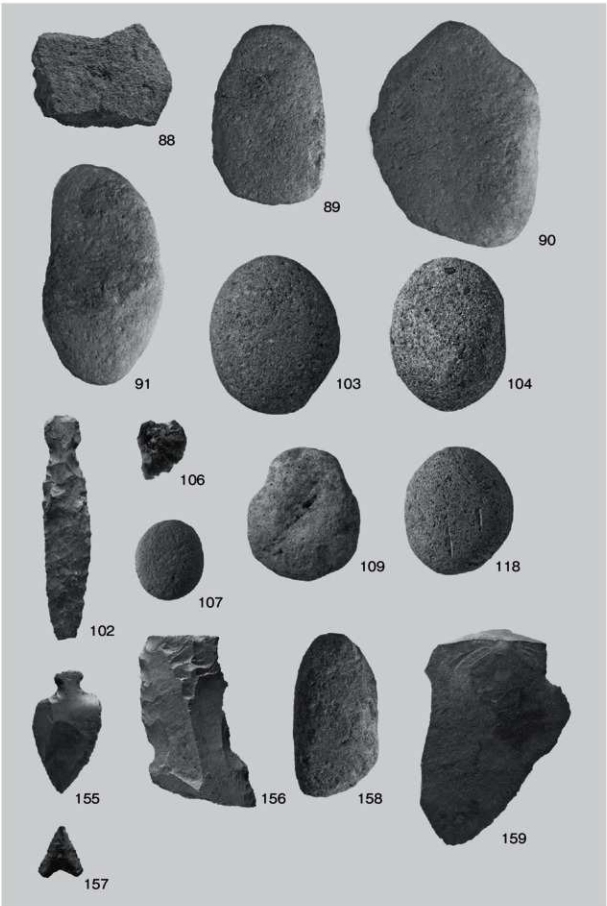
写真図版63　調査Ⅸ区遺構外出土土器



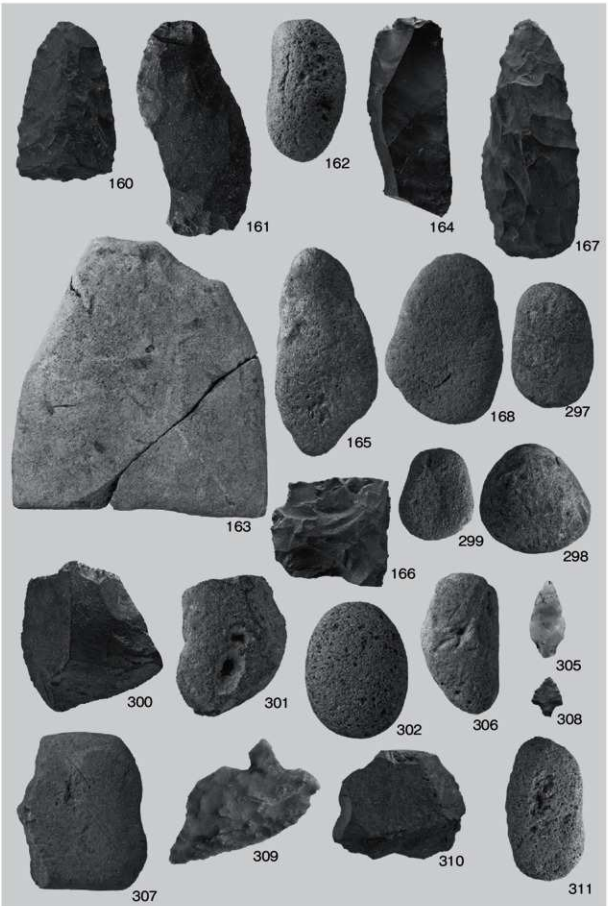
写真図版64　1号・2号住居出土石器



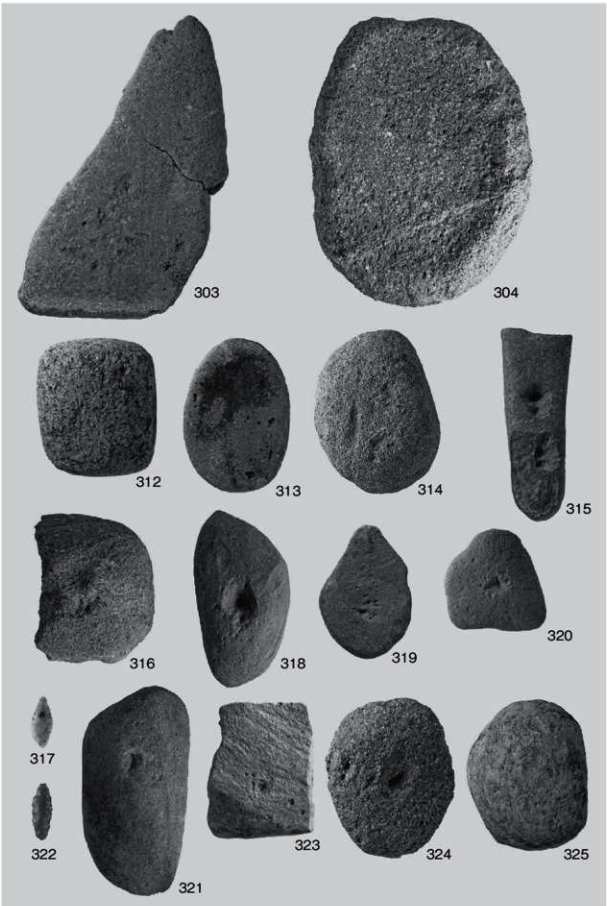
写真図版65　2～4号住居出土石器



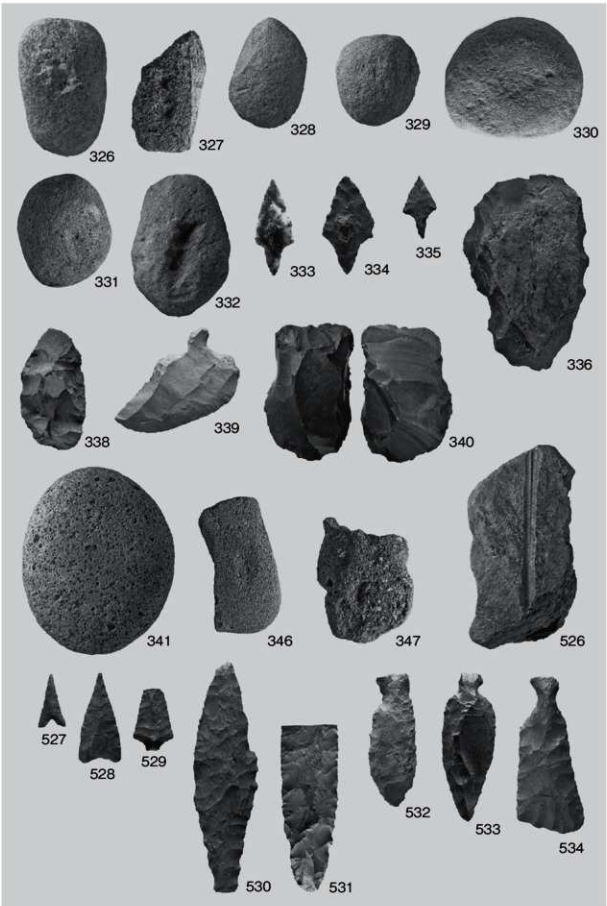
写真図版66　4～7号住居・1号住居状遺構・土坑出土石器



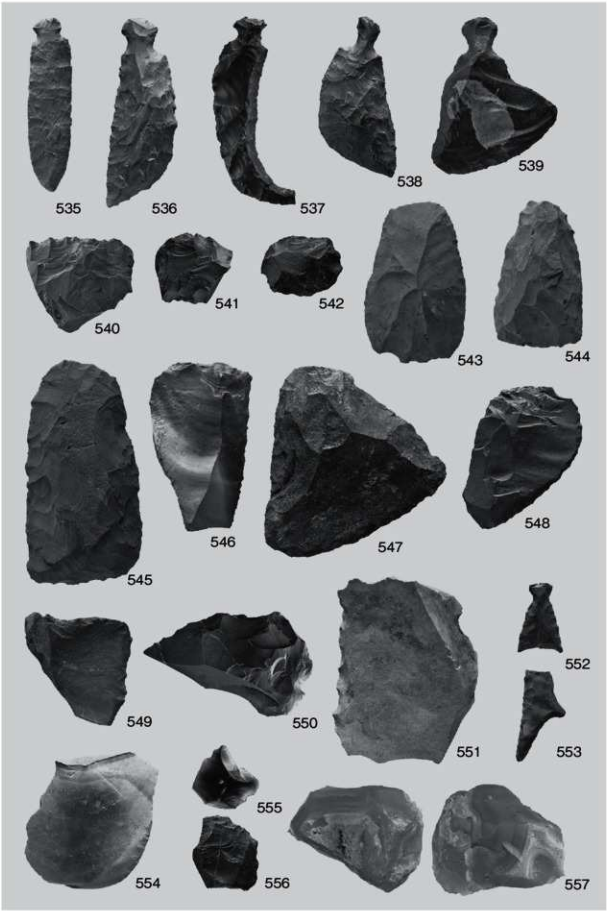
写真図版67　土坑出土石器（2）



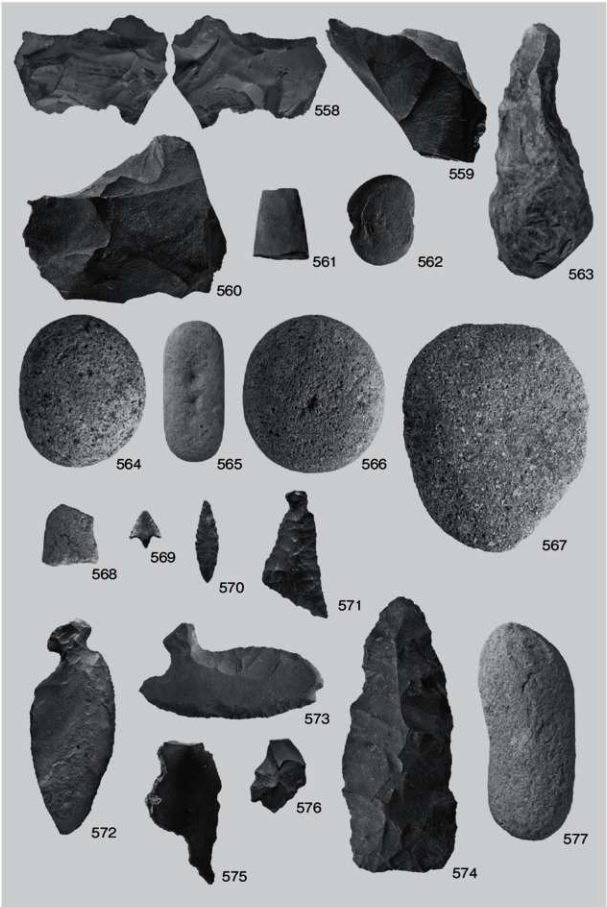
写真図版68　土坑出土石器（3）



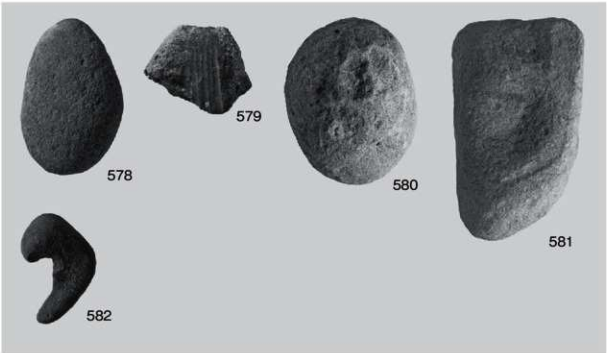
写真図版69　土坑・柱穴・性格不明遺構・遺構外出土石器



写真図版70　遺構外出土石器（2）



写真図版71　遺構外出土石器（3）



近現代遺物

写真図版72　遺構外出土石器（4）

報告書抄録

ふりがな	おおだいらの2いせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	大平野Ⅱ遺跡発掘調査報告書
副書名	胆沢ダム建設事業関連遺跡発掘調査
巻次	
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第609集
編著者名	須原　拓
編集機関	(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	〒020－0853　岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地　TEL (019)638－9001
発行年月日	2013年2月15日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
大平野Ⅱ遺跡 (おおだいらの にせき)	岩手県奥州市胆沢区大平野1ほか (いわて けん おうしゅう し いさわ く おおだいらの)	03215	NE30－2300	39度 05分 34秒	140度 52分 05秒	2011.06.13 ～ 2011.11.07	8,700㎡	胆沢ダム 建設事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大平野Ⅱ遺跡	集落跡	縄文時代 中期後葉・ 晩期中葉	竪穴住居跡　7棟 住居状遺構　1棟 土坑　135基 焼土遺構　5基 性格不明遺構　1基	縄文土器(早期中～末葉・前期前葉・中期初頭・中期後葉～後期初頭・晩期中葉～後葉) 土製品(土製円盤) 石器 石製品(石棒など)	

要約	調査区ほぼ中央を横断する沢の北岸に縄文時代中期後葉(大木9～10式期)の小規模な集落が、また小寒沢の両岸からは縄文時代後期前葉および晩期中葉(大洞BC式期)の集落が展開する。また早期の貝殻文土器や前期前葉の遺物群も見つかっており、ながきにわたる人の生活の痕跡が認められた。

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第609集

大平野Ⅱ遺跡発掘調査報告書

胆沢ダム建設事業関連遺跡発掘調査

印　刷　平成25年２月12日
発　行　平成25年２月15日

編　集　（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020－0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地
電 話（019）638－9001
発　行　国土交通省東北地方整備局胆沢ダム工事事務所
〒023－0403 岩手県奥州市胆沢区若柳字下松原77
電 話（0197）46－4711
（公財）岩手県文化振興事業団
〒020－0023 岩手県盛岡市内丸13番1号
電 話（019）654－2235
印　刷　（株）興版社
〒020－0816 岩手県盛岡市中野1-4-14
電 話（019）624－3456

©（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2013